財団法人 八尾市文化財調査研究会報告33

成法寺遺跡 33

＜第1次調査～第4次調査・第6次調査報告書＞

1991年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

正　誤　表

頁	行	誤	正
5P	2行目	昭和56年5月に	昭和56年7月に
43P	16行目	2個（SP15）の柱穴内には径22cmを測る。平面の形状がほぼ円形の柱痕が見られる。	SP15の柱穴内には径22cmを測るほぼ円形の柱痕が見られる。
54P	7行目	土馬（35）	土馬（37）
69P	12行目	土錘（13）	土錘（13）
76P	下から4行目	第III様式の壷（36）	第III様式の壷（35）
76P	下から3行目	長頸壷（37・38）・甕（39～41）があ	長頸壷（36・37）・甕（38・40）があ
76P	下から2行目	庄内式甕（42～49）・高杯（50～52）・鉢（53）・小型の鉢（54）・小型の壷（55）がある。	庄内式甕（41～48）・高杯（49～51）・鉢（53・55）・小型の鉢（54）がある。

成法寺遺跡

＜第1次調査～第4次調査・第6次調査報告書＞

1991年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、生駒山地の西麓と、そこから広がる河内平野のほぼ中央部にあります。この信貴生駒山地の高安山麓一帯は高安山古墳群として全国的にも知られている多くの古墳が遺存している地域であります。

またその西に広がるこの河内平野は古来より幾度となく旧大和川の氾濫を受けながらも豊かな水と肥沃な土壌に恵まれ、人々の生活や活動の場として重要な役割を果してきた所であります。

一方、現在の八尾市は、大阪都市圏の一角を占め近年市街化が急速に進み近代都市へと大きく変貌しつつあります。このことは私達の生活に便利さや、快適さを与えてくれる非常にすばらしいことですが、反面、重要な文化財が開発によって破壊され失われる危険にさらされています。

そこで私共は、これらの文化遺産を後世に永く伝えるため、事業者の協力を得て埋蔵文化財の事前の発掘調査を実施し、その記録保存に努めている次第であります。

今回、昭和57年度から昭和62年度にわたり実施しました成法寺遺跡の第１次調査から第４次調査及び第６次調査の整理が完了しましたので、これをまとめ報告書として刊行することに致しました。

本書が学術研究の資料として、又は文化財保護及び啓発に広く活用して頂ければ幸であります。

最後になりましたが、この発掘調査に対し、ご協力賜りました関係機関の皆様に対し心から厚く御礼申し上げます。

平成３年９月

財団法人　八尾市文化財調査研究会

理事長　福島　孝

序

1．本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が昭和57年・58年・62年・63年・平成２年度に実施した発掘調査報告を集録したもので、内業整理および本書作成業務は各現地調査終了後に着手し、平成３年８月31日をもって終了した。なお、報告書の末に八尾市教育委員会からの指示書を掲載した。

1．本書に収録した調査報告は、下記の目次のとおりである。

1．本書の構成・編集は高萩千秋・原田昌則が行い、文責は各例言に明示した。

1．本書記載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2500分の１（昭和61年８月発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成３年４月１日改訂）をもとに作成した。

1．本書で用いた高さの基準は東京湾の平均海水面である。

1．本書で用いた方位は第１次・第２次・第６次調査が磁北、第３次・第４次は座標北を示している。

1．遺構は下記の略号で表わした。

掘立柱建物－ＳＢ　井戸－ＳＥ　土坑－ＳＫ　小穴－ＳＰ　溝－ＳＤ

1．実測図の縮尺は、遺構が20分の１・40分の１・50分の１・100分の１を基調とし、遺物は４分の１に統一した。

1．遺物実測図は、断面の表示によって以下のように分類した。

弥生土器・土師器・瓦器－白　須恵器・陶器・磁器－黒　瓦・石製品－斜線

1．各調査に際しては、写真・実測図の他にカラースライドも多数作成している。市民の方々が広く利用されることを希望する。

目　　次

はしがき

序

八尾市埋蔵文化財分布図

第１章　地理・歴史的環境

第２章　第１次調査（ＳＨ82－１）発掘調査報告 …… 1

第３章　第２次調査（ＳＨ83－２）発掘調査報告 …… 5

第４章　第３次調査（ＳＨ87－３）発掘調査報告 …… 25

第５章　第４次調査（ＳＨ88－４）発掘調査報告 …… 39

第６章　第６次調査（ＳＨ90－６）発掘調査報告 …… 85

第７章　指示書 …… 101

八尾市
埋蔵文化財分布図

山賀遺跡
西部廃寺
福万寺遺跡
萱振遺跡
美園遺跡
佐堂遺跡
宮町遺跡
穴太廃寺
東郷遺跡
八尾寺内町
久宝寺寺内町
久宝寺遺跡
成法寺遺跡
小阪合遺跡
竜華寺遺跡
矢作遺跡
中田遺跡
渋川廃寺
跡部遺跡
竹渕遺跡
亀井遺跡
植松遺跡
太子堂遺跡
東弓削遺跡
弓削寺跡
老原遺跡
志紀遺跡
田井中遺跡
木の本遺跡
八尾南遺跡
太田遺跡
大正橋遺跡
弓削遺跡
薬音寺遺跡
大竹西遺跡
心合寺跡
花岡山遺跡
太田川遺跡
大竹遺跡
高寺廃跡
水越遺跡
高安古墳群
高安城跡
郡川遺跡
教興寺跡
恩智遺跡
神宮寺遺跡

0 100 500 1000 m

凡例

周知の遺跡であって、文化財保護法57条の2・3の適要を受ける区域	史跡指定地であって、文化財保護法80条または大阪府文化財保護条例の適要を受ける土地	古墳・周溝墓	既往調査で発見された主要な遺構と遺物出土地点

第１章　地理・歴史的環境

第１章　地理・歴史的環境

成法寺遺跡は、大阪府八尾市のほぼ中央部に位置する弥生時代中期から室町時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画上の八尾市光南町１～２丁目、清水町１～２丁目、南本町１～４丁目、高美町１～２丁目、陽光園１丁目、明美町１丁目、松山町１丁目の東西1.1㎞、南北0.6㎞に分布している。

成法寺遺跡の位置する八尾市の中央部の地形は、東を生駒山地、西を上町台地、南を河内台地、北を淀川に画された河内平野の南東部に当たる。河内平野の南部は、大和盆地・河南山地の水を集めて流下していた旧大和川の沖積作用によって形成されたものである。宝永元年（1704）に現在の大和川が付け替えられる以前の旧大和川は、八尾市二俣付近で長瀬川と玉串川に分流して北流した後、上町台地の北部を経て大阪湾に注いでいた。両河川のほかに恩智川、楠根川、平野川といった中小河川が放射状に展開しており、これらの河川の幾多にわたる氾濫により、現在の地形が形成されたものと推定されている。

成法寺遺跡の位置は前述した水系で区別すれば、長瀬川と玉串川に挟まれた低位沖積地にあたる。この低位沖積地は、南北方向に形成されており、肥沃な土壌と豊富な水量を背景に、水稲耕作の早い段階から集落が営まれていたようで、遺跡の分布密度も高い。当遺跡周辺では、東に小阪合遺跡、南東に中田遺跡、南に矢作遺跡・竜華寺跡、西に久宝寺遺跡、北に東郷遺跡が近接している。

当遺跡は、昭和56年度に八尾市教育委員会が光南町１丁目で実施された発掘調査で、弥生時代後期から古墳時代後期の遺構・遺物が検出され、遺跡として認識されるようになった。その後、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会により、現在（平成３年３月）に至るまで14回におよぶ発掘調査が実施されている。その結果、弥生時代中期から室町時代に至る遺構・遺物が検出されている。以下、これらの成果をもとに各時期ごとに遺跡内の推移を概観してみる。

弥生時代中期（畿内第Ⅲ～Ⅳ様式）　この時期の遺構には遺跡の北東部の⑫で検出された方形周溝墓がある。１基のみの検出であるため不明な点が多いが、近接する位置で同時期の遺物がまとまって出土した自然河川が検出されており、付近に居住域が存在していた可能性が高い。

弥生時代後期（畿内第Ⅴ様式）　遺跡の東部と西部で検出されている。東部の⑭では、弥生時代終末に比定される多量の土器類が出土した溝が検出されており、弥生時代から古墳時代に移行する時期の土器の様相を知る上で重要であろう。一方、西部の①地点では土器溜が検出されたほか、近接する⑮では遺物が多量に出土した溝が検出されており、この付近に居住域の中

心が存在したようである。

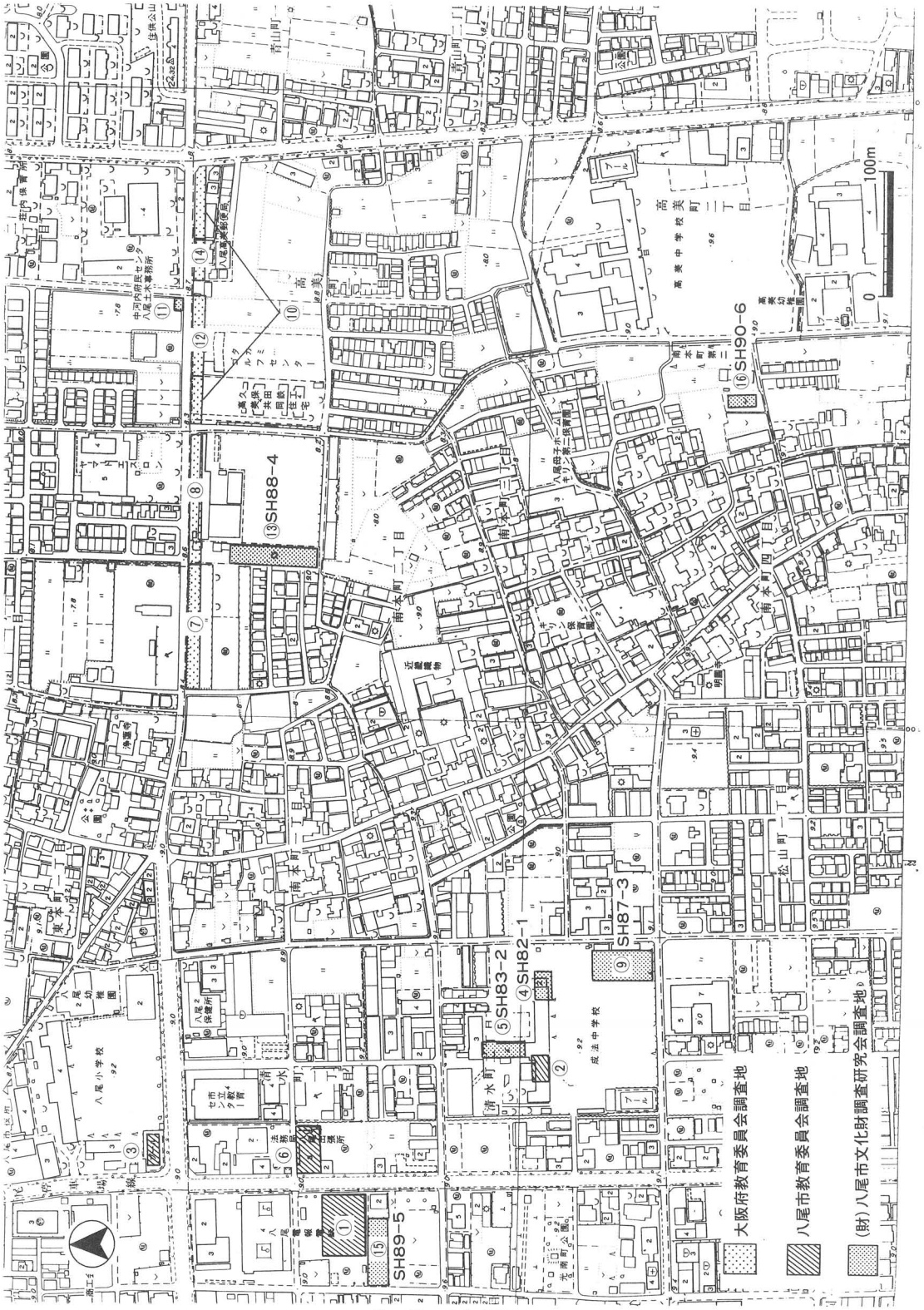
古墳時代前期（庄内式期～布留式期）　庄内式期古相では①で前代と同位置で居住域が営まれるほか、新たに⑦⑬で居住域が検出されており、集落が分散したことが窺われる。⑬では方形周溝墓と各遺構が近接して検出されており、墓域と居住域との明確な区別は無かったようである。続く、庄内式新相の居住域は⑤⑬で確認されている。同時期の墓域が①⑦⑬検出されている。居住域と墓域の関係では、⑬では前代と同様、居住域と墓域が近接している。一方、遺跡の西部では⑤の居住域に対して①の墓域が推定されている。また、⑦で検出された周溝墓（ＳＸ１）は不明な点もあるが、検出部分からみて円形周溝墓の可能性が高く、この時期の墓制を考える上で一石を投ずる結果となった。布留式古相の段階には居住域が⑬地点から⑧⑫に移動したようで、⑫では竪穴住居８棟、井戸１基、土坑４基が検出されている。

古墳時代中期　この時期の居住域は、前代の集落位置からやや東に移動した⑭で竪穴住居１棟のほか土坑、溝、小穴等が検出されている。そのほか、⑮では埴輪円筒棺１基が検出されている。

古墳時代後期　この時期の居住域は①で掘立柱建物８棟、⑤で掘立柱建物１棟が検出されており、遺跡の西部に集中する傾向がある。

奈良時代　④⑨でこの時期の居住域が検出されている。特に、⑨では居住域の中核を構成する掘立柱建物３棟が検出されている。

室町時代　⑯では溝で囲繞された館と推定される遺構が検出されており、この時期の村落の様相を知る上で貴重な資料と言えよう。


100m
0
⑬SH88-4
⑯SH90-6
⑤SH83-2
④SH82-1
⑨SH87-3
SH89-5
大阪府教育委員会調査地
八尾市教育委員会調査地
(財)八尾市文化財調査研究会調査地

第1図　調査地周辺図

周辺の既往調査一覧表

番号	遺跡名	調査年月	調査主体	調査の原因	掲載報告書
①	成法寺	昭和56年 7月～9月	八尾市教育委員会	電々公社社屋建設	「成法寺遺跡－八尾市光町1丁目29番地の調査－」八尾市教育委員会1983．3
②	成法寺	昭和56年 8月	八尾市教育委員会	成法中校舎増改築	「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度」八尾市教育委員会1983．3
③	東郷	昭和57年 3月	八尾市教育委員会	八尾小プール建設	同　上
④	**成法寺(第1次)** (SH82－1)	昭和57年 6月～7月	八尾市教育委員会 当調査研究会	成法中校舎増改築	「昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査－その成果と概要－」(財)八尾市文化財調査研究会1983
⑤	**成法寺(第2次)** (SH83－2)	昭和58年 7月	当調査研究会	成法中校舎増改築	「昭和58年度事業概要報告」 (財)八尾市文化財調査研究会報告5　1984．4
⑥	成法寺	昭和59年 7月	八尾市教育委員会	貸事務所建設	「八尾市内遺跡　昭和59年度発掘調査報告」八尾市教育委員会1985．3
⑦	成法寺	昭和60年 11月～12月	大阪府教育委員会	府道拡幅	「成法寺遺跡発掘調査概要Ⅰ」 大阪府教育委員会1986．3
⑧	成法寺	昭和61年 7月～10月	大阪府教育委員会	府道拡幅	「成法寺遺跡発掘調査概要Ⅱ」 大阪府教育委員会1989．3
⑨	**成法寺(第3次)** (SH87－3)	昭和62年 5月～7月	当調査研究会	成法中体育館	「八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告16　1988
⑩	成法寺	昭和62年	大阪府教育委員会	府道拡幅	―――
⑪	東郷(第26次) (TG88－26)	昭和63年 1月	当調査研究会	電話通信地下施設	「八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告16　1988
⑫	成法寺	昭和63年 10月～12月	大阪府教育委員会	府道拡幅	「成法寺遺跡発掘調査概要Ⅳ」 大阪府教育委員会1989．3
⑬	**成法寺(第4次)** (SH88－4)	昭和63年 11月～12月	当調査研究会	事務所建設	「八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告25　1989
⑭	成法寺	平成元年 9月～10月	大阪府教育委員会	府道拡幅	「成法寺遺跡発掘調査概要Ⅴ」 大阪府教育委員会1990．3
⑮	成法寺(第5次) (SH89－5)	平成元年 10月～11月	当調査研究会	共同住宅建設	「八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度」 (財)八尾市文化財調査研究会報告28　1990
⑯	**成法寺(第6次)** (SH90－6)	平成2年 2月～3月	当調査研究会	共同住宅建設	〃

第２章　第１次調査（ＳＨ82－１）発掘調査報告

例　　言

1．本書は、八尾市清水町２丁目２－５で実施した市立成法中学校増築工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する成法寺遺跡第１次調査（ＳＨ82－１）の発掘調査業務は、昭和57年６月21日から６月31日までは八尾市教育委員会が実施したが、昭和57年７月１日以降は（財）八尾市文化財調査研究会が調査を引き継ぎ実施した。

1．現地調査は昭和57年６月21日から６月31日までは原田昌則、昭和57年７月１日から７月12日にかけては西村公助が担当した。調査面積は207㎡を測る。調査においては北尾耕三・中野慶太・中野健太郎・野田雅彦が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後実施し平成２年８月31日に完了した。

1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－麻田優・柏本幸寿・小林博・田中明美・長野琢磨・益本浩・松岡利行、図面レイアウト－成海佳子・原田、図面トレース－成海・中西隆子、遺物写真撮影－成海が行った。

1．本書の執筆および編集は原田が行った。

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに …… 5

Ⅱ　調査概要 …… 5

　1．調査方法と経過 …… 5

　2．基本層序 …… 5

　3．検出遺構・出土遺物 …… 7

Ⅲ　まとめ …… 24

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺図 …… 6
第２図　ＳＥ－１平断面図 …… 7
第３図　検出遺構平面図 …… 8
第４図　ＳＫ－１平断面図 …… 9
第５図　ＳＫ－１出土遺物実測図１ …… 11
第６図　ＳＫ－１出土遺物実測図２ …… 12
第７図　ＳＫ－１出土遺物実測図３ …… 13
第８図　ＳＫ－１出土遺物実測図４ …… 14
第９図　ＳＫ－１出土遺物実測図５ …… 15
第10図　ＳＫ－１出土遺物実測図６ …… 16
第11図　ＳＥ－１・ＳＫ－３出土遺物実測図 …… 17
第12図　ＳＰ－８・ＳＰ－９・ＳＰ－10・ＳＤ－２・ＳＤ－４・ＳＤ－５出土遺物実測図 19
第13図　落ち込み・第５層出土遺物実測図 …… 20
第14図　第５層出土遺物実測図 …… 21
第15図　第３層出土遺物実測図 …… 22

図　版　目　次

図版一　調査区全景
　　ＳＫ－１
図版二　拡張区全景
　　ＳＤ－２遺物出土状況
図版三　ＳＫ－１出土遺物１
図版四　ＳＫ－１出土遺物２
図版五　ＳＫ－１出土遺物３
図版六　ＳＫ－３・ＳＰ－１・ＳＰ－９・ＳＰ－10・ＳＤ－２出土遺物
図版七　第５層・第３層出土遺物

Ⅰ　はじめに

成法寺遺跡は、昭和56年５月に八尾市光南町１丁目26番地で八尾市教育委員会が実施した発掘調査で存在が明らかにされた遺跡である。この調査では弥生時代後期の土器溜３ケ所、古墳時代前期の方形周溝墓４基、古墳時代後期の掘立柱建物５棟が検出され、当遺跡が複合遺跡であることが確認された。また、同年８月には前記の調査地点より東200ｍに存在する八尾市立成法中学校の校舎増築工事に伴う発掘調査が八尾市教育委員会によって実施され、古墳時代前期から中世に至る遺物包含層の存在が認められ、成法寺遺跡が東部に広がることが確認された。

このような状況下、八尾市教育委員会施設課から八尾市立成法中学校の校舎を増築する旨の届出書が八尾市教育委員会文化財室に提出された。校舎の増築予定地は、前年度調査地点の東80ｍ地点に当たることから文化財保護法に基づき発掘調査が必要であると判断し、申請者へその旨を通知した。発掘調査は昭和57年６月21日から八尾市教育委員会が実施したが、７月１日以降は、財団法人八尾市文化財調査研究会が調査を引き継いで実施し、７月12日をもって現地調査を終了した。調査面積は207㎡を測る。

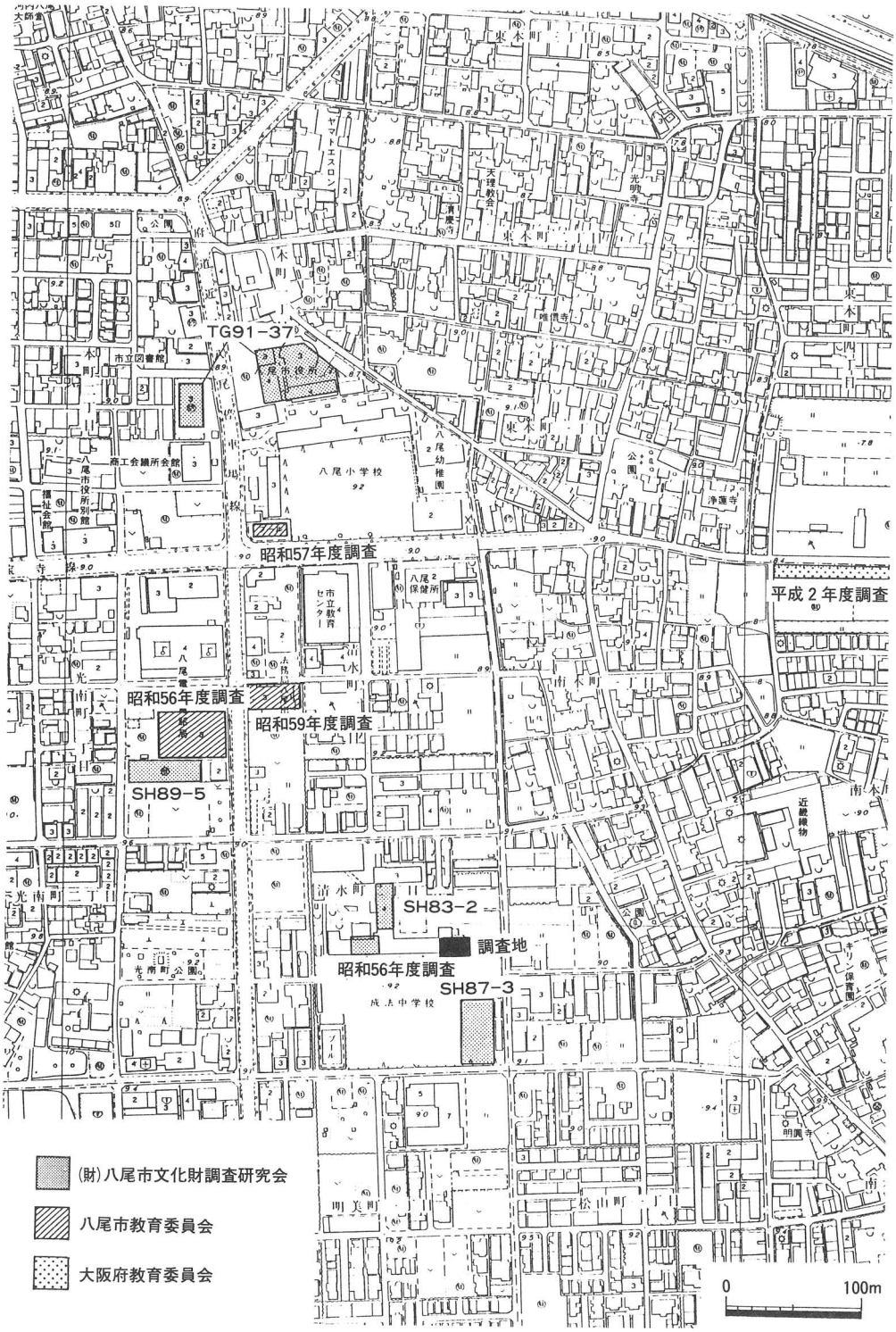
Ⅱ　調査概要

１．調査方法と経過

調査では校舎増築予定地に東西20ｍ・南北９ｍの調査区を設定した。掘削に際しては、現地表下1.0ｍ前後に存在する盛土および旧耕土までを重機により排除し、以下は層理に従って人力掘削を実施した。その結果、表土下1.5ｍ（標高7.6ｍ）に存在する第６層茶灰色砂混じり粘質土上面で奈良時代および近世に比定される遺構が検出された。なお、調査区の西端で検出された土坑の広がりを追求するため調査区の北西部で東西３ｍ・南北７ｍを拡張した。検出された遺構は、奈良時代に比定される土坑３基（ＳＫ－１～ＳＫ－３）、溝７条（ＳＤ－１～ＳＤ－７）、小穴16個（ＳＰ－１～ＳＰ－16）、落ち込み１ケ所（落ち込み１）のほか、近世に比定される井戸１基（ＳＥ－１）である。

２．基本層序

調査地の層序は、層厚0.8ｍ前後の盛土を除去すると層厚0.15ｍ前後を測る第１層暗灰色粘質土（旧耕土）に達する。続く、第２層暗灰色粗砂混じり粘質土は、層厚0.1～0.25ｍを測る。酸化鉄・マンガンが斑点状に付着するもので床土の性格を有している。第３層青灰色粗砂混じり粘質土は、層厚0.05～0.2ｍを測るもので鎌倉時代後期以降の遺物を包含している。第４層灰茶褐色砂混じり粘質土は、層厚0.1～0.4ｍを測るもので奈良時代に比定される遺物が少量出


TG91-37
昭和57年度調査
平成2年度調査
昭和56年度調査
昭和59年度調査
SH89-5
SH83-2
調査地
昭和56年度調査
SH87-3
(財)八尾市文化財調査研究会
八尾市教育委員会
大阪府教育委員会
0
100m

第1図　調査地周辺図

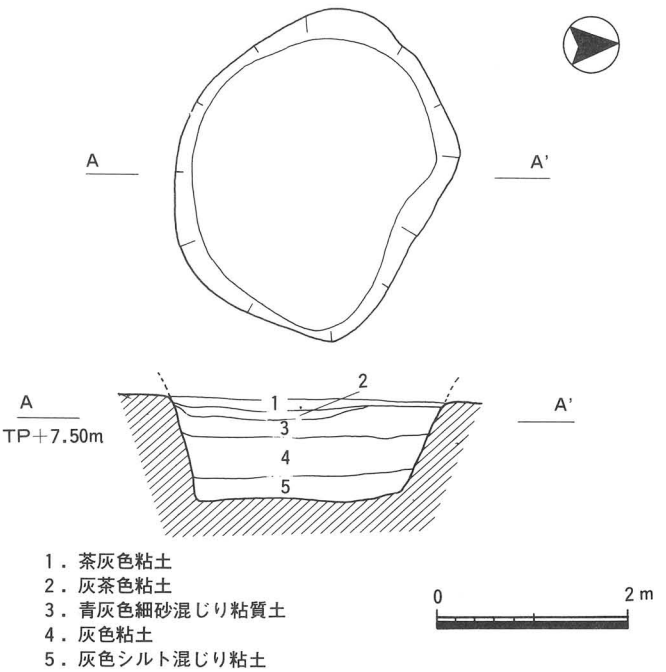
土している。調査区の東部ではこの上層上面で耕作に伴う溝が検出されている。第５層茶灰色細砂混じり粘質土は、調査区の中央部から西部にかけて広がっている。層厚は0.1～0.2ｍを測る。第６層茶灰色砂混じり粘質土は、層厚0.15～0.5ｍを測るもので、調査区の中央部から東部にかけてほぼ水平に堆積しているが、西部において削平を受けたためか、上面の起伏が著しい。この土層上面をベースとして奈良時代に比定される遺構が構築されている。第７層灰色粘土は、層厚0.4ｍ以上。無遺物土層である。

３．検出遺構・出土遺物

井戸（ＳＥ）

ＳＥ－１

調査区の中央部で検出した。平面の形状が東西方向に長い楕円形を呈する素掘り井戸で、東西幅3.6ｍ・南北幅3.0ｍを測る。掘形の断面の形状は逆台形で深さ1.1ｍを測る。内部堆積土層は上層から茶灰色粘土・灰茶色粘土・青灰色細砂混じり粘質土・灰色粘土・灰色シルト混じり粘土である。遺物は茶灰色粘土から伊万里焼の碗の細片が出土したほか、灰色粘土から瓦器椀の細片、最下層の灰色シルト混じり粘土から須恵器の壺（151・152）が出土した。なお、第６層上面で検出したが出土遺物からみて本来の構築面は第２層上面と推定される。



第２図　ＳＥ－１　平断面図

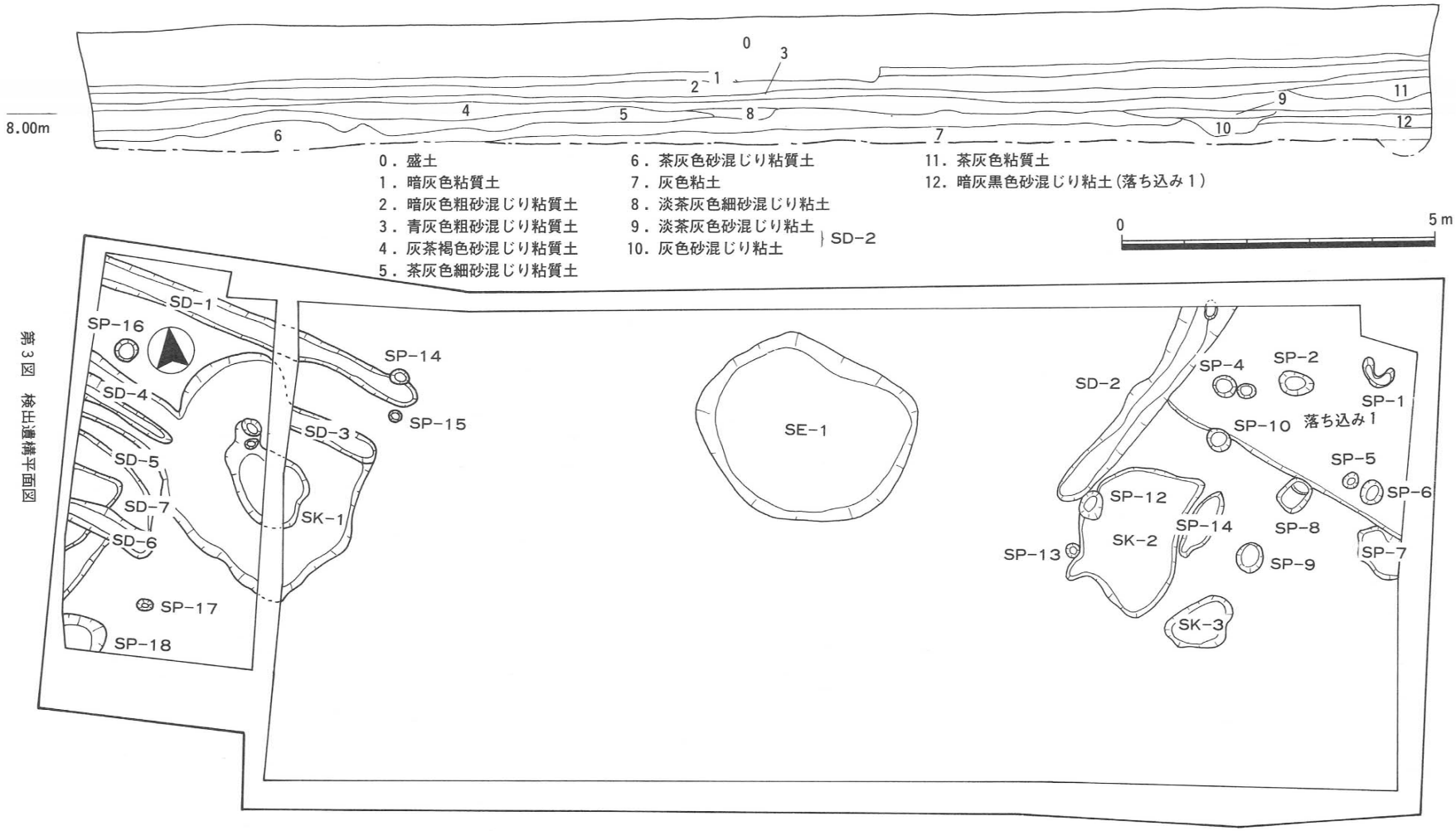
土坑（ＳＫ）

ＳＫ－１

調査区の西部で検出した。平面の形状は不定形を呈するもので、西部でＳＤ－４・ＳＤ－５と合流し、北東部がＳＤ－３に切られている。東西幅3.0ｍ・南北幅3.8ｍ・深さ0.2ｍを測る。断面の形状は皿状を呈するが、中央部に0.1ｍ程度円形状に窪む部分がある。内部堆積土は暗茶褐色混じり粘土である。

ＳＫ－１出土遺物

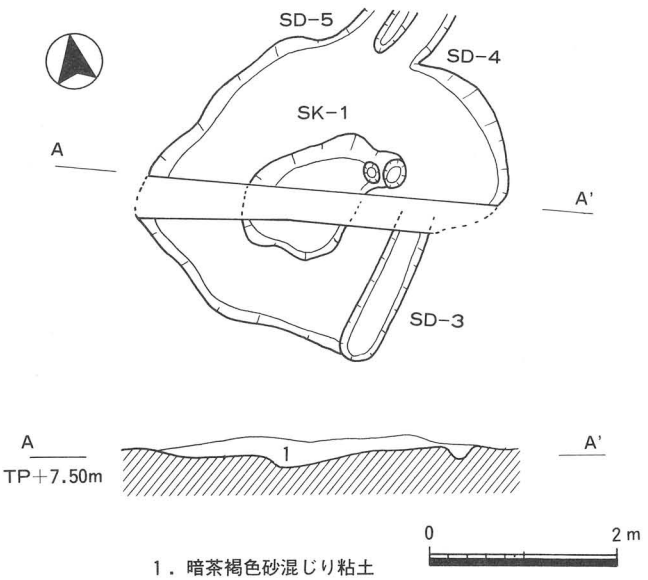
遺物は８世紀前葉～中葉に比定される土師器・須恵器を中心とする土器類で、総量はコンテナ箱に３箱程度出土したが、大半が細片で完形に成り得たものは少なく、そのうち図示できた


8.00m
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
0．盛土
1．暗灰色粘質土
2．暗灰色粗砂混じり粘質土
3．青灰色粗砂混じり粘質土
4．灰茶褐色砂混じり粘質土
5．茶灰色細砂混じり粘質土
6．茶灰色砂混じり粘質土
7．灰色粘土
8．淡茶灰色細砂混じり粘土
9．淡茶灰色砂混じり粘土
10．灰色砂混じり粘土
SD-2
11．茶灰色粘質土
12．暗灰黒色砂混じり粘土（落ち込み1）
0
5m
SD-1
SP-16
SD-4
SP-14
SP-15
SD-3
SD-5
SD-7
SD-6
SK-1
SP-17
SP-18
SE-1
SD-2
SP-4
SP-2
SP-1
SP-10
落ち込み1
SP-5
SP-6
SP-12
SP-14
SP-8
SK-2
SP-13
SP-9
SP-7
SK-3

第3図　検出遺構平面図

ものの総数は150点（１～150）である。

土師器小皿は20点（１～20）図示した。数値の違いからⅠとⅡに区別した。Ⅰは口径が15㎝前後・器高２㎝前後のもの、Ⅱは口径が16.5～19.5㎝以上、器高３㎝前後のものである。さらに形態の違いからⅠで４類（ⅠＡ～ⅠＤ）、Ⅱで３類（ⅡＡ～ⅡＣ）に区別した。ⅠＡ類は体部が斜上方に伸びた後口縁端部付近で小さく外反し端部が上方へつまみ上げられるもの（１）、ⅠＢ類は口縁端部が内側に肥厚するもの（２）、ⅠＣ類は口縁端部が丸みをもって終わるもの（３～５・11）、ⅠＤ類は口縁端部が尖りぎみで終わるもの（６～10）である。ⅡＡ類はⅠＡ類と同様の形態を有するもの（12～17）、ⅡＢ類は口縁端部が内傾して水平な面を持つもの（18・19）、ⅡＣ類は口縁端部が丸く終わるもの（20）である。



第４図　ＳＫ－１　平断面図

中皿は12点（21～32）図示した。口径20㎝以上・器高が２㎝前後を測るもので、形態の違いから５類（Ａ～Ｅ）に区別した。Ａ類は体部が斜上方に伸びた後、口縁端部付近で小さく外反し端部が肥厚して終わるもの（21・22）、Ｂ類は端部が尖り気味で終わるもの（23・24）・Ｃ類は体部が斜上方に直線的に伸びた後、口縁端部が内側に肥厚するもの（25～30）、Ｄ類は口縁端部が尖り気味で終わるもの（31）、口縁端部が丸味をもって終わるもの（32）がある。

杯は56点（33～74・80～93）図示した。数値の違いからⅠとⅡに区別した。Ⅰは口径11.5～16.0㎝・器高2.0～4.0㎝、Ⅱは口径16.5～21㎝・器高４㎝前後を測る。さらに形態の違いからⅠで８類（ⅠＡ～ⅠＨ）、Ⅱで１類（ⅡＡ）に区別した。ⅠＡ類は体部が斜上方に伸びた後口縁端部付近で小さく外反し口縁端部がわずかに肥厚するもの（33～45）、ⅠＢ類は口縁端部が丸味をもって終わるもの（46～50）、ⅠＣ類は体部が上外方に伸びた後、口縁端部付近で小さく外反し口縁端部が尖り気味で終わるもの（51～60）、ⅠＤ類は体部が斜上方へ丸味をもって伸びる。口縁端部は斜上方に尖り気味で終わるもの（61～63・69）、ⅠＥ類は体部が斜上方へ伸びた後、口縁端部は丸味をもって終わるもの（64～68）、ⅠＦ類は体部が斜上方へ内湾気味に伸びた後、口縁端部付近で小さく外反するもの（70～72）、ⅠＧ類は体部が上外方へ内湾気味に伸びた後、口縁端部は上方へつまみ上げ気味に終わるもの（73）、ⅠＨ類は体部が垂直方

向に伸びる。口縁端部は丸味をもって終わるもの（74）である。ⅡＡ類はＩＡ類と同様の形態を有するもの（80～93）である。

杯蓋は５点（75～79）図示したがすべて小破片で全容を知りえたものは無い。

鉢は15点（94～107・112）図示した。形態の違いから５類（Ａ～Ｆ）に区別した。Ａ類は、体部が内湾して伸びるもので、口縁端部が丸いもの（94・95）。Ｂ類は体部が斜上方に伸びた後、口縁端部付近で角度を垂直方向に変えるもので、口縁端部は内側に肥厚するもの（96・97）Ｃ類は体部が内湾気味に伸びるもので、口縁端部の形状はＢ類と同様のもの（98～101）。Ｄ類は体部が斜上方へ伸びた後、口縁部付近で角度を垂直ないしは内傾させるもので口縁端部は丸く終わる。口径の数値から16㎝前後の小型（102）、22㎝前後の中型（103）、30㎝前後の大型（105）に区別できる。Ｅ類は形態的にはＤ類と同様であるが、口縁端部に段を有するもの（104・106）である。Ｆ類は体部が内湾気味に伸びた後、口縁端部付近で角度を上外方に変え小さく伸びるもの（107・112）である。

甕は６点(108～111・115・116)図示した。小型の(108・109)と大型の(110・111・115・116)がある。115・116は把手付き甕と推定されるものであるが破片のため全容は不明である。

鍋は１点（114）図示した。体部の両側に把手が付くもので、流し口を有する。

高杯は１点（113)図示した。中空の柱状部を持つもので、外面には９面の面取りが施されている。

土釜は４点（117～120）図示した。いずれも上部のみの破片のため詳細は不明である。

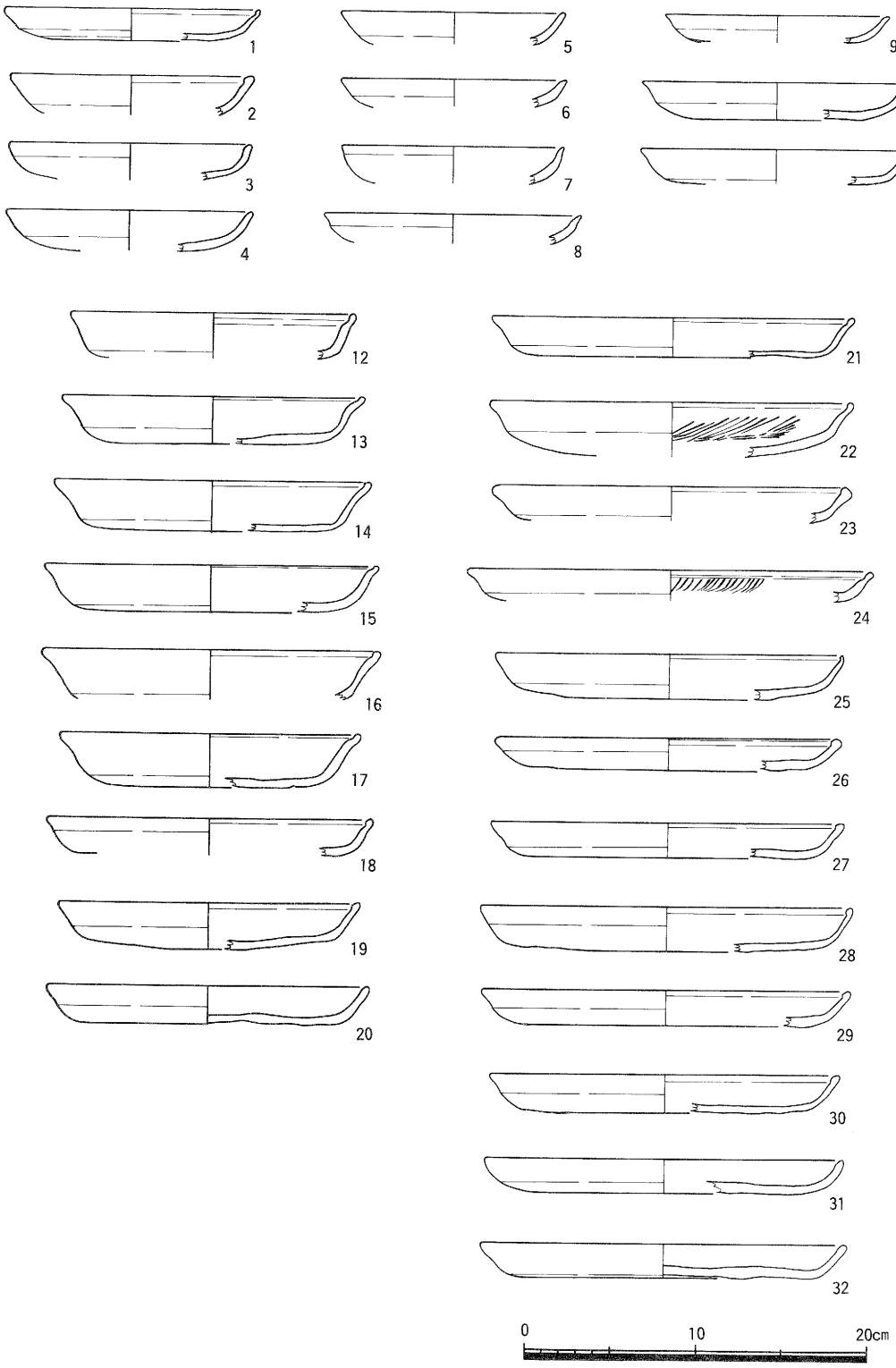
須恵器は30点図示した。杯蓋は９点（121・124～131）図示した。口縁部の形態の特長から３類（Ａ～Ｃ）に区別した。Ａ類は口縁端部にかえりを有するもの（121）、Ｂ類は擬宝珠形の鈕を有し、天井部が弓状を呈し口縁部が下方に短く屈曲するもの（128～131）、Ｃ類は口縁部と天井部の境に段を有するもの（126・127）である。杯身は14点（132～144・146）した。そのうち、高台を有するものは７点（135～141）である。壺は５点（122・123・147・148・150）図示した。いずれも細片で詳細は不明である。145は口縁部の資料であるが器種は不明である。149は底部が横位に広がる鉢である。

ＳＫ－２

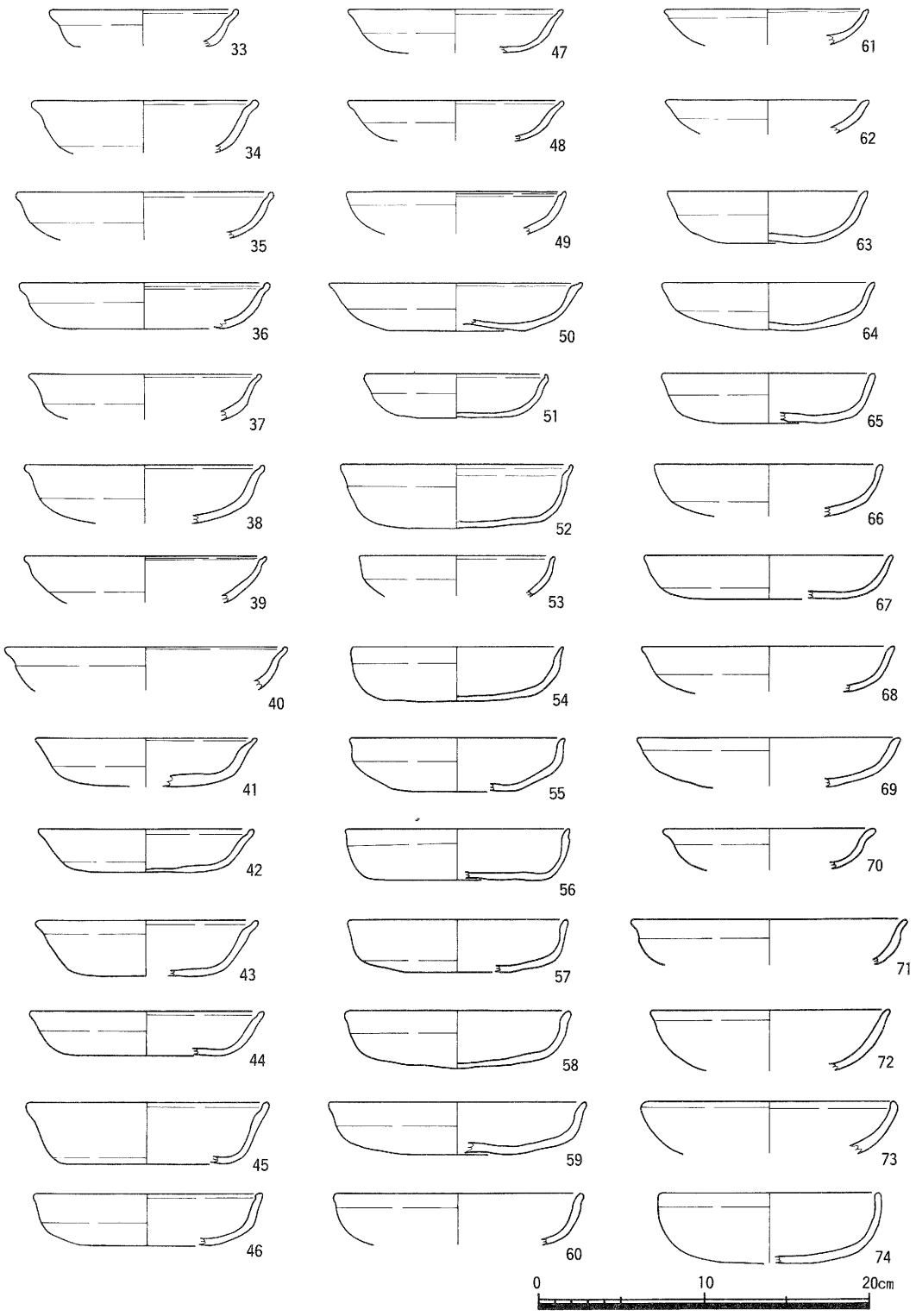
ＳＤ－２の南側で検出した。平面の形状が不定形を呈するもので、東西幅1.7ｍ・南北幅2.4ｍ・深さ0.1ｍを測る。内部堆積土層は灰茶色粘土である。

ＳＫ－３

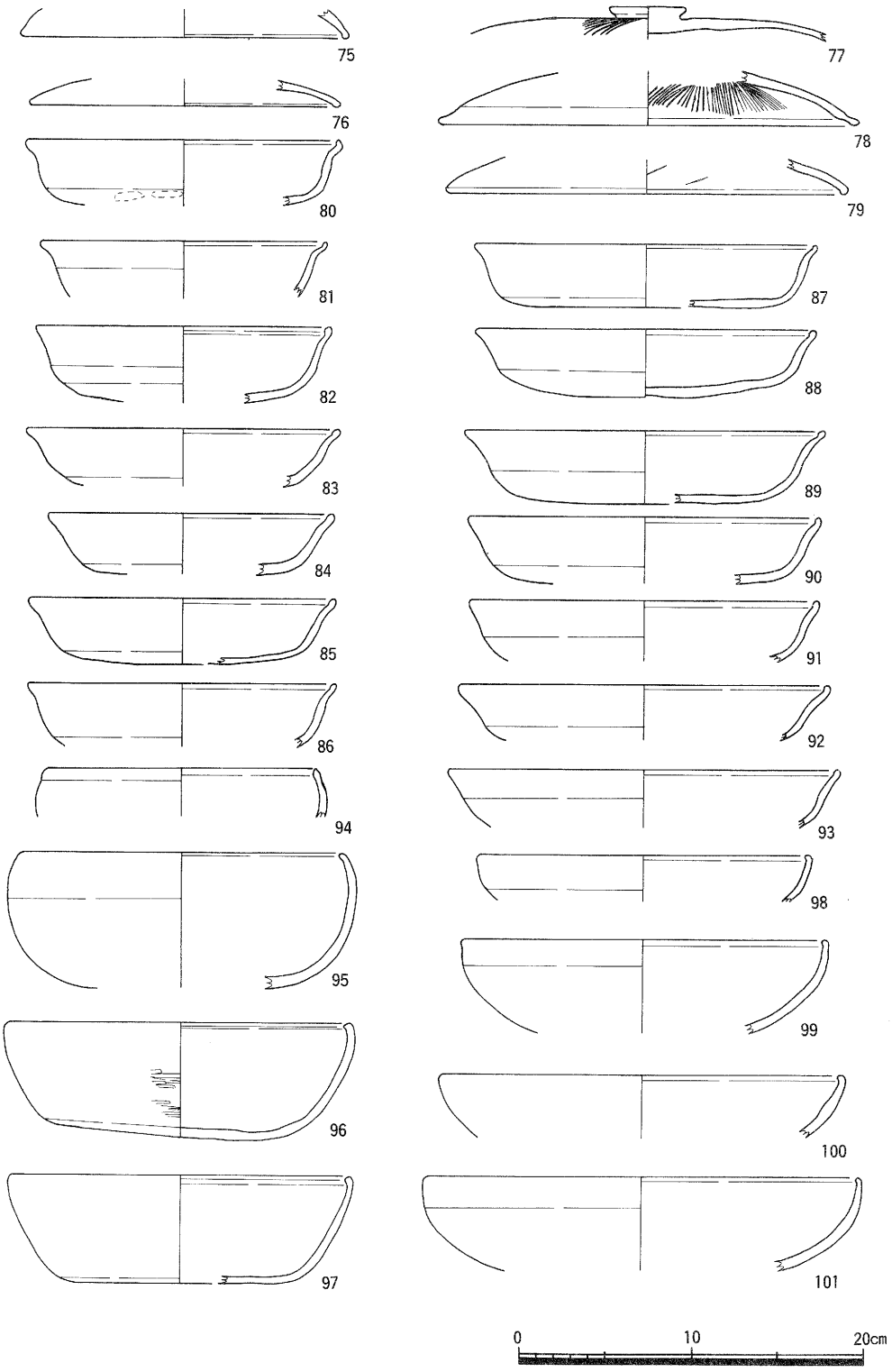
ＳＫ－２の南東で検出した。平面の形状が楕円形を呈するもので、長径1.1ｍ・短径0.75ｍ・深さ0.15ｍを測る。内部堆積土は灰茶色粘土である。遺物は土師器甕（154・155）・竈（156）須恵器杯身（153）が出土した。



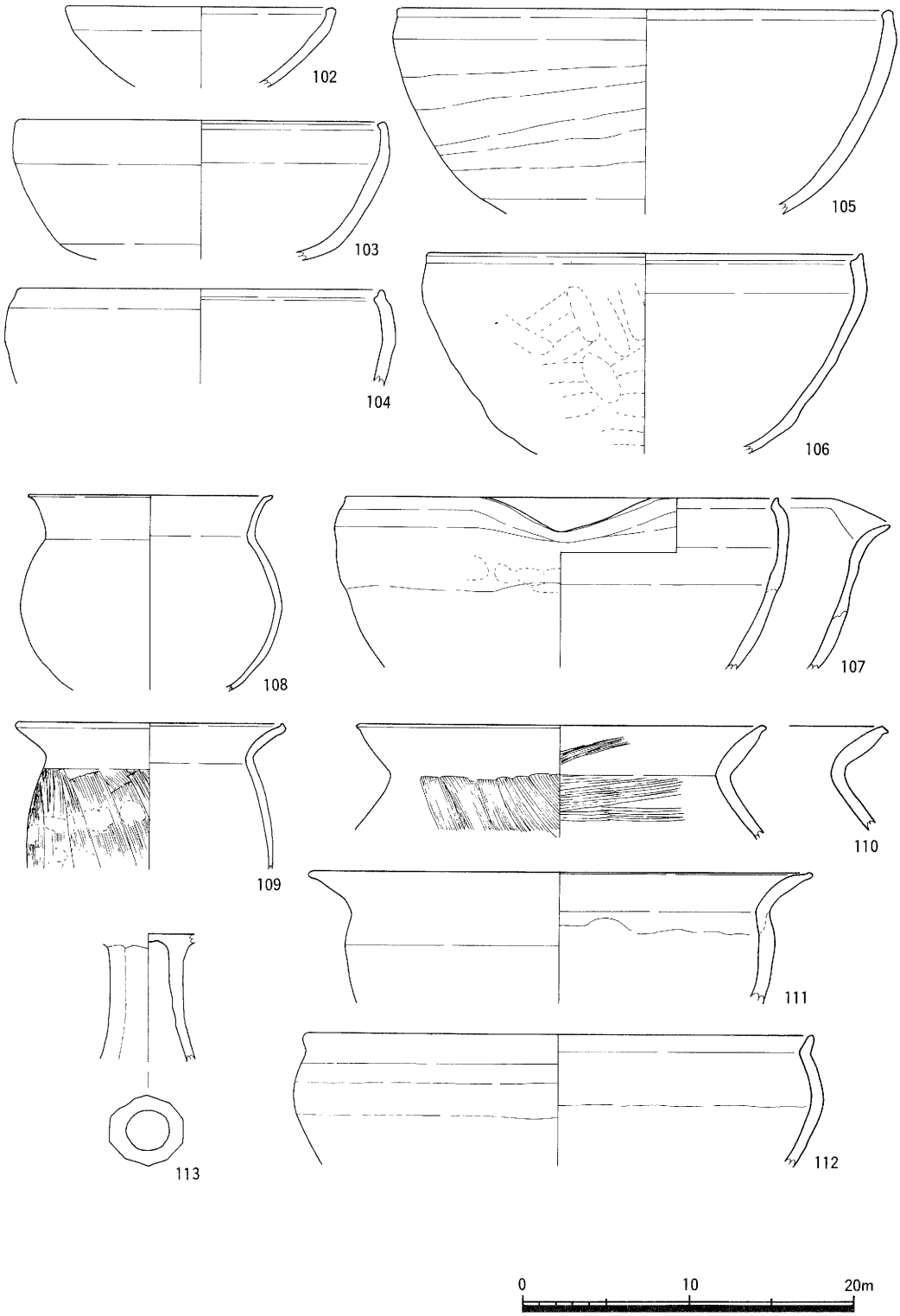
第５図　ＳＫ－１　出土遺物実測図１



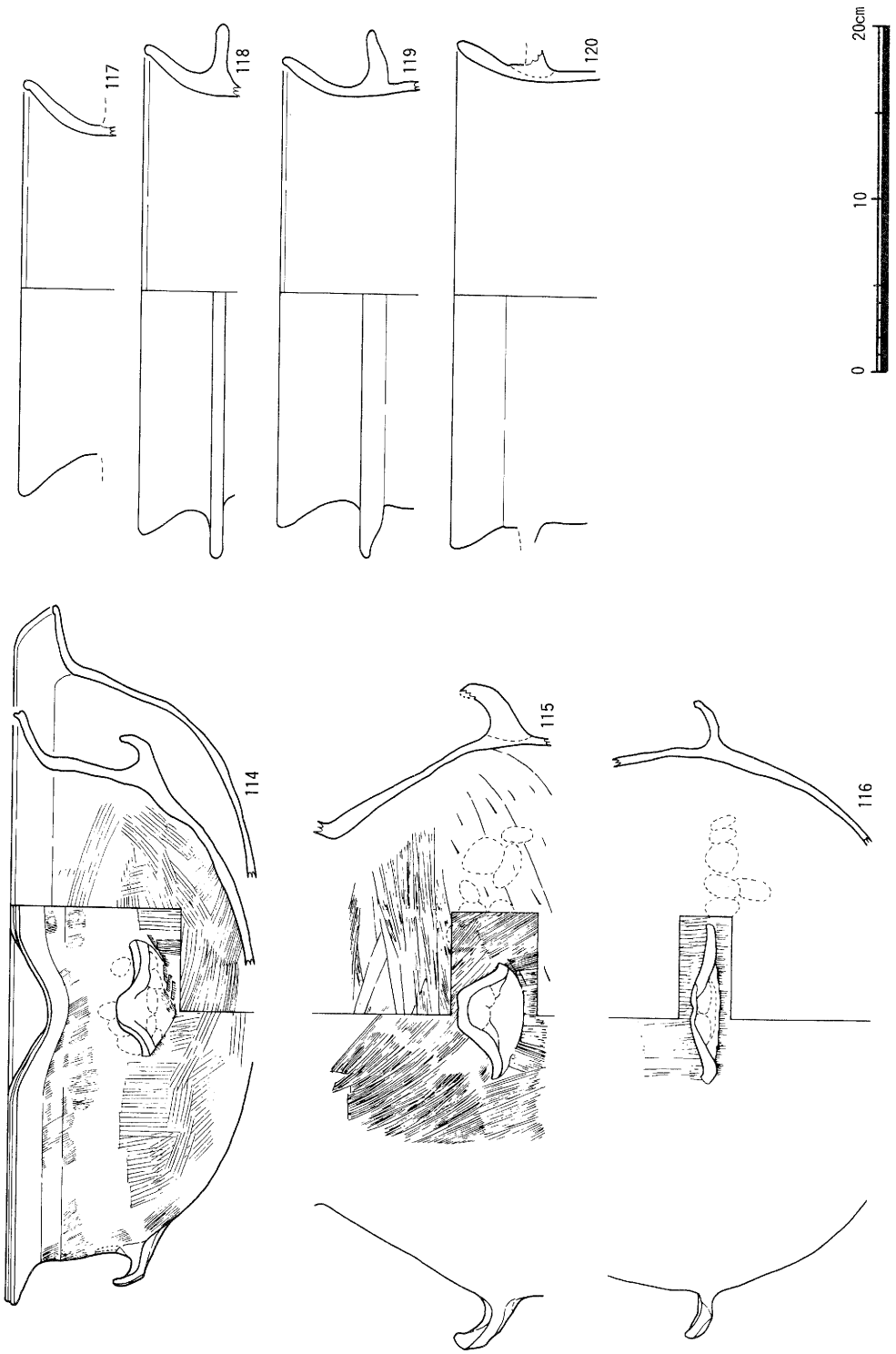
第６図　ＳＫ－１　出土遺物実測図２



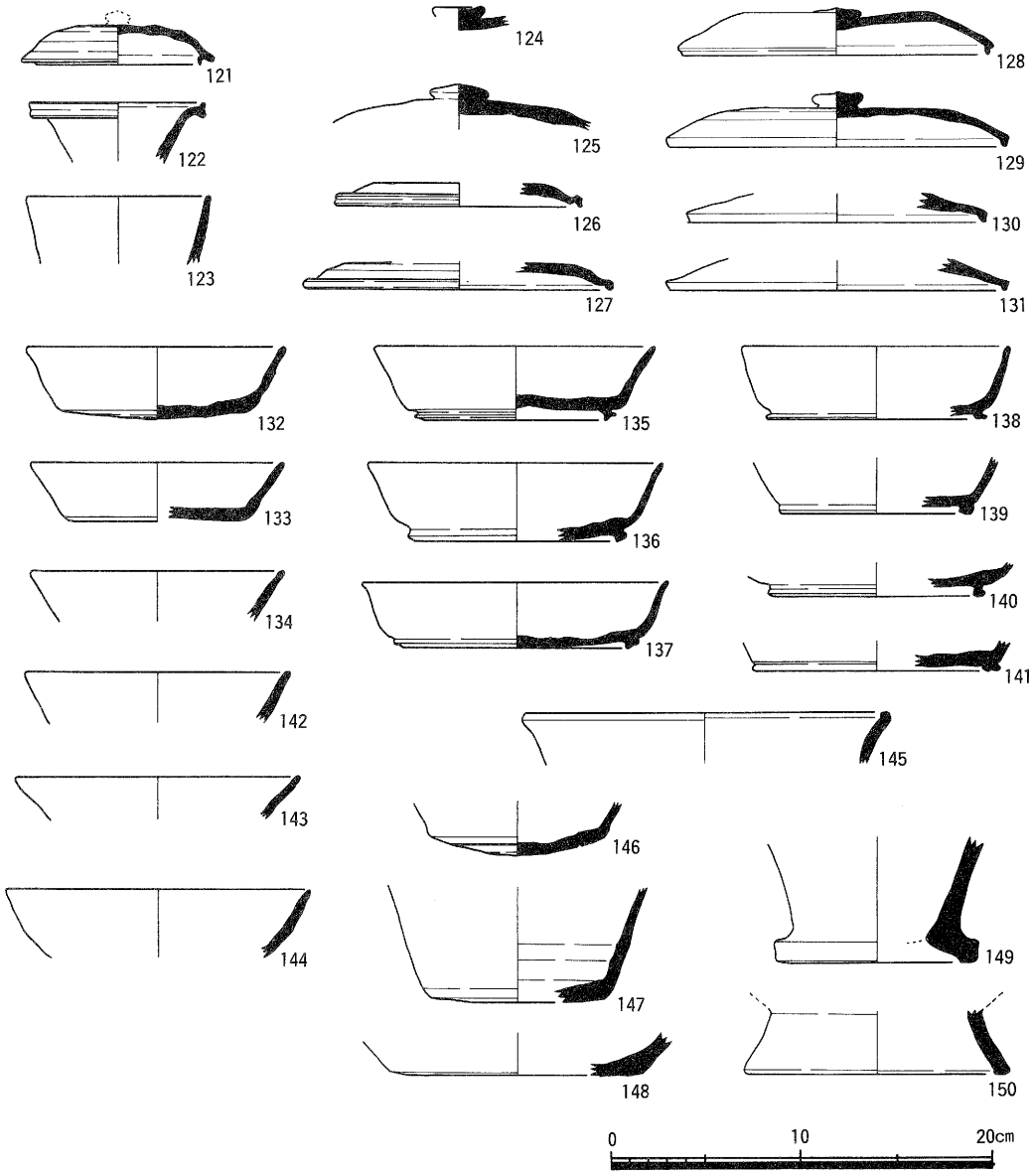
第７図　ＳＫ－１　出土遺物実測図３



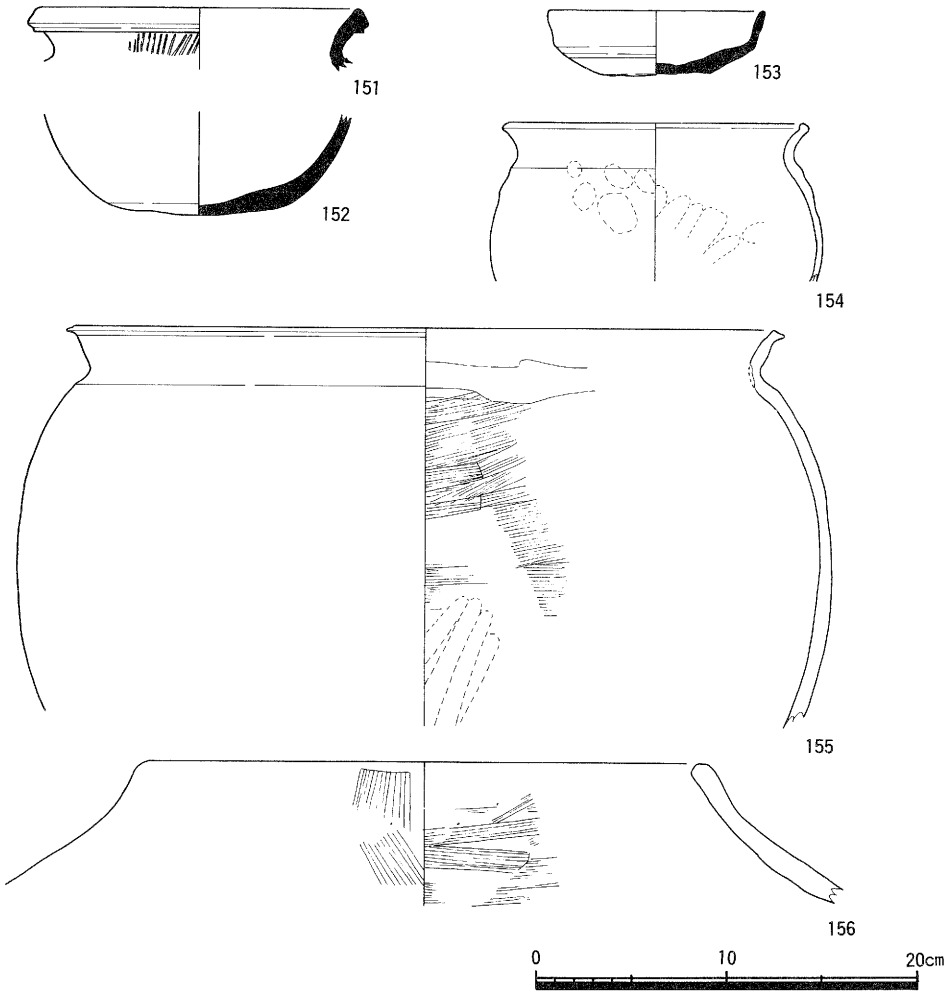
第８図　ＳＫ－１　出土遺物実測図４



第９図　ＳＫ－１　出土遺物実測図５



第10図　ＳＫ－１　出土物実測図６



第11図　ＳＥ－１(151)，ＳＫ－３(153～156)出土遺物実測図

溝（ＳＤ）

ＳＤ－１

調査区の北西部で検出した。南東－北西方向に伸びるもので、検出長5.4ｍ・幅0.4ｍ・深さ0.05ｍを測る。内部堆積土は暗灰色粗砂混じり粘土である。

ＳＤ－２

調査区の北東部で検出した。南東から北西方向に伸びるもので、検出長4.0ｍ・幅0.4～0.8ｍ・深さ0.05～0.28ｍを測る。内部堆積土層は上層の淡茶灰色粗砂混じり粘土と下層の灰色細砂混じり粘土の二層で、遺物は下層から須恵器の横瓶（167）が出土している。

ＳＤ－３

調査区の西部で検出した。ＳＫ－１の北東部を切っている。北西－南東に伸びるもので検出長1.4ｍ・幅0.4ｍ・深さ0.05ｍを測る。内部堆積土層は暗灰色粗砂混じり粘土である。

ＳＤ－４

調査区の西部で検出した。南東－北西方向に伸びるもので、南東端はＳＫ－１に合流している。検出長1.6ｍ・幅0.4ｍ・深さ0.15ｍを測る。内部堆積土は暗灰色粗砂混じり粘土である。遺物は土師器土釜（168）・竈（169）が出土した。

ＳＤ－５

ＳＤ－４の南で検出した。ＳＤ－４に並行して伸びるもので、南東端はＳＫ－１に合流している。検出長1.4ｍ・幅0.3ｍ・深さ0.07ｍを測る。内部堆積土は暗灰色粗砂混じり粘土である。遺物は土師器中皿（170）・土釜（171）が出土した。

ＳＤ－６

調査区の西部で検出した。南東－北西方向に伸びるものでＳＤ－６を切っている。検出長1.5ｍ・幅0.4ｍ・深さ0.15ｍを測る。内部堆積土は灰色シルト混じり粘土である。

ＳＤ－７

調査区の西部で検出した。屈曲して伸びるもので一部ＳＤ－６に切られている。幅0.4～0.8ｍ・深さ0.06ｍを測る。内部堆積土層は暗灰色粗砂混じり粘土である。

落ち込み１

調査区の北西隅で検出した。検出部分の平面の形状は「Ｌ」字型を呈するが、北西部がＳＤ－２に切られ北部および東部が調査区外のため全容は不明である。検出部分で東西4.5ｍ・南北2.0ｍ・深さ0.1ｍを測る。内部堆積土層は茶褐色細砂混じり粘土・茶灰色シルト混じり粘土・茶灰色粘質シルトで各層には多量の炭片が含まれていた。底部から小穴６個（ＳＰ－１～ＳＰ－６）が検出された。遺物は須恵器杯蓋（172）が出土した。

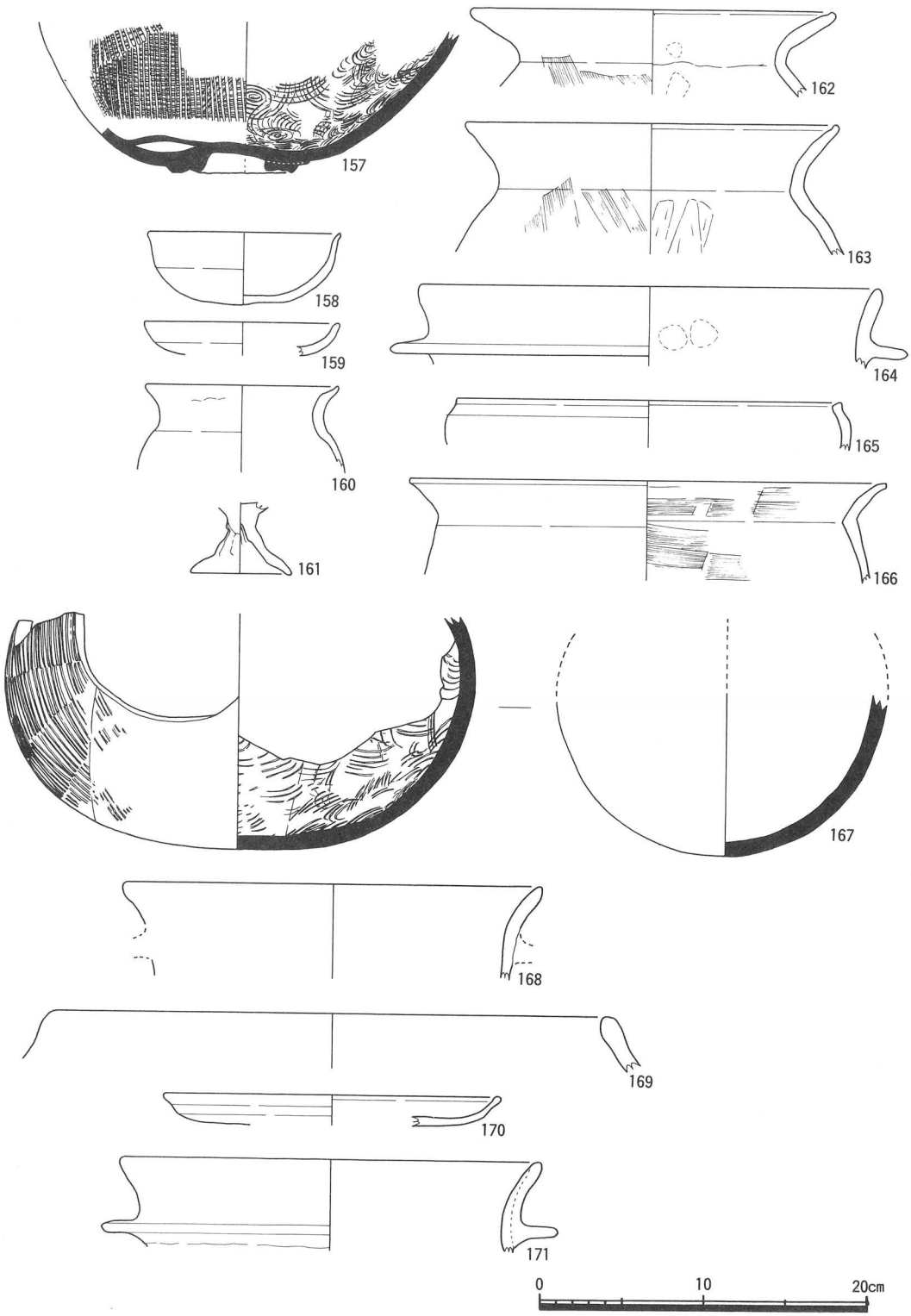
小穴（ＳＰ）

小穴は調査区の東部および西部で検出した。総数は18個（ＳＰ－１～ＳＰ－18）である。平面の形状で区別すれば円形８個（ＳＰ－４・９・10・13～17）、楕円形６個（ＳＰ－２・３・５・６・11・12）、方形１個（ＳＰ－８）、不定形１個（ＳＰ－１・７）、不明１個（ＳＰ－18）である。規模は幅0.2～1.0ｍ・深さ0.05～0.16ｍを測る。遺物はＳＰ－８から須恵器甕（157）、ＳＰ－９から土師器杯（158）、ＳＰ－10から土師器小皿（159）・甕（160・162・163）・高杯（161）・土釜（164）・鉢（165）出土した。

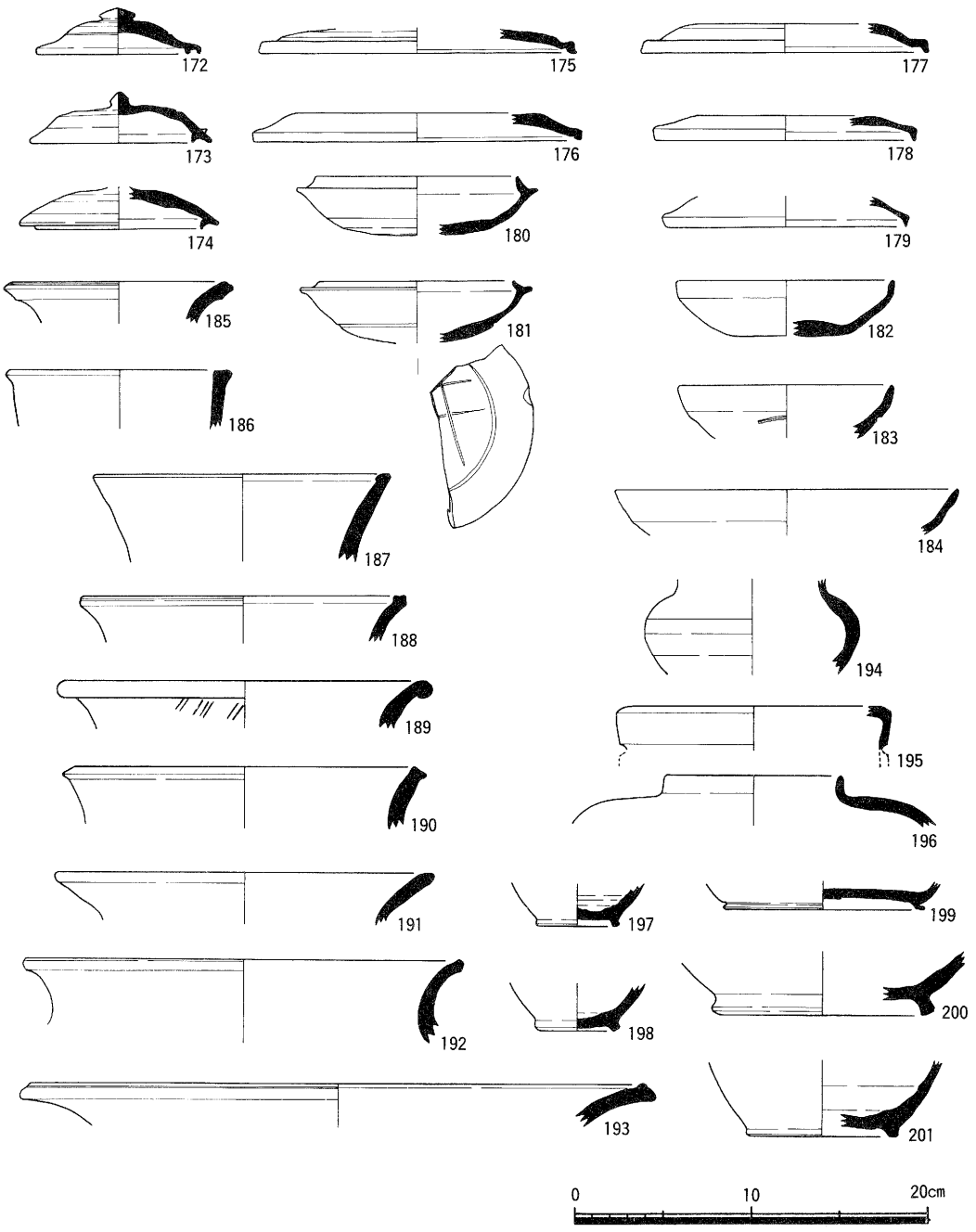
包含層出土遺物

遺物包含層は第３層・第５層で、第３層からは鎌倉時代後期、第５層からは奈良時代に比定される遺物が出土した。総量はコンテナ箱に２箱程度である。

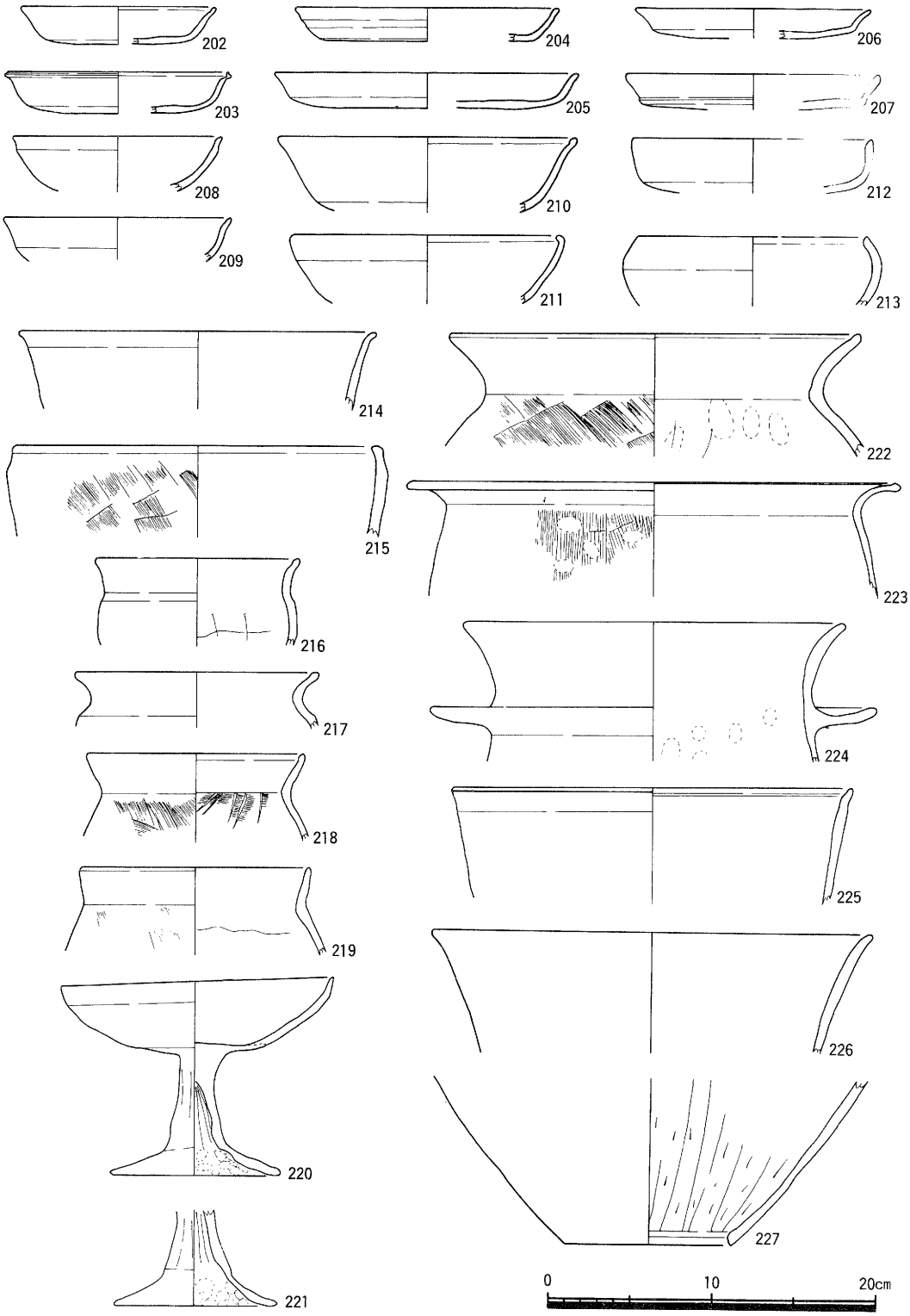
図示した遺物の総数は69点（173～242）である。そのうち第５層出土遺物は54点（173～227）、第３層出土遺物は15点（228～240）である。



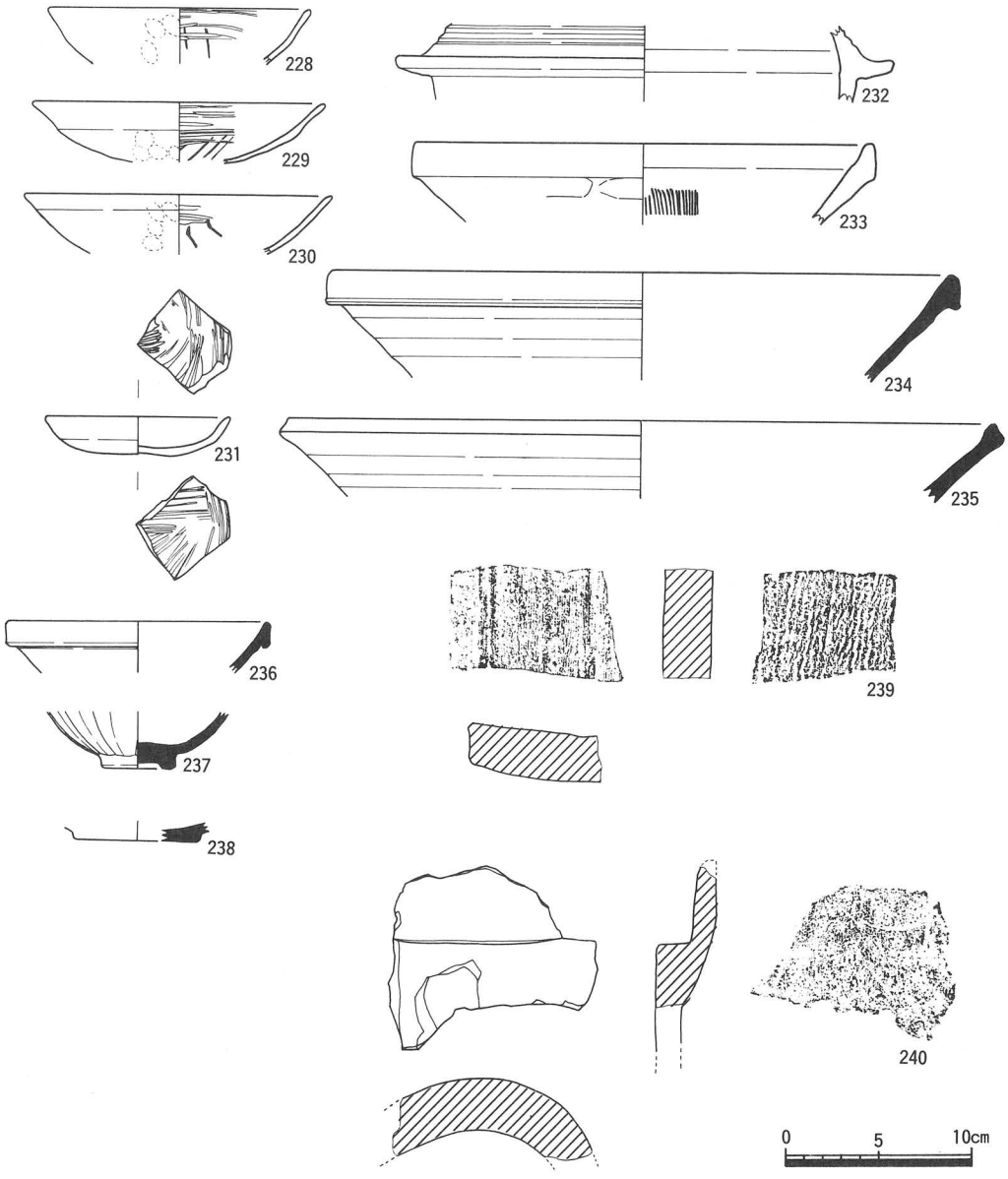
第12図　ＳＰ－８（157），ＳＰ－10（159～165），ＳＤ－２（167），ＳＤ－４（168・169）ＳＤ－５（170・171）出土遺物実測図



第13図　落ち込み１(172)，第５層(173～201)出土遺物実測図



第14図　第５層出土遺物実測図



第15図　第３層出土遺物実測図

第５層出土遺物の内訳は、土師器26点（202～227）、須恵器29点（173～201）である。土師器小皿は２点（202・203）図示した。口縁端部が丸味をもって終わるもの（202）と口縁端部が上方につまみ上げられるもの（203）がある。中皿は４点（204～207）図示した。体部が斜上方に伸びるもので、口縁端部は丸く終わるもの（204・205・207）と体部が外反するもの（206）がある。杯は５点（208～212）図示した。体部が斜上方に伸びた後、口縁端部付近で小さく外反するもの（208～210）。体部が内湾気味に伸びた後、口縁端部が内側に肥厚するもの（211）。体部が垂直に伸びるもの（212）がある。（213）は鉢で、体部が内湾気味に伸びる。甑は５点図示した（214・215・225～227）。体部が上外方に伸びた後、口縁端部付近で外反するもの（214・225・226）と口縁部が内湾するもの（215）がある。（227）は底部である。甕は６点図示した（216～219・222・223）。小型の（216～219）と大型の（222・223）がある。（224）は鍔を有する土釜である。高杯は２点図示した。（220）は椀形の杯部を有するものである。須恵器杯蓋は７点（173～179）図示した。口縁端部にかえりを有するもの（173・174）と無いもの（175～179）がある。杯身は５点（180～184）図示した。受部を有するもの（180・181）と直口の口縁を呈する（182・184）がある。181の底部には「×」のヘラ記号が遺存している。甕は７点（187～193）図示した。いずれも細片のため詳細は不明である。壺は８点（194～202）図示した。197～201は高台を有するもので、小型の（197・198）と大型の（199～201）がある。

第３層出土遺物の内訳は、瓦器椀３点（228～230）・瓦器小皿１点（231）、土師器土釜１点（232）・擂鉢１点（233）、須恵器鉢２点（234・235）、白磁碗１点（236）、青磁碗１点（237）、緑釉陶器１点（238）、平瓦１点（239）、丸瓦１点（240）である。

Ⅲ　まとめ

今回の調査では、奈良時代に比定される遺構・遺物が検出された。なかでも、ＳＫ－１の出土遺物は完形こそ少なかったものの雑多な土器類が多量に出土しており、この時期の土器類の様相を知るうえで貴重な資料の１つと言えよう。

ＳＫ－１出土土器類のうち図示でき得たものの総数は150点で、土師器120点（80％）・須恵器20点（20％）である。土師器・須恵器の器種別の比率は、土師器小皿20点（16.7％）・中皿12点（10％）・杯56点（46.7％）・杯蓋５点（4.2％）・鉢15点（12.5％）・甕６点（５％）・鍋１点（0.8％）・高杯１点（0.8％）・土釜４点（３％）、須恵器杯蓋９点（30％）・杯身14点（46.7％）・壺５点（16.7％）・鉢１点（３％）・不明１点（３％）である。そのうち、須恵器杯蓋については３形態（Ａ類～Ｃ類）に分類が可能で、これらの土器群の帰属時期を知るうえで有効な土器と言えよう。形態の特徴からＡ類は口縁部にかえりを有するもの、Ｂ類は口縁部が下方に短く屈曲するもの、Ｃ類は口縁部と天井部の境に段を有するものに区別した。形態の特徴からＡ類・Ｂ類・Ｃ類の順で推移することが明晰にされており、陶邑編年[註1]の型式によれば、Ａ類がⅢ型式第３段階、Ｂ類がⅣ型式１段階、Ｃ類がⅣ型式２段階に比定されている。

なお、平城宮の編年[註2]によれば平城宮Ⅰの段階ではＢ類のみであるが、平城宮Ⅱの時期にはＢ類とＣ類が共存することが確認されている。また、土師器の器種構成においては平城宮Ⅲ期以降に出現する佐波理鋺模倣土器椀が出土していないことが土器群の時期を決定するうえでの目安となろう。以上の結果から、平城宮Ⅱの略年代の１点とされる730年前後を中心とした資料と推定されよう。

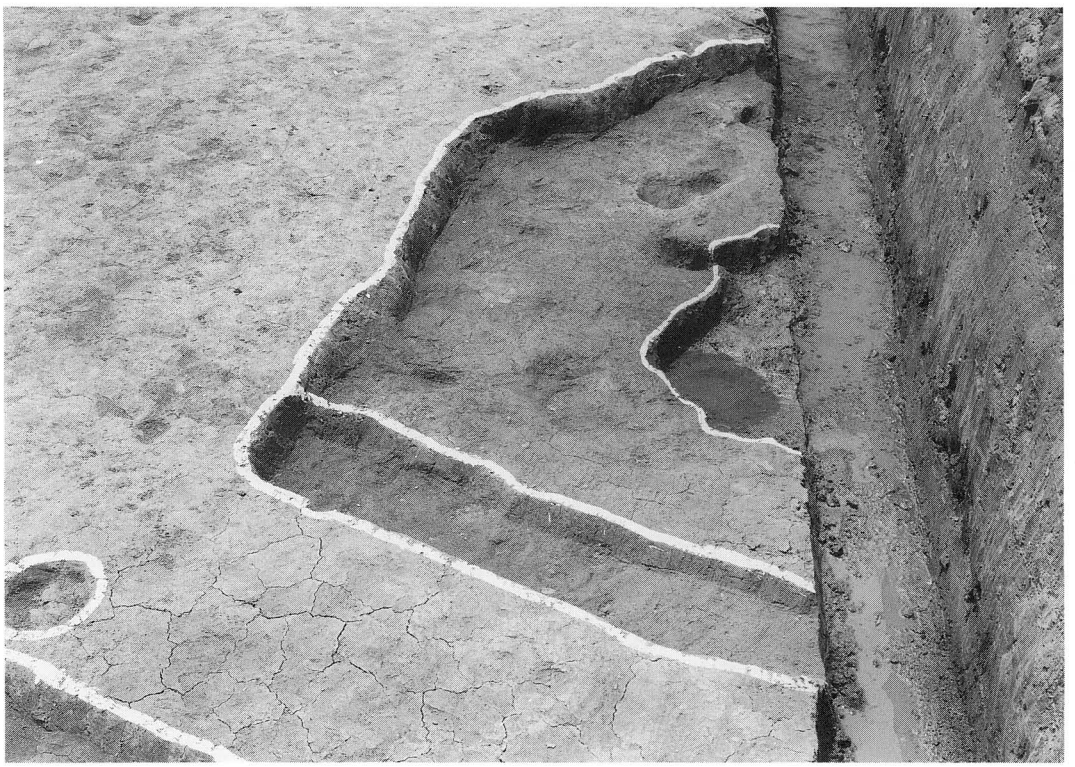
註記

註１　（財）大阪文化財センター　『陶邑Ⅰ』　大阪府文化財調査報告書第28輯　1980

註２　西　弘海　「土器様式の成立とその背景」『小林行雄博士古稀記念論文集　考古学論考』　1982

図　　版

調査区全景（東から）

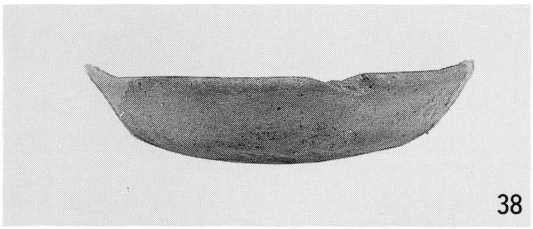


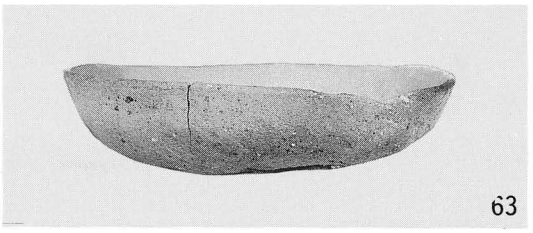
ＳＫ－１（北から）

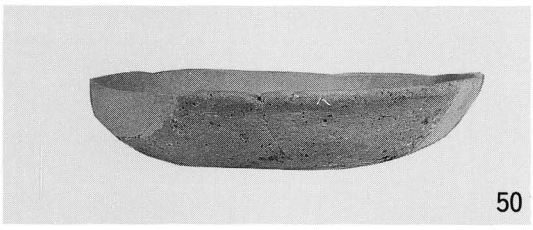
図版二

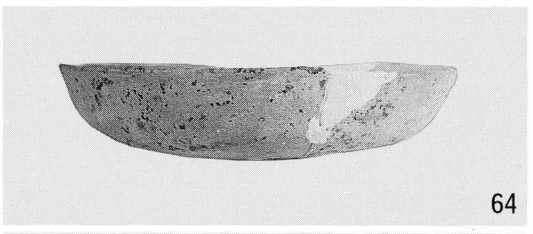
拡張区全景（東から）

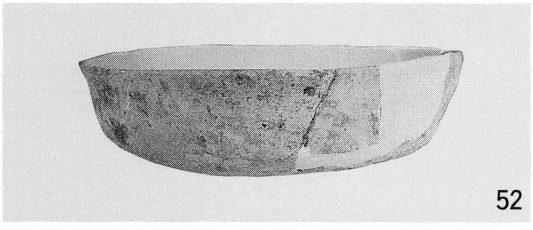
ＳＤ－２遺物出土状況（東から）

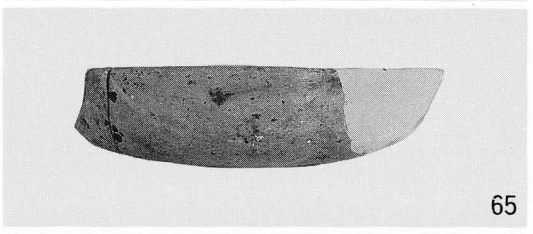

38

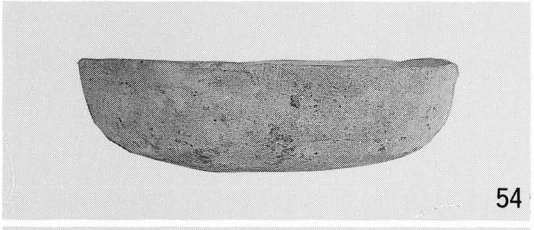

63

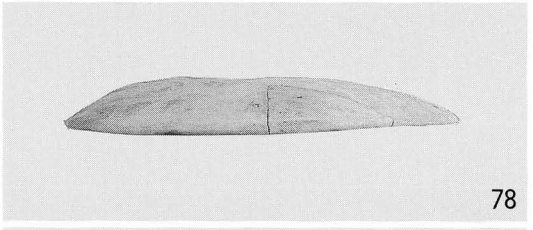

50

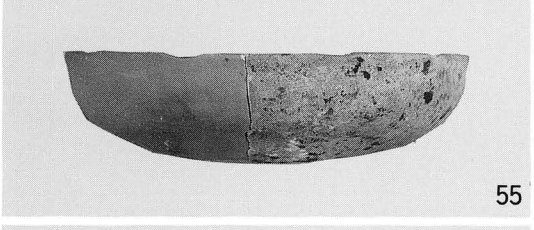

64

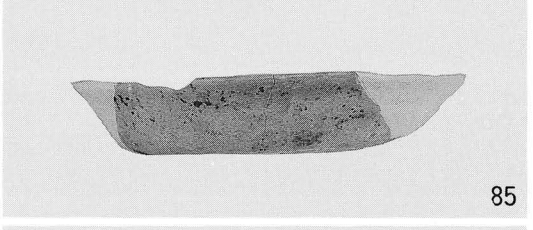

52

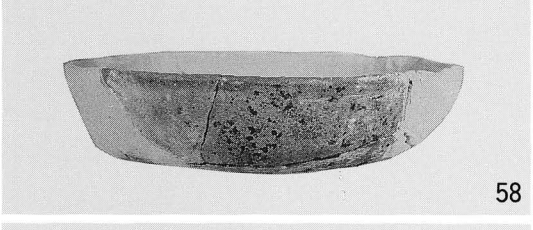

65

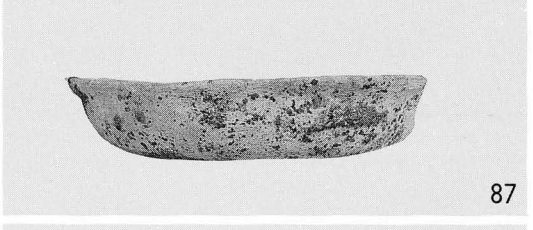

54

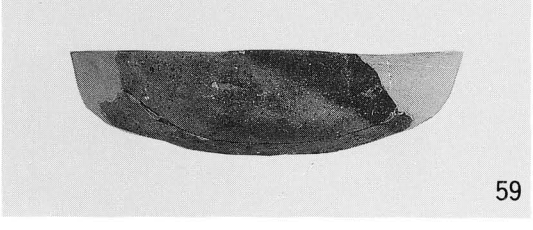

78

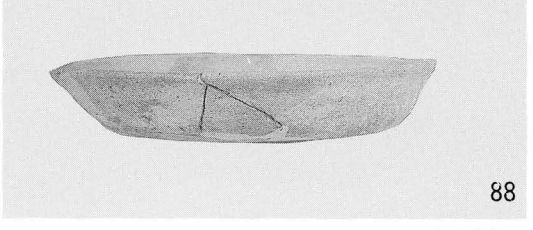

55


85

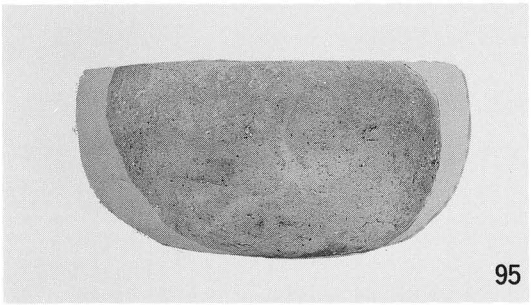

58

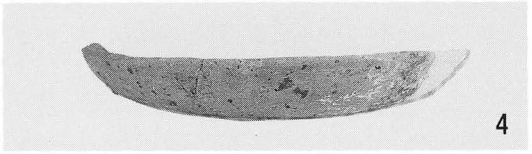

87

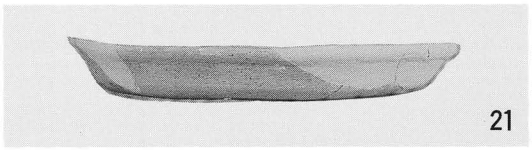

59

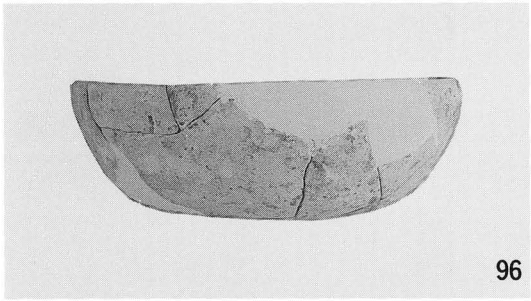

88

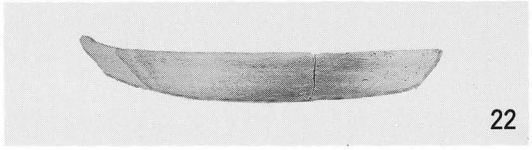
ＳＫ－１出土遺物１

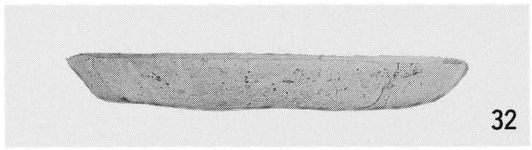


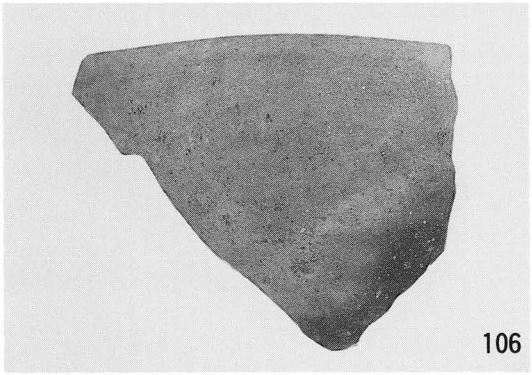


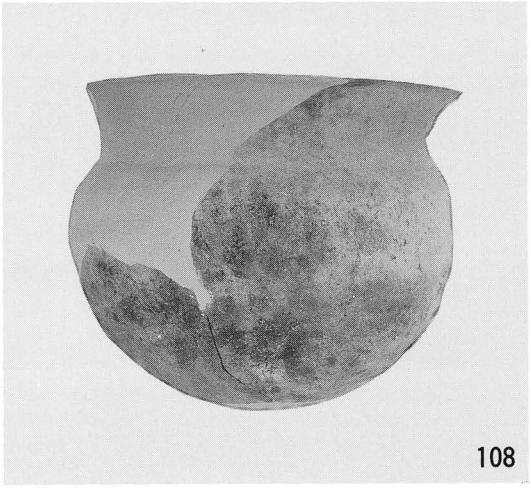


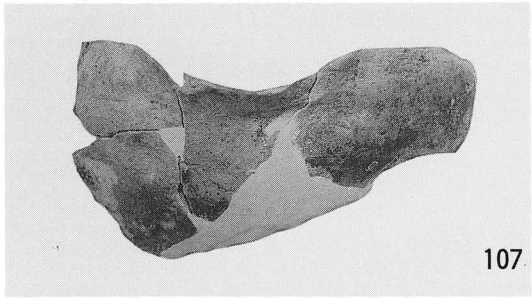


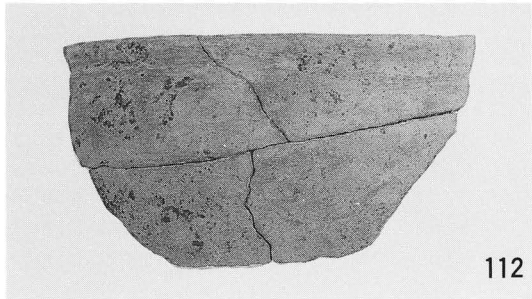




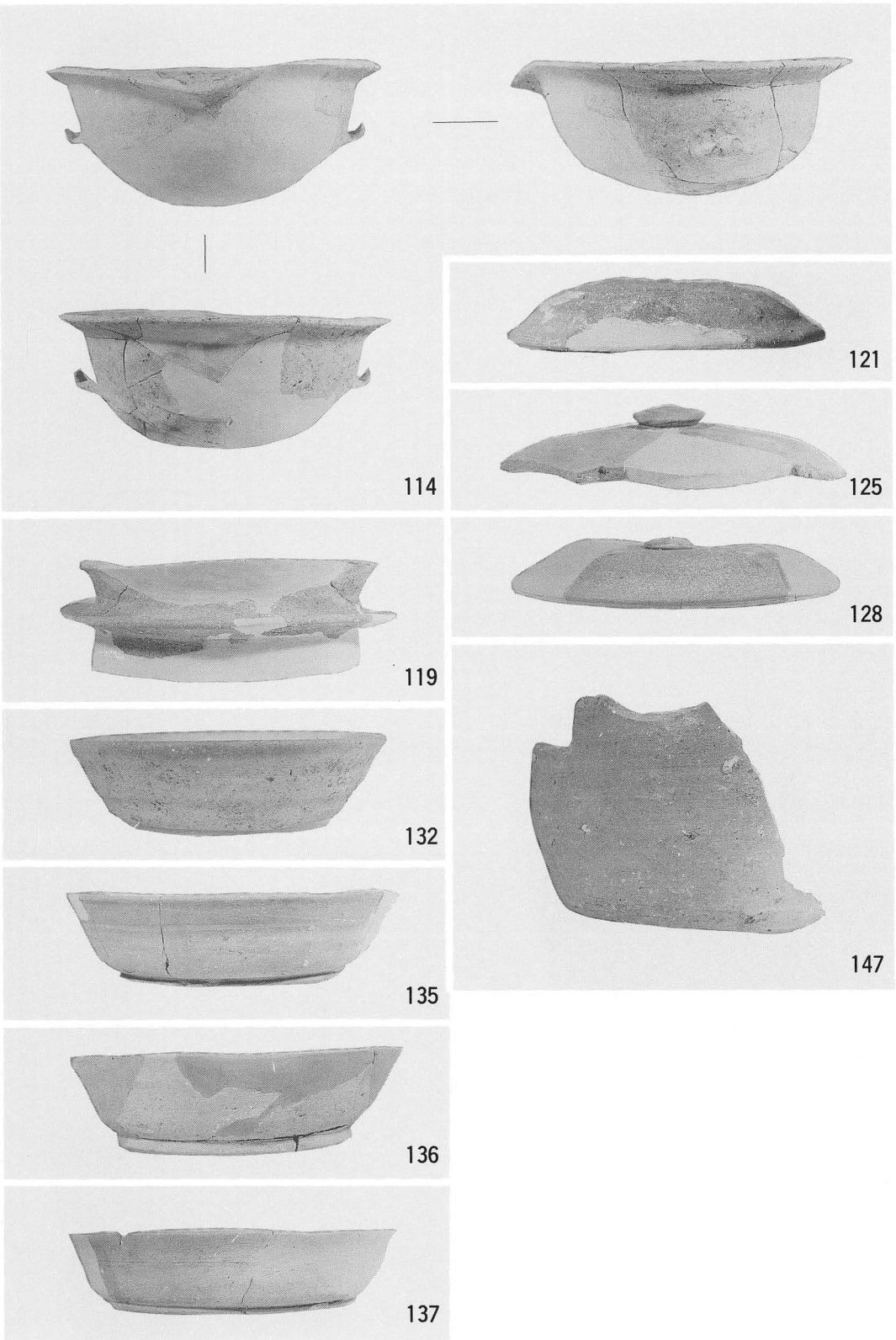






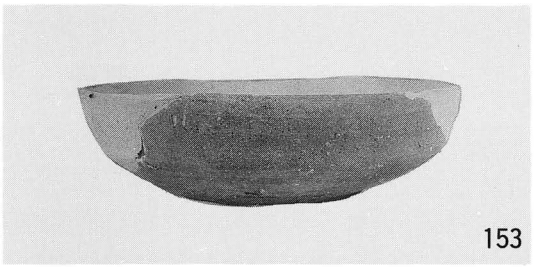


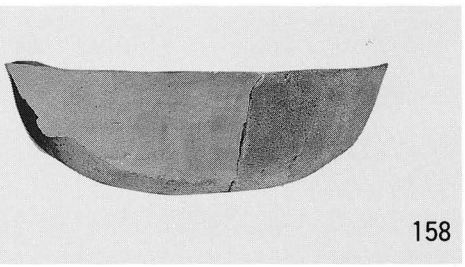
ＳＫ－１出土遺物２

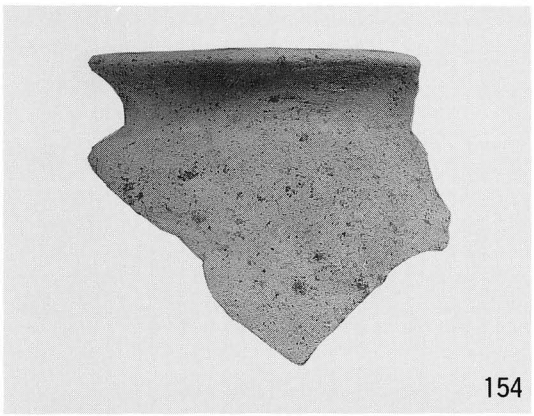


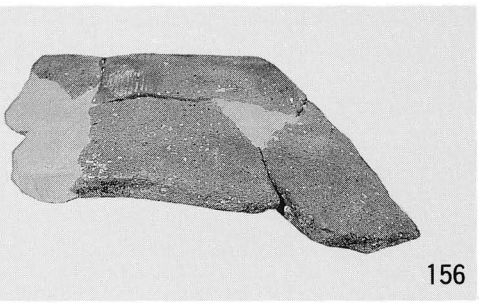
ＳＫ－１出土遺物３

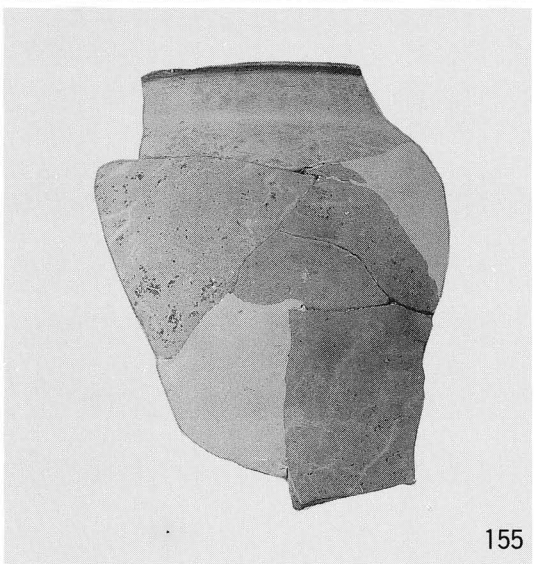
図版六

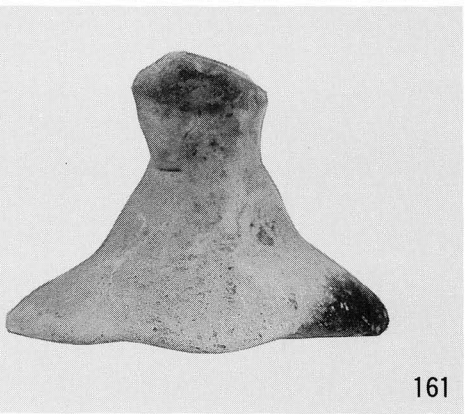

153

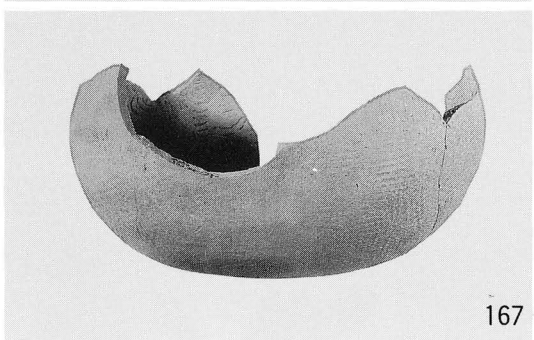

158

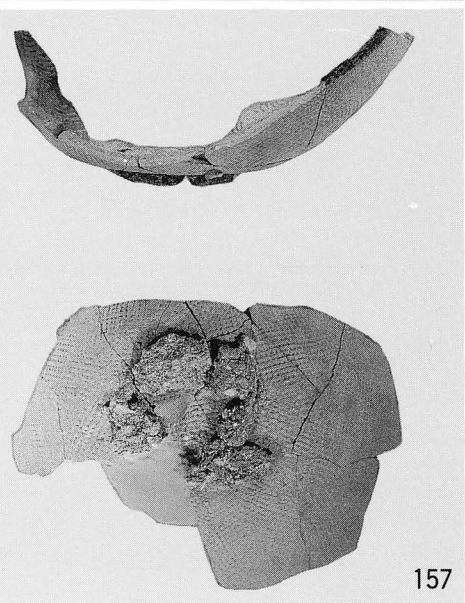

154


156


155

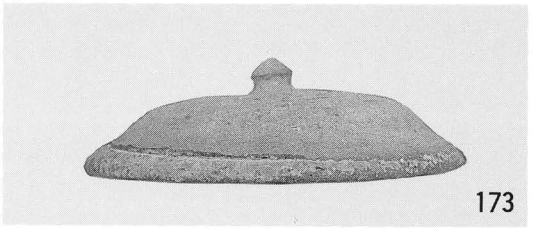

161

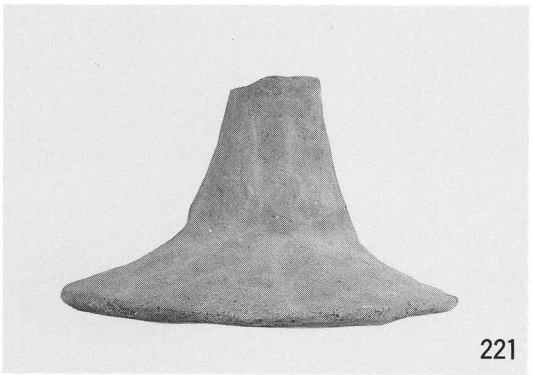

167

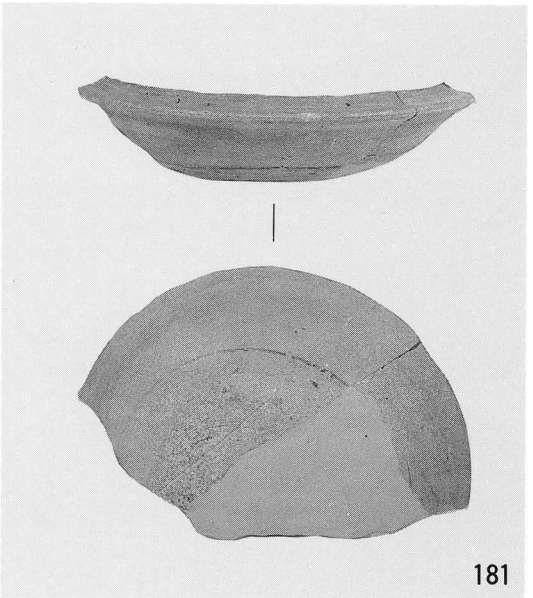

157

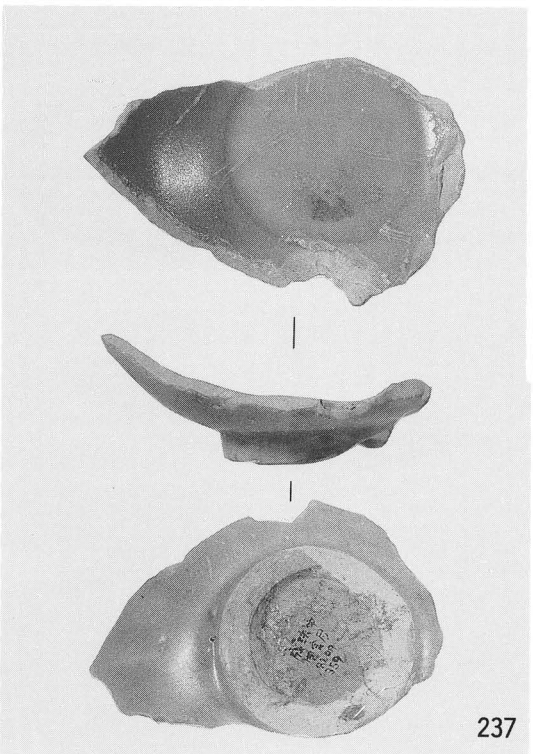
S K－3 (153～156)、S P－1 (157)、S P－9 (158)、S P－10 (161)、S D－2 (167) 出土遺物

220


173


221


181


237

201

第 5 層 (173・181・201・220・221)、第 3 層 (237) 出土遺物

第３章　第２次調査（ＳＨ83－２）発掘調査報告

例　　言

1．本書は、八尾市清水町２丁目２－５番地で実施した校舎建替え工事に伴う発掘調査の報告である。

1．本書に報告する成法寺遺跡第２次調査（ＳＨ83－２）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は昭和58年７月25日から８月15日にかけて、高萩千秋を担当として実施した。調査面積は360㎡を測る。なお、調査においては徳谷貢正・山西嘉彦・笹井伸彦・中野健太郎・森下（旧姓嶋村）友子が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後実施し、平成３年に刊行した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測－西森忠幸・岡田清一・八元聡志、図面レイアウト－中西紀子・山中智美、図面トレース－岩本多貴子・小倉弘恵、遺物写真撮影－高萩が行った。本書の執筆は主に高萩が担当したが、Ⅲ出土遺物観察表については村田英子が担当した。

1．全体の編集は高萩が行った。

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに …… 25

Ⅱ　調査概要 …… 26

　１．調査の方法 …… 26

　２．基本層序 …… 27

　３．検出遺構・出土遺物 …… 27

　　１）第１調査面（古墳時代前期） …… 29

　　２）第２調査面（古墳時代後期） …… 31

　　３）遺構に伴わない遺物 …… 34

Ⅲ　出土遺物観察表 …… 35

Ⅳ　まとめ …… 38

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺図 …… 25
第２図　調査区設定図及び区割図 …… 26
第３図　基本層序柱状図（Ｓ＝１／40） …… 27
第４図　第１調査面遺構平面図 …… 28
第５図　ＳＤ１東部検出遺物平断面図及び断面図 …… 29
第６図　ＳＤ１出土遺物実測図 …… 30
第７図　ＳＤ２出土遺物実測図 …… 31
第８図　ＳＤ３出土遺物実測図 …… 31
第９図　第２調査面遺構平面図 …… 32
第10図　ＳＢ１平断面図 …… 33
第11図　遺構に伴わない遺物 …… 34

図　版　目　次

図版一　第１調査区全景（北から）
第２調査区第１調査面全景（北から）
図版二　第２調査区ＳＤ１検出遺物（北から）
第２調査区第２調査面全景（北から）
図版三　ＳＤ１
図版四　ＳＤ２
遺構に伴わない遺物

Ⅰ　はじめに

今回の調査は、八尾市清水町２丁目２－５内に所在する八尾市成法寺中学校の校舎建設に伴う発掘調査で、当調査研究会が実施した第２次調査（ＳＨ83－２）にあたる。当調査の敷地内では、今回の調査を含めて校舎建て替え工事に伴う発掘調査が八尾市教育委員会と当調査研究会により実施されている。第１回目の調査地は今回の調査地の南西約10ｍ地点で、昭和56年度に八尾市教育委員会により発掘調査が実施されている。第２回目の調査地は今回の調査の南東約40ｍ地点で、昭和57年度に当調査研究会が第１次調査（ＳＨ82－１）を実施している。さらに、同学校敷地内では昭和62年にも当調査地の南東約100ｍ地点で、当調査研究会が第３次調査（ＳＨ87－３）を実施しており、これを含めて計４回にわたる調査が実施されている。これらの調査の結果、古墳時代中期～鎌倉時代に至る遺構・遺物が検出されている。

調査期間は昭和58年７月25日～８月15日まで現地調査を実施した。調査面積は約360㎡を測る。

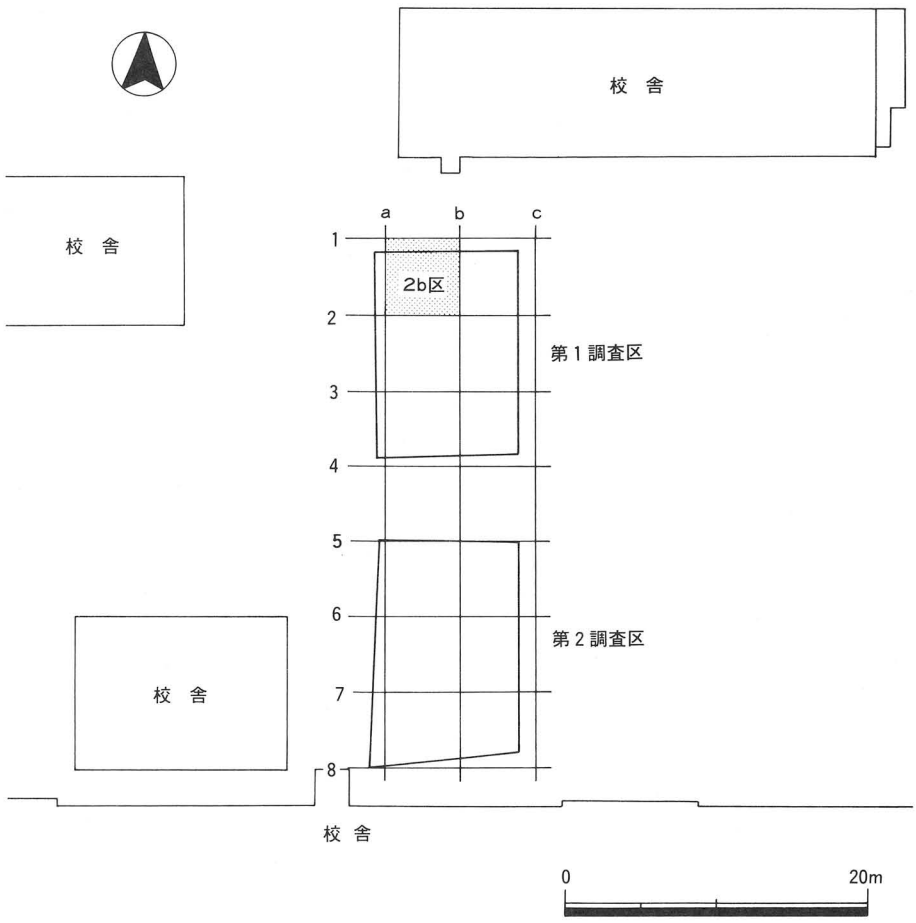
第１図　調査地周辺図

Ⅱ　調査概要

1．調査の方法

調査地が二分されていることから、北側の調査区を第１調査区、南側の調査区を第２調査区と呼称した。調査は八尾市教育委員会の指示に基づいて、現地表面から約1.3ｍまでの土層を機械で掘削し、それより以下40㎝の土層は人力による掘削・精査を実施した。

地区割は、調査区範囲内に任意の基準点を設け、南北線を磁北方向に合わせて南北40ｍ、東西15ｍの調査区内を５ｍ四方に区画した。地区名は北西部の隅から東西線が数字（１～８）、南北線がアルファベット（ａ～ｃ）を付称し、１ａ～８ｃ区とした。



第２図　調査区設定図及び区割図

２．基本層序

調査区内で現地表面から約1.8ｍまでに存在する土層内から普遍的にみられる８層を摘出して基本層序とした。現地表面は標高9.4ｍを測る。

第１層　盛土：層厚90㎝。学校建設で整地された土層である。

第２層　旧耕土：層厚10～15㎝。

第３層　黄褐色～青灰色粘質土：15～25㎝。床土である。

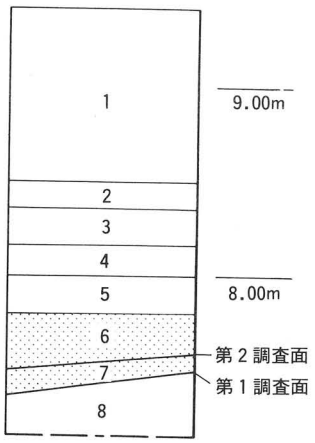
第４層　青灰色粘質土：層厚20～25㎝。

第５層　茶褐色粘質シルト：層厚20～25㎝。酸化鉄を多量に含む。

第６層　灰褐色細砂混粘質土：層厚20～40㎝。古墳時代前期～奈良時代の遺物を少量含み、北部に行くに従い厚く堆積している。

第７層　灰茶色粘質土：層厚10～20㎝。古墳時代前期に比定される遺物が含まれている。この上面には古墳時代後期の遺構が切り込まれている。標高7.2ｍ前後を測る（第２調査面）。

第８層　茶灰色粘質土：層厚30㎝以上。この上面で古墳時代前期の遺構を検出した（第１調査面）。

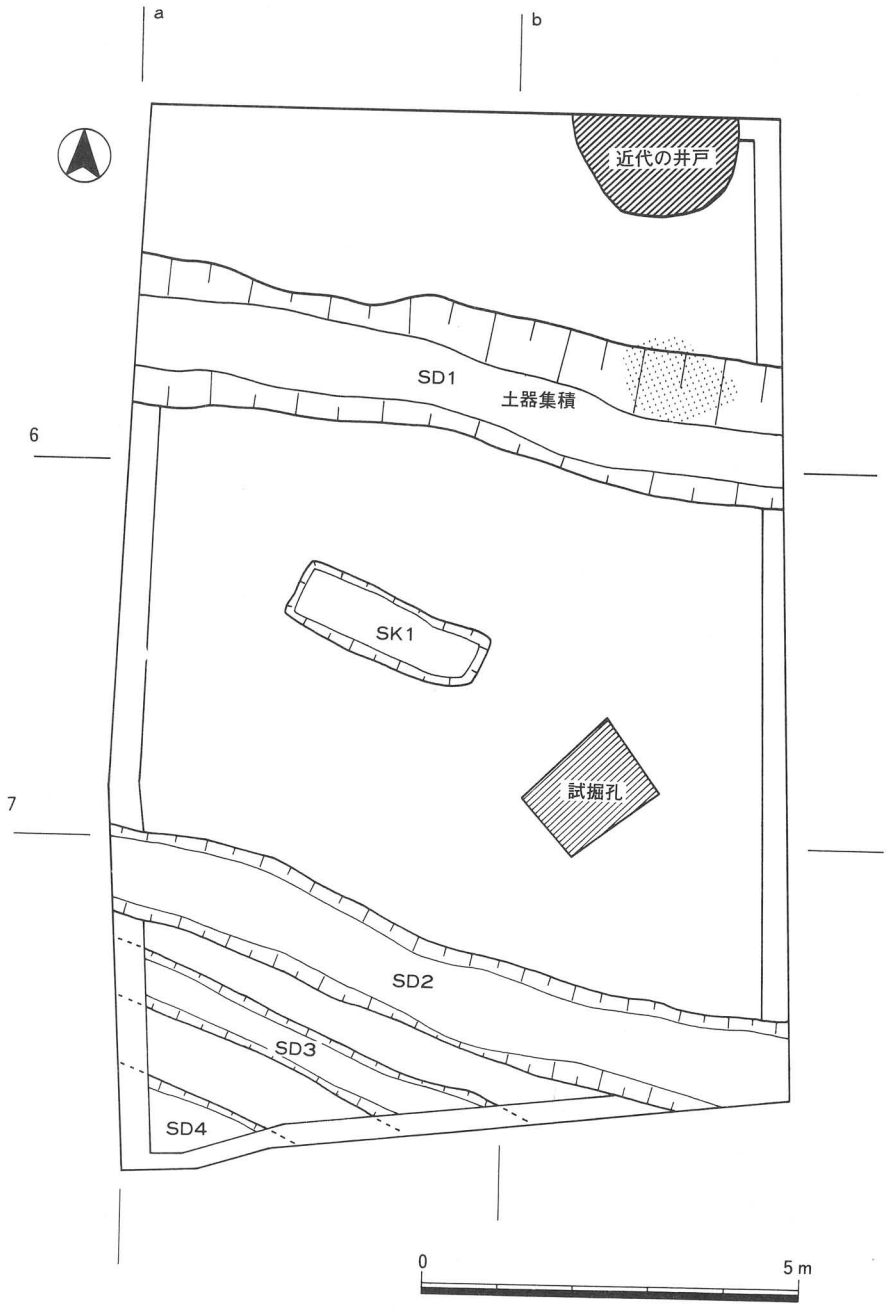


第３図　基本層序柱状図（Ｓ＝１／40）

３．検出遺構・出土遺物

第７層（第２調査面）と第８層の上面（第１調査面）の２面を調査対象面とした。その結果、第１調査区では、２面とも遺構が検出されなかった。第２調査区では、第１調査面で古墳時代前期の土坑１基・溝４条、第２調査面で古墳時代後期の掘立柱建物１棟・土坑１基・溝２条を検出した。

以下、第２調査面で検出した遺構遺物について概説する。



第 4 図　第 1 調査面遺構平面図

１）第１調査面（古墳時代前期）

土坑（ＳＫ）

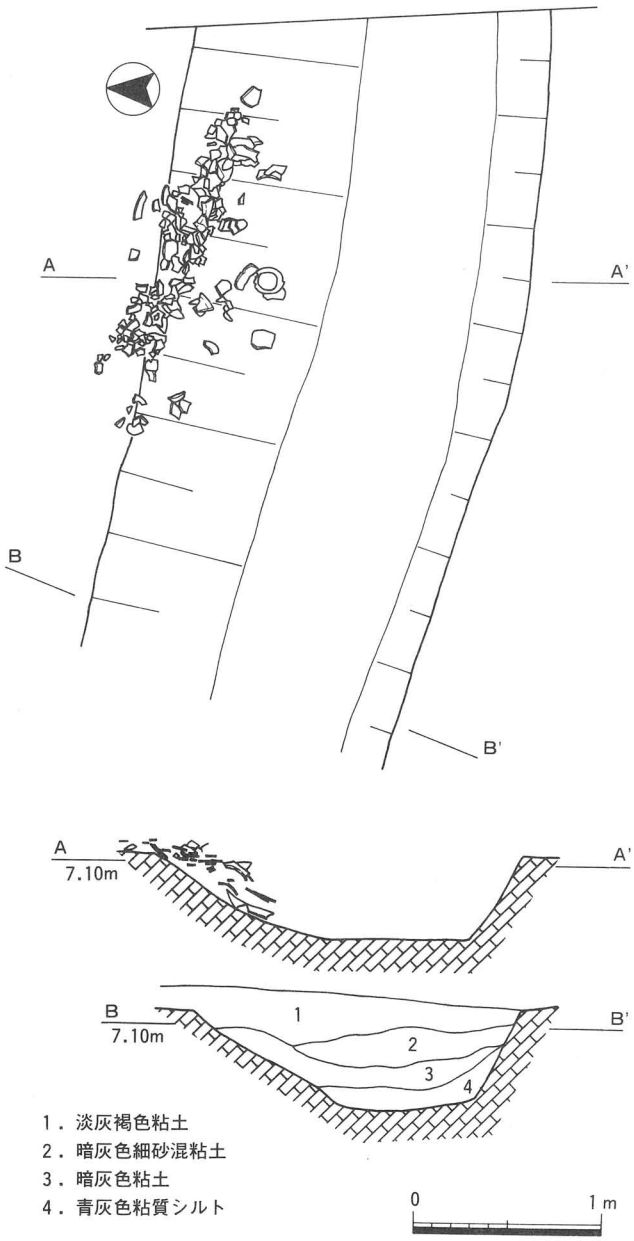
ＳＫ１

７ｂ区で検出した。平面の形状は長方形を呈する。規模は検出部で、長径2.65ｍ、短径0.76ｍ、深さ34㎝を測る。断面の形状は逆台形を呈し、内部には暗灰色粘質シルトが堆積している。遺物は、土坑内から庄内式新相に比定される庄内式甕などの小片が少量出土している。

溝（ＳＤ）

ＳＤ１

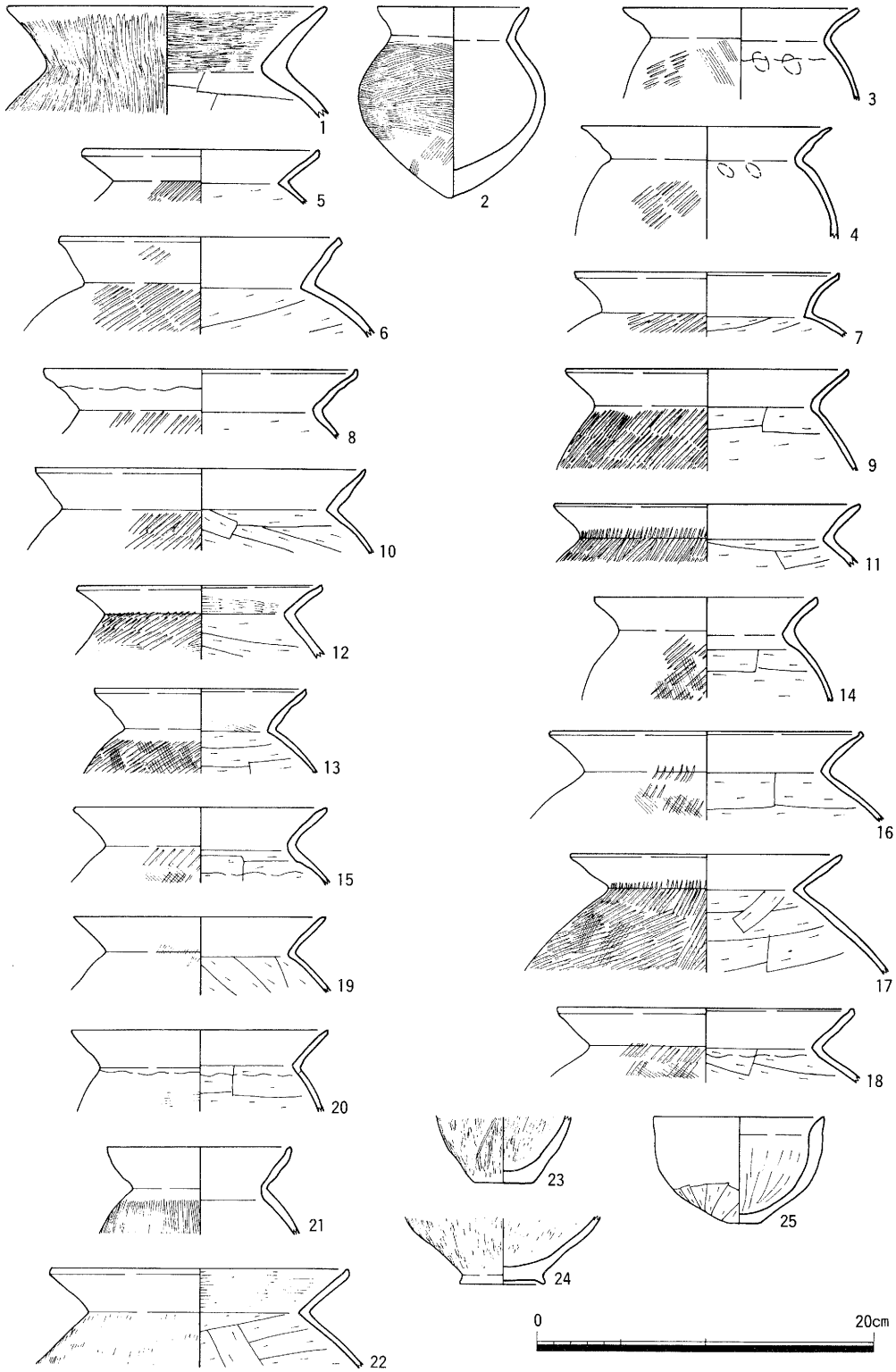
ＳＫ１の北部で検出した。方向はほぼ東西方向を示す。規模は検出部で、幅1.6～２ｍ、深さ58～62㎝を測る。断面は逆台形を呈し、内部には上方から淡灰褐色粘土・暗灰色細砂混粘土・暗灰色粘土・青灰色粘質シルトが堆積している。遺物は東部の北側斜面に集積していた。これらは古墳時代前期（庄内式新相）に比定される土器で、北側から投げ捨てられたような状態で検出された。器種には壺（１）・小型壺（２）・庄内式甕（３～22）・鉢（23～25）がある（第６図）。



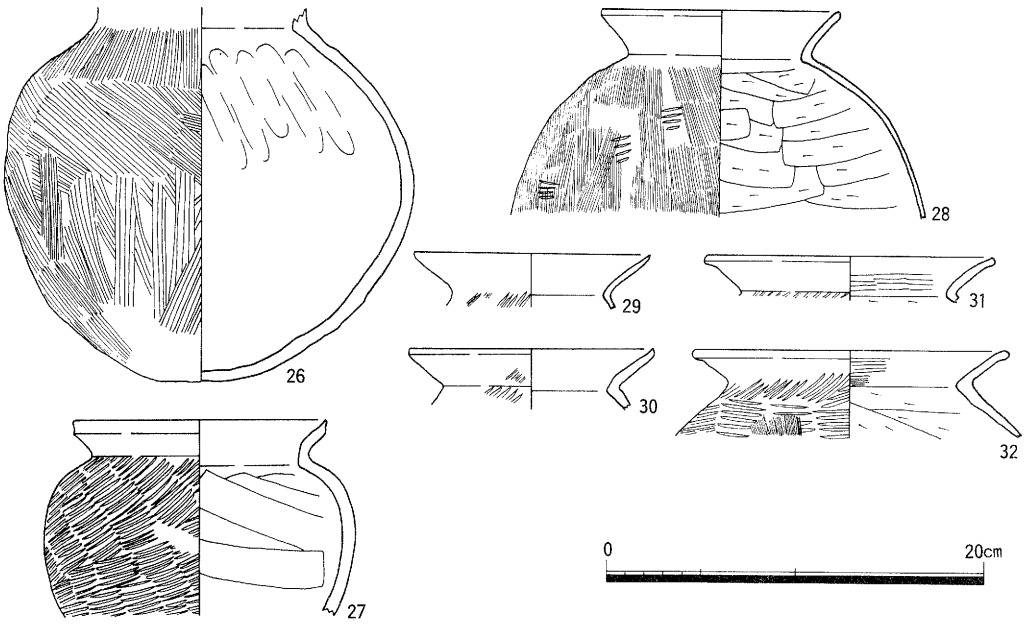
第５図　ＳＤ１東部検出遺物平断面図及び断面図

ＳＤ２

ＳＫ１の南部で検出した。方向はＳＤ１とほぼ同一方向を示す。規模は検出部で、幅1.1～1.3ｍ、深さ54～57㎝を測る。断面は逆台形を呈し、内部には暗灰青色粘質シルトが堆積している。遺物は、古墳時代前期に比定される壺（26）・Ｖ様式系甕（27）・庄内式甕（28～32）などの破片が少量出土している（第７図）。



第６図　ＳＤ１出土遺物実測図



第７図　ＳＤ２出土遺物実測図

ＳＤ３

ＳＤ２の南部で検出した。ＳＤ２と平行して伸びる溝である。規模は検出部で、幅60～70cm、深さ15～20cmを測る。断面は浅い半円形を呈し、内部には暗灰色粘質シルトが堆積している。遺物は、古墳時代前期に比定される壺（33）・庄内式甕（34）などの破片が少量出土している（第８図）。

ＳＤ４

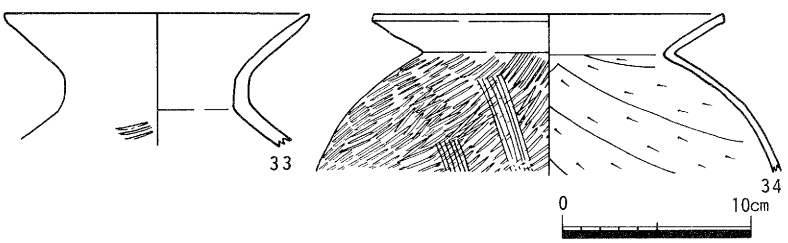
ＳＤ３の南部で検出した。方向はＳＤ３と平行して伸びるものと思われる。東西端はともに調査区外に至る。規模は検出部で、幅１ｍ、深さ15cmを測る。内部には暗灰青色シルトが堆積している。遺物は、古墳時代前期に比定される土器の小片が少量出土している。

２）第２調査面（古墳時代後期）

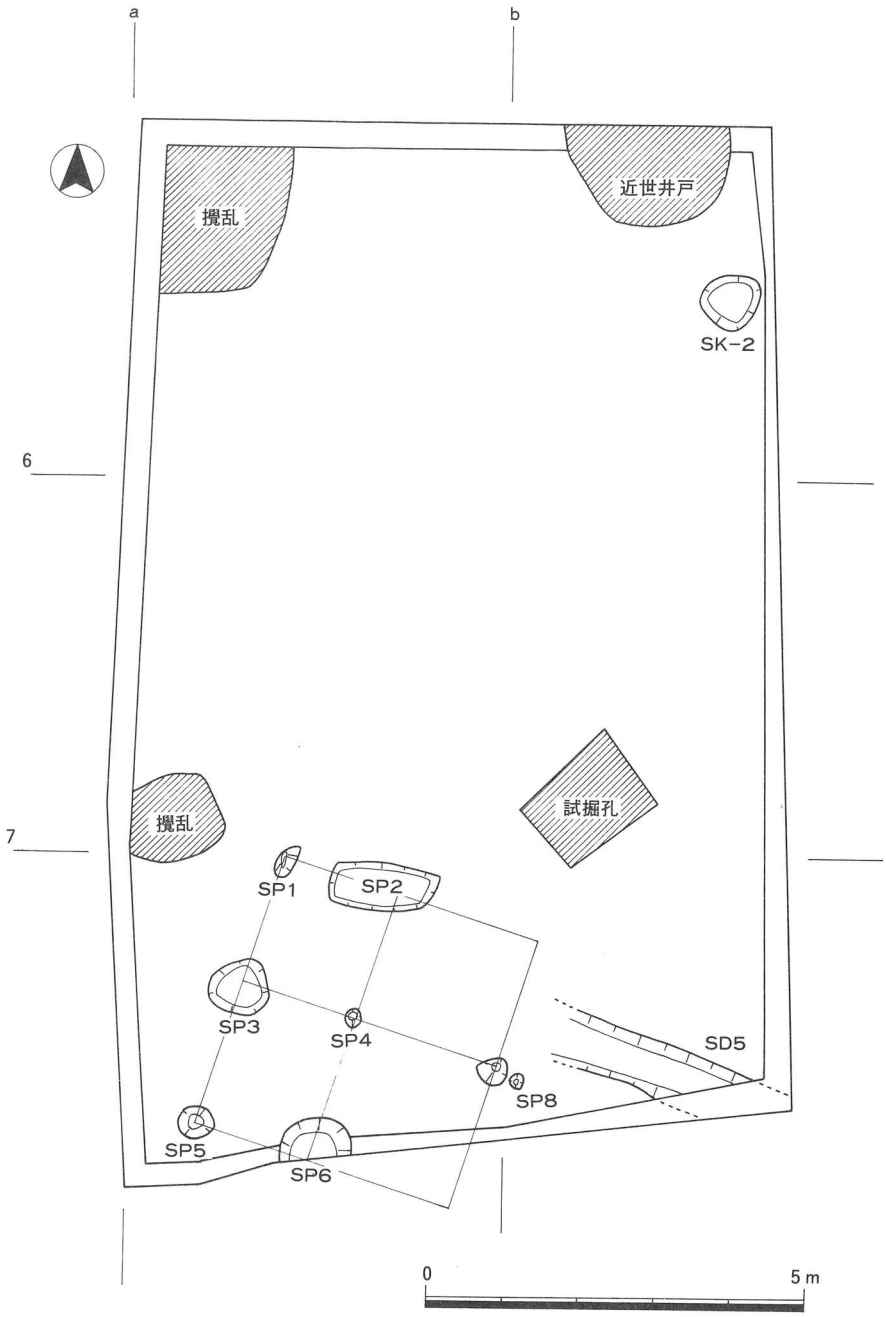
掘立柱建物（ＳＢ）

ＳＢ１

３ｄ・ｃ区で検出した。２間×２間（3.5×3.7m）の規模をもつものと思われる掘立柱建物である。柱穴は７個を検出した。北東隅の柱穴は欠損してなく、南東隅の柱穴は、調査区外に



第８図　ＳＤ３出土遺物実測図



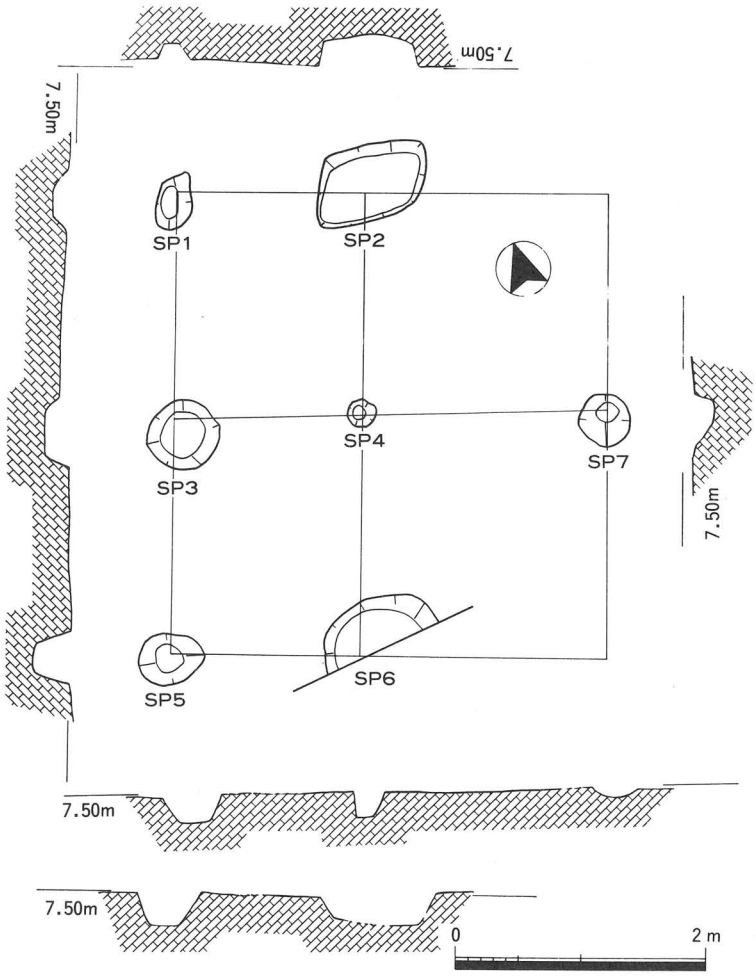
第 9 図　第 2 調査面遺構平面図

至るため不明である。建物の南北軸は磁北から東へ15度振っている。柱の間隔は、東西が西から1.6ｍ、1.8ｍ、南北が南から1.9ｍ、1.7ｍを測る。復元床面積は約12.95㎡を測る。柱穴の形状は円形のもの５個（ＳＰ３～ＳＰ７)、楕円形のもの１個（ＳＰ１)、長方形のもの１個（ＳＰ２）がある。各柱穴の規模はＳＰ１が径23～50㎝、深さ15㎝、ＳＰ２が長径140㎝、短径65㎝、深さ25㎝、ＳＰ３が径72～80㎝、深さ21㎝、ＳＰ４が径20～28㎝、深さ21㎝、ＳＰ５が径40～42㎝、深さ28㎝、ＳＰ６が東西径92㎝、深さ25㎝、ＳＰ７が径35～40㎝、深さ23㎝をそれぞれ測る。断面は逆台形及びＵ字形を呈する。小穴内には暗茶灰色微砂粘土・灰茶色粘質細砂が堆積している。遺物は小穴内から土師器の小片がごく少量出土している。

土坑（ＳＫ）

ＳＫ２

６ｃ区で検出した。平面の形状はほぼ円形を呈する。規模は検出部で、径72～78㎝、深さ



第10図　ＳＢ１平断面図

20cmを測る。断面は浅い半円形を呈し、内部には暗茶褐色細砂混粘質土が堆積している。遺物は、土師器の小片がごく少量出土している。

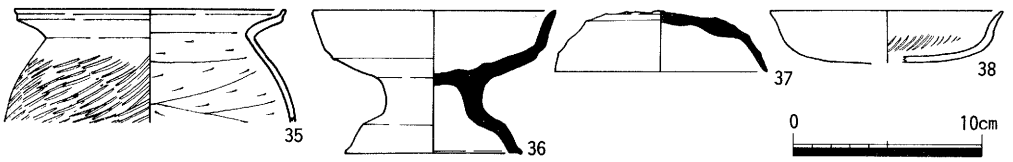
溝（ＳＤ）

ＳＤ５

８ｃ区で検出した。方向は南東－北西を示す。南東部は調査区外に至り、北西部は途切れている。規模は検出部で、検出長3.2m、幅72～78cm、深さ10～15cmを測る。断面は浅い逆台形を呈し、内部には褐灰色微砂混粘質土が堆積している。遺物は、土師器・須恵器の小片が少量出土している。

３）遺構に伴わない遺物

第６層と第７層内から遺物が出土している。コンテナ箱にして約２箱分を数える。第７層では古墳時代前期（庄内式期）に比定される土器片、第６層では古墳時代後期から奈良時代に比定される土器片が主に出土している。これらの土器はほとんどが小片であり、図示できたものは４点であった。第７層内から出土した庄内式甕（35)、第６層内から出土した古墳時代後期の高杯（36）・杯蓋（37)、奈良時代の皿（38）である（第11図)。



第11図　遺構に伴わない遺物

第１調査面
ＳＤ１

Ⅲ　出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器　種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色　調	胎　土	焼　成	備　考
1 三	壷 （土師器）	口　径	19.0	内上方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、斜上方へ外反気味に伸びる口縁部に至る。端部は丸い。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面・体部外面ヘラミガキ、体部内面ヘラナデ。	乳灰褐色	4.5㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	
2 三	小型壷 （土師器）	口　径 器　高 最大径	9.9 11.4 11.1	最大径を体部中位よりやや上にもつ卵形の体部から屈曲し、上外方へ外反気味に伸びる口縁部に至る。端部は鈍く尖る。底部は尖り底。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケナデ、内面ナデ。	淡灰色	2㎜以下の角閃石・長石・石英等の砂粒を少量含む。	良好	
3	甕 （土師器）	口　径	14.0	上内方へ内湾して伸びる体部から屈曲し、上外方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部丸い。体部内面には一条の接合痕がみられる。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ（４本）後ハケナデ、内面指ナデ。	淡灰茶色	1㎜以下の角閃石・長石・雲母等の砂粒を少量含む。	良好	
4	同　上	口　径	14.6	上内方へ内湾して伸びる体部から屈曲し、上外方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部は丸い。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ（４本）、内面指ナデ。	淡茶色	1㎜以下の角閃石・長石・石英・雲母の砂粒を少量含む。	良好	
5	同　上	口　径	14.0	内上方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し斜上方へ伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げ、外に面をもつ。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ（５本）、内面ヘラ削り。	淡灰褐色	2㎜以下の角閃石・長石・雲母等の砂粒を少量含む。	良好	
6	同　上	口　径	16.6	内上方へ内湾して伸びる体部から屈曲し、上外方へ伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げ、外に面をもつ。口縁部外面には一条の接合痕がみられる。体部中位以下は欠損。 口縁部外面タタキ後ヨコナデ、内面ヨコナデ、体部外面タタキ（３本）、内面ヘラ削り。	淡灰褐色	2.5㎜以下の角閃石・長石・雲母等の砂粒を少量含む。	良好	
7	同　上	口　径	15.8	内上方へ内湾して伸びる体部から屈曲し、上外方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げ、外に面をもつ。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ（３本）、内面ヘラ削り。	淡灰褐色	3㎜以下の角閃石・長石等の砂粒を少量含む。	良好	
8	同　上	口　径	18.6	上内方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、上外方へ外反気味に伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げる。体部中位以下は欠損。口縁部外面には一条の接合痕がみえる。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ（３本）、内面ヘラ削り。	淡茶褐色	石英・雲母等の砂粒を少量含む。	良好	
9	同　上	口　径	16.8	上内方へ内湾して伸びる体部から屈曲し、上外方へ伸びる口縁部に至る。端部は若干つまみ上げる。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ（４本）、内面ヘラ削り。	淡褐色	2㎜以下の角閃石・長石・雲母等の砂粒を少量含む。	良好	
10	同　上	口　径	19.6	上内方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、上外方へ伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げ、外に凹面をもつ。体部下位は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ（３本）、内面ヘラ削り。	暗茶灰色	2㎜以下の長石・角閃石等の砂粒を少量含む。	良好	
11	同　上	口　径	18.0	内上方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、斜上方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部は丸い。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ（４本）、内面ヘラ削り。	淡灰茶色	1㎜以下の長石・雲母等の砂粒を少量含む。	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
12	甕 (土師器)	口径	14.0	上内方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、上外方へ外反気味に伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げ、外に面をもつ。体部中位以下は欠損。 口縁部内面ヨコナデ後ハケナデ、外面ヨコナデ、体部外面タタキ（3本）後ハケナデ（10本）、内面ヘラ削り。	淡茶褐色	2㎜以下の角閃石・長石・雲母等の砂粒を少量含む。	良好	
13 三	同上	口径	12.6	内上方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、上外方へ外反気味に伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げ、外に凹面をもつ。体部中位以下は欠損。 口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ、体部外面タタキ（5本）後ハケナデ（6本）、内面ヘラ削り。	淡灰色	2㎜以下の角閃石・雲母・長石等の砂粒を少量含む。	良好	
14	同上	口径	13.2	上内方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、上外方へ外反気味に伸びる口縁部に至る。端部は若干つまみ上げる。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ（3本）ハケナデ（8本）、内面ヘラ削り。	外 淡褐色 内 淡茶褐色	1㎜以下の角閃石・長石・雲母・石英等の砂粒を少量含む。	良好	
15 三	同上	口径	15.0	内上方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、上外方へ外反気味に伸びる口縁部に至る。端部は若干つまみ上げる。体部内面には一条の接合痕が残る。体部下位は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ（3本）ハケナデ（7本）、内面ヘラ削り。	灰褐色～淡褐色	1㎜以下の角閃石・長石・雲母・石英等の砂粒を少量含む。	良好	
16	同上	口径	18.4	内上方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、上外方へ外反気味に伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げ、外傾する面をもつ。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ（3本）ハケナデ（8本）、内面ヘラ削り。	外 淡褐色 内 淡茶褐色	3㎜以下の角閃石・長石・石英・雲母等の砂粒を少量含む。	良好	
17 三	同上	口径	16.0	内上方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、上外方へ伸びる口縁部に至る。端部は若干上つまむ。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ（4本）後ハケナデ（6本）、内面ヘラ削り。	淡茶灰色	2㎜以下の角閃石・長石・雲母等の砂粒を少量含む。	良好	
18	同上	口径	17.6	内上方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、上外方へ伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げ、外に面をもつ。口縁部外面と頸部内面には接合痕がある。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ（5本）後ハケナデ（8本）、内面ヘラ削り。	淡褐色	1㎜以下の角閃石・長石・雲母等の砂粒を少量含む。	良好	
19	同上	口径	15.0	上内方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、上外方へ伸びる口縁部に至る。端部は鈍く尖る。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケナデ、内面ヘラ削り。	灰褐色	0.5㎜以下の角閃石・長石・雲母等の砂粒を少量含む。	良好	
20	同上	口径	15.2	上内方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、上外方へ伸びる口縁部に至る。端部は若干つまみ上げる。頸部内外面には一条の接合痕が残る。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケナデ（6本）、内面ヘラ削り。	外 茶褐色 内 灰褐色	1㎜以下の角閃石・長石・雲母・赤褐色酸化粒の砂粒を少量含む。	良好	
21	同上	口径	10.8	上内方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、上外方へ内湾気味に伸びる口縁部に至る。端部は丸い。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケナデ（10本）、内面ヘラ削り。	淡茶褐色	2㎜以下の長石・石英等の砂粒を少量含む。	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
22 三	甕 （土師器）	口径	17.6	斜上内へ伸びる体部から屈曲し、上外方へ伸びる口縁部に至る。端部は上につまむ。体部中位以下は欠損。 口縁部平面ヨコナデ、口縁部内面・体部外面ハケナデ、内面ヘラ削り。	淡茶灰色	1㎜以下の長石等の砂粒を少量含む。	良好	
23	鉢 （土師器）	底径	3.4	口縁部・体部は欠損。底部は突出しない平底。 内外面ヘラミガキ。	外　暗灰色 内　淡灰色	長石等の細砂等を少量含む。	良好	
24	同上	底径	5.0	口縁部・体部は欠損。底部は突出した上げ底。 底部外面ナデ、他はヘラミガキ。	暗茶灰色	長石等の細砂等を少量含む。	良好	
25 三	同上	口径 器高	10.2 6.4	半球形の体部から屈曲し、上外方へ短く伸びる口縁部に至る。端部は鈍く尖る。底部は突出しない小さな平底。 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ、下位ヘラ削り、内面ヘラナデ。	淡灰茶色	3㎜以下の長石等の砂粒を少量含む。	良好	

ＳＤ－２

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色・調	胎土	焼成	備考
26 四	壷 （土師器）			最大径を中位にもつ球形の体部から屈曲し、口縁部に至る。口縁部は欠損。底部は丸底。 体部外面ハケナデ（８本）、内面ナデ。	淡灰褐色	3㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	
27 四	甕 （土師器）	口径	13.2	上内方へ内湾して伸びる体部から屈曲し、上外方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げ、外に凹面をもつ。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ（３本）、内面ヘラ削り。	茶褐色	4㎜以下の角閃石・長石・雲母等の砂粒を少量含む。	良好	
28 四	同上	口径	12.6	上内方へ内湾して伸びる体部から屈曲し、上外方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げる。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ（３本）後ハケナデ（10本）、内面ヘラ削り。	外　淡褐灰色 内　灰褐色	2.5㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	
29	同上	口径	12.6	口縁部は上外方へ伸び、端部は若干つまみ上げる。体部は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ（３本）、内面ヘラ削り。	淡灰褐色	3㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	
30	同上	口径	13.0	口縁部は上外方へ伸び、端部はつまみ上げる。体部は欠損。 口縁部内外面タタキ後ヨコナデ、体部外面タタキ（３本）、内面ヘラ削り。	乳茶灰色	2㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	
31	同上	口径	15.2	口縁部は上外方へ外反して伸びる、端部は若干つまみ上げる。体部は欠損。 口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデ、ハケナデ、内面ヘラ削り。	外　褐灰色 内　暗茶褐色	3.5㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	煤付着。
32	同上	口径	16.4	内上方へ内湾して伸びる体部から屈曲し、外上方へ伸びる口縁部に至る。端部は外へつまみ丸い。体部中位以下は欠損。 口縁部外面タタキ後ヨコナデ、内面ヨコナデ後ハケナデ、体部外面タタキ（３本）後ハケナデ（10本）、内面ヘラ削り。	淡茶褐色	2㎜以下の角閃石・長石・雲母等の砂粒を少量含む。	良好	

遺物番号 図版番号	器　種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色　調	胎　土	焼　成	備　考
33	壺 (土師器)	口　径	16.2	上内方へ伸びる体部から屈曲し、上方へ短く伸びる頸部に至る。さらに屈曲した後上外方へ伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げる。体部は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ(3本)、内面ナデ。	暗茶灰色	5㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	
34	甕 (土師器)	口　径	18.6	内上方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、上外方へ伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げ、外に面をもつ。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ(4本)後ハケナデ(6本)、内面ヘラ削り。	暗灰褐色	5㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	

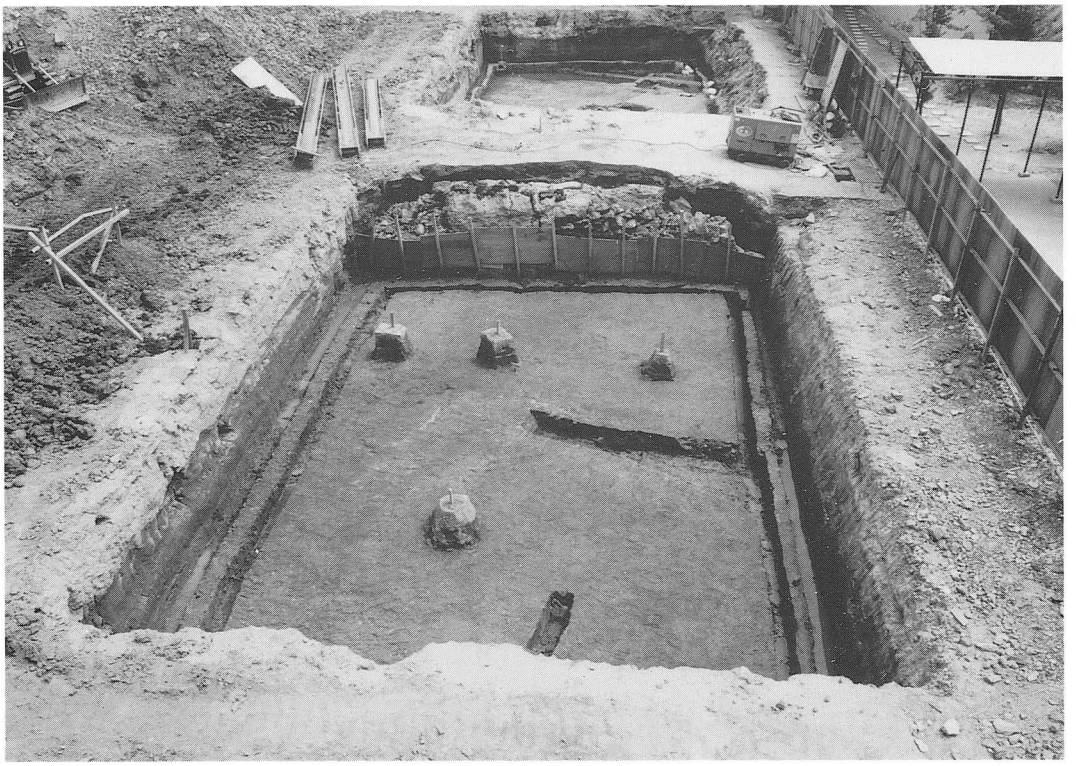
遺構に伴わない遺物

遺物番号 図版番号	器　種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色　調	胎　土	焼　成	備　考
35	甕 (土師器)	口　径	14.4	上内方へ内湾して伸びる体部から屈曲し、外上方へ伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げ、外に凹面をもつ。体部下位は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ(3本)、内面ヘラ削り。	灰褐色	0.5㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	煤付着。
36 四	高杯 (須恵器)	口　径 器　高	11.3 3.4	杯部は丸みをもつ底から緩やかに屈曲し、上外方へ伸びる口縁部に至る。端部は丸い。脚部は下外方へ伸びた後2段に屈曲し、下外方へ下る。端部は凹面をもつ。 内外面回転ナデ。	灰青色	精良 細砂粒を少	良好	完形。 煤付着。 ヘラ記号。
37 四	杯蓋 (須恵器)	口　径 器　高	13.0 7.5	低い天井部から下内方へ内湾して口縁部に至る。端部は丸い。 天井部約1／5回転ヘラ削り、他は回転ナデ。	淡灰色	量含む。	良好	ロクロ右方向。 完形。 ロクロ右方向
38	皿 (土師器)	口　径 器　高	12.4 2.8	平坦に近い体底部から屈曲し、上外方へ外反気味に伸びる口縁部に至る。端部は鈍く尖る 口縁部内外面ヨコナデ、体底部外面ナデ、内面放射状ヘラミガキ。	茶灰色	5㎜以下の砂粒を多量含む。	良好	

Ⅳ　まとめ

今回の調査では、第2調査区で、古墳時代前期と奈良時代の遺構が検出された。奈良時代の遺構は、南部に隣接する第1次調査（ＳＨ82－1）で奈良時代に比定される遺構が検出されており、北部への広がりが確認された。また、南東部約80ｍで実施した第3次調査（ＳＨ87－3）でも同時期の掘立柱建物などの遺構が検出されており、当調査地の周辺で奈良時代の集落が存在していたことが明らかとなった。古墳時代前期の遺構は、当調査区の北西約60ｍ地点（光南町1丁目29）で、昭和56年に八尾市教育委員会が実施した調査で、墓域が検出されており、両者間の有機的な関係が推定できよう。

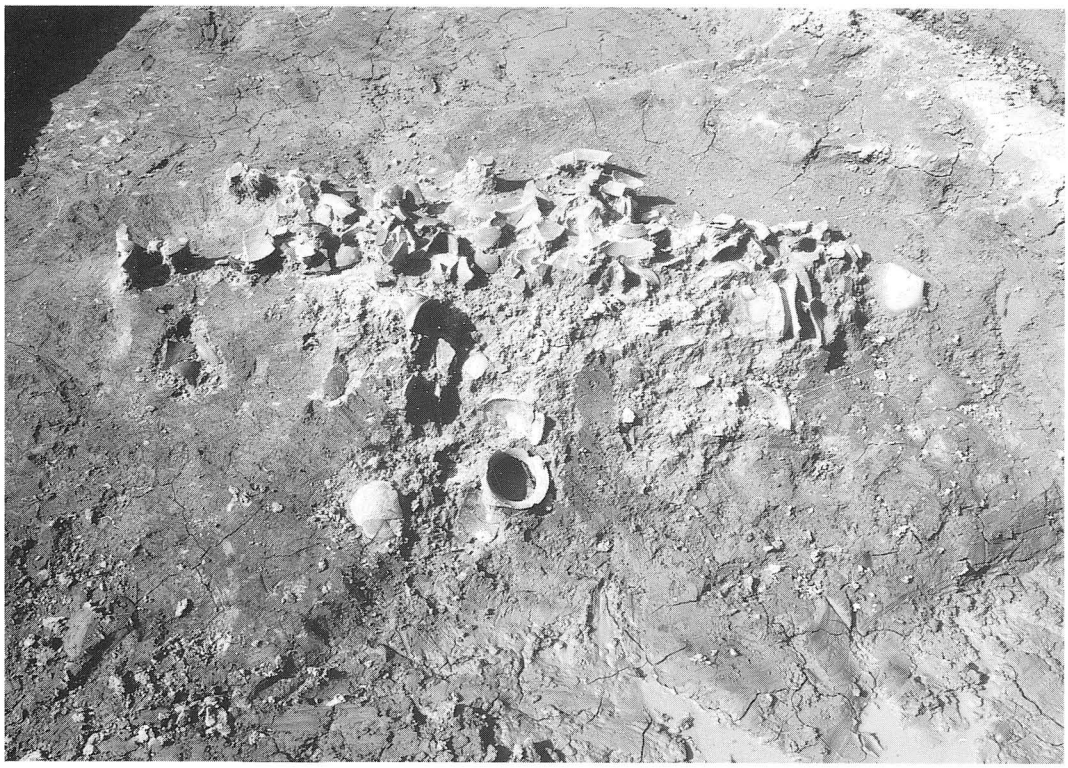
図　　版



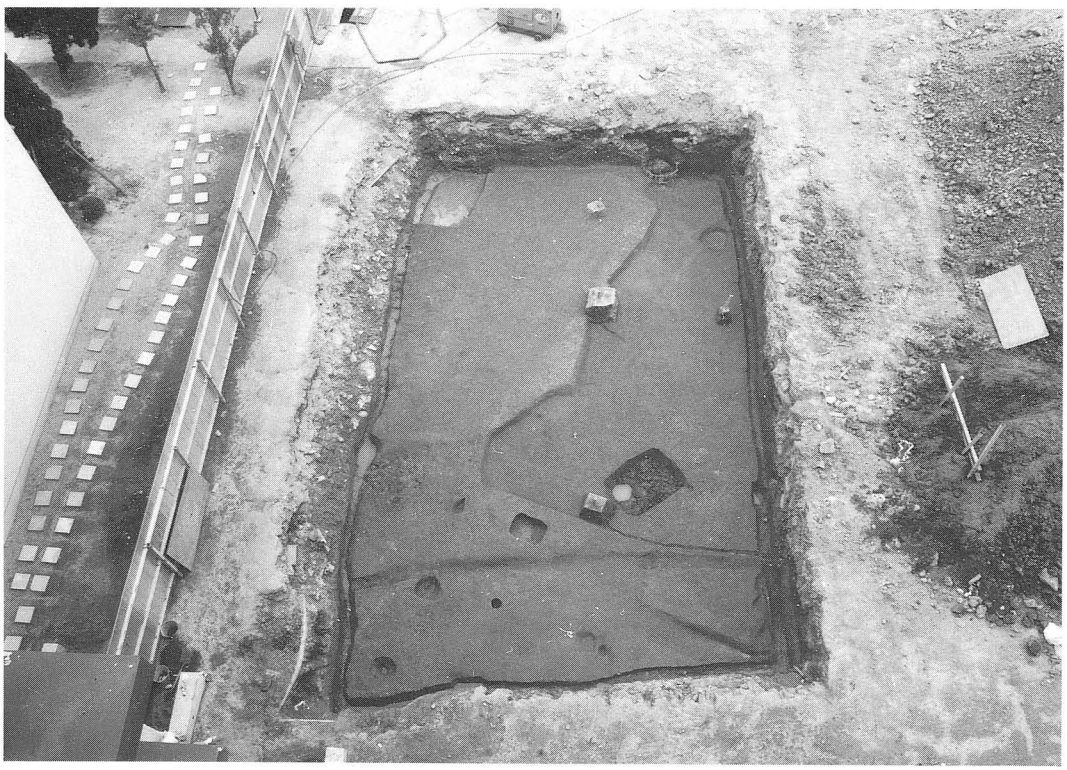
第１調査区全景（北から）

第２調査区全景（北から）

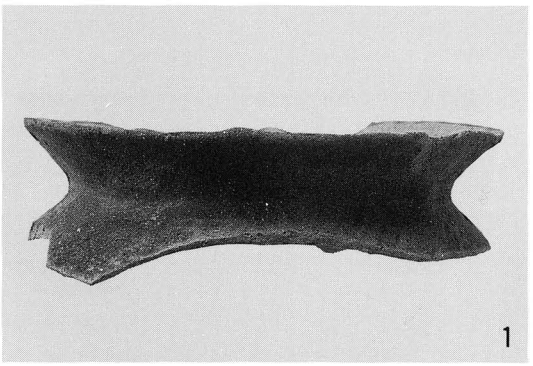
図版二

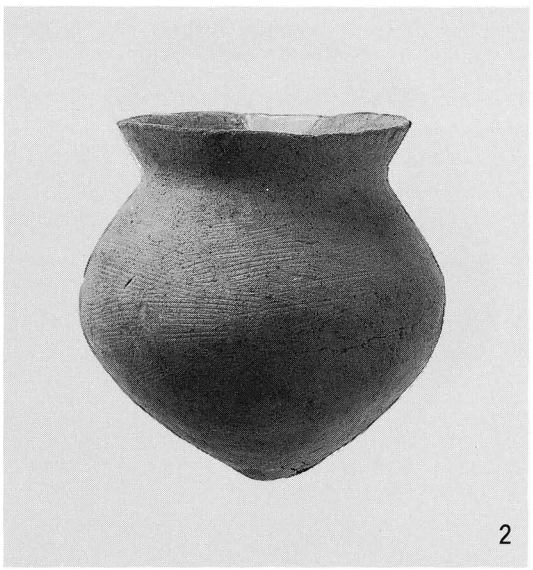


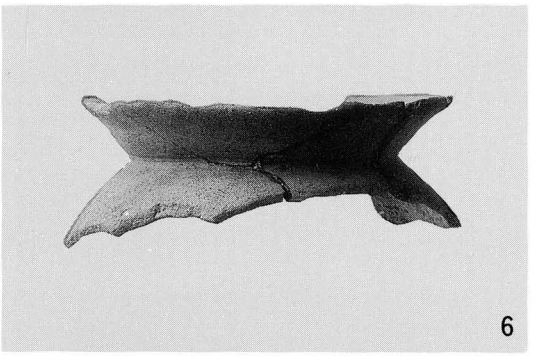
第２調査区ＳＤ１東部検出遺物（北から）

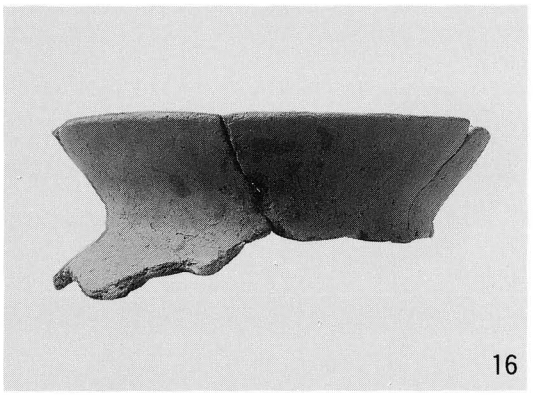


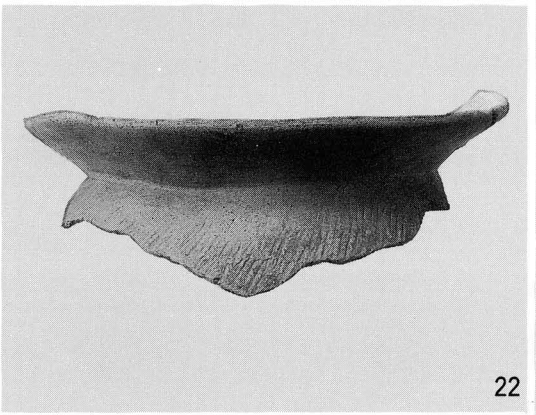
第２調査区第２調査面全景（北から）

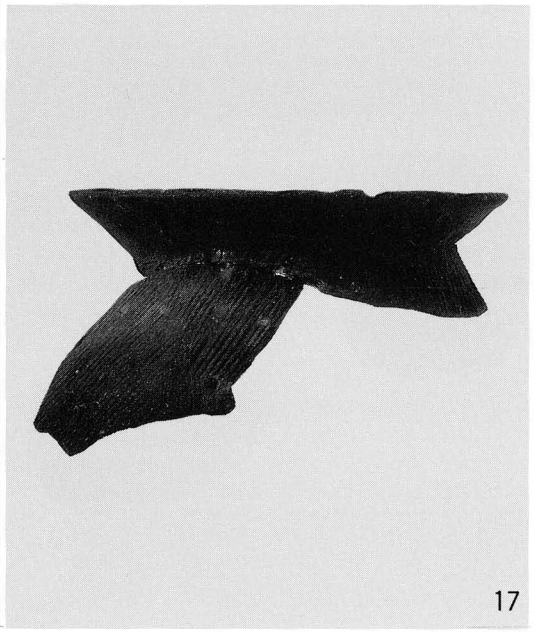

1

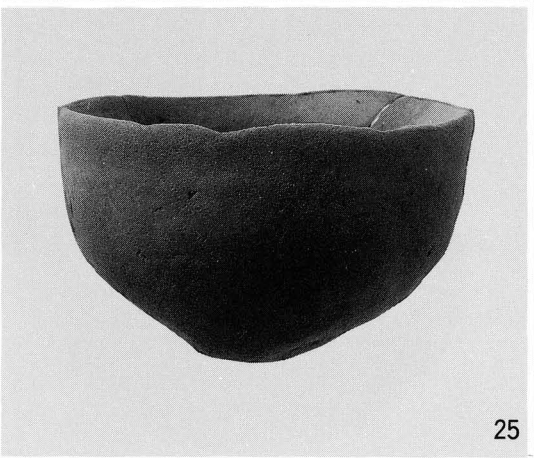

2


6


16


22


17


25

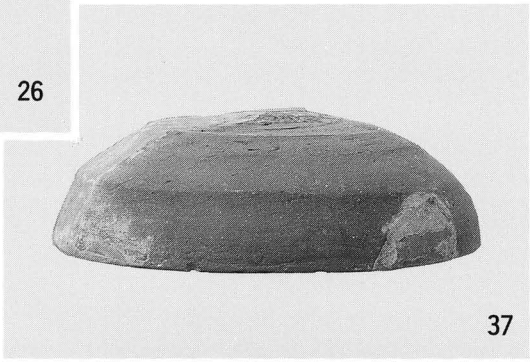
SD1

図版四　出土遺物

26

27

28


37

36

ＳＤ１　26～28
遺構に伴わない出土遺物36・37

第4章　第3次調査（SH81－3）発掘調査報告

例　　言

1．本書は、八尾市清水町２丁目２－５番地で実施した校舎建替え工事に伴う発掘調査の報告である。

1．本書に報告する成法寺遺跡第２次調査（ＳＨ83－３）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は昭和62年５月25日から７月15日にかけて、高萩千秋を担当として実施した。調査面積は812㎡を測る。なお、調査においては高井裕之・岡田清一・八元聡志・岩本多貴子・村田英子・村田圭子が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後実施し、平成３年に刊行した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測－岡田・高井・松村富子・村田（圭）、図面レイアウト－岩本・村田英子、図面トレース－岩本・村田（英）、遺物写真撮影－高萩が行った。本書の執筆は主に高萩が担当したが、第４節出土遺物観察表については村田英子が担当した。

1．全体の編集は高萩が行った。

1．本書の構成・編集は高萩千秋が行い、文責等は各例言に明記した。

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに …… 39

Ⅱ　調査概要 …… 40

　１．調査の方法 …… 40

　２．基本層序 …… 41

　３．検出遺構・出土遺物 …… 41

　　１）奈良時代 …… 43

　　２）鎌倉時代 …… 52

　　３）遺構に伴わない遺物 …… 54

Ⅲ　出土遺物観察表 …… 56

Ⅳ　まとめ …… 60

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺図 …… 39
第２図　調査区設定図及び区割図 …… 40
第３図　基本層序柱状図（Ｓ＝１／40） …… 41
第４図　第１調査面遺構平面図 …… 42
第５図　ＳＢ２平断面図 …… 44
第６図　ＳＢ２平断面図 …… 45
第７図　ＳＢ３平断面図 …… 46
第８図　ＳＰ20平断面図 …… 46
第９図　ＳＫ１平断面図 …… 47
第10図　ＳＫ１出土遺物実測図 …… 47
第11図　ＳＫ２出土遺物実測図 …… 48
第12図　ＳＤ14出土遺物実測図 …… 50
第13図　ＳＤ25出土遺物実測図 …… 51
第14図　ＳＤ43出土遺物実測図 …… 51
第15図　ＳＯ１出土遺物実測図 …… 52
第16図　ＳＤ３出土遺物実測図 …… 52
第17図　第２調査面遺構平面図 …… 53
第18図　遺構に伴わない遺物 …… 55

表　目　次

第１表　小穴（ＳＰ）一覧表 …… 48
第２表　小穴（ＳＰ）一覧表 …… 49
第３表　溝（ＳＤ）一覧表 …… 51

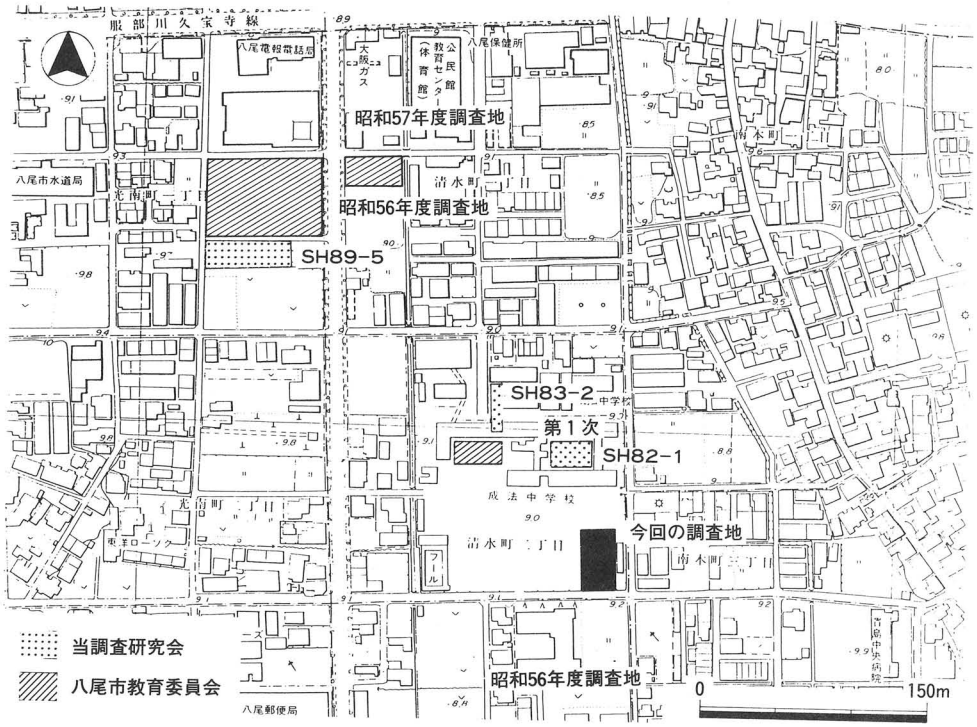
図　版　目　次

図版一　調査区全景（北から）
　　調査区北部（北から）
図版二　ＳＢ１（南から）
　　ＳＢ１（南から）
図版三　ＳＢ１内ＳＰ８（南から）
　　ＳＢ１内ＳＰ９（南から）
図版四　ＳＢ１・ＳＢ２（南から）
　　ＳＢ２（北から）
図版五　ＳＫ１全景（西から）
　　ＳＤ37（西から）
図版六　北西部遺構（西から）
　　下層確認トレンチ（北から）
図版七　出土遺物　ＳＰ20　１　ＳＫ１　２．３．５．９　ＳＰ25　14　ＳＤ17　銅製品
　　ＳＯ１　21・22
　　遺構に伴わない出土遺物　25
図版八　出土遺物　遺構に伴わない出土遺物

Ⅰ　はじめに

今回の調査は、八尾市清水町２丁目２－５に所在する市立成法寺中学校の体育館建設に伴う発掘調査で、当調査研究会が当遺跡で実施した第３次調査（ＳＨ87－３）にあたる（第１図）。

当中学校では、校舎建設に伴う発掘調査が３回にわたり実施されている。昭和56年度に八尾市教育委員会、昭和57年度に八尾市教育委員会と当調査研究会が第１次調査（ＳＨ82－１）、昭和58年度には第２次調査（ＳＨ83－２）を実施している。その結果、古墳時代前期に比定される土坑・溝、古墳時代後期～奈良時代の土坑・掘立柱建物・溝などを検出している。今回の調査区は、当中学校敷地内の南東部にあたり、当中学校内で実施された第４回目の調査に当たる。調査期間は昭和62年５月25日～７月15日迄である。調査面積は約812㎡を測る。



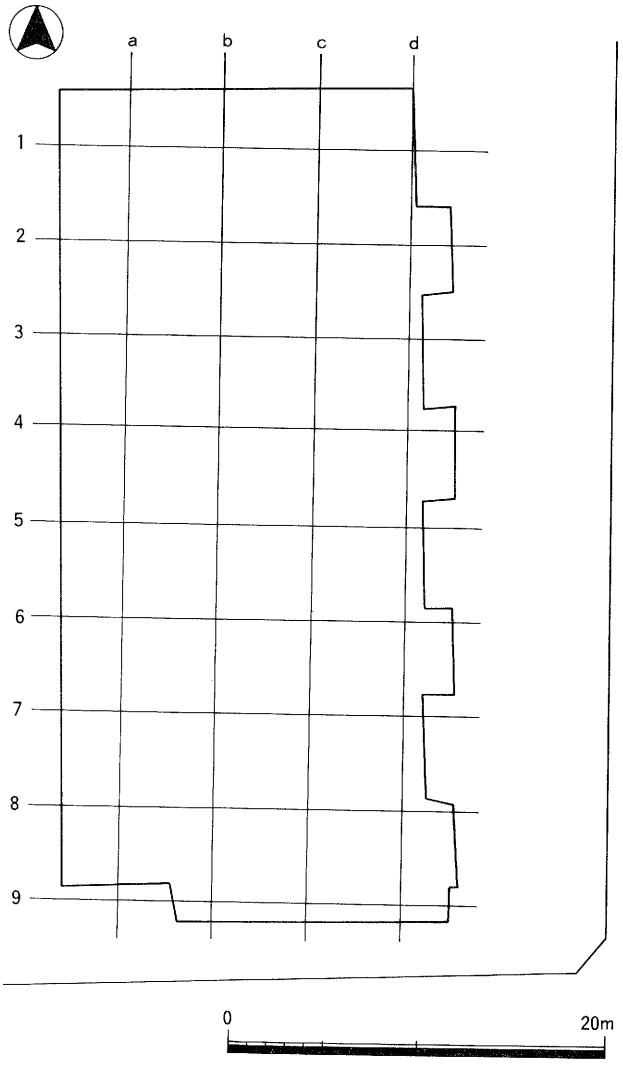
第１図　調査地周辺図

Ⅱ　調査概要

1．調査の方法

調査は、八尾市教育委員会が実施した試掘調査のデータに基づいて、現地表面から約1.3mまでの土層を機械掘削し、以下、40cmの土層については人力による掘削を実施した。

地区割は、国土座標の東西軸・南北軸により調査区の東西30m、南北50mの範囲内に5m四方の区画をした。地区名は北西部の隅から東西線が数字（1～9）、南北線がアルファベット



第2図　調査区設定図及び区割図

（ａ～ｄ）を付した。なお、国土座標の値は、北西部の隅の交点がＸ＝－15 3081.000、Ｙ＝－36 197.000を測る（第２図）。

２．基本層序

当調査区では、現地表面から2.5ｍまでに存在する土層で普遍的に見られる10層を摘出して基本層序とした（第３図）。現地表面は標高8.8ｍを測る。

第１層　盛土：層厚１ｍ。当中学校建設に伴い増設した土層である。

第２層　旧耕土：層厚10～20㎝。畑と考えられ、畝の高まりが幾筋も見られる。

第３層　床土：層厚20～25㎝。耕土の床土で、酸化鉄の斑点が上部に見られる。

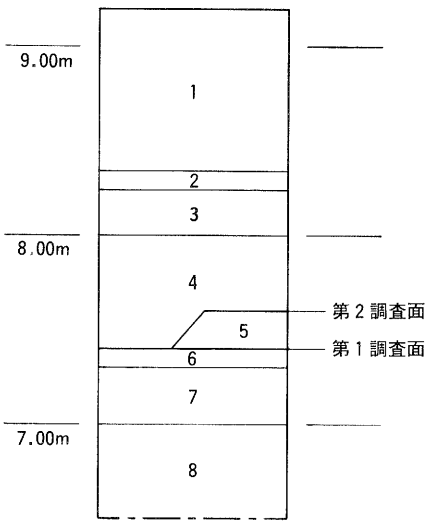
第４層　橙色砂質土：層厚20～30㎝。酸化鉄を多量に含み、中世の遺物がごく少量含まれる。

第５層　橙色細砂混粘質土：層厚20～35㎝。奈良～平安時代の遺物が含まれる（第２調査面）。

第６層　橙色明青灰色細砂混粘質土：層厚10～25㎝。奈良時代の遺構を検出した（第１調査面）。

第７層　淡茶灰色細砂：層厚20～30㎝。

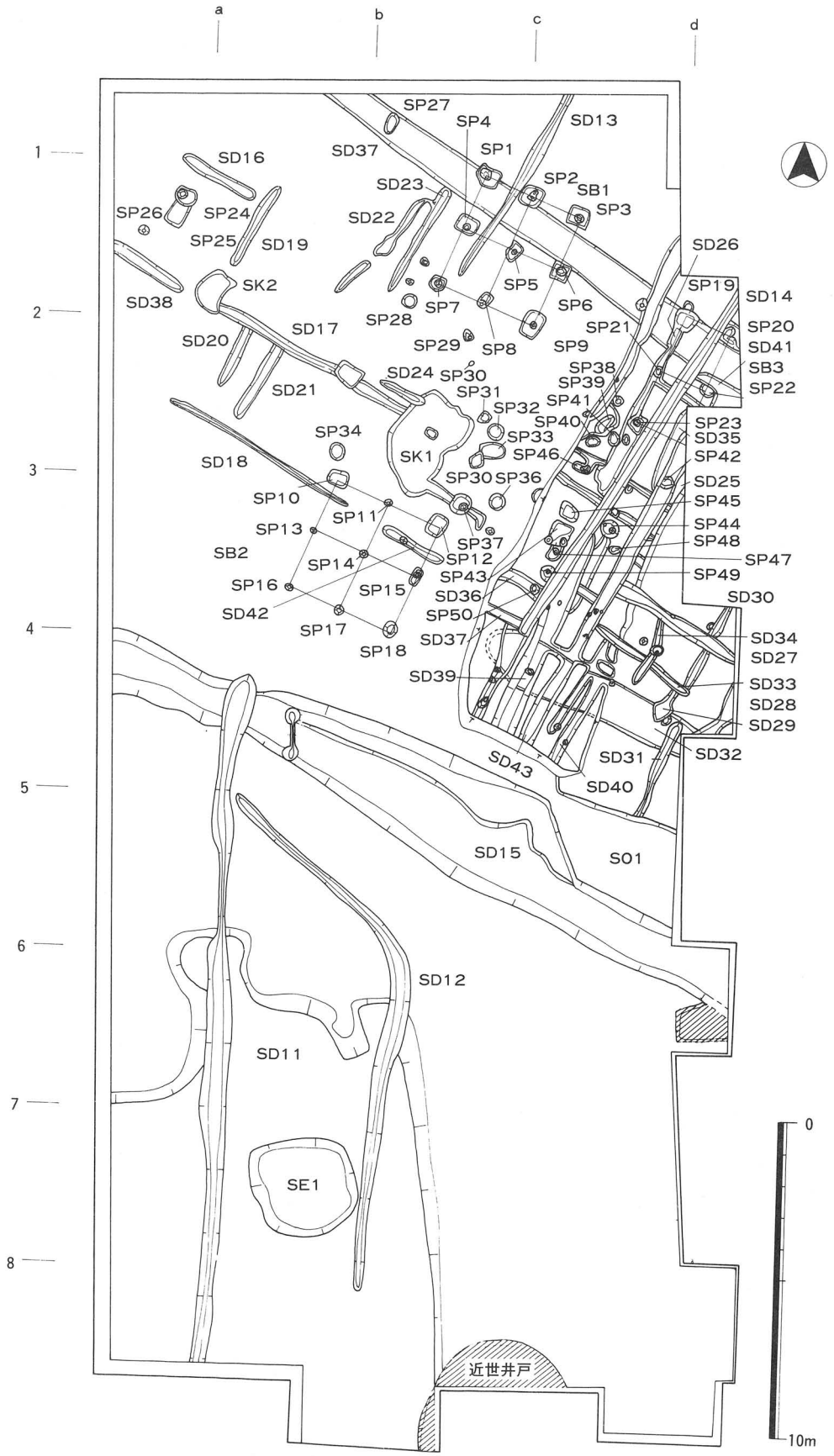
第８層　青灰色細砂：層厚10㎝。



第３図　基本層序柱状図（Ｓ＝１／40）

３．検出遺構と出土遺物

２面を調査対象面（第１調査面・第２調査面）とした。その結果、第１調査面は奈良時代に比定される掘立柱建物３棟（ＳＢ１～ＳＢ３）・小穴50個（ＳＰ１～ＳＰ50）・土坑２基（ＳＫ１・ＳＫ２）・溝33条（ＳＤ11～ＳＤ43）、第２調査面は第５層から切り込むもので鎌倉時代に比定される井戸１基（ＳＥ１）・溝10条（ＳＤ１～ＳＤ10）を検出した。以下、検出した遺構・遺物について記す（第４図）。



第4図　第1調査面遺構平面図

１）奈良時代

掘立柱建物（ＳＢ）

ＳＢ１

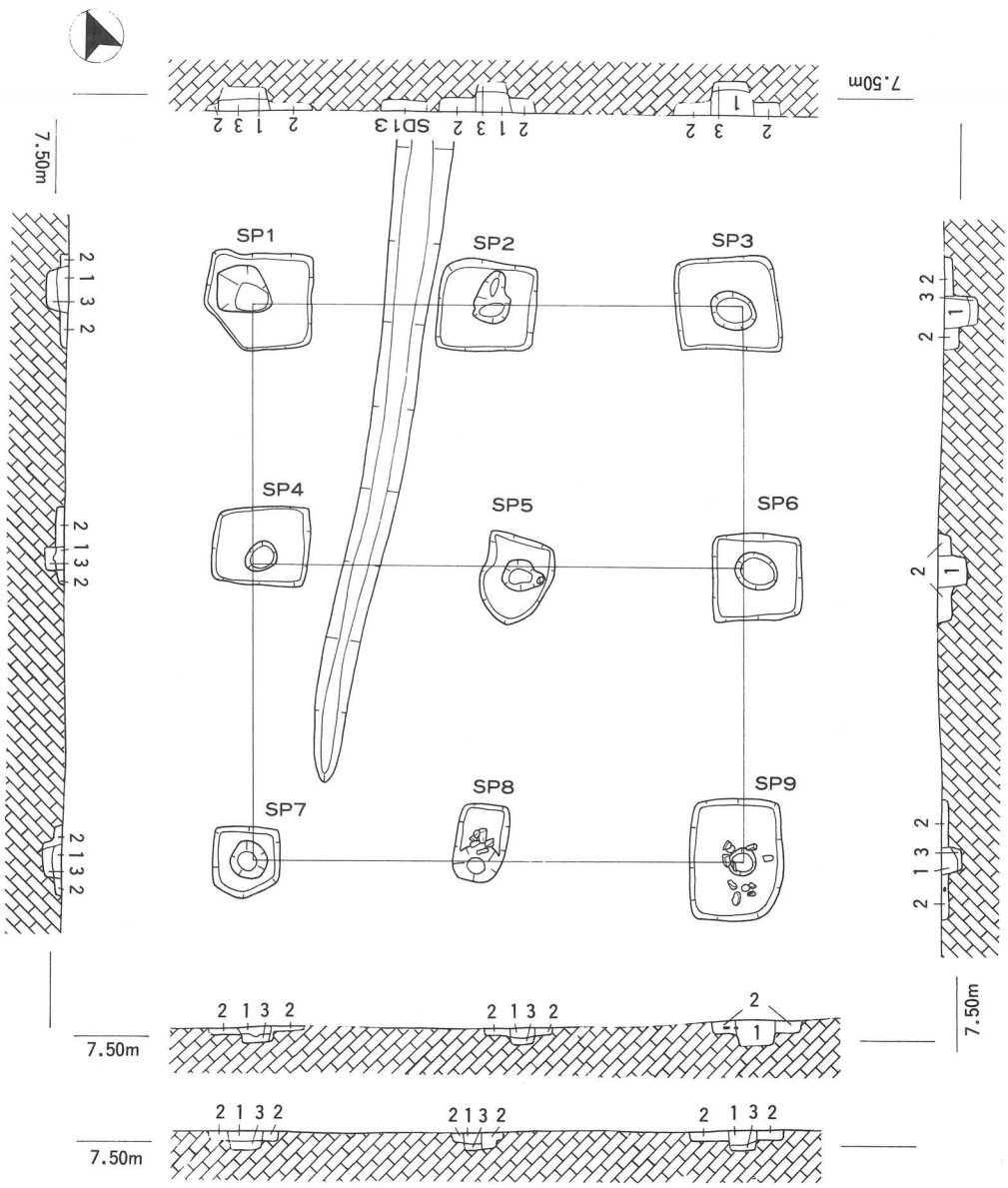
２ｃ～ｄ区で検出した。上部は鎌倉時代の耕作によって削平されている。規模は２×２間（3.2ｍ）の総柱の建物である。方向は南北軸に対して東へ30度を示す。柱穴は東西が1.6ｍ、南北が1.85ｍの等間隔である。柱穴の掘形の平面は隅丸方形を呈し、一辺45～82㎝、深さ15～25㎝を測る。柱穴内には径22～30㎝を測る柱痕が見られる。なお、ＳＰ８・ＳＰ９には柱痕の周囲に小石（径４～８㎝）が置かれており、ＳＰ８で６個、ＳＰ９で12個を数えた。柱穴の内部の埋土は掘形内が灰褐色～茶褐色砂質土で、柱痕内が暗灰褐色～黒褐色細砂混シルト・暗灰褐色細砂である。遺物は掘形内から奈良時代に比定される須恵器・土師器の小片がごく少量出土している（第５図）。

ＳＢ２

４ｂ～ｃ区で検出した。上部はＳＢ１と同じく削平されている。規模は２×２間（3.5×3.6ｍ）の総柱の建物である。方向は南北軸に対し東へ30度を指し、ＳＢ１と同一方向である。柱穴の間隔は東西が西から1.8ｍ、1.7ｍ、南北が北から1.7ｍ、1.9ｍを測る。柱穴の掘形の平面は隅丸方形を呈し、規模は一辺20～70㎝、深さ10～25㎝を測る。２個（ＳＰ15）の柱穴内には径22㎝を測る。平面の形状がほぼ円形の柱痕が見られる。柱穴の内部には掘形が暗灰褐色細砂混シルト、柱混内が暗褐灰色粘質シルトが堆積している。遺物は奈良時代に比定される須恵器・土師器の小片が少量出土している（第６図）。

ＳＢ３

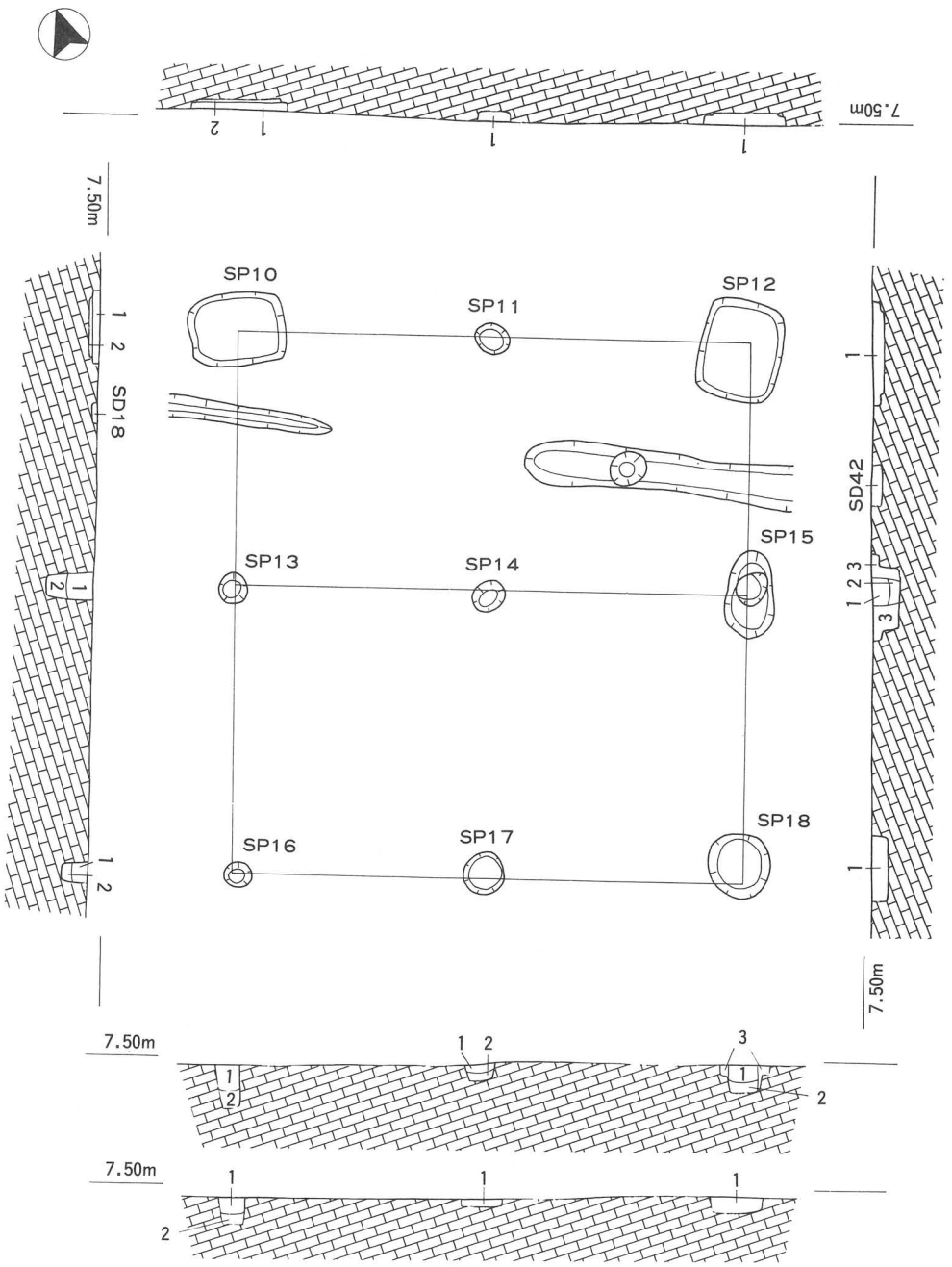
３ｄ～ｅ区で検出した。東部は調査区外に至っており、全体の規模は不明である。検出部で２×１間（3.6×1.6ｍ）分を確認している。この建物はＳＢ１・ＳＢ２と違い、鎌倉時代以降による削平をあまり受けていないが、同時期の溝と切り合う。方向はＳＢ１・ＳＢ２と同じ方向を示す。柱穴の間隔は東西が1.6ｍ、南北がともに1.8ｍを測る。柱穴の平面形状は楕円形及び隅丸方形を呈し、一辺30～70㎝を測る。断面は逆台形を呈し、深さは20～35㎝を測る。柱穴内には平面円形を呈す。径20㎝の柱痕が１個（ＳＰ23）がある。堆積土内部の埋土は、掘形内が暗茶褐色粘質シルト、柱痕内が暗灰褐色シルト粘土である（第７図）。遺物は、奈良時代に比定される須恵器の蓋杯・杯身（１）、土師器の皿等の小片が少量出土している（第８図）。また、ＳＰ19の上層から小石（径８～10㎝）４個が出土している。



1．黒灰色～灰茶色砂質土
2．灰褐色～淡灰色細砂混じり砂質土
3．暗灰色細砂混じり粘質土～茶灰色細砂質土

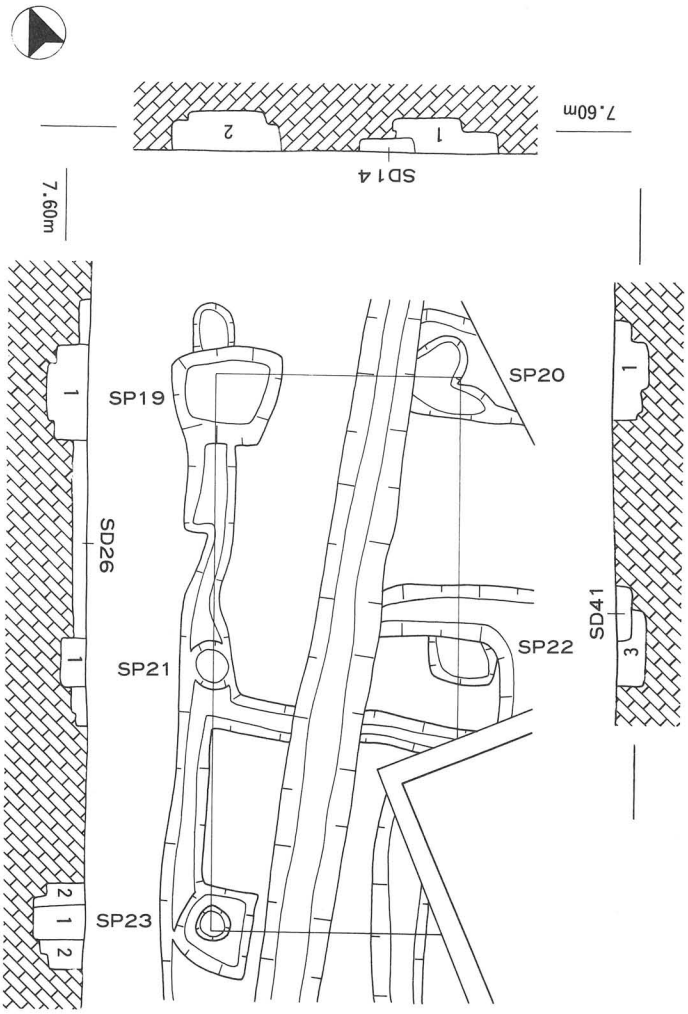
0　2 m

第5図　ＳＢ１平断面図



1．暗茶褐色～暗茶灰色粘質土
2．暗灰色～暗青灰色粘質土
3．褐灰色粘質土

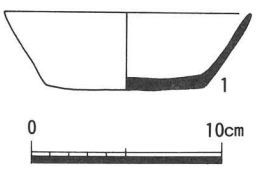
第６図　ＳＢ２平断面図



1．暗灰褐色～褐灰色粘質シルト
2．暗茶褐色粘質シルト
3．茶褐色粘砂質土

0　2m

第7図　ＳＢ３平断面図

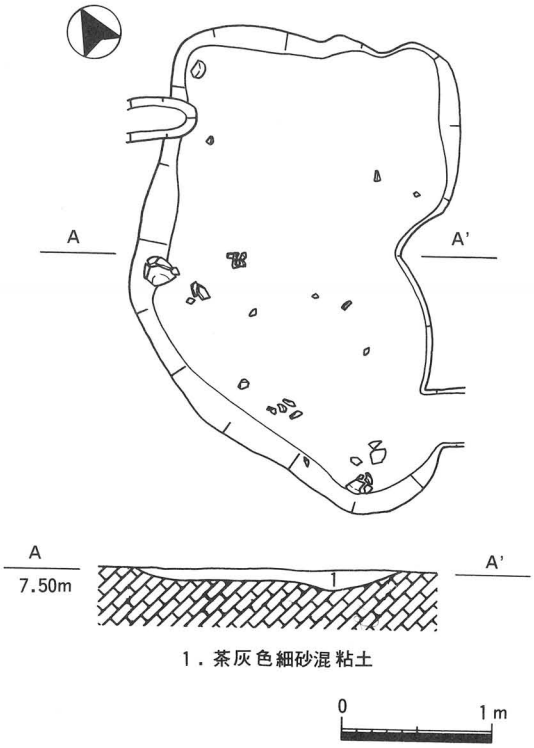


第8図　ＳＰ20平断面図

土坑（ＳＫ）

ＳＫ１

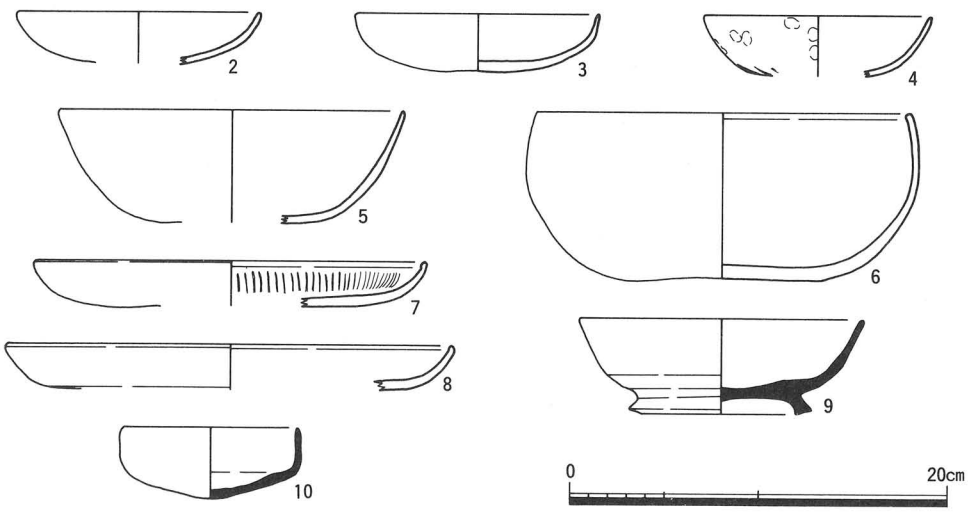
３ｃ区で検出した。ＳＢ１とＳＢ２の間に位置する遺構で、上部は鎌倉時代の溝によって削平されている。平面の形状は不定形を呈し、最大幅3.2ｍ、最小幅1.75ｍ、深さ12㎝を測る。断面は浅い逆台形を呈し、中央付近の底面には若干のくぼみがみられる。堆積土は茶灰色細砂混粘土で、内部から奈良時代に比定される須恵器の杯身（９・10）、土師器の皿（７・８）・小皿（２～４）・鉢（５・６）などのほか小片が少量出土している（第９・10図）。



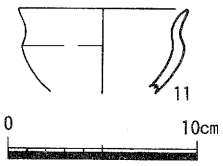
第９図　ＳＫ１平断面図

ＳＫ２

２ａ～ｂ区で検出した。平面の形状は不定形を呈し、最大幅1.3ｍ、最小



第10図　ＳＫ１出土遺物実測図



第11図　ＳＫ２出土遺物実測図

幅0.9ｍ、深さ10cmを測る。断面は逆台形を呈する。堆積土は暗灰褐色細砂混シルト・褐灰色粘質シルトである。遺物は古墳時代後期に比定される須恵器の杯身（10）などの小片が少量出土している（第11図）。

小穴（ＳＰ）

ＳＰ１～ＳＰ50

調査区から50個を検出した。これらの小穴は北東部に集中している。ＳＰ１～ＳＰ23は掘立柱建物の柱穴である。その他の小穴も建物に伴う小穴と考えられるが後世に削平されて消滅したもので、調査区内で規則的に並ぶものは検出されなかった。これらの小穴の平

第１表　小穴（ＳＰ）一覧表

＊　単位：cm

遺構番号	地　区	平面形	断面形	径		堆積土	備考
ＳＰ１	２ｃ	隅丸方形	逆凸形	66～70	6	暗灰褐色～暗茶灰色砂質土	ＳＢ１内
ＳＰ２	２ｃ～２ｄ	隅丸方形	逆凸形	62～65	10	暗茶灰色～灰茶色砂質土	ＳＢ１内
ＳＰ３	２ｄ	隅丸方形	逆凸形	62～69	10	黒褐色～褐灰色砂質土	ＳＢ１内
ＳＰ４	２ｃ	隅丸方形	逆凸形	52～65	4	暗灰褐色～暗茶灰色砂質土	ＳＢ１内
ＳＰ５	２ｃ	隅丸方形	逆凸形	44～58	6	灰茶色～茶灰色砂質土	ＳＢ１内
ＳＰ６	２ｄ	隅丸方形	逆凸形	60	11	黒灰色砂質土	ＳＢ１内
ＳＰ７	２ｃ	隅丸方形	逆凸形	46～47	6	灰褐色～茶灰色砂質土	ＳＢ１内
ＳＰ８	２ｃ	隅丸方形	逆凸形	34～52	7	灰褐色細砂礫砂質土	ＳＢ１内
ＳＰ９	３ｃ～３ｄ	隅丸方形	逆凸形	63～81	7	灰褐色～暗茶灰色砂質土	ＳＢ１内
ＳＰ10	４ｂ	隅丸方形	逆台形	50～66	6	暗褐色粘質土（酸化鉄を多量に含む）	ＳＢ２内
ＳＰ11	４ｃ	円形	逆台形	22	6	暗茶褐色粘質土	ＳＢ２内
ＳＰ12	４ｃ	隅丸方形	逆台形	50～70	8	暗茶褐色粘質土	ＳＢ２内
ＳＰ13	４ｂ	円形	逆台形	20	32	暗茶色～茶灰色粘質土（下層青灰色粘質土）	ＳＢ２内
ＳＰ14	４ｂ～４ｃ	円形	逆台形	21	14	暗茶色～茶灰色粘質土（下層暗灰色粘質土）	ＳＢ２内
ＳＰ15	４ｃ	楕円形	逆凸形	33～60	8	暗灰茶色～褐灰色粘質土（下層暗灰色粘質土）	ＳＢ２内
ＳＰ16	４ｂ	円形	逆台形	18	18	暗灰茶色粘質土（暗灰色粘土）	ＳＢ２内
ＳＰ17	４ｃ	円形	逆台形	28	5	暗茶灰色粘質土（下層明青灰色粘質土）	ＳＢ２内
ＳＰ18	４ｃ	楕円形	逆台形	42～48	12	暗茶灰色粘質土	ＳＢ２内

第２表　小穴（ＳＰ）一覧表　　＊　単位：cm

遺構番号	地区	平面形	断面形	径		推積土	備考
ＳＰ19	２ｄ～２ｅ	隅丸方形	逆台形	65～68	27	暗灰褐色粘質シルト	ＳＢ３内
ＳＰ20	２ｅ	隅丸方形	逆凸形	68以上	11	褐灰色粘質シルト（一部暗褐色粘質土）	ＳＢ３内
ＳＰ21	３ｄ	楕円形	逆台形	28～33	8	暗灰褐色粘質シルト	ＳＢ３内
ＳＰ22	３ｅ	隅丸方形	逆台形	44～	7	茶褐色粘砂質土	ＳＢ３内
ＳＰ23	３ｄ	隅丸方形	逆凸形	49～58	30	褐灰色粘質シルト	ＳＢ３内
ＳＰ24	２ａ	楕円形	逆凸形	52～65	6	暗茶灰色粘質シルト	
ＳＰ25	２ａ	隅丸方形	逆台形	60～	8	茶灰色粘質シルト	
ＳＰ26	２ａ	楕円形	逆台形	26～30	15	茶灰色細砂混粘質シルト	
ＳＰ27	１ｃ	楕円形	逆台形	37～71	8	茶灰色細砂混シルト（炭を含む）	
ＳＰ28	２ｃ	円形	逆台形	41	9	茶褐色～褐灰色砂質土	
ＳＰ29	３ｃ	隅丸方形	逆凸形	32	7	暗茶灰色粘質土	
ＳＰ30	３ｃ	楕円形	逆台形	14～21	8	暗茶灰色細砂混粘質土	
ＳＰ31	３ｃ	円形	逆台形	38	6	茶褐色細砂混粘質土	
ＳＰ32	３ｃ	円形	逆台形	50	6	暗灰褐色細砂混粘質土（土器片・炭化物を含む）	
ＳＰ33	３ｃ	楕円形	逆台形	55～82	7	暗灰褐色細砂混粘質土（酸化鉄・炭化物を含む）	
ＳＰ34	３ｂ	楕円形	逆台形	46～50	9	暗茶灰色粘質土	
ＳＰ35	３ｃ	隅丸方形	逆台形	34～46	7	暗茶色～暗灰褐色粘質土	
ＳＰ36	４ｃ	円形	逆台形	47	6	暗茶色～暗灰褐色粘質土	
ＳＰ37	４ｃ	円形	逆凸形	60	6	暗褐灰色粘質シルト	
ＳＰ38	３ｄ	円形	逆台形	30	7	茶灰色～褐灰色粘質シルト	
ＳＰ39	３ｄ	楕円形	逆台形	32～74	30	茶褐色粘質土	
ＳＰ40	３ｄ	楕円形	逆台形	30～46	14	暗灰褐色粘質シルト	
ＳＰ41	３ｄ	楕円形	逆凸形	34～46	15	暗茶褐色シルト混粘土	
ＳＰ42	３ｄ	楕円形	逆台形	36～42	7	茶灰褐色細砂混砂質土	
ＳＰ43	４ｄ	隅丸方形	逆凸形	66～84	15	褐灰色粘質土	
ＳＰ44	４ｄ	楕円形	逆凸形	56～66	21	褐灰色～暗褐色粘質土（下層茶褐色粘質土）	
ＳＰ45	４ｄ	隅丸方形	逆台形	54～60	14	褐灰色細砂混粘質土	
ＳＰ46	３ｄ	楕円形	逆凸形	28～60	15	暗灰褐色粘質シルト	
ＳＰ47	４ｄ	楕円形	逆凸形	44～62	9	茶灰色細砂混粘質シルト	
ＳＰ48	２ａ	円形	逆台形	20～41	13	褐灰色粘質土	
ＳＰ49	４ｄ	楕円形	逆凸形	44～49	13	茶灰褐色粘質シルト（下層淡青灰色シルト）	
ＳＰ50	４ｄ	円形	逆台形	30	15	茶褐色粘質シルト（下層暗灰色細砂混粘質土）	

面の形状には円形のもの８個、楕円形のもの14個、隅丸方形のもの５個がある。断面は逆台形18個と逆凸形９個に分かれる。規模は検出部で、径30～70㎝、深さ６～15㎝を測るものが大部分である。堆積土は色調が褐色茶色～茶灰色で、シルト～細砂混粘質土である。各小穴については第１・２表を参照されたい。

溝（ＳＤ）

ＳＤ11

５ｂ～９ｂ区で検出した。方向は南北方向を示す。規模は検出部で、幅10～70㎝、深さ10～25㎝を測る。断面は浅い半円形を呈する。堆積土は青灰色細砂混粘土である。遺物は奈良時代～鎌倉時代に至る土器の小片が少量出土している。時期は第２調査面で検出した鎌倉時代のＳＤ１と同時期と考えられる。

ＳＤ12

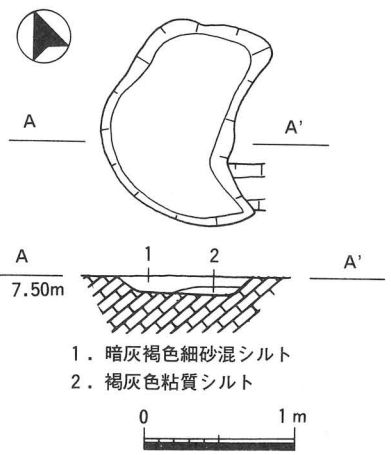
６ｂ～９ｃ区で検出した。方向は南東－北西に伸びた後屈曲し、北東へ伸びる溝で、南北部はともに途中で途切れている。規模は検出部で、幅30～50㎝、深さ10～20㎝を測る。断面は浅い半円形を呈する。堆積土は灰青色細砂混粘土である。遺物は奈良時代～鎌倉時代に至る土器の小片が少量出土している。

ＳＤ13

１ｄ～２ｃ区で検出した。方向は北西－南東を示す。規模は検出部で、幅26～40㎝、深さ６㎝を測る。断面は浅い半円形を呈する。堆積土は明青灰色細砂混粘質土である。遺物は奈良時代～鎌倉時代に至る土器の小片が少量出土している。

ＳＤ14

２ｅ～４ｄ区で検出した。方向は北西－南東を示す。規模は検出部で、幅38～48㎝、深さ14～17㎝を測る。断面は浅い半円形を呈する。堆積土は灰褐色細砂シルト混粘土で、内部から奈良時代～鎌倉時代に至る土器の小片が少量出土している（第12図）。



第12図　SK2出土遺物実測図

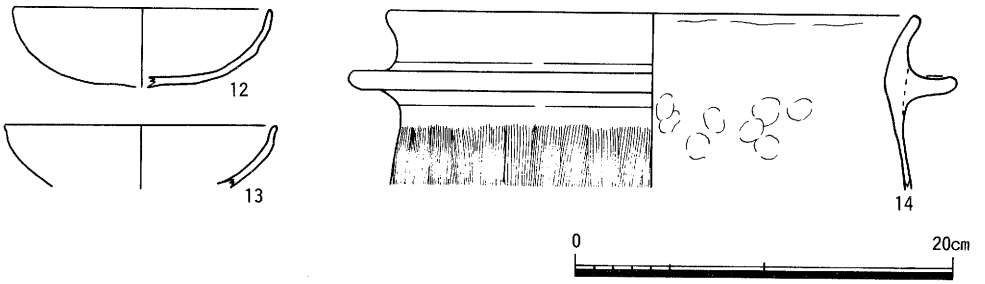
ＳＤ15

調査区中央で検出した。方向は南西－北東を示す。規模は検出部で、幅1.2ｍ、深さ20～30㎝を測る。断面は浅い半円形を呈する。堆積土は茶灰色細砂混粘土である。遺物は奈良時代の土器の小片が少量出土している。

溝（ＳＤ）

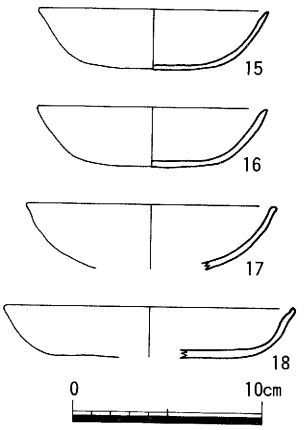
ＳＤ16～ＳＤ43

調査区北部の住居域内で検出している。溝の方向には南西－北東と南東－北西の２方向があ



第13図　ＳＤ25出土遺物実測図

る。規模は検出部で、幅14～74cmの小溝と幅62～164cmのやや大きい溝があるが、前者の方にほとんど含まれる。深さは２～30cmを測り、比較的浅い。堆積土はベース面の土層によって埋まっている土層が異なるが、溝の時期は若干の切り合い関係がみられるが、ほぼ同時期に比定してもよいものであろう。溝の性格として考えられることは畝溝・鍬溝などの耕作溝である。同一面では奈良時代の住居域を検出しているが、この住居域が何かの諸事情により移動ないしは廃絶したものと考えられる。



第14図　ＳＤ43出土遺物実測図

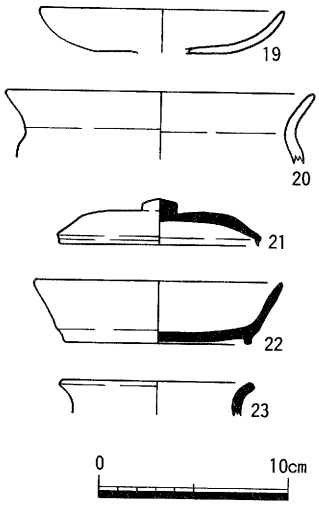
第３表　溝（ＳＤ）一覧表

遺構番号	地　区	方　向	断面形	幅	深　さ	推　積　土	備　考
ＳＤ16	２ａ～２ｂ	南東～北西	椀状形	30～40	４～６	灰褐色細砂混シルト	
ＳＤ17	２ｂ～３ｃ	南東－北西	椀状形	30～40	８～９	暗灰褐色細砂混粘シルト	ＳＫ１が切る
ＳＤ18	３ａ～４ｂ	南西－北東	椀状形	14～22	３～７	褐青灰色粘質シルト	
ＳＤ19	２ｂ	南西－北東	椀状形	26～30	５～７	暗褐灰色細砂混シルト	
ＳＤ20	３ｂ	南西－北東	椀状形	24～34	６～８	灰褐色粘質シルト	ＳＤ17が切る
ＳＤ21	３ｂ	南西－北東	椀状形	34～40	３～８	暗灰褐色粘質シルト	ＳＤ17が切る
ＳＤ22	２ｂ～２ｃ	南西－北東	椀状形	16～24	４～５	褐青灰色粘質シルト	
ＳＤ23	２ｃ	南西－北東	椀状形	16～36	２～７	褐灰色粘質シルト	
ＳＤ24	３ｃ	南東－北西	椀状形	18～24	６～10	褐灰色粘質シルト	
ＳＤ25	４ｃ～５ｄ	南西－北東	逆台形	28～80	12～18	暗褐灰色細砂混シルト	ＳＤ27が切る
ＳＤ26	３ｄ	南西－北東	椀状形	16～38	５～10	暗茶褐色粘質シルト	ＳＰ35・ＳＫ２が切る
ＳＤ27	４ｄ～５ｅ	南東－北西	椀状形	28～58	10～27	暗灰褐色粘質シルト	
ＳＤ28	５ｅ	南西－北東	皿状形	30～60	５～７	褐灰色粘質土	
ＳＤ29	４ｄ～５ｅ	南西－北東	逆台形	26～64	３～５	暗灰褐色粘質シルト	ＳＤ33が切る
ＳＤ30	４ｄ～５ｅ	南西－北東	逆台形	26～64	３～５	暗灰褐色粘質シルト	
ＳＤ31	４ｄ～５ｅ	南西－北東	逆台形	20～32	３～５	暗灰褐色細砂混シルト	ＳＤ32が切る
ＳＤ32	４ｃ～５ｅ	南東－北西	逆台形	62～164	13～18	暗灰褐色細砂混シルト	
ＳＤ33	５ｄ～５ｅ	南東－北西	椀状形	20～32	２～10	暗灰褐色粘質シルト	ＳＤ30が切る
ＳＤ34	４ｄ～５ｄ	南西－北	椀状形	18～26	３～４	暗褐灰色細砂混シルト	ＳＤ27・ＳＰ54が切る
ＳＤ35	３ｅ	南西－北東	椀状形	30～	７～13	灰褐色粘質シルト	ＳＤ21が切る
ＳＤ36	４ｃ～４ｄ	南東－北西	逆台形	40～47	18～28	暗褐灰色細砂混シルト	ＳＤ14が切る
ＳＤ37	４ｃ～４ｄ	南東－北西	椀状形	28～32	27～28	暗灰褐色細砂混シルト	ＳＤ14が切る
ＳＤ38	２ａ	南東－北西	椀状形	30～42	６～11	灰褐色細砂混シルト	
ＳＤ39	４ｃ～５ｄ	南西－北東	逆台形	78～	８～26	暗灰褐色細砂混シルト	
ＳＤ40	５ｄ	南西－北東	椀状形	30～40	７～13	暗灰褐色細砂混シルト	
ＳＤ41	３ｅ	南東－北西	皿状形	104～	11～15	暗茶褐色粘質シルト	ＳＤ14が切る
ＳＤ42	４ｃ	南東－北西	椀状形	24～30	５～７	褐灰色粘質シルト	
ＳＤ43	３ｄ～５ｄ	南西－北東	椀状形	38～54	８～23	暗褐灰色細砂混シルト	

1）鎌倉時代

ＳＯ１

５ｄ～６ｄ区で検出した。東部は調査区外に至り、南部はＳＤ15に切られる。北部はＳＤ31を切る。東西3.8ｍ以上、南北3.2ｍ以上、深さ33㎝を測る。堆積土は暗灰色砂混粘質土・暗黒灰色粘質土で、内部から奈良時代～鎌倉時代に比定される土師器の皿（19）・甕（20）、須恵器の杯蓋（21）・杯身（22）・甕（23）などの小片が少量出土している（第15図）。

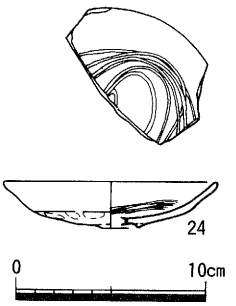


第15図　ＳＯ１出土遺物実測図

溝（ＳＤ）

ＳＤ１～ＳＤ10

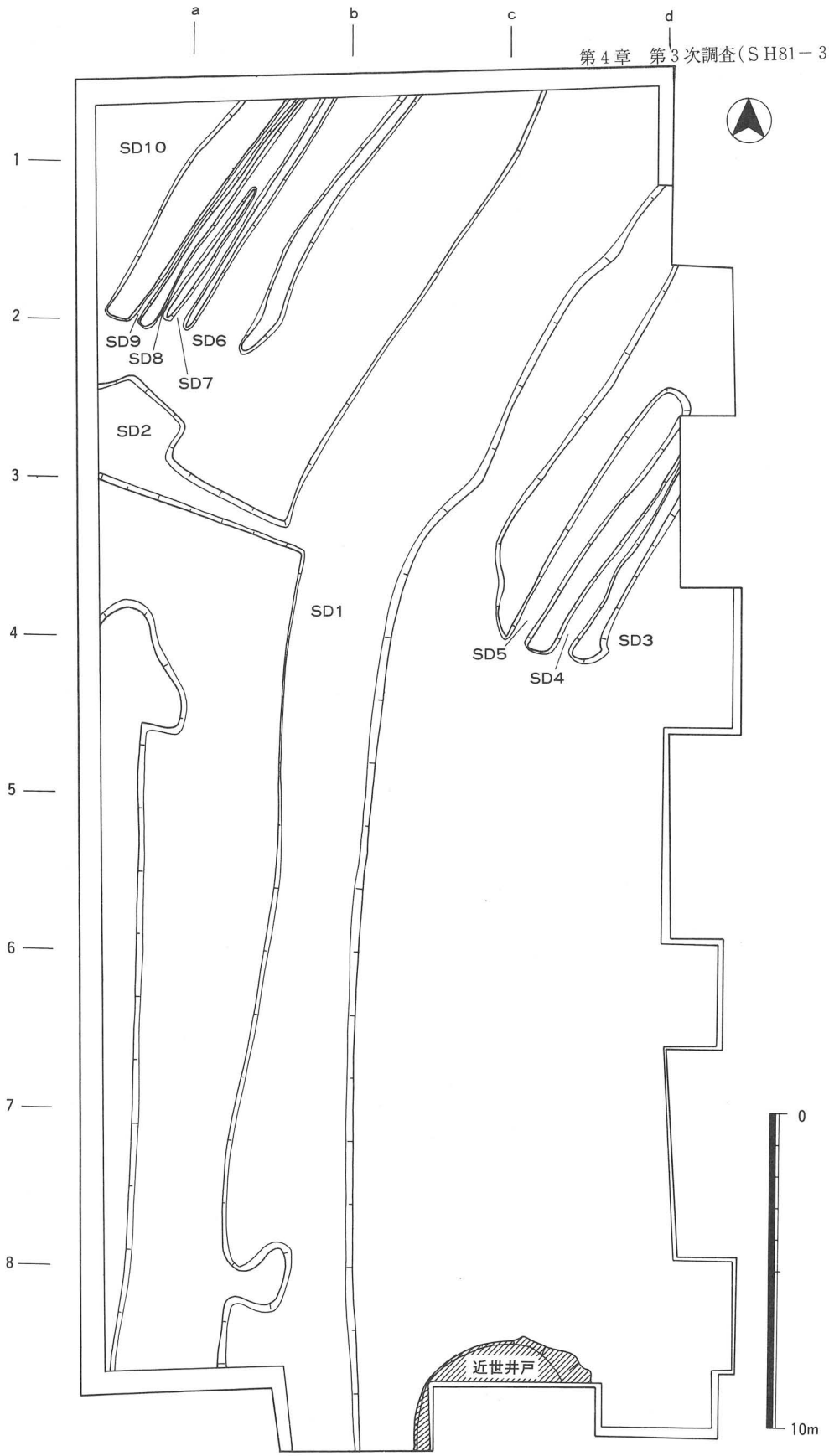
第５層上面で10条検出した。調査区中央で検出したＳＤ１が幅・規模ともに大きく、南から北方へ伸びた後、中央付近で屈曲し北東方向へ伸びる溝で、ＳＤ３～ＳＤ10は調査区北部で南西－北東の方向に伸びる。ＳＤ２はＳＤ１の屈曲部から北西方向に至るものである。これらの溝は耕作に関連するもので、下層で検出している溝の方向と一致しており、耕地区画がほとんど変わっていないことが分かった。ＳＤ３内から鎌倉時代に比定される瓦器小皿（24）が出土している（第16図）。個々の溝の法量などについては第３表に記す。



第16図　ＳＤ３出土遺物実測図

第１表　溝（ＳＤ）一覧表

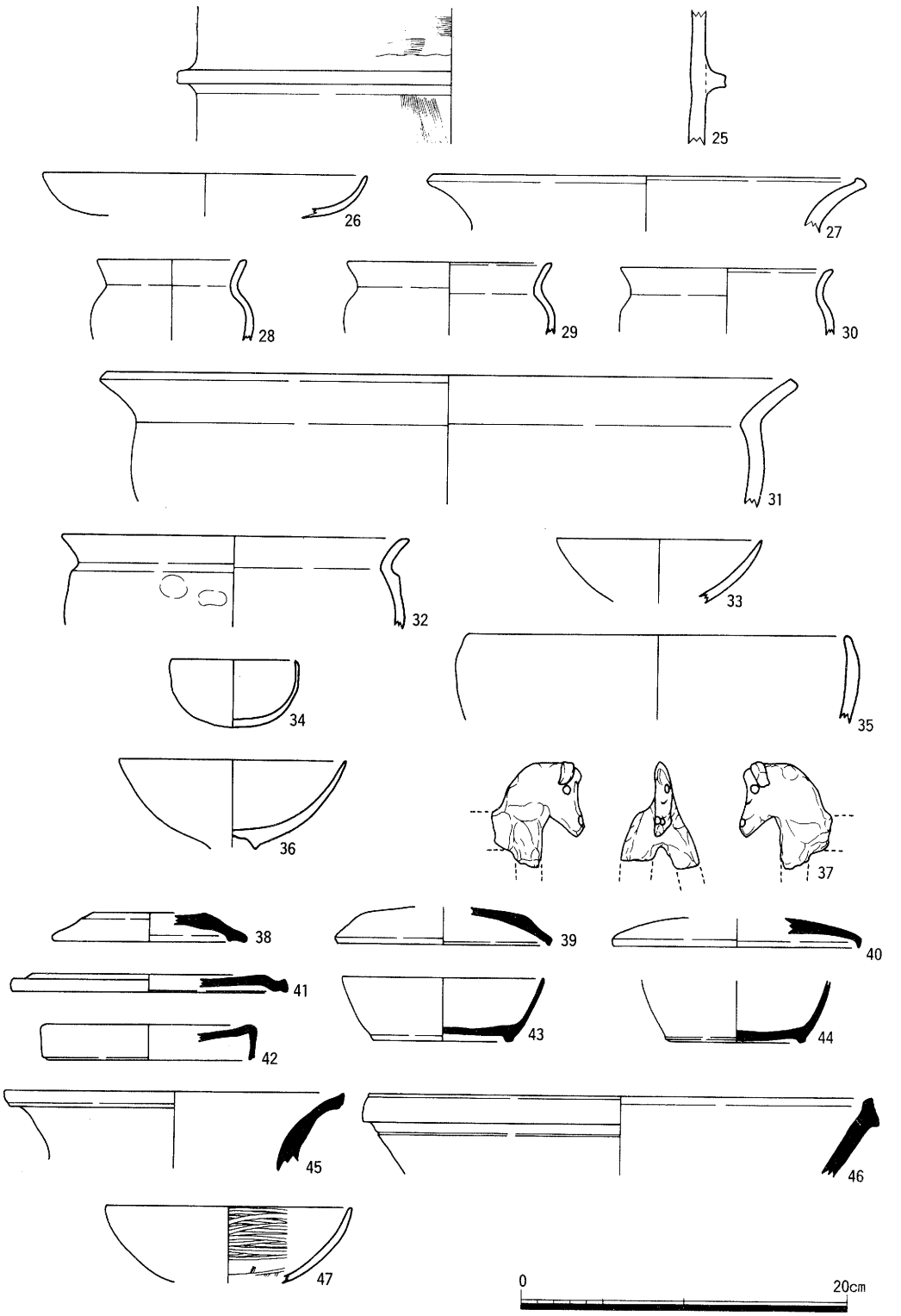
遺構番号	地区	方向	断面形	幅	深さ	堆積土	備考
ＳＤ１	１ｂ～10ｄ	南北	皿状形	390～500	８～13	青灰色粘土	ＳＤ２と合流
ＳＤ２	３ａ～４ｂ	南東－北西	皿状形	80～350	９～11	青灰色粘土	ＳＤ１と合流
ＳＤ３	４ｄ～６ｅ	南西－北東	皿状形	450～	５～15	暗灰色粘質シルト	
ＳＤ４	３ｅ～５ｅ	南西－北東	皿状形	30～70	４～５	淡灰褐色細砂混粘土	
ＳＤ５	３ｄ～４ｅ	南西－北東	椀状形	70～130	４～10	淡灰褐色細砂混粘土	
ＳＤ６	１ｂ～３ｃ	南西－北東	皿状形	90～170	３～11	淡灰褐色細砂混粘土	
ＳＤ７	１ａ～３ｂ	南西－北東	皿状形	30～40	９～10	淡灰褐色細砂混粘土	
ＳＤ８	１ａ～３ｂ	南西－北東	椀状形	60～100	７～12	淡灰褐色細砂混粘土	
ＳＤ９	１ａ～２ｂ	南西－北東	皿状形	30～40	７～11	淡灰褐色細砂混粘土	
ＳＤ10	１ａ～２ｂ	南西－北東	椀状形	350～	７～13	淡灰褐色細砂混粘土	



第17図　第２調査面遺構平面図

3）　遺構に伴わない出土遺物

調査区内で出土した遺物はコンテナ箱にして約7箱分である。このうち、遺構に伴わない遺物は約半分を占めている。遺物は古墳時代前期（庄内式）から近世に至る各種のものを出土している。特に第4層と第5層内の出土である。第4層は鎌倉時代に比定される土器を中心に、第5層は奈良時代に比定される土器を中心に出土している。図示できたものについて記す。古墳時代中期に比定される円筒埴輪（25）、飛鳥から奈良時代に比定される土師器の皿（26）・甕（27～30・32）・大型の鉢（31）・小型の鉢（34・42）・高杯（33・36）・土馬（35）、須恵器の壺蓋（42）・杯蓋（38～41）・杯（43・44）・甕（45）・鉢（46）、鎌倉時代に比定される瓦器椀（47）である（第18図）。また、時期不明の銅製品（図版7）が1点出土している。



第18図　遺構に伴わない遺物

Ⅲ　出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1 七	杯身 須恵器 SP20	口径 器高	4.15 13.0	平らな杯底部から屈曲し上外方へ伸びる。口縁部はやや尖り気味。 口縁部内外面回転ナデ、内面不定方向ナデ外面回転ヘラケズリ後不定方向ナデ。	内　乳灰色 外　灰乳色	2㎜以下の砂粒をごく微量に含む。	良好	完形
2 七	杯 土師器 SK1	口径	12.8	底部から外上方へ伸びた後緩やかに屈曲し上外方へ伸びる。口縁部は丸く終わる。底部は欠損。 口縁部ヨコナデ、外面ナデ、内面剝離の為不明。	内　乳灰茶色 外　暗灰青色	微砂粒を含む。	良好	外面に煤付着。 1／4残存
3 七	同上 SK1	口径 器高	12.8 3.1	浅い半球形で、口縁端部は丸く終わる。口縁部ヨコナデ、内外面磨耗の為不明。	内　乳灰茶色 外　橙茶色	微砂粒を含む。	良好	1／2残存
4	同上 SK1	口径	12.0	杯底部から緩やかに屈曲し、上外方へ伸びる。口縁端部は丸く終わる。底部は欠損。 口縁部ヨコナデ、外面指ナデ後ヘラミガキ内面磨耗の為不明。	乳灰茶色	微砂粒を含む。	良好	1／2残存
5	鉢 土師器 SK1	口径	18.2	やや平らな底部から屈曲し、上外方へ伸びる。口縁端部は丸く終わる。底部は欠損。 口縁部ヨコナデ、その他磨耗の為不明。	乳灰茶色	3㎜以下の微砂粒を含む。	良好	1／5残存
6 七	同上 SK1	口径 器高	20.0 8.7	平らな杯底部から上外方へ内湾しながら伸びる口縁部はやや内側に肥厚する。 口縁部ヨコナデ、内外面ナデ。	乳茶灰色	3㎜以下の微砂粒を含む。	良好	1／2残存
7	Ⅲ 土師器 SK1	口径	20.6	平らな杯底部から屈曲し、上外方へ短く伸びる。口縁端部は内側に肥厚し、丸く終わる。 口縁部ヨコナデ、内面ナデ後ヘラミガキ、外面磨耗の為不明。	乳橙茶色	1.5㎜以下の微砂粒をごく少量含む。	良好	1／5残存
8	Ⅲ 土師器 SK1	口径	23.8	杯底部から上外方へ短く伸びる。口縁端部は内側に肥厚し、丸く終わる。 口縁部ヨコナデ、内外面磨耗の為不明。	内　乳灰色 外　乳灰茶色	微砂粒を含む。	良好	1／6残存
9 七	杯身 須恵器 SK1	口径 器高	5.0 15.0	杯底部から上外方へ伸びる。口縁端部は丸く終わる。断面ハ字形に方形の高台が付く。 回転ナデ。	灰色	3～6㎜の礫、微砂粒を少量含む。	良好	3／4残存
10	杯身 須恵器 SK1	口径 器高	9.2 3.8	やや尖りぎみの杯底部から上方へ伸びる。口縁端部は丸く終わる。 内外面回転ナデ。	灰色	2.5㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	
11	鉢 土師器 SD14	口径	8.9	体部から上方へ外反しながら伸びる。口縁端部は丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ、外面ナデ。	橙茶色	微砂粒を含む。	良好	1／3残存
12	杯 土師器 SD25	口径 器高	13.4 4.2	浅い半球形で、口縁部は丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ、他ナデ。	橙茶色	微砂粒を含む。	良好	1／4残存
13	杯 土師器 SD25	口径	13.4	口縁部は僅かに外反する。口縁端部は丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ、他ナデ。	橙茶色	微砂粒を含む。	良好	1／5残存
14 七	羽釜 土師器 SD25	口径	27.8	口縁部は上方へ外反して伸びる。口縁端部は丸く終わる。頚部外面に鍔が巡る。鍔は水平に伸び、端部は丸い。 口縁部・鍔はヨコナデ、内面ナデ、外面ハケナデ。	暗褐茶色	1～1.5㎜の砂粒を含む。	良好	1／6残存
15	杯 土師器 SD43	口径 器高	12.0 3.2	浅い半球形で、やや平らな底部をもつ。口縁端部は丸く終わる。 口縁部ヨコナデ、他ナデ。	橙茶色	1～1.5㎜の砂粒を含む。	良好	1／2残存

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
16	杯 土師器 ＳＤ43	口径 12.1	浅い半球形で、やや平らな底部をもつ。口縁端部は丸く終わる。 口縁部ヨコナデ、他ナデ。	内 乳灰橙色 外 橙茶色	微砂粒を含む。	良好	１／４残存
17	杯 土師器 ＳＤ43	口径 13.4	口縁端部は丸く終わる。 口縁部ヨコナデ、他ナデ。	橙茶色	微砂粒を含む。	良好	１／５残存
18	皿 土師器 ＳＤ43	口径 15.2 器高 2.7	平らな底部から屈曲し、上外方へ伸びる。口縁端部は内側に肥厚する。 口縁部ヨコナデ、他ナデ。	橙茶色	微砂粒を含む。	良好	１／５残存
19	中皿 土師器 ＳＯ１	口径 12.8	平らな杯底部から上方へ伸びる。口縁端部は丸く終わる。 口縁部ヨコナデ、他ナデ。	乳灰橙色	２㎜以下の微砂粒を微量に含む。	良好	１／４残存
20	甕 土師器 ＳＯ１	口径 14.2	口縁部は上外方へ伸びる。口縁端部は丸く終わる。 口縁部ヨコナデ、他磨耗の為不明。	乳灰橙色	2.5㎜以下の微砂粒をごく少量含む。	良好	１／５残存
21 七	蓋 須恵器 ＳＯ１	口径 10.6 器高 2.4	平らな天井部から下外方へ伸びる。口縁端部は下方につまみ出す。天井部外面につまみが付く。 回転ナデ。	灰色	２㎜以下の微砂粒を含む。	良好	１／２残存
22 七	杯身 須恵器 ＳＯ１	口径 13.0 器高 3.3	平らな杯底部から上外方へ伸びる。口縁端部は丸く終わる。断面ハ字形に方形の高台が付く。 回転ナデ。	乳灰色	３㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	３／４残存
23	壷 須恵器 ＳＯ１	口径 10.5	外反する口縁部で、端部は丸く終わる。 回転ナデ。	乳灰色	砂粒を少量含む。	良好	１／５残存
24	小皿 瓦器 ＳＤ３	口径 11.2	浅い半球形で、口縁端部は丸く終わる。底部外面に小さな張り付け高台が付く。 口縁部・高台ヨコナデ、他ナデ。見込み部は螺旋暗文。	暗灰色	微砂粒を含む。	良好	１／３残存
25 七	埴輪 第４層	タガ上幅 0.8 タガ下幅 2.1 タガ高 1.2 タガ径 33.9	筒状で、断面台形のタガが巡る。体部外面に接合痕１本がみられる。 内面・タガヨコナデ、外面ハケナデ。	内 暗灰色 外 橙茶色	3.5 ㎜砂粒を微量に含む。	良好	小片
26	皿 土師器 第４層	口径 19.8	上外方へ内湾して伸びる口縁部で、端部は丸く終わる。 口縁部ヨコナデ、他ナデ。	乳灰茶色	微砂粒を含む。	良好	１／６残存
27	甕 土師器 第４層	口径 26.2	外上方へ外反して伸びる口縁部で、端部は上につまみ上げる。 内外面ヨコナデ。	内 乳茶灰色 外 乳灰茶色	微砂粒を含む。	良好	１／６残存
28	同上 第４層	口径 8.8	口縁部は上外方へ伸びる。端部はやや上に面をもつ。 内外面とも磨耗のため不明。	内 暗灰茶色 外 暗茶灰色	４㎜以下の砂粒を含む。	良好	１／４残存
29	同上 第４層	口径 12.4	口縁部は上外方へ伸びる。端部はやや上に面をもつ。 内外面とも磨耗のため不明。	内 橙茶灰色 外 茶灰乳色	４㎜以下の砂粒を含む。	良好	１／４残存
30	同上 第４層	口径 13.0	口縁部は上外方へ伸びる。端部はやや上に面をもつ。 内外面とも磨耗のため不明。	内 乳灰茶色 外 乳茶灰色	２㎜以下の砂粒を含む。	良好	１／５残存

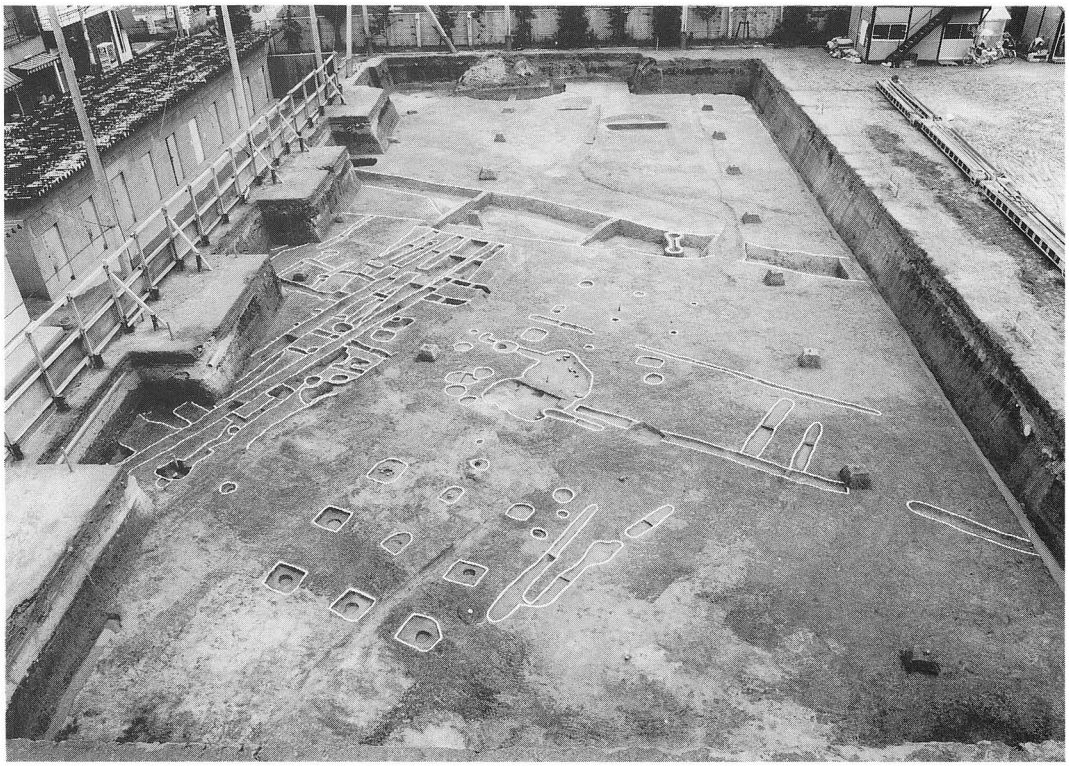
遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
31	甕 土師器 第4層	口径 42.0	外上方へ伸びる口縁部で、端部は外に面をもつ。 口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ。	内 灰茶色 外 乳灰茶色	3㎜以下の砂粒を含む。	良好	1／6残存
32	同上 第4層	口径 21.2	外上方へ伸びる口縁部で、端部は内側に面をもつ。 口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ、外面ナデ・指頭痕。	暗褐茶色	微砂粒を含む。	良好	1／6残存
33	高杯 土師器 第4層	口径 10.6	上外方へ内湾しながら伸びる口縁部で、端部は丸く終わる。底部は欠損。 口縁部ヨコナデ、他ナデ。	乳橙茶色	3㎜以下の砂粒を含む。	良好	1／5残存
34 八	鉢 土師器 第4層	口径 7.6	半球形で、口縁端部は鈍く尖る。 口縁部ヨコナデ、他ナデ。	内 乳灰橙色 外 乳灰茶色	1.5㎜以下の砂粒を含む。	良好	1／2残存
35	同上 第4層	口径 23.2	上方へ内湾しながら伸びる口縁部、端部は丸く終わる。 内外面ヨコナデ。	内 茶橙色 外 乳茶色	微砂粒を含む。	良好	1／7残存
36 八	高杯 土師器 第4層	口径 13.8	半球形の杯体部で、口縁端部は丸く終わる。脚部は欠損。 口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ヨコナデ。	乳灰橙色	1.5㎜以下の砂粒をごく少量含む。	良好	1／4残存
37 八	土馬 土師器 第4層		頭部のみで、馬顔には目・鼻・耳がはっきりと付けられている。 手ずくね。	茶橙色	微砂粒を含む。	良好	1／4残存
38 八	杯蓋 須恵器 第4層	口径 11.6	天井部から外下方へ伸びる口縁部、端部は丸く終わる。内側には小さなかえりがある。 天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰色	2.5㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	1／3残存
39	同上 第4層	口径 13.0	天井部から外下方へ伸びる口縁部、端部は下方へつまみ出す。 回転ナデ	灰色	微砂粒を含む。	良好	1／3残存
40	同上 第4層	口径 15.0	天井部から外下方へ伸びる口縁部、端部は下方へつまみ出す。 回転ナデ。	灰色	微砂粒を含む。	良好	1／4残存
41	同上 第4層	口径 16.8	平らな天井部から外方へ伸びる口縁部、端部は下方へ屈曲し、下につまみ出す。 回転ナデ。	灰青色	微砂粒を含む。	良好	1／3残存
42 八	壷蓋 須恵器 第4層	口径 12.5	凹んだ天井部から外方へ伸びた後屈曲し、下方へ伸びる口縁部、端部は凹面をもつ。 内側不定方向のナデ、他は回転ナデ。	灰青色	微砂粒を含む。	良好	1／4残存
43	杯身 須恵器 第5層	口径 12.3 器高 3.95 底部径 8.8	平らな杯底部から屈曲し、上外方へ伸びる口縁部、端部は丸く終わる。底部外面に断面台形の高台が付く。 口縁部回転ナデ、底部内外面不定方向のナデ。	灰色	微砂粒を含む。	良好	1／2残存
44	同上 第4層	底部径 7.8	平らな杯底部から屈曲し、上外方へ伸びる口縁部、端部は欠損。底部外面に断面方形でハ字形に開いた高台が付く。 回転ナデ。	乳灰色	微砂粒を含む。	良好	1／3残存
45	甕 須恵器 第4層	口径 21.8	外上方へ外反して伸びる口縁部、端部はつまみ上げる。 回転ナデ。	灰色	微砂粒を含む。	良好	1／5残存

遺物番号 図版番号	器　種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色　調	胎　土	焼　成	備　考
46	鉢 須恵器 第４層	口　径	30.0	外上方へ伸びる口縁部、端部は上につまみ上げ、外に面をもつ。 回転ナデ。	灰青色	微砂粒を含む。	良好	１／６残存
47	椀 瓦器 第４層	口　径	15.0	半球形で、口縁端部は丸く終わる。 口縁部ヨコナデ、内面ヘラミガキ、見込み格子暗文。	黒灰色	微砂粒を含む。	良好	１／５残存

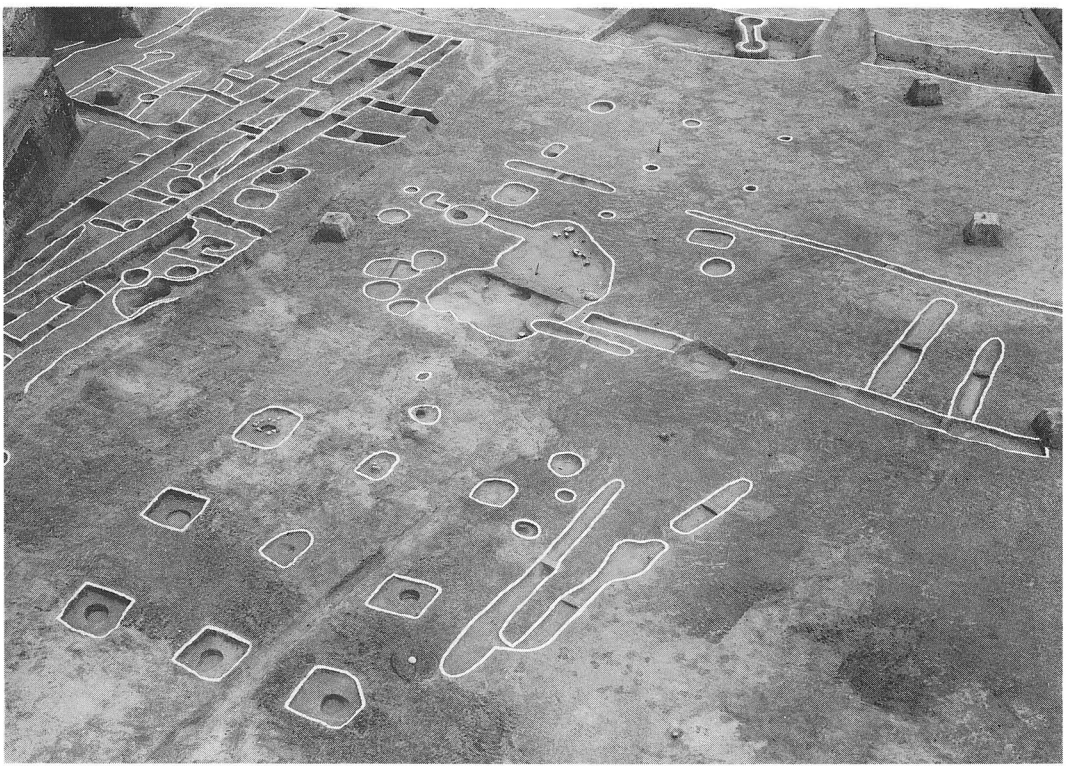
Ⅳ　まとめ

今回の発掘調査は、成法中学校内の第４次の調査にあたり、敷地内の南東部に位置する調査であった。調査では奈良時代から近世に至る遺構・遺物を検出した。特に、掘立柱建物を中核とする奈良時代の住居域の一部を検出することができた。この時期の遺構は当敷地内で実施した調査（ＳＨ82－１・ＳＨ85－３）でも検出されており、少なくとも南北100ｍにわたって居住域が拡がっていたことが明らかになった。また、遺物としては包含層から祭祀用に使用したと考えられる馬をかたどった土製品（土馬の頭部分）が出土しており、この付近で祭祀的なものが行われたのであろう。

図　　版

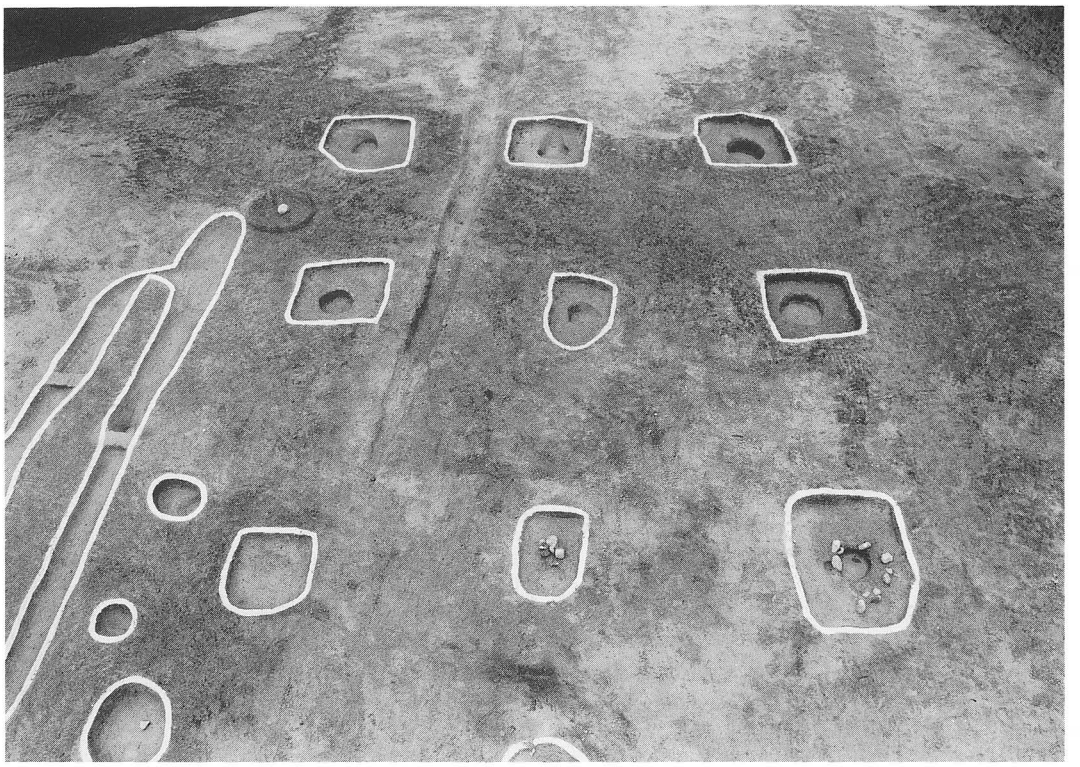


調査区全景（北から）

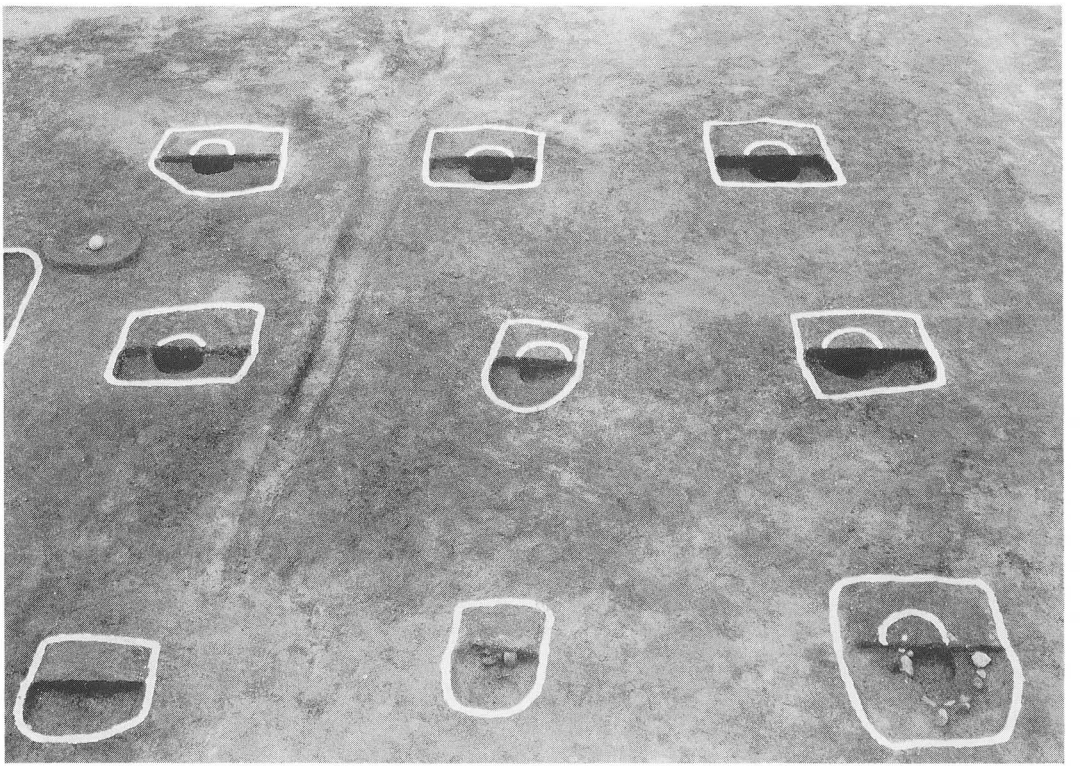


調査区北部（北から）

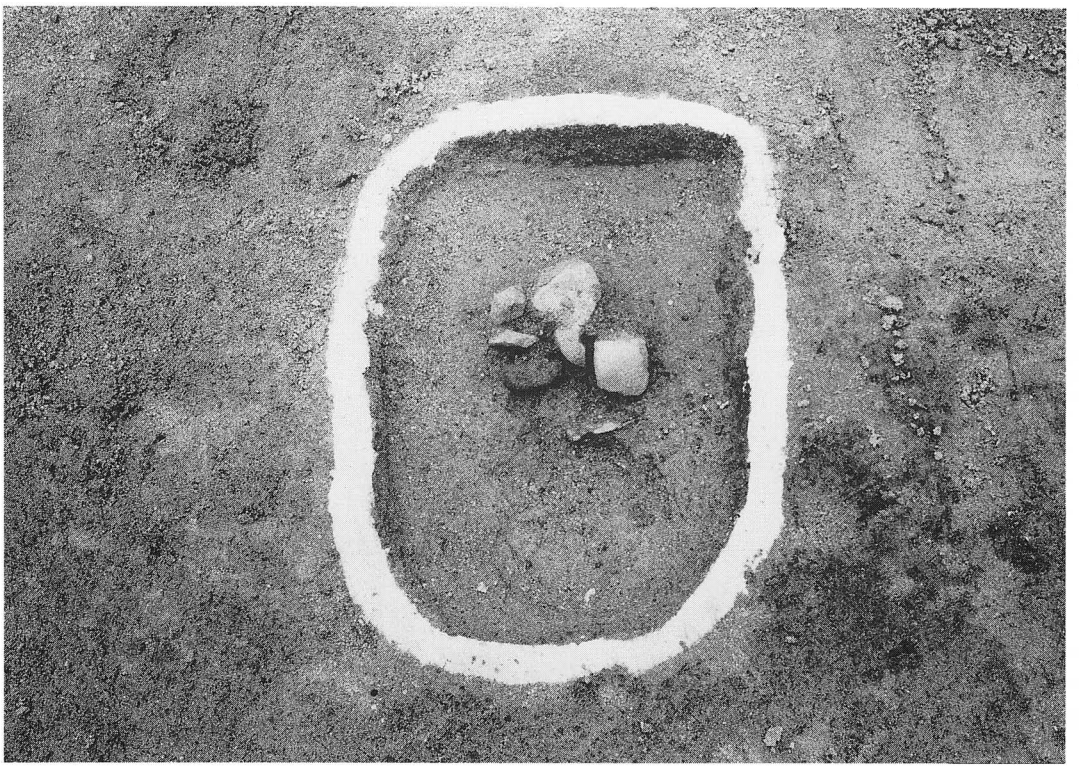
図版二



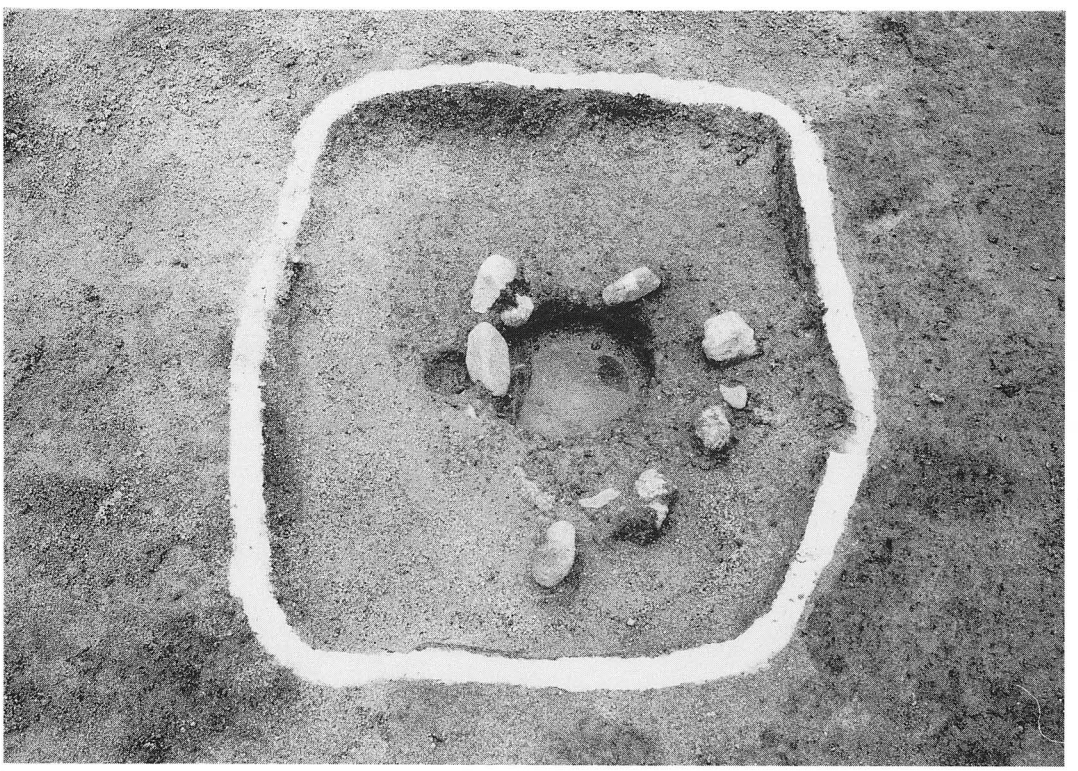
ＳＢ１（南から）



ＳＢ１（南から）

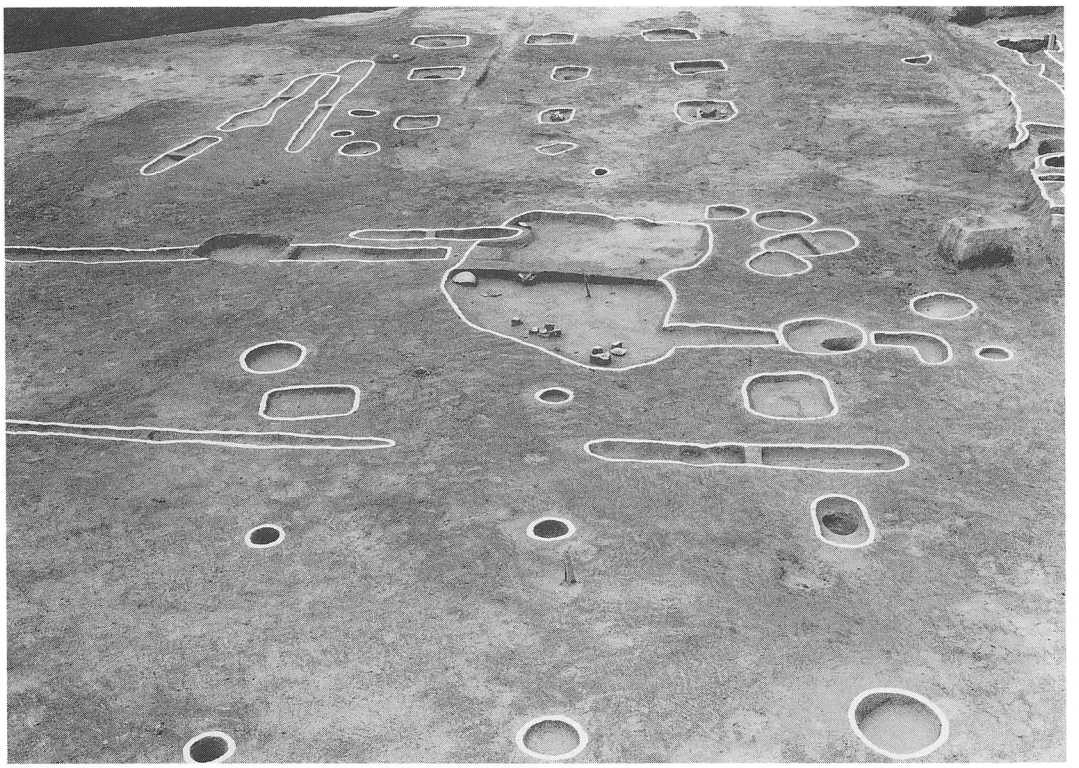


ＳＢ１内・ＳＰ８（南から）

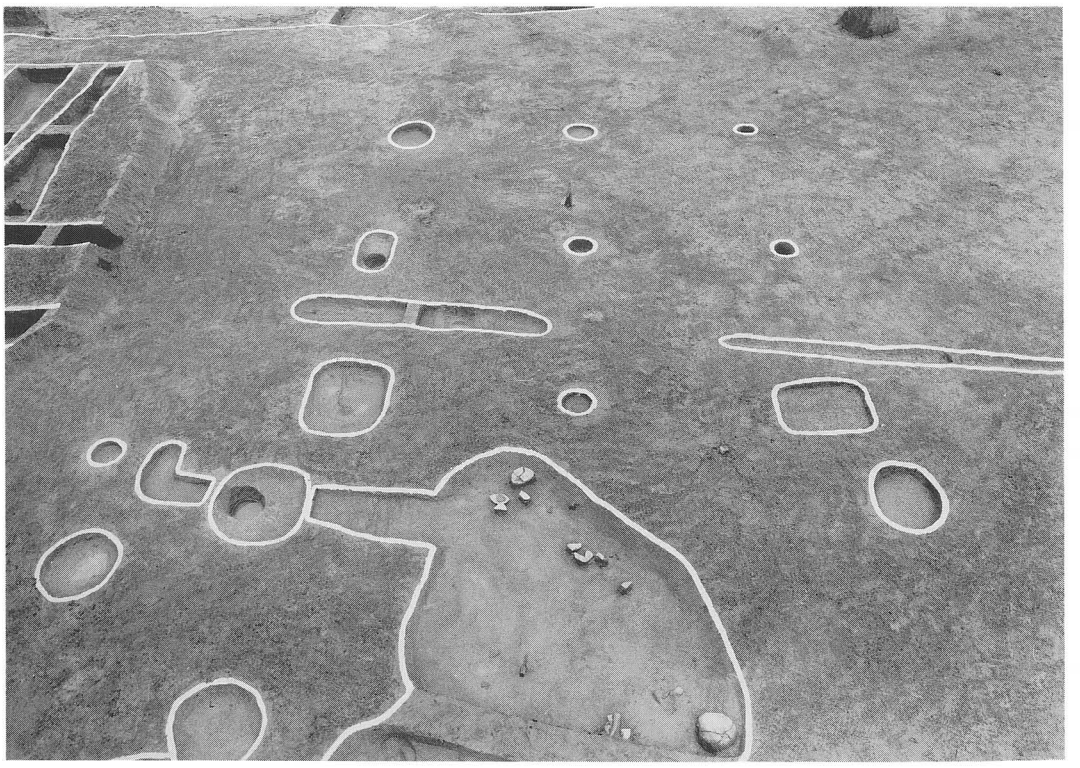


ＳＢ１内・ＳＰ９（南から）

図版四



ＳＢ１・ＳＢ２（南から）

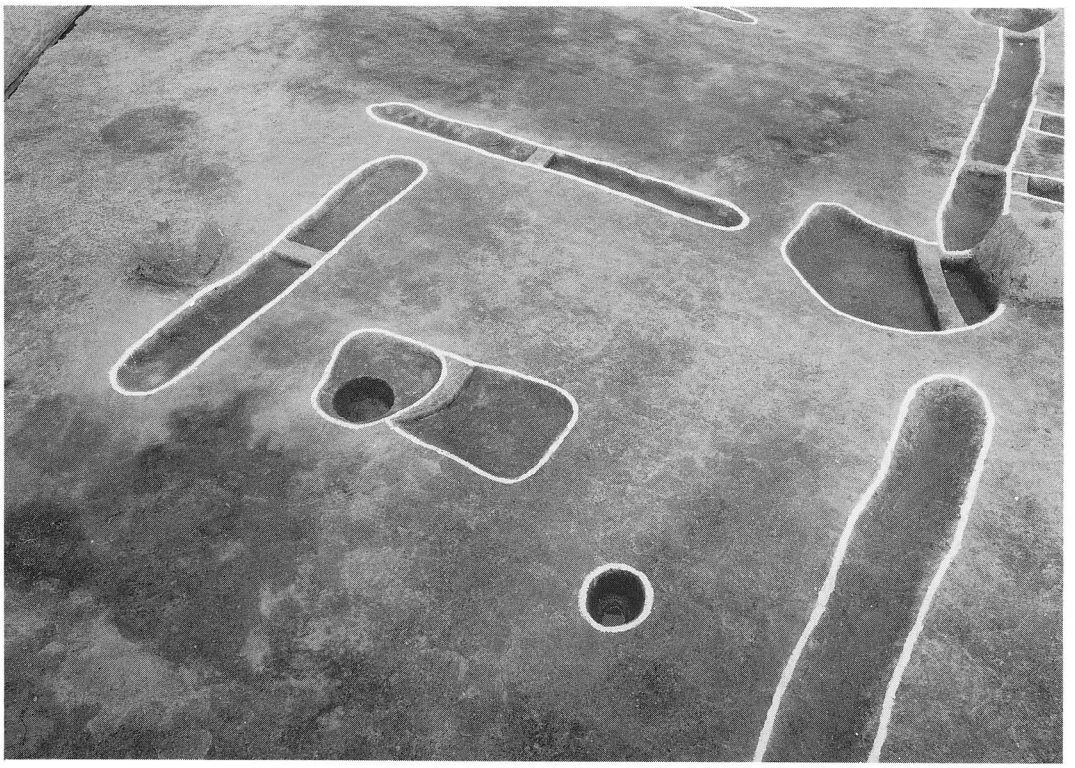


ＳＢ２（北から）

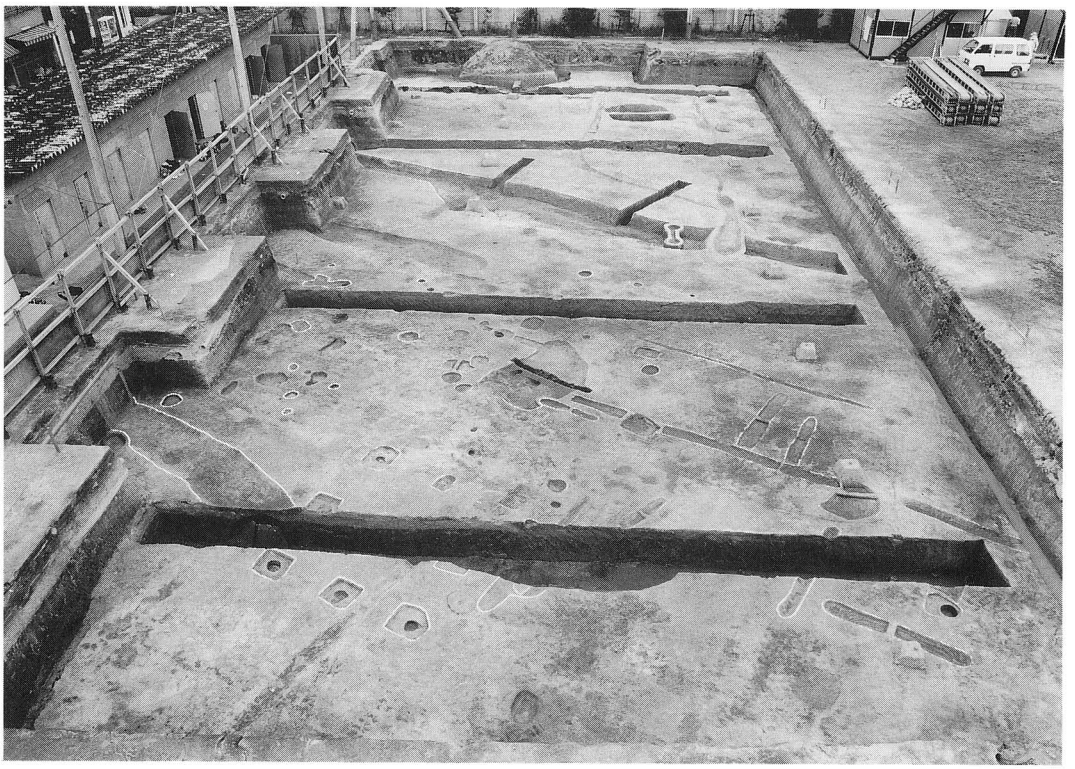
ＳＫ１全景(西から)

ＳＤ37(西から)

図版六

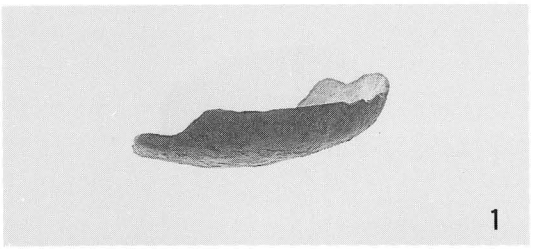


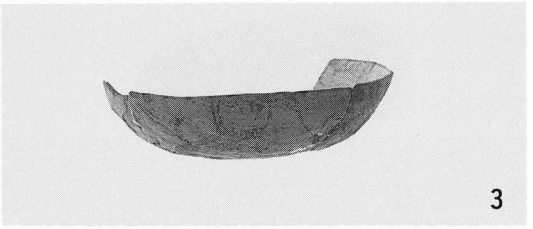
北西部遺構（西から）

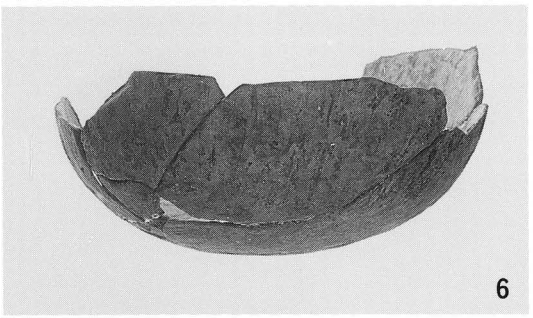


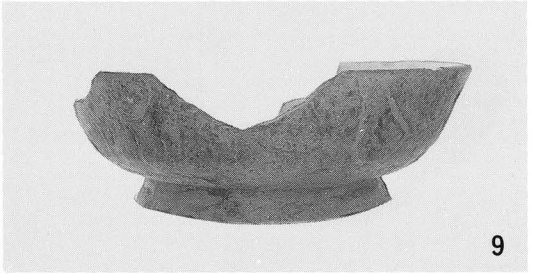
下層確認トレンチ（北から）

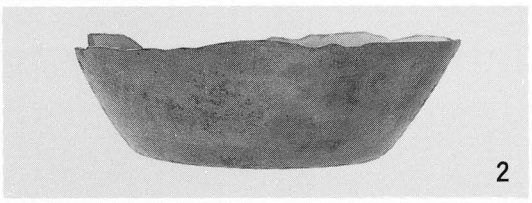
図版七　出土遺物

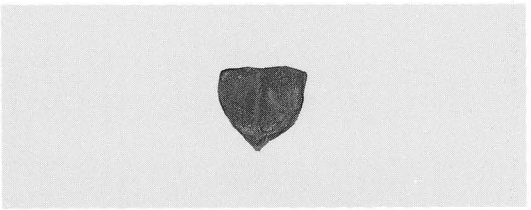

1

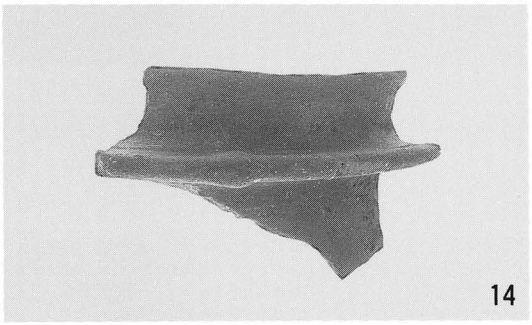

3

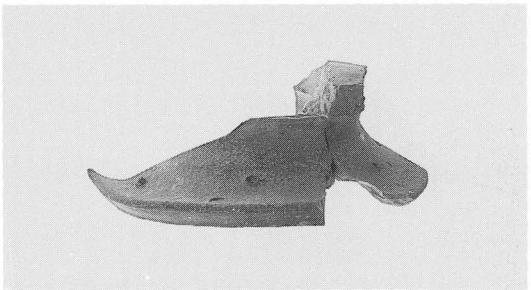

6

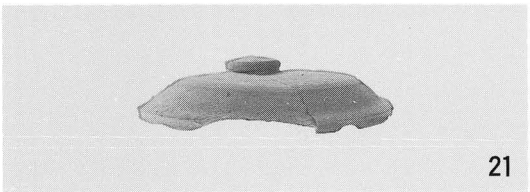

9

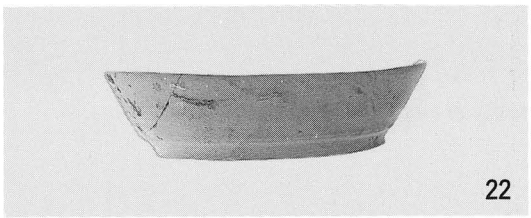

2

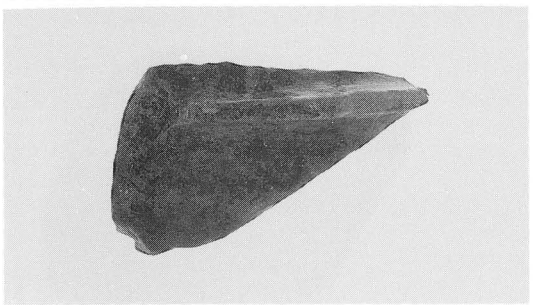


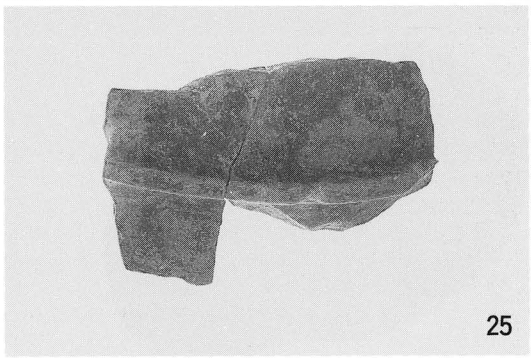

14




21

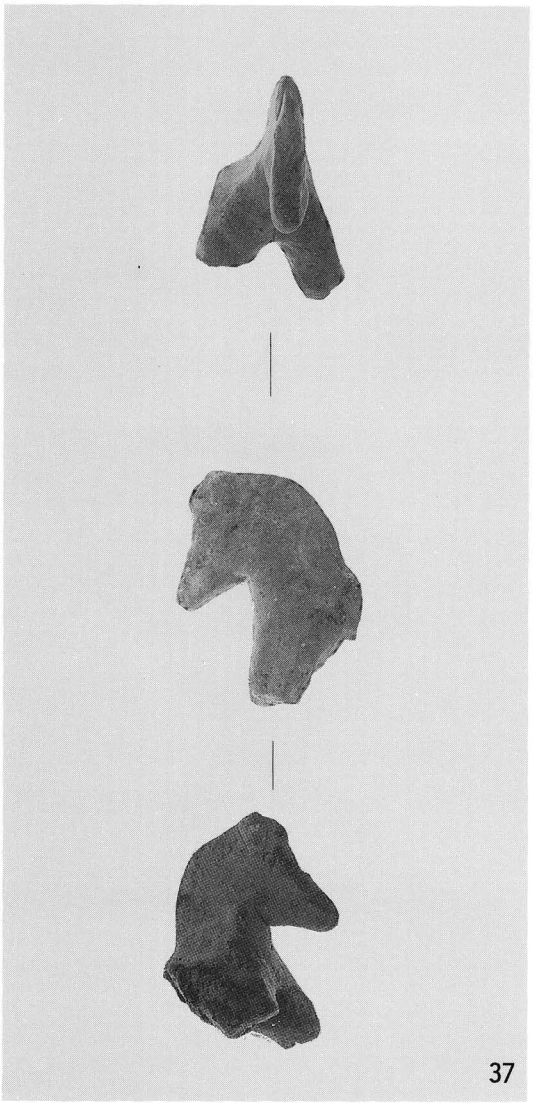

22

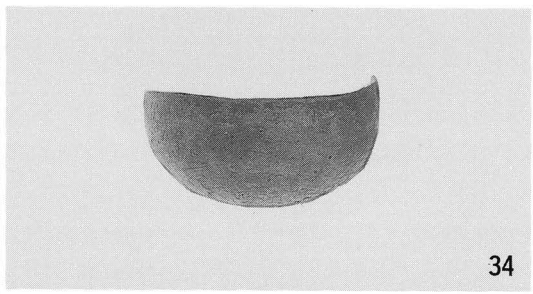


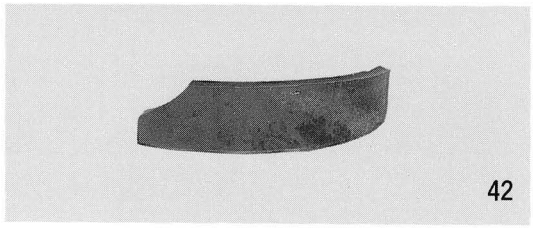

25

SP20　1　SK1　2・3・6・9　SP25・14　SD17　銅製品
SO1　21・22
遺構に伴わない出土遺物　25

図版八　出土遺物







遺構に伴わない出土遺物

第５章　第４次調査（ＳＨ88－４）発掘調査報告

例　　言

1．本書は、八尾市南本町１丁目10番地で実施した大阪シーリング印刷事務所建設工事に伴う発掘調査の報告である。

1．本書に報告する成法寺遺跡第４次調査（ＳＨ83－４）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は昭和63年11月７日から12月５日にかけて、高萩千秋を担当として実施した。調査面積は540㎡を測る。なお、調査においては高井裕之・八元聡志・岩本多貴子・村田英子・村田圭子が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後実施し、平成３年に刊行した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測－岡田・高井、図面レイアウト－岩本・村田英子、図面トレース－岩本・村田（英）、遺物写真撮影－高萩が行った。本書の執筆は主に高萩が担当したが、第４節出土遺物観察表については村田英子が担当した。

1．全体の編集は高萩が行った。

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに …… 61

Ⅱ　調査概要 …… 62

　1．調査の方法と経過 …… 62

　2．基本層序 …… 65

　3．検出遺構・出土遺物 …… 66

　　遺構に伴わない遺物 …… 76

Ⅲ　出土遺物観察表 …… 79

Ⅳ　まとめ …… 84

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺図 …… 61
第２図　調査区設定図及び区割図 …… 62
第３図　遺構平面図 …… 63・64
第４図　基本層序柱状図（Ｓ＝１／40） …… 65
第５図　ＳＸ１出土遺物実測図 …… 66
第６図　ＳＸ２出土遺物実測図 …… 66
第７図　ＳＸ１・ＳＸ２平断面図 …… 67
第８図　ＳＸ３平断面図 …… 68
第９図　ＳＸ３出土遺物実測図 …… 69
第10図　ＳＥ１平断面図 …… 69
第11図　ＳＥ１出土遺物実測図 …… 69
第12図　ＳＫ４断面図 …… 70
第13図　ＳＫ４出土遺物実測図 …… 70
第14図　ＳＫ５断面図 …… 71
第15図　ＳＫ５出土遺物実測図 …… 71
第16図　ＳＫ６断面図 …… 71
第17図　ＳＫ６出土遺物実測図 …… 71
第18図　ＳＫ６断面図 …… 72
第19図　ＳＫ６出土遺物実測図 …… 72
第20図　ＳＫ12出土遺物実測図 …… 73
第21図　ＳＫ13出土遺物実測図 …… 73
第22図　ＳＫ14出土遺物実測図 …… 73
第23図　ＳＫ15出土遺物実測図 …… 74
第24図　ＳＫ16出土遺物実測図 …… 74
第25図　ＳＫ18出土遺物実測図 …… 74
第26図　ＳＫ20断面図 …… 75
第27図　ＳＫ21断面図 …… 75
第28図　ＳＤ１・ＳＤ２断面図 …… 77
第29図　遺構に伴わない出土遺物実測図 …… 78

表　目　次

第１表　小穴（ＳＰ）一覧表 …… 76

図　版　目　次

図版一　第１調査区全景（北から）
第２調査区全景（北から）
図版二　第３調査区全景（北から）
第２調査区５ｂ～７ｂ区（南から）
図版三　第２調査区５ｂ～７ｂ区（北から）
第２調査区ＳＸ１（西から）
図版四　第２調査区ＳＸ２（西から）
第２調査区ＳＥ１・ＳＫ13（東から）
図版五　第２調査区ＳＥ１・ＳＫ13（東から）
第２調査区ＳＫ15（西から）
図版六　第２調査区ＳＸ16（東から）
第２調査区ＳＸ17（東から）
図版七　第３調査区ＳＤ１・ＳＰ27（西から）
第３調査区５ａ区（北西から）
図版八　第３調査区ＳＸ３（南西から）
第３調査区ＳＸ３（東から）
図版九　第３調査区ＳＸ３（東から）
第３調査区ＳＸ３（北から）
図版一〇　第３調査区ＳＸ３（北から）
第３調査区ＳＫ22（東から）
図版一一　第３調査区ＳＫ23（西から）
図版一二　出土遺物　ＳＸ２　４　ＳＸ３　７・９　ＳＥ１　10　12
ＳＫ４　15・17　ＳＫ５　18・19
図版一三　出土遺物　ＳＫ６　21　ＳＫ７　23　ＳＫ12　25　ＳＫ16　33
遺構に伴わない遺物　36～38・53

Ⅰ　はじめに

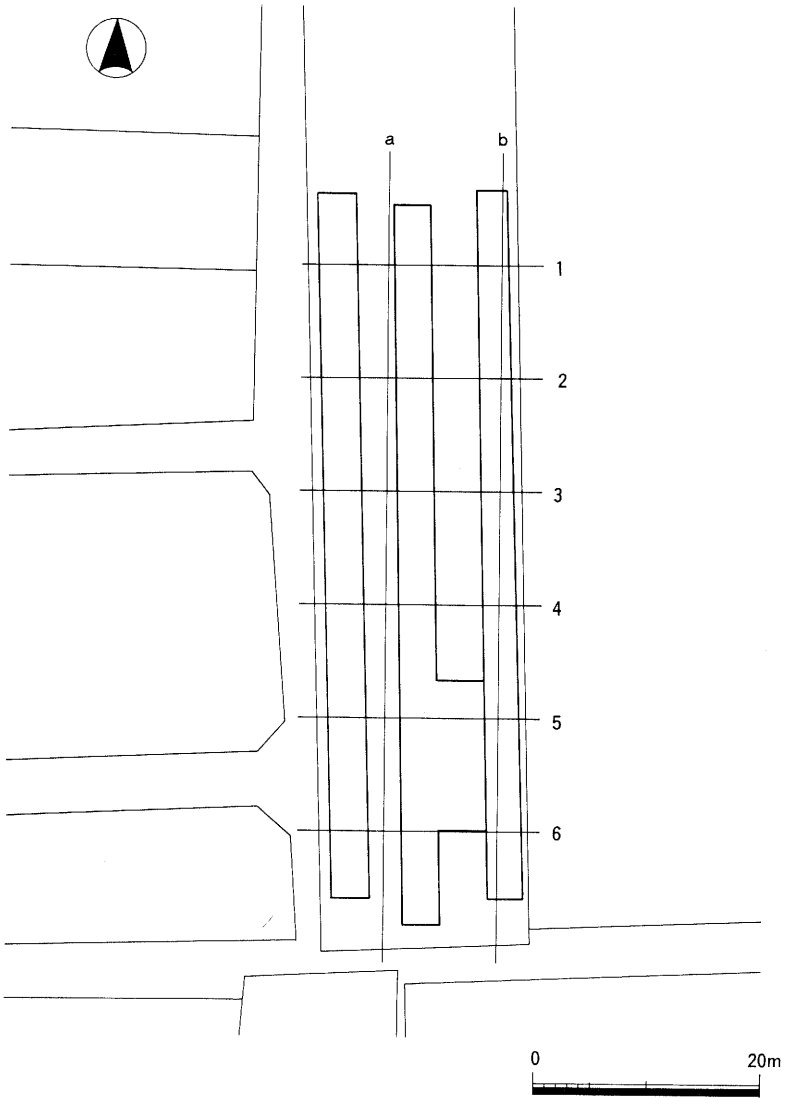
今回の調査は、南本町１丁目10に所在する㈱大阪シーリング印刷の事務所建設工事に伴うもので、当調査研究会が当遺跡で実施した第４次調査（ＳＨ88－４）にあたる。当調査地の北方に近接する都市計画道路平野中高安線では拡張工事に伴う発掘調査が大阪府教育委員会によって昭和60年度から継続的に実施されている。その結果、弥生時代中期に比定される方形周溝墓の墓域、古墳時代前期の竪穴住居・井戸・溝等の居住域が検出されている。当調査地は、昭和61年度に実施された調査地の南部に位置する。調査期間は昭和63年11月７日～12月５日までである。調査面積は約540㎡を測る。

第１図　調査地周辺図

Ⅱ　調査概要

1．調査の方法と経過

八尾市教育委員会の指示書に従って建物の基礎部分に幅３ｍ×長さ60ｍのトレンチ３本（東から第１調査区～第３調査区）を設定し、現地表下約1.5ｍまでの土層を機械掘削し、以下の土層については人力掘削を実施した。なお、第１調査区と第２調査区の南側の間については遺構の性格を知るために拡張した。また、第１調査区では、下層（弥生時代中期の遺構）を確認する目的で前面を約40㎝掘り下げた。



第２図　調査区設定図及び区割図

1
2
3
4
5
6
b
SK1
SK2
SP2
SP3
SP1
SP4
SP5
SP6
SK3
SP7
SP8
SP10
SK4
SP9
SK5
SP11
SP12
SK6
SK8
SK9
SP13
SP14
SK7
SK6
SK10
SK11
SK16
第1調査区
SK13
SK15
SP17
SP19
SP20
SK14
SP18
SK16
SK17
SK12
SE1
攪乱
SX1
SX2
攪乱
SP21
SP22
第2調査区
a
SK18
SP25
SK19
SP26
SD1
SD2
SK23
SP27
SX3
SP24
SP23
SK20
SK21
SK22
SK24
第3調査区
7
8
1
2
3
4
5
6
7.4m
1．盛　土　2．耕　土　3．暗青色粘質土　4．茶色細砂混じり粘質土　5．暗青褐色粘土混じり細砂　6．灰青色細砂　7．青灰色粘土　8．暗茶灰色シルト
0
10m

第3図　遺構平面図

地区割（第２図）は、調査区の北東隅から東西線が数字（１～６）、南北線がアルファベット（ａ～ｂ）を呼称した。なお、基準点の国土座標の値は東西軸（１ライン）がＸ＝－153110.257、南北側（ａライン）がＹ＝－35 350.000を測り、区割りの南北線は国土座標の軸に対し２°西へ振っている。

調査では、現地表下1.5ｍ（標高7.0ｍ）に存在する第６層淡灰色～灰青色細砂の上面で古墳時代前期（庄内式古相）に比定される遺構を検出した。遺構は方形周溝墓３基（ＳＸ１～ＳＸ３）、井戸１基（ＳＥ１）、土坑24基（ＳＫ１～ＳＫ24）、小穴27個（ＳＰ１～ＳＰ27）・溝２条（ＳＤ１・ＳＤ２）である。出土遺物は、遺構内及び上面に存在する第５層暗茶色～暗青褐色細砂混粘質土内から弥生時代後期（第Ｖ様式）～古墳時代前期（庄内式）に比定される土器片が、コンテナ箱にして約６箱分出土した。

２．基本層序

調査区内で、現地表面から約1.8ｍまでの間に存在する土層内から普遍的にみられる７層を摘出して基本層序とした（第４図）。現地表面は標高8.3ｍを測る。

第１層　盛土。層厚１ｍ。工場跡地で、基礎コンクリートが部分的に残っている。

第２層　旧耕土。層厚10～15㎝。近年まで耕作土である。

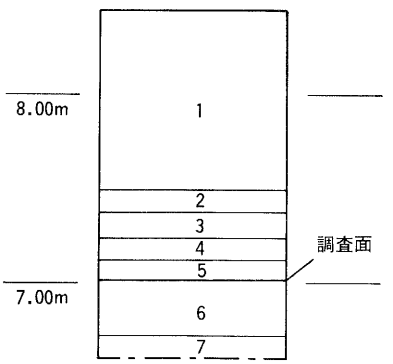
第３層　黄褐色～茶色細砂混粘質土。層厚10～20㎝。耕土の床土である。

第４層　灰褐色～茶色細砂混粘質土。層厚10～15㎝。自然堆積土である。

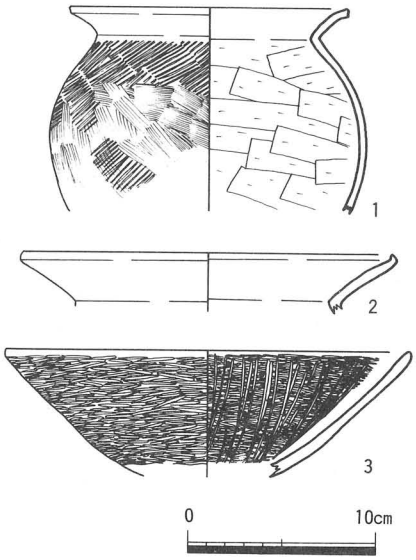
第５層　暗灰色～暗青褐色粘土混細砂。層厚５～15㎝。第Ｖ様式～庄内式に比定される土器の小片が少量含まれている。

第６層　淡灰色～灰青色細砂。層厚25～30㎝。洪水層の堆積土で、この上面（標高7.0ｍ前後）で古墳時代前期に比定される遺構を検出した。

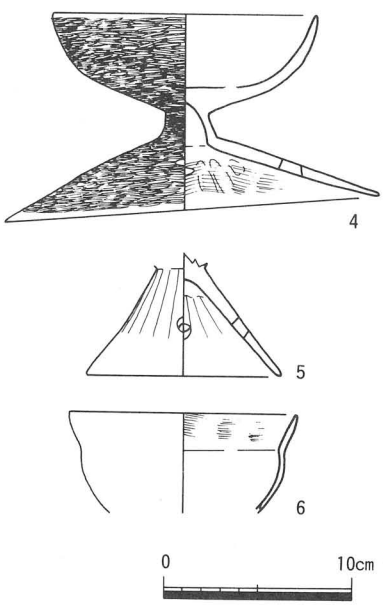
第７層　淡灰色～灰青色粘土。層厚20㎝。粘性が強い土層で、炭化物が少量含まれている。



第４図　基本層序柱状図（Ｓ＝１／40）



第５図　ＳＸ１出土遺物実測図



第６図　ＳＸ２出土遺物実測図

３．検出遺構と出土遺物

方形周溝墓（ＳＸ）

ＳＸ１

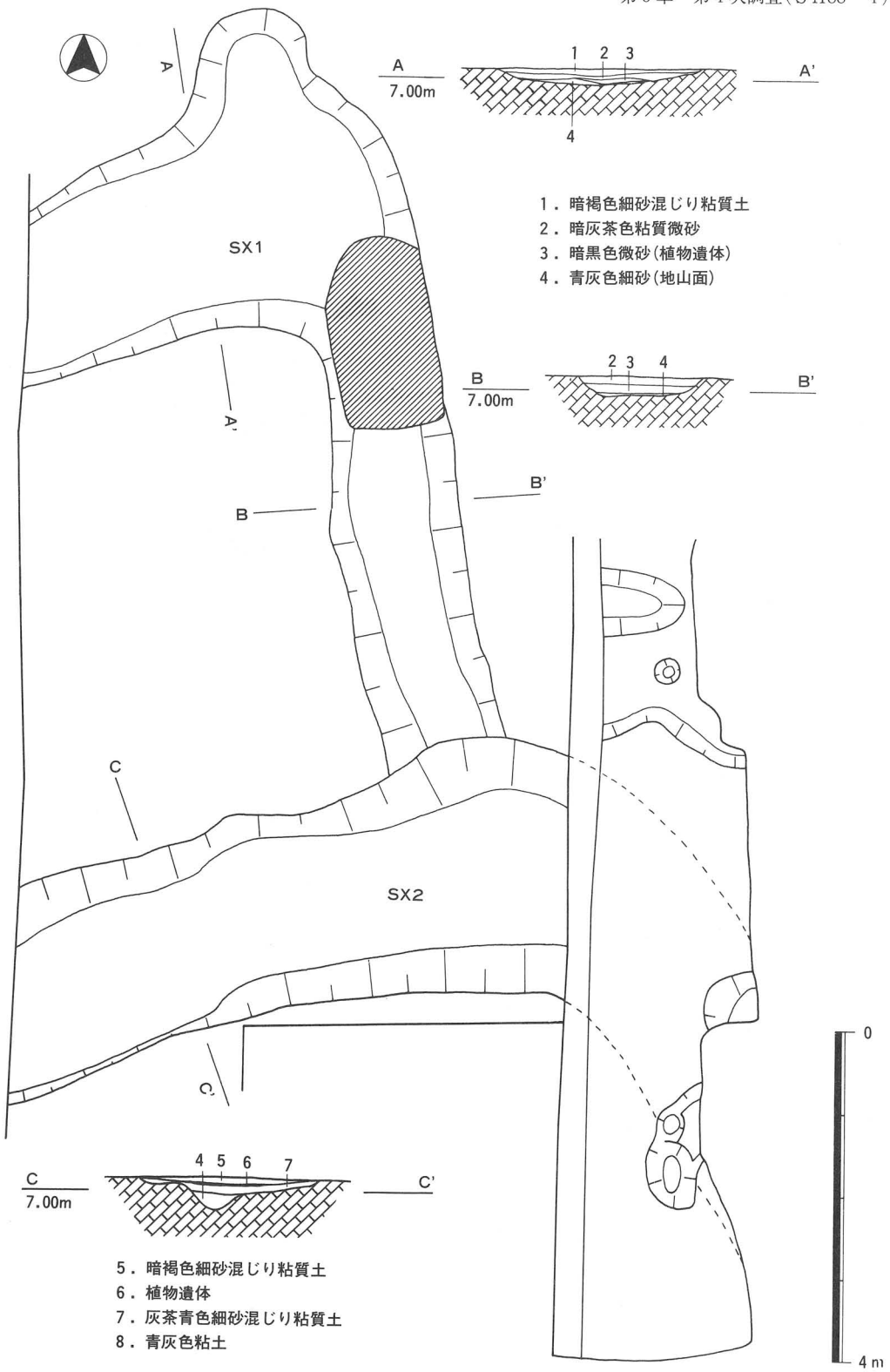
ＳＸ２の北部で検出した。検出できたのは東溝と北溝の一部でＳＸ２に切られており、西溝は調査区外に至り、不明である。規模は確認できたところで、南北辺８ｍ前後、溝幅は東溝約1.4～1.5ｍ、北溝2.1～2.4ｍを測る。溝の断面は浅い半円形を呈し、暗灰青色粘質細砂の一層が堆積している。遺物は、溝内から庄内式中相の庄内式甕（１・２）・高杯（３）がごく少量出土している（第５図）。

ＳＸ２

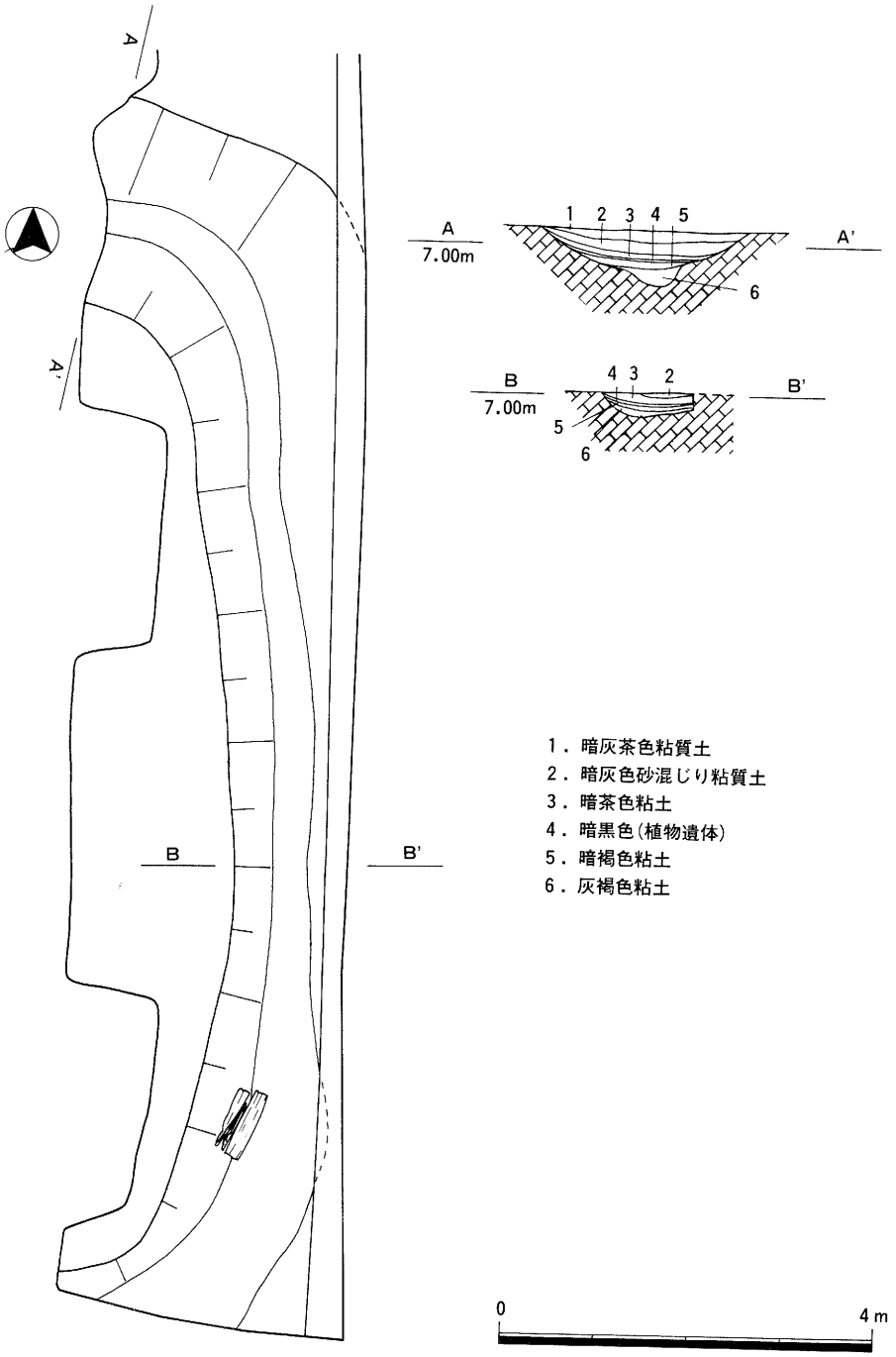
第２調査区の南部から北溝と東溝を検出した。北溝の東側ではＳＸ１の東溝を切っている。方向は東溝を軸にすると東に対し北へ約70°振っている。規模は確認できたところで、東西辺約8.0ｍ、溝は東溝が2.4ｍ、北溝が2.2～2.6ｍで、深さ15～25㎝を測る。溝の断面は浅い半円形を呈し、上方から暗褐色細砂混粘質土・黒褐色粘質土・灰茶青色細砂混粘質土の土層がレンズ状に堆積している。遺物は、溝内から庄内式甕・高杯（４）・器台（５）・鉢（６）などの小片が少量出土している。

ＳＸ３

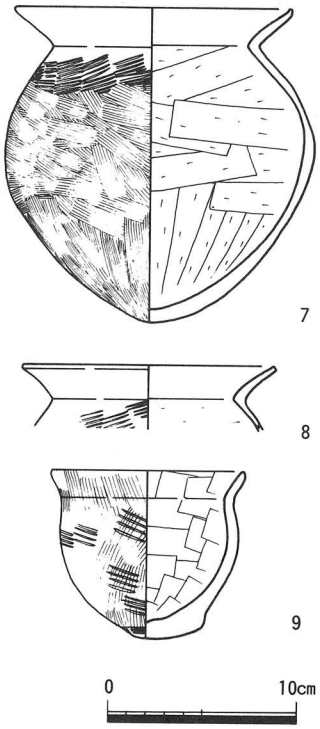
第３調査区の南部で検出した。南溝と北溝の一部と東溝が確認できた。方向は東溝を軸にするとほぼ南北方向を呈している。規模は確認できたところで、南北辺約10.5ｍ、溝幅は東溝が1.5～1.7ｍ、北溝2.3ｍで、深さ40～60㎝を測る。溝の断面は浅い半円形を呈し、上方から暗灰茶色粘質土・暗灰色細砂混粘質土・暗茶色粘土・黒褐色粘質土（植物遺体を含む）・暗褐色粘土・灰褐色粘土の土層がレンズ状に堆積している。遺物は、溝内の北東角から１個体分の庄内式甕（７）と鉢（９）、南東隅から木製品の板材１点が出土している。その他、溝内部から庄内式甕（８）のほか小片がごく少量出土している。



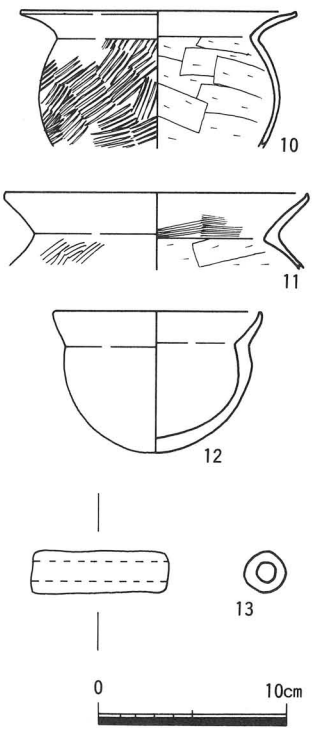
第７図　ＳＸ１・ＳＸ２平断面図


A
A'
B
B'
7.00m
1 2 3 4 5
6
4 3 2
5
6
1．暗灰茶色粘質土
2．暗灰色砂混じり粘質土
3．暗茶色粘土
4．暗黒色(植物遺体)
5．暗褐色粘土
6．灰褐色粘土
0
4 m

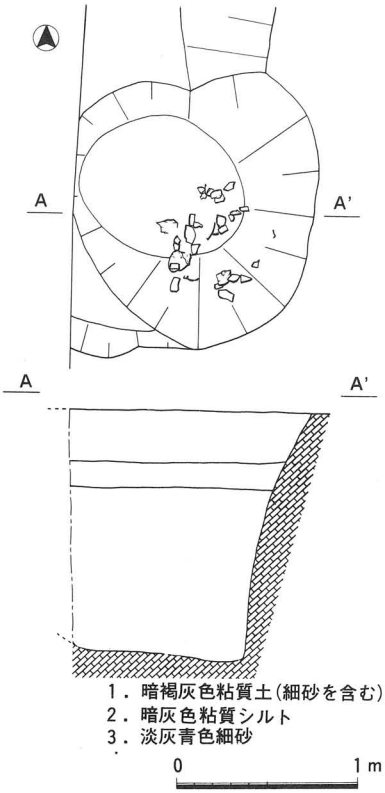
第8図　ＳＸ３平断面図



第９図　ＳＸ３出土遺物実測図



第11図　ＳＥ１出土遺物実測図



第10図　ＳＥ１平断面図

井戸（ＳＥ）

ＳＥ１

第２調査区の北部（１ｂ区）で検出した。平面の形状は円形を呈する素掘りの井戸で、ＳＫ12を切り込んでいる。規模は検出部で、径1.3～1.5ｍ、深さ1.4ｍを測る。断面は逆台形を呈し、上方から第１層暗褐灰色粘質土・第２層暗灰色粘質シルト・第３層淡灰青色細砂が堆積している（第10図）。遺物は第１層の上部で集積していた庄内式古相の甕（10・11）・鉢（12）・器台・高杯などの破片と第２層内から土錘（13）１点が少量出土している（第11図）。

土坑（ＳＫ）

ＳＫ１

第３調査区の北部（１ｃ区）で検出した。北東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西0.8ｍ、南北0.6ｍ、深さ20㎝を測る。断面は逆台形を呈し、暗茶灰色シルトが堆積している。遺物は、庄内式土器をごく少量出土している。

ＳＫ２

ＳＫ１の南部（２ｃ区）で検出した。南東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西0.6ｍ、南北0.5ｍ、深さ10㎝を測る。断面は逆台形を呈し、暗茶灰色シルトが堆積している。遺物は、庄内式土器をごく少量出土している。

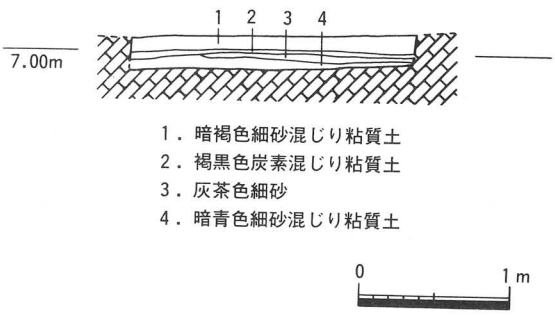
ＳＫ３

第１調査区の北部（３ｃ区）で検出した。東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西２ｍ、南北３ｍ、深さ26㎝を測る。断面は逆台形を呈し、暗茶灰色シルトが堆積している。遺物は、庄内式土器をごく少量出土している。

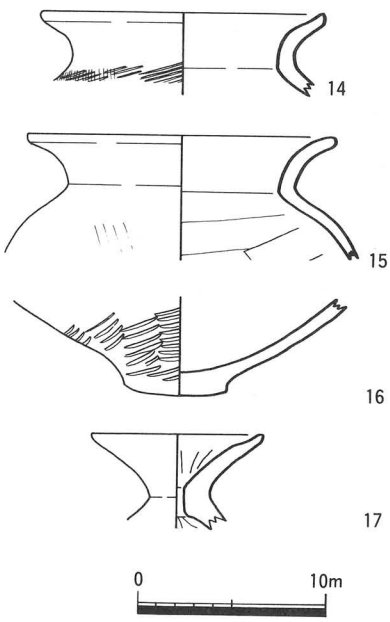
ＳＫ４

第３調査区の北部（３ｃ区）で検出した。ＳＰ７に切られ、東西は調査区外に至る。規模は検出部で、東西２ｍ、南北4.56ｍ、深さ26㎝を測る。断面は逆台形を呈し、暗褐色細砂混じり粘質土・褐黒色炭素混じり粘質土・灰茶色細砂・暗青色細砂混じり粘質土が堆積している。底面にはＳＰ８～ＳＰ10が切り込んでいる（第12図）。

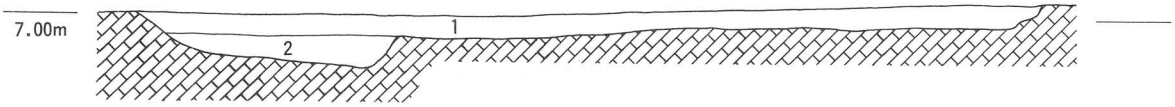
遺物は、内部から庄内式のＶ式系甕（14～16）・器台（17）をごく少量出土している（第13図）。



第12図　ＳＫ４断面図



第13図　ＳＫ４出土遺物実測図

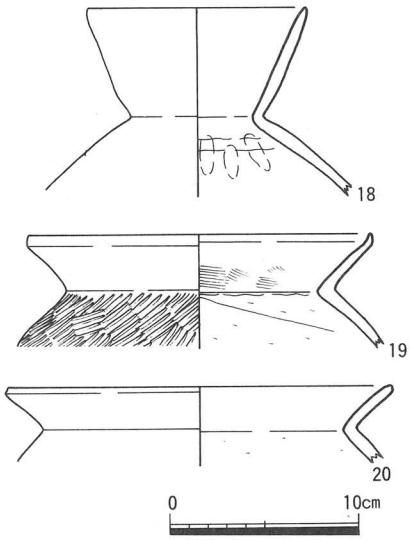


１．暗褐色細砂混じり粘質土　　２．暗青色粘土混じり細砂

第14図　ＳＫ５断面図

ＳＫ５

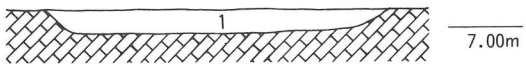
第１調査区の北部（４ｃ区）で検出した。東西は調査区外に至る。規模は検出部で、東西0.7ｍ、南北1.4ｍ、深さ15㎝を測る。断面は逆台形を呈し、暗褐色細砂混じり粘質土・暗青色粘土混じり細砂が堆積している（第14図）。底面には、ＳＰ11が切り込んでいる。遺物は、壺（18）・庄内式甕（19・20）のほか庄内式期の土器の小片がごく少量出土している（第15図）。



第15図　ＳＫ５出土遺物実測図

ＳＫ６

第３調査区の中央部（５ｃ区）で検出した。東西部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西２ｍ、南北3.2ｍ、深さ20㎝を測る。断面は逆台形を呈し、暗褐色細砂混じり粘質土が堆積している（第16図）。底面にはＳＰ12が切り込んでいる。遺物は、鉢（21）のほか庄内式期の土器の小片がごく少量出土している（第17図）。

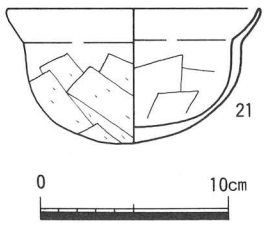


１．暗褐色細砂混じり粘質土

第16図　ＳＫ６断面図

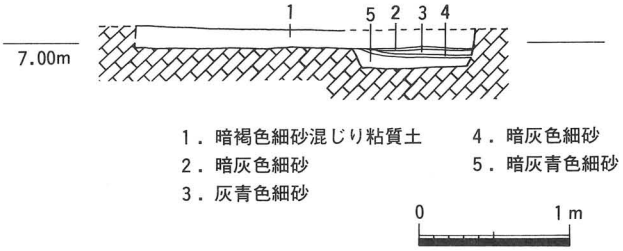
ＳＫ７

第３調査区の南部（５ｃ・６ｃ）で検出した。東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西1.8ｍ、南北４ｍ、

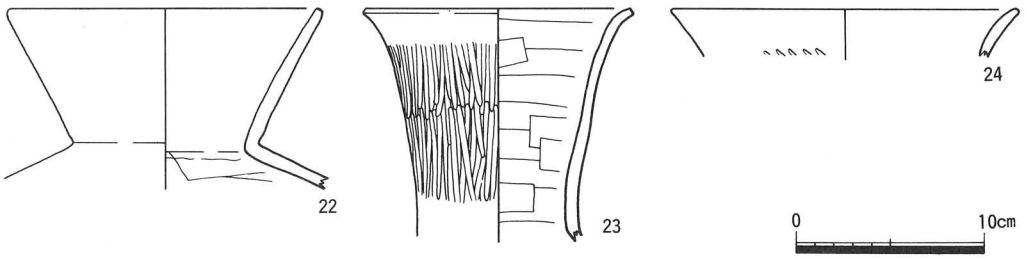


第17図　ＳＫ６出土遺物実測図

深さ50cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗褐色細砂混じり粘質土・暗灰色細砂・灰青色細砂・暗灰色細砂・暗灰青色細砂が堆積している(第18図)。遺物は、Ｖ様式の長頸壺（23）・庄内式の壺（22）・Ｖ様式甕（24）をごく少量出土している（第19図）。



第18図　ＳＫ６断面図



第19図　ＳＫ６出土遺物実測図

ＳＫ８

第１調査区の南部（５ｃ）で検出した。東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西0.8ｍ、南北1.15ｍ、深さ20cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗茶灰色シルトが堆積している。遺物は、庄内式期の土器をごく少量出土している。

ＳＫ９

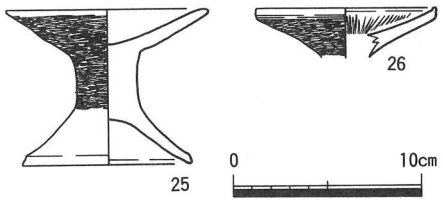
第１調査区の南部（５ｃ）で検出した。ＳＰ14に切られ、東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西1.5ｍ、南北1.6ｍ、深さ50cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗青色砂質土が堆積している。遺物は、庄内式期の土器をごく少量出土している。

ＳＫ10

第１調査区の南部（６ｃ・７ｃ）で検出した。東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西0.6ｍ、南北0.5ｍ、深さ20cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗茶灰色シルトが堆積している。遺物は、内部から庄内式期の土器をごく少量出土している。

ＳＫ11

第１調査区の南部（７ｂ・７ｃ）で検出した。平面の形状は楕円形を呈する。規模は検出部で、東西径0.5ｍ、南北0.7ｍ、深さ25cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗茶灰色シルトが堆積している。遺物は内部から庄内式期の土器をごく少量出土している。



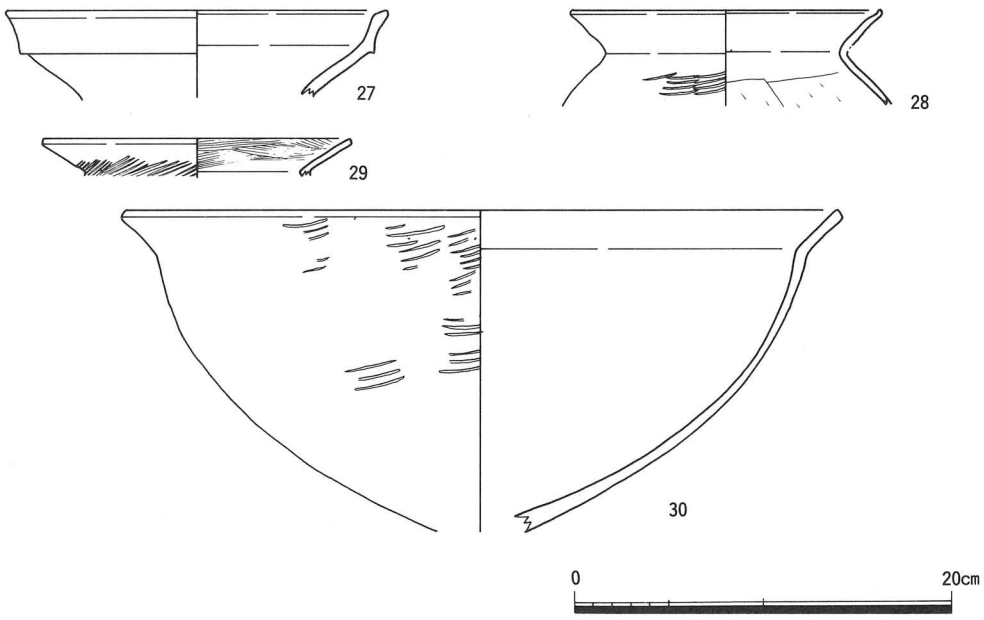
第20図　ＳＫ12出土遺物実測図

ＳＫ12

第２調査区の北部（１ｂ）で検出した。南部ではＳＥ１が切り込んでいる。西部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西1.1ｍ、南北4.45ｍ、深さ30㎝を測る。断面は逆台形を呈し、暗茶灰色シルトが堆積している。遺物は、内部から器台（25・26）の他が少量出土している（第20図）。

ＳＫ13

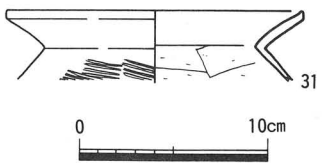
第２調査区の北部（２ｂ）で検出した。東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西１ｍ、南北２ｍ、深さ13㎝を測る。断面は逆台形を呈し、暗青色砂質土が堆積している。遺物は、壺（27）・庄内式甕（28・29）・鉢（30）のほか土器の小片がごく少量出土している（第21図）。



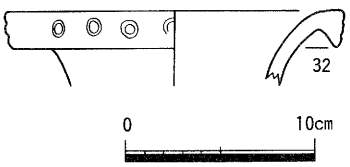
第21図　ＳＫ13出土遺物実測図

ＳＫ14

第２調査区の北部（２ｂ）で検出した。平面は楕円形を呈する。規模は検出部で、東西径1.15ｍ、南北1.36ｍ、深さ36㎝を測る。断面は逆台形を呈し、暗灰青色粘土混粗砂が堆積している。遺物は、庄内式甕（31）のほか土器の小片がごく少量出土している（第22図）。



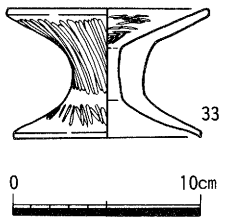
第22図　ＳＫ14出土遺物実測図



第23図　ＳＫ15出土遺物実測図

ＳＫ15

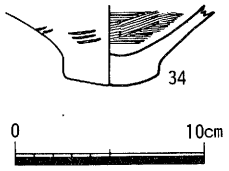
第２調査区の中央部（４ｂ）で検出した。東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西1.8ｍ、南北1.57ｍ、深さ30㎝を測る。断面は逆台形を呈し、暗灰青色粘土混粗砂が堆積している。遺物は、庄内式の壺（32）が出土している（第23図）。



第24図　ＳＫ16出土遺物実測図

ＳＫ16

第２調査区の中央部（４ｂ）で検出した。平面は楕円形を呈する。規模は検出部で、東西径0.88ｍ、南北径0.8ｍ、深さ18㎝を測る。断面は逆台形を呈し、暗灰青色粘土混粗砂が堆積している。遺物は、小型器台（33）のほか庄内式期の土器の小片がごく少量出土している（第24図）。



第25図　ＳＫ18出土遺物実測図

ＳＫ17

第２調査区の中央部（５ｂ）で検出した。東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西1.8ｍ、南北3.7ｍ、深さ15㎝を測る。断面は逆台形を呈し、暗灰褐色粘質シルトが堆積している。遺物は、内部から庄内式期の土器をごく少量出土している。

ＳＫ18

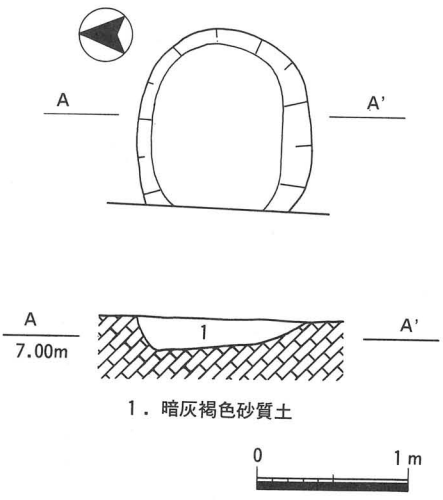
第３調査区の北部（１ａ）で検出した。北東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西１ｍ、南北0.8ｍ、深さ40㎝を測る。断面は逆台形を呈し、暗灰青色粘土混粗砂が堆積している。遺物は、Ｖ様式の底部（34）のほか庄内式期の土器の小片がごく少量出土している（第25図）。

ＳＫ19

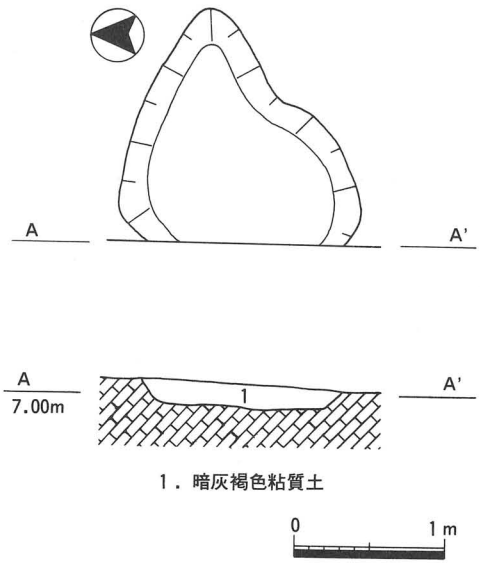
第３調査区の北部（３ａ）で検出した。東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西0.7ｍ、南北1.26ｍ、深さ10㎝を測る。断面は逆台形を呈し、暗茶灰色細砂が堆積している。遺物は、庄内式期の土器をごく少量出土している。

ＳＫ20

第３調査区の北部（３ａ）で検出した。西部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西1.2ｍ、南北1.18ｍ、深さ20㎝を測る。断面は逆台形を呈し、暗灰褐色砂質土が堆積している（第26図）。遺物は、庄内式期の土器をごく少量出土している。



第26図　SK20断面図



第27図　SK21断面図

SK21

第3調査区の中央（3a）で検出した。西部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西1.6m、南北1.6m、深さ12cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗灰褐色粘質土が堆積している（第27図）。遺物は、庄内式期の土器をごく少量出土している。

SK22

第3調査区の中央部（3a・4a）で検出した。西部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西0.6m、南北1m、深さ10cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗灰褐色粘質土が堆積している。遺物は、庄内式期の土器をごく少量出土している。

SK23

第3調査区の中央部（3a・4a）で検出した。東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西1.7m、南北3.26m、深さ15cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗灰褐色砂質土が堆積している。遺物は、庄内式期の土器をごく少量出土している。

SK24

第3調査区の中央部（4a）で検出した。東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西0.6m、南北0.6m、深さ13cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗灰褐色砂質土が堆積している。遺物は、庄内式期の土器をごく少量出土している。

小穴（ＳＰ）

ＳＰ１～ＳＰ27

調査区外から27個を検出した。平面の形状は円形のもの楕円形のもの不明のものがある。規模は径14～32㎝の小さいものと、径33～62㎝の大きいものがあり、径の小さいものが多く検出している。深さは10～20㎝を測り、断面は逆台形である。堆積土は暗灰褐色砂質土である。

第１表　小穴（ＳＰ）一覧表

遺構番号	トレンチ番号	区	平面図	断面図	径	深さ	堆積土
ＳＰ１	第１調査区	１ｂ	円　形	逆凸形	35	48	暗青色砂質土
ＳＰ２		１ｃ	楕円形	逆台形	14～18	8	暗青色砂質土
ＳＰ３		１ｃ	――	逆凸形	40～48	58	暗青色砂質土
ＳＰ４		１ｂ	楕円形	逆台形	30～44	48	暗青色砂質土
ＳＰ５		１ｃ	円　形	逆台彩	30	35	暗青色砂質土
ＳＰ６		２ｂ	楕円形	逆台形	58～73	13	暗青色砂質土
ＳＰ７		３ｂ	円　形	逆台形	50	40	暗青色砂質土
ＳＰ８		３ｃ	楕円形	逆台形	34～50	21	暗青色砂質土
ＳＰ９		３ｂ	円　形	逆台形	35	10	暗青色砂質土
ＳＰ10		３ｃ	――	逆台形	33～44	30	暗青色砂質土
ＳＰ11		４ｂ	楕円形	逆台形	38～52	12	暗青色砂質土
ＳＰ12		４ｃ	――	逆台形	22～40	10	暗青色砂質土
ＳＰ13		５ｃ	円　形	逆台形	38	38	暗青色砂質土
ＳＰ14		５ｃ	楕円形	逆台形	28～38	35	暗灰青色粘土混粗砂
ＳＰ15		６ｃ	円　形	逆台形	30	25	暗青色砂質土
ＳＰ16		７ｃ	楕円形	逆台形	29～32	25	暗青色砂質土
ＳＰ17	第２調査区	２ｂ	円　形	逆台形	40	11	暗灰褐色粘質シルト
ＳＰ18		３ｂ	円　形	逆台形	40	22	暗青色砂質土
ＳＰ19		３ｂ	――	逆台形	42	13	暗茶灰色細砂
ＳＰ20		３ｂ	円　形	逆台形	40	10	茶灰色細砂
ＳＰ21		３ｂ	円　形	逆台形	46	12	暗青色砂質土
ＳＰ22		７ｂ	円　形	逆台形	26	10	暗青色砂質土
ＳＰ23	第３調査区	７ｂ	――	逆台形	44～58	10	暗青色砂質土
ＳＰ24		２ａ	――	逆台形	20～42	13	暗青色砂質土
ＳＰ25		２ａ	――	逆台形	62	15	暗青色砂質土
ＳＰ26		３ａ	円　形	逆台形	48	15	暗青色砂質土
ＳＰ27		４ａ	楕円形	逆台形	20	15	暗青色砂質土

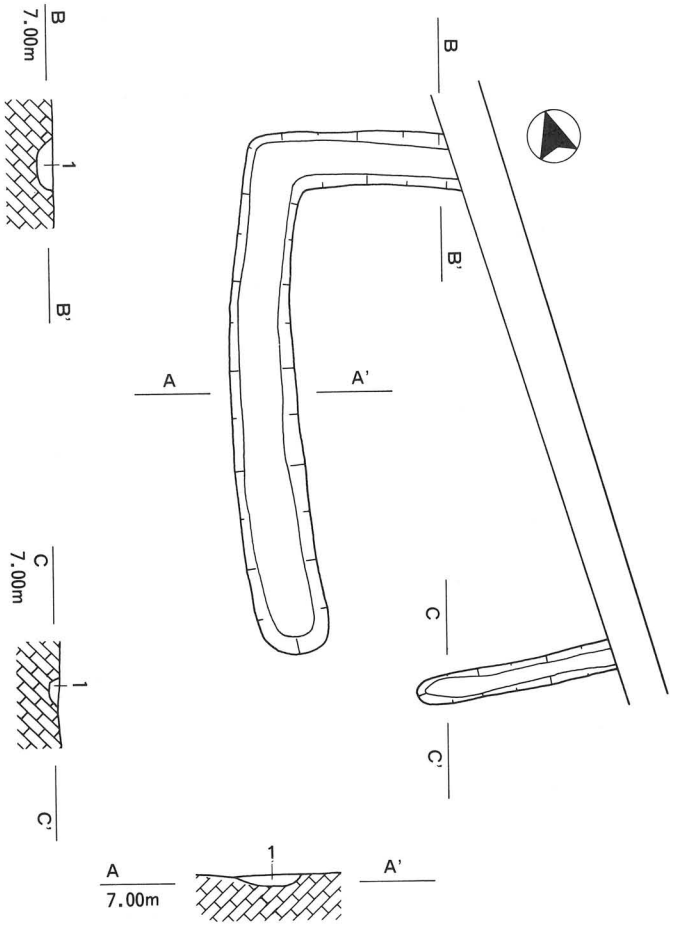
溝（ＳＤ）

ＳＤ１・ＳＤ２

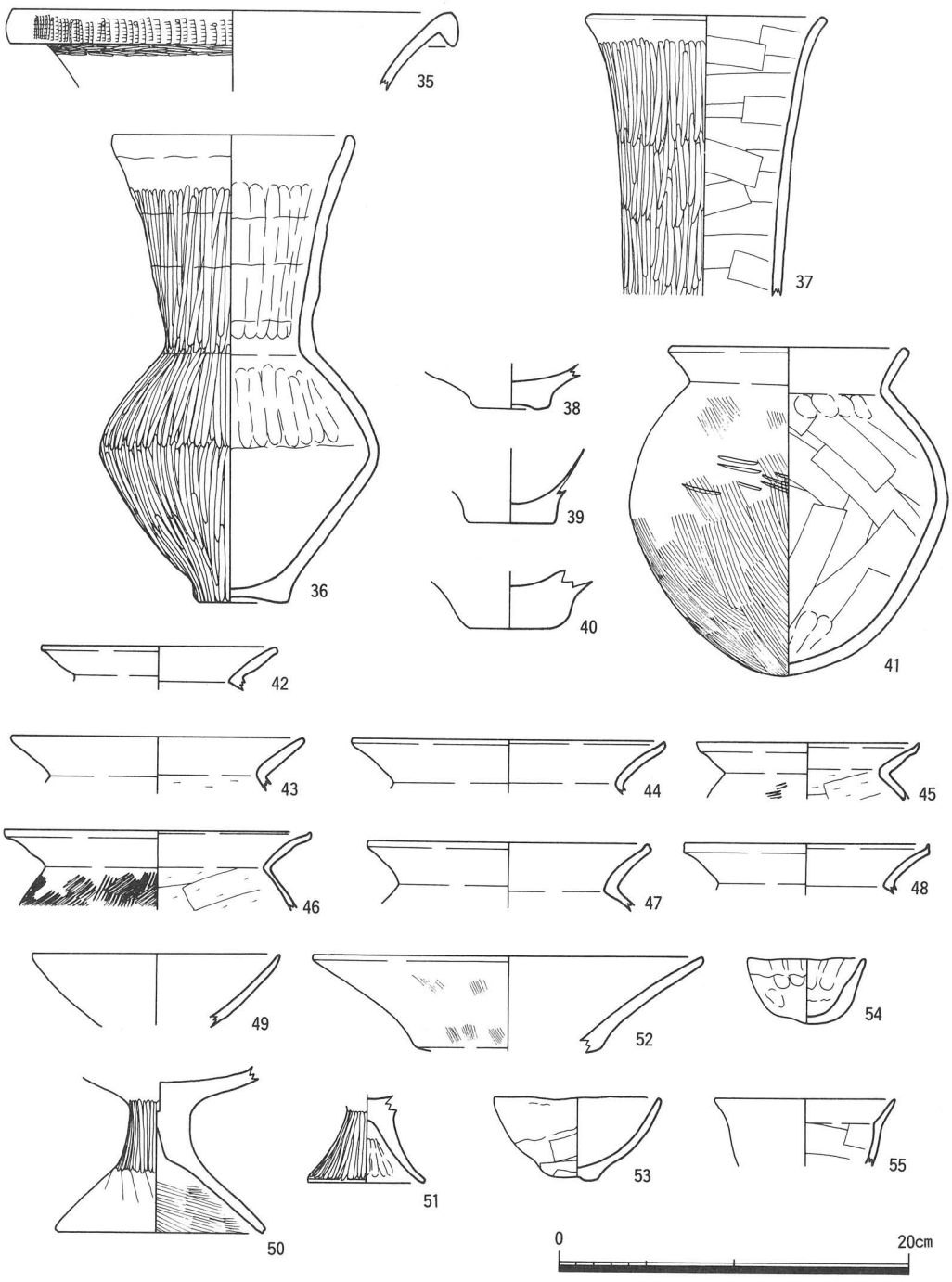
第３調査区中央で検出した。ＳＤ１の平面形状はＬ字形を呈しており、東部は調査区外に至る。規模は検出部で、検出長東西0.8ｍ、南北1.8ｍ、幅30～40ｍ、深さ５～10㎝を測る。ＳＤ２は東西方向に伸びるもので、東部は調査区外に至る。規模は検出部で、検出長0.8ｍ、幅30ｍ、深さ８㎝を測る（第28図）。

遺構に伴わない出土遺物

遺物は第４層と第５層内から出土している。出土量はコンテナ箱にして約２箱分である。時期は弥生時代中期～古墳時代前期に至る遺物である。以下、図示できたものについて記す。弥生時代中期の遺物は、第Ⅲ様式の壺（36）、弥生時代後期の遺物は、第１調査区のＳＤ１・ＳＤ２に囲まれた砂層上面で出土した第Ⅴ様式の長頸壺（37・38）・甕（39～41）がある。古墳時代前期の遺物には、庄内式甕（42～49）・高杯（50～52）・鉢（53）・小型の鉢（54）・小型壺（55）がある（第29図）。



第28図　ＳＤ１・ＳＤ２断面図



第29図　遺構に伴わない出土遺物実測図

Ⅲ　出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	甕 土師器 ＳＸ－１	口径　14.7	体部から屈曲し、外上方へ外反して伸びる口縁部、端部は上につまみ、外に凹面をもつ。 口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ（５本）後ハケナデ（６本）、内面ヘラケズリ。	淡灰褐色	2.5㎜以下の砂粒を多量に含む。（雲母・角閃石・長石）	良好	煤付着。 １／２残存
2	同上 ＳＸ－１	口径　19.8	外上方へ外反して伸びる口縁部、端部は上につまみ。 口縁部ヨコナデ	暗茶灰色	３㎜以下の砂粒を多量に含む。（雲母・角閃石・長石）	良好	１／７残存
3	高杯 土師器 ＳＸ－１	口径　10.7	外上方へ外反して伸びる口縁部、端部は丸く終わる。脚部は欠損。 内外面ヘラミガキ、内面放射状暗文。	淡茶灰色	2.5㎜以下の砂粒を多量に含む。（雲母・角閃石・長石）	良好	１／４残存
4 十二	同上 ＳＸ－２	口径　14.0 器高　11.4 脚部径　20.2	杯部は半球形で、口縁端部は丸く終わる。脚部は短い柱状部から屈曲し、大きく外下方へ開く裾部に至る。端部丸く終わる。 外面ヘラミガキ、杯部内面磨耗の為不明、脚部内面指ナデ後ハケナデ。	淡茶橙色	２㎜以下の砂粒を多量に含む。（赤褐色酸化粒・長石）	良好	完形
5	器台 土師器 ＳＸ－２	脚部径　10.2	受部は欠損。脚部は下外方へ伸び、端部は丸く終わる。四方孔有り。 内面ヘラナデ、ナデ、外面調整不明。	淡灰茶色	2.5㎜以下の砂粒を多量に含む。（雲母・角閃石・長石）	良好	１／２残存
6	鉢 土師器 ＳＸ－２	口径　12.0	体部から屈曲し、上外方へ内湾気味に伸びる口縁部、端部は丸く終わる。 口縁部内面ハケナデ、他はナデ。	淡灰茶色	１㎜以下の砂粒を多量に含む。（雲母・角閃石・長石）	良好	１／４残存
7 十二	甕 土師器 ＳＸ－３	口径　14.6 口径　16.7 最大径　16.5	楕円形の体部から屈曲し、上外方へ外反して伸びる口縁部、端部はつまみ上げる。底部はやや尖りぎみ。 口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ（８本）後ハケナデ（８本）、内面ヘラケズリ。	淡灰茶色	３㎜以下の砂粒を多量に含む。（雲母・角閃石・長石）	良好	完形
8	同上 ＳＸ－３	口径　13.5	外上方へ外反気味に伸びる口縁部、端部はつまみ上げる。 口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ（６本）、内面ヘラケズリ。	暗灰茶色	3.5㎜以下の砂粒を多量に含む。（雲母・角閃石・長石）	良好	１／６残存
9 十二	鉢 土師器 ＳＸ－３	口径　10.2 器高　8.9	半球形の体部から屈曲し、上外方へ短く伸びる口縁部、端部は丸く終わる。 外面タタキ（４本）後ハケナデ（６本）、内面ヘラナデ。	暗灰褐色	２㎜以下の砂粒を多量に含む。（雲母・角閃石・長石）	良好	完形
10 十二	甕 土師器 ＳＥ－１	口径　14.6	体部から屈曲し、外上方へ外反して伸びる口縁部、端部はつまみ上げる。 口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ（６本）内面ヘラケズリ。	乳灰褐色	３㎜以下の砂粒を多量に含む。（雲母・角閃石・長石）	良好	１／３残存
11	同上 ＳＥ－１	口径　16.0	体部から屈曲し、上外方へ外反して伸びる口縁部、端部はつまみ上げる。 口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ、体部外面タタキ、内面ヘラケズリ。	淡灰茶色	２㎜以下の砂粒を多量に含む。（雲母・角閃石・長石）	良好	１／７残存

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
12 十二	鉢 土師器 SE－1	口径 器高	11.0 7.2	半球形の杯部から屈曲し、上外方へ内湾気味に伸びる口縁部、端部は丸く終わる。 口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	内 淡灰茶色 外 暗灰茶色	2㎜以下の砂粒を少量含む（雲母・長石・石英）。	良好	完形
13	土錘 土師器 SE－1	長さ 径	7.4 2.2	管状形である。 外面ナデ。	暗灰色	1㎜以下の砂粒を多量含む（雲母・長石・角閃石）。	良好	完形
14	甕 土師器 SK－4	口径	14.8	外反して伸びる口縁部、端部はつまみ上げる。 口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ（5本）後ハケナデ（5本）、内面ナデ。	暗灰褐色	2.5㎜以下の砂粒を多量含む（雲母・長石・角閃石）。	良好	1／6残存
15 十二	同上 SK－4	口径	16.2	外反して伸びる口縁部、端部は丸く終わる。 口縁部ヨコナデ、体部外面ハケナデ、内面ヘラナデ。	淡茶灰色	3㎜以下の砂粒を多量含む（雲母・長石・角閃石・石英）。	良好	1／5残存
16	同上 SK－4	底径	5.0	体部上位以上は欠損。突出する平底。 体部外面タタキ、内面剝離で不明。	内 乳灰茶色 外 淡黒灰色	3㎜以下の砂粒を多量含む（長石・石英）。	良好	1／5残存
17 十二	器台 土師器 SK－4	口径	9.0	上外方へ伸びる受部、端部は少しつまむ。受部と脚部間は貫通している。脚部は欠損。 外面ナデ、内面ヘラナデ。	乳茶灰色	4㎜以下の砂粒を多量含む（長石・雲母）。	良好	1／2残存
18 十二	壷 土師器 SK－5	口径	11.6	体部から屈曲し上外方へ伸びる口縁部、端部は丸く終わる。体部は欠損。 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ、内面指ナデ。	淡灰茶色	3㎜以下の砂粒を少量含む（長石・角閃石・雲母）。	良好	1／4残存
19 十二	同上 SK－5	口径	18.2	体部から屈曲し外上方へ伸びる口縁部、端部はつまみ上げる。体部は欠損。 口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ後ヨコナデ、体部外面タタキ、内面ヘラケズリ。	内 淡灰茶色 外 暗茶褐色	3㎜以下の砂粒を少量含む（長石・角閃石・雲母）。	良好	1／5残存
20	同上 SK－5	口径	20.3	体部から屈曲し外上方へ伸びる口縁部、端部はつまみ上げ、外に面をもつ。体部は欠損。 口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ。	淡灰茶色	2㎜以下の砂粒を少量含む（長石・角閃石・雲母）。	良好	1／6残存
21 十三	鉢 土師器 SK－6	口径 器高	13.4 7.2	半球形の体部から屈曲し外上方へ内湾気味に伸びる口縁部、端部は丸く終わる。 口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ。	淡灰茶色	4.5㎜以下の砂粒を少量含む（長石・雲母）。	良好	完形
22	壷 土師器 SK－6	口径	16.0	体部から屈曲し、上外方へ伸びる口縁部、端部は丸く終わる。体部は欠損。 口縁部剝離のため不明、体部内面ヘラナデ、外面ナデ。	内 暗茶赤色 外 暗茶赤色～暗灰色	5㎜以下の砂粒を多量含む（長石・角閃石・雲母）。	良好	1／6残存
23 十三	長頸壷 弥生土器 SK－6	口径	14.0	上方へ外反して伸びる口縁部、端部は外に面をもつ。体部は欠損。 口縁部外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。	淡黄橙色	5㎜以下の砂粒を多量に含む（長石）。	良好	1／5残存

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
24	甕 弥生土器 SK－7	口径	18.3	口縁部は上外方へ伸びる。端部は丸く終わる。 口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ。	淡灰茶色	3.5㎜以下の砂粒を少量含む（長石・雲母）。	良好	1／8残存
25 十三	器台 土師器 SK－12	口径	10.5	受部は外上方へ伸びる。端部は丸く終わる。脚部は中実の中柱部から下外方へ開く裾部に至る。端部は下につまみ出す。 受部外面ヘラミガキ、内面磨耗のため不明脚部内面ナデ。	淡茶橙色	3㎜以下の砂粒を多量に含む（雲母・長石・石英）。	良好	完形
26	同上 SK－12	口径	9.4	受部は外上方へ伸びる。端部は上につまむ。脚部は欠損。 外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ後放射状暗文。	乳灰茶色	2㎜以下の砂粒を多量に含む（雲母・長石・角閃石）。	良好	1／3残存
27	壷 土師器 SK－13	口径	20.0	口縁部は外上方へ伸びた後屈曲し、上外方へ伸びる。端部は内側に面をもち、屈曲部外面には稜がある。	淡茶褐色	2㎜以下の砂粒を多量に含む（雲母・長石・角閃石）。	良好	1／5残存
28	甕 土師器 SK－13	口径	16.2	体部から屈曲し、外上方へ伸びる口縁部、端部は上につまみ。 口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ、内面ヘラケズリ。	内　淡茶褐色 外　乳茶褐色	4㎜以下の砂粒を多量に含む（雲母・長石・角閃石）。	良好	1／5残存
29	同上 SK－13	口径	16.2	体部から屈曲し、外上方へ伸びる口縁部、端部は上につまみ。 口縁部内面ハケナデ、外面タタキ後ヨコナデ。	褐灰色	2㎜以下の砂粒を多量に含む（雲母・長石・角閃石）。	良好	1／7残存 煤付着。
30	鉢 土師器 SK－13	口径	38.0	半球形の体部から屈曲し、外上方へ伸びる口縁部、端部は外に面をもつ。底部は欠損。 口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ後ナデ、内面ナデ。	淡茶褐色	7㎜以下の砂粒を多量に含む（雲母・長石・角閃石）。	良好	1／3残存
31	甕 土師器 SK－14	口径	15.7	体部から屈曲し、外上方へ伸びる口縁部、端部は上につまみ。 口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ、内面ヘラケズリ。	暗茶褐色	1㎜以下の砂粒を多量に含む（雲母・長石・角閃石）。	良好	1／3残存
32	壷 土師器 SK－15	口径	19.6	上外方へ外反する口縁部、端部は垂れ下がり、外に面があり、竹管圧文が巡る。 外面ナデ、内面ヨコナデ。	淡茶灰色	3㎜以下の砂粒を多量に含む（雲母・長石・角閃石）。	良好	1／6残存
33 十三	器台 土師器 SK－16	口径 口径	10.6 6.9	受部は外上方へ伸び、端部は丸く終わる。脚部は短い中柱部から外下方へ開く、端部は下につまむ。受部と脚部は貫通している。 外面ヘラナデ、受部内面ヘラミガキ、脚部内面ナデ。	淡茶灰色	4㎜以下の砂粒を多量に含む（雲母・長石・角閃石）。	良好	完形
34	甕 弥生土器 SK－18	底径	5.1	突出する平底。体部は欠損。 外面タタキ後ナデ、内面ヘラナデ。	淡茶灰色	4㎜以下の砂粒を多量に含む（雲母・長石・角閃石）。	良好	1／5残存

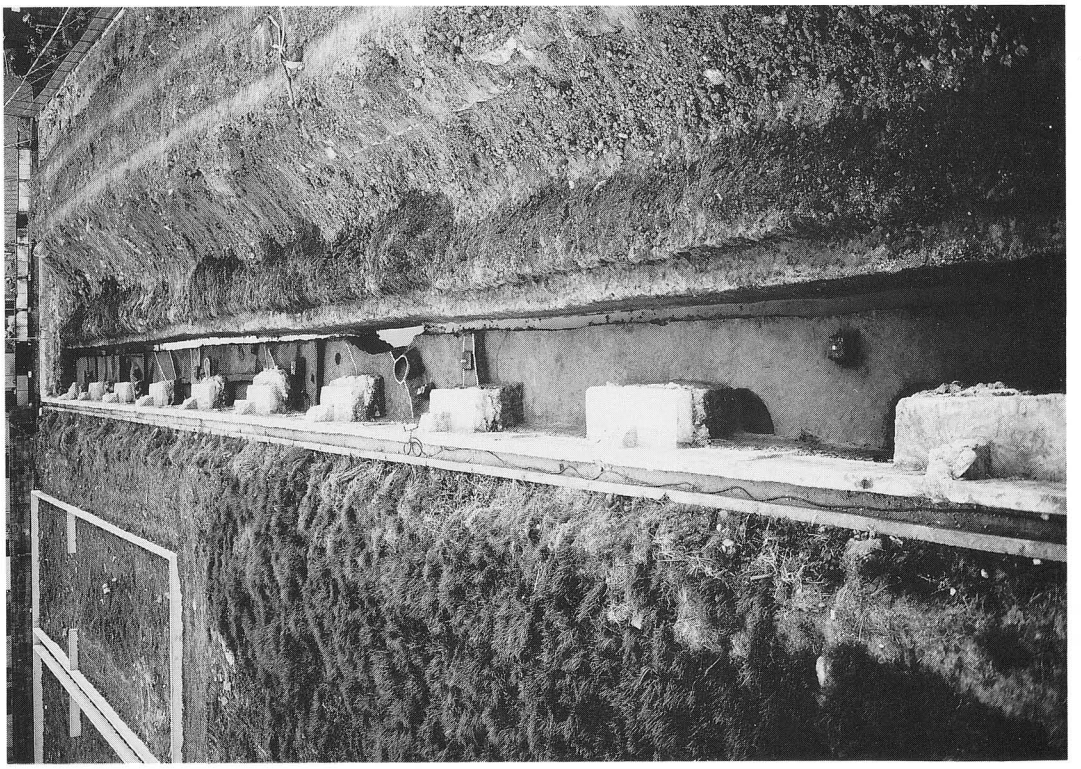
遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
35 十三	壷 弥生土器 第5層	口径 25.0	口縁部上外方へ外反気味に伸び、端部は大きく垂れ下がる。端面に刺突文。 外面簾状文・ヘラミガキ、内面ナデ。	内 淡茶灰色 外 淡灰茶色	3.5㎜以下の砂粒を多量に含む（角閃石・長石）。	良好	1／7残存
36 十三	長頸壷 弥生土器 第4層	口径 13.6 器高 16.0 底径 5.1	中位に最大径をもつ体部から上方へ外反して伸びる長い口縁部で、端部は丸く終わる。底部は突出するやや上げ底。 口縁部上位ヨコナデ、口縁部下位・体部外面ヘラミガキ、内面ナデ・指ナデ、内外面に7条の接合痕がみられる。	淡茶灰色～暗茶橙色	4㎜以下の砂粒を多量に含む（雲母・角閃石・長石）。	良好	完形
37 十三	同上 第4層	口径 13.2	口縁部は上方へ外反気味に長く伸びた後口縁端部付近で外反する。端部は外に面をもつ。大部は欠損。 口縁端部付近ヨコナデ、外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。	淡灰黄色	1.5㎜以下の砂粒を多量に含む（雲母・角閃石・長石）。	良好	1／4残存
38	壷 弥生土器 第4層	底径 4.2	突出するやや上げ底。体部上位は欠損。 外面ナデ、内面ヘラナデ。	暗黒灰色	2㎜以下の砂粒を多量に含む（雲母・角閃石・長石）。	良好	底部のみ残存
39	同上 第4層	底径 4.8	突出する平底。体部上位は欠損。 内外面ナデ。	内 暗黒灰色 外 乳灰色	4㎜以下の砂粒を多量に含む（雲母・角閃石・長石）。	良好	底部のみ残存
40	同上 第4層	底径 4.0	突出する平底。体部上位は欠損。 内外面ナデ。	内 暗灰褐色 外 淡茶灰色	4㎜以下の砂粒を多量に含む（雲母・角閃石・長石）。	良好	底部のみ残存
41	甕 土師器 第4層	口径 13.2 器高 18.9 最大径 18.2	やや上位に最大径をもつ楕円形の体部から屈曲し、上外方へ伸びる口縁部に至る。端部は外に面をもつ。底部は丸底。 口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ後ハケナデ、内面ヘラナデ・指ナデ。	暗茶褐色	6㎜以下の砂粒を多量に含む（雲母・角閃石・長石）。	良好	完形
42	同上 第4層	口径 13.4	口縁部は外上方へ伸びる。端部は外に面をもつ。体部以下は欠損。 口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ。	淡茶灰色	5㎜以下の砂粒を多量に含む（雲母・角閃石・長石）。	良好	1／4残存
43	同上 第4層	口径 16.6	口縁部は外上方へ伸びる。端部は丸く終わる。体部以下は欠損。 口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ。	淡灰茶色	3㎜以下の砂粒を多量に含む（雲母・角閃石・長石）。	良好	1／4残存
44	同上 第4層	口径 18.0	口縁部は外上方へ伸びる。端部はつまみ上げる。体部以下は欠損。 口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ。	暗茶灰色	3㎜以下の砂粒を多量に含む（雲母・角閃石・長石）。	良好	1／4残存
45	同上 第4層	口径 12.8	口縁部は外上方へ伸びる。端部はつまみ出す。体部以下は欠損。 口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ後ヨコナデ、体部外面タタキ、内面ヘラケズリ。	乳灰茶色	3㎜以下の砂粒を多量に含む（雲母・角閃石・長石）。	良好	1／4残存

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
46	甕 土師器 第4層	口径	17.4	体部から屈曲し、外上方へ伸びる口縁部、端部はつまみ上げる。体部は欠損。 口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ、内面ヘラケズリ。	淡灰茶色	4㎜以下の砂粒を少量含む（角閃石・雲母・長石）。	良好	1／4残存
47	同上 第4層	口径	15.6	体部から屈曲し、外上方へ伸びる口縁部、端部はつまみ上げる。体部は欠損。 口縁部ヨコナデ。	淡灰茶色	4㎜以下の砂粒を少量含む（角閃石・雲母・長石）。	良好	1／4残存
48	同上 第4層	口径	13.6	体部から屈曲し、外上方へ伸びる口縁部、端部はつまみ上げる。体部は欠損。 口縁部ヨコナデ。	淡灰茶色	4㎜以下の砂粒を少量含む（角閃石・雲母・長石）。	良好	1／4残存
49	高杯 土師器 第4層	口径	14.0	上外方へ伸びる杯体部から口縁部、端部は丸く終わる。脚部は欠損。 杯部内外面ナデ。	淡灰茶色	4㎜以下の砂粒を少量含む（角閃石・雲母・長石）。	良好	1／4残存
50	同上 第4層	底径	11.6	脚部は下外方へ伸びる柱状部から、斜下方へ伸びる裾部に至る。端部は丸く終わる。杯部は欠損。 柱状部外面ヘラミガキ、裾部外面ヘラナデ、内面ハケナデ。	淡灰茶色	4㎜以下の砂粒を少量含む（角閃石・雲母・長石）。	良好	1／4残存
51	同上 第4層	底径	6.4	脚部は下外方へ外反して伸びる柱状部から裾部に至る。端部は丸く終わる。杯部は欠損。 脚部外面ヘラミガキ、内面指ナデ。	淡灰茶色	4㎜以下の砂粒を少量含む（角閃石・雲母・長石）。	良好	1／4残存
52	同上 第4層	口径	22.0	上外方へ伸びる杯体部から口縁部、端部は丸く終わる。脚部は欠損。 杯部外面ハケナデ、内面ナデ。	淡灰茶色	4㎜以下の砂粒を少量含む（角閃石・雲母・長石）。	良好	1／4残存
53 十三	鉢 土師器 第4層	口径 口径	9.4 4.5	半球形の体部で、口縁端部は丸く終わる。底部は突出する平底。 外面ヘラナデ、内面ナデ。	内　淡灰茶色 外　淡灰茶色	4㎜以下の砂粒を少量含む（角閃石・雲母・長石）。	良好	1／2残存
54	同上 第4層	口径 口径	6.6 3.8	やや変形した半球形で、端部は丸く終わる。 内外面指ナデで、接合痕が残る。	乳灰茶色	4㎜以下の砂粒を少量含む（角閃石・雲母・長石）。	良好	完形
55	同上 第4層	口径	10.2	体部から屈曲し上外方へ伸びる口縁部、端部は丸く終わる。 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ、内面ヘラケズリ。	淡茶灰色	4㎜以下の砂粒を少量含む（角閃石・雲母・長石）。	良好	1／5残存

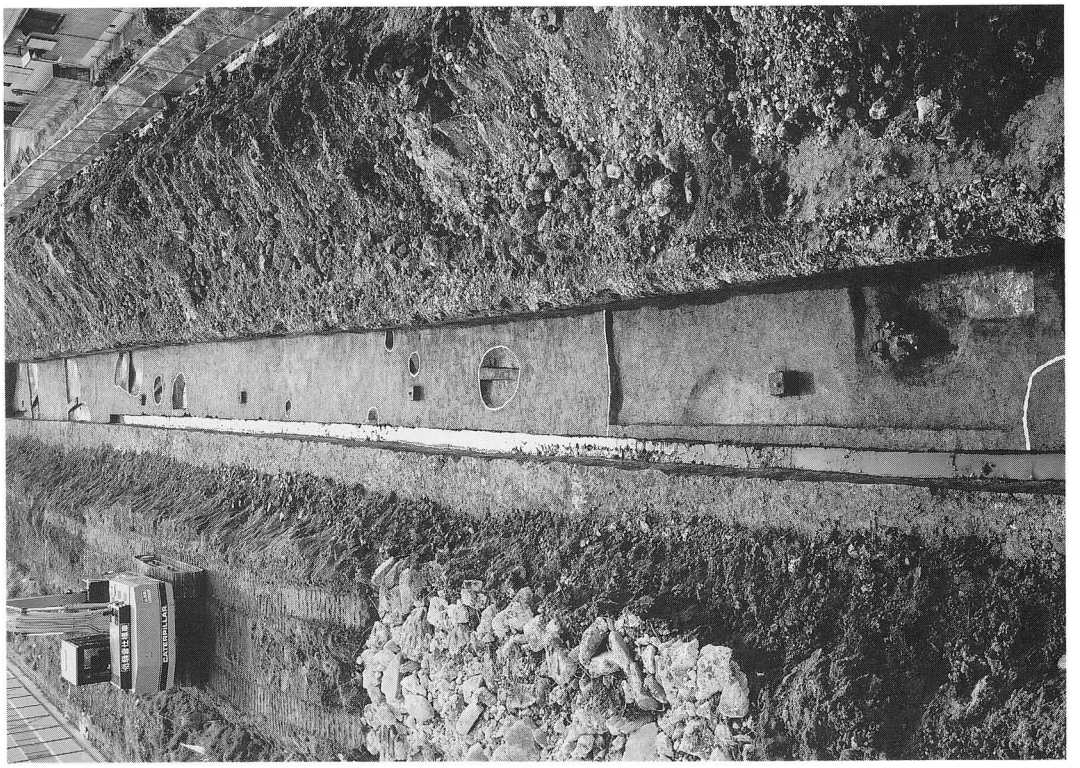
Ⅳ　まとめ

今回の調査では、古墳時代前期の庄内式古相と新相の遺構・遺物を検出した。遺構は調査区南部で方形周溝墓、調査区北部で井戸・小穴などが検出されており、隣接した既往調査の結果と総合すると、庄内式古相の時期では調査区の南部が墓域で、北部が居住域であったが、庄内式新相～布留式古相の時期になると墓域が北部にまで及ぶようになり、居住域が東部に移動していることが窺える。また、同一遺構面上で弥生時代後期に比定される長頸壺が出土しており、この時期の遺構が付近に存在していた可能性が高い。

図　　版

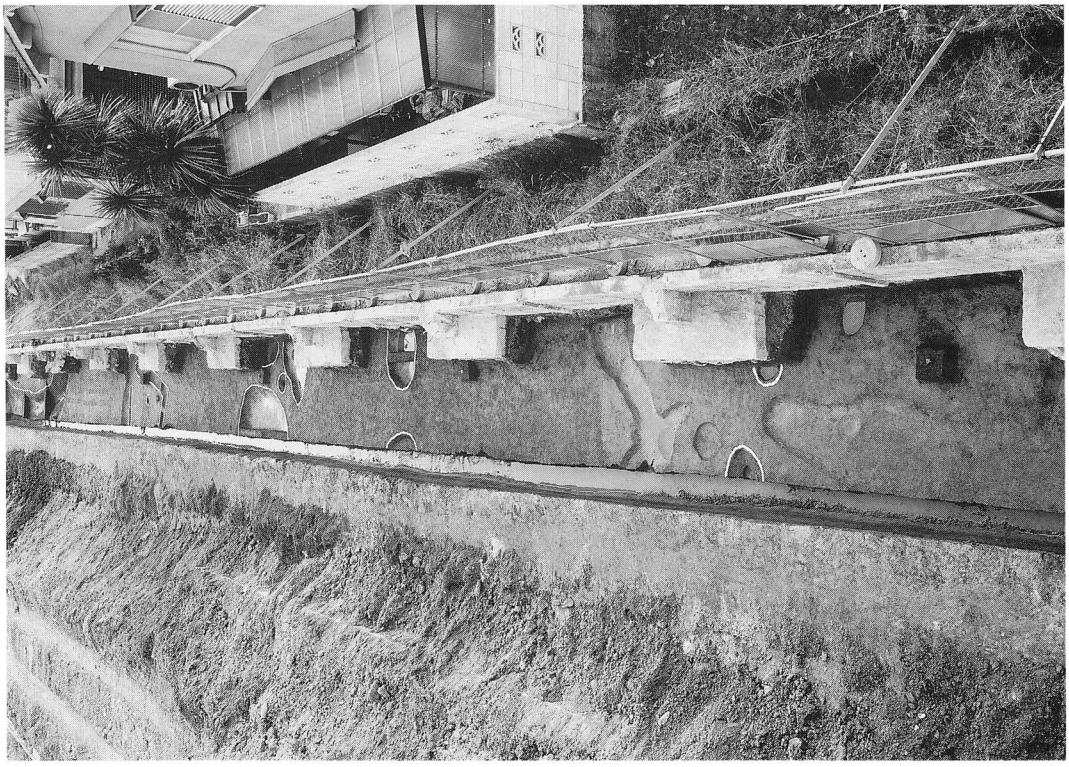


第 1 調査区全景（北から）



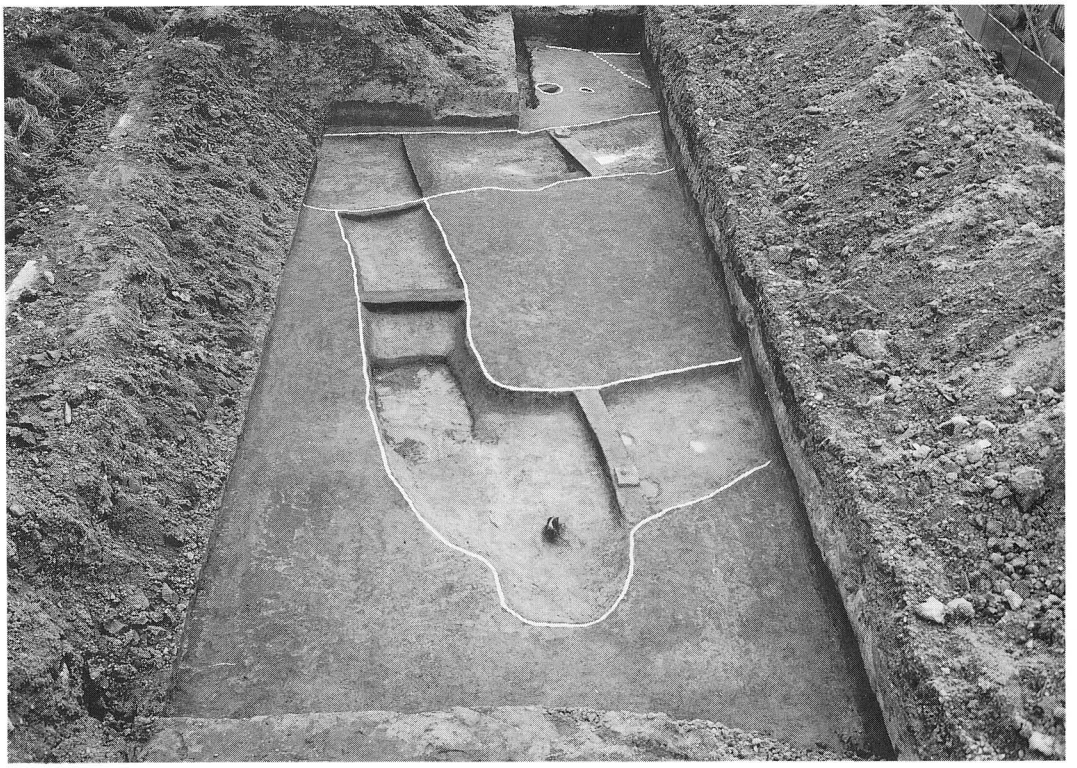
第 2 調査区全景（北から）

図版二

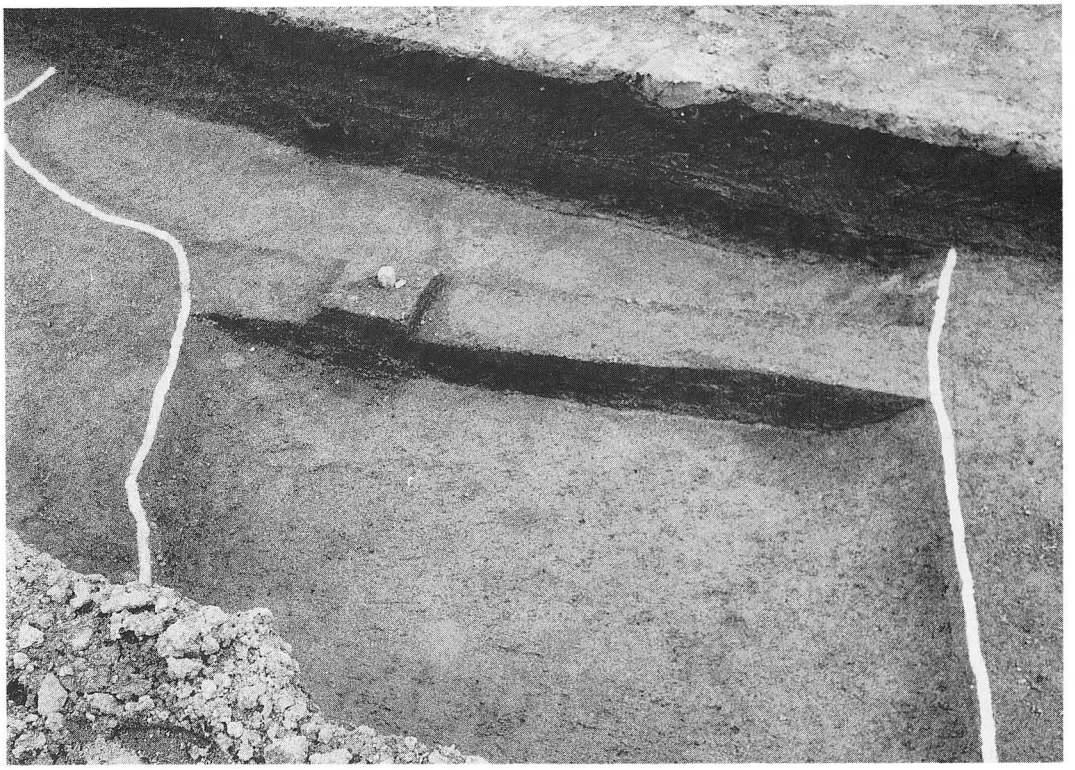


第３調査区全景（北から）

第２調査区　５ｂ～７ｂ区（南から）

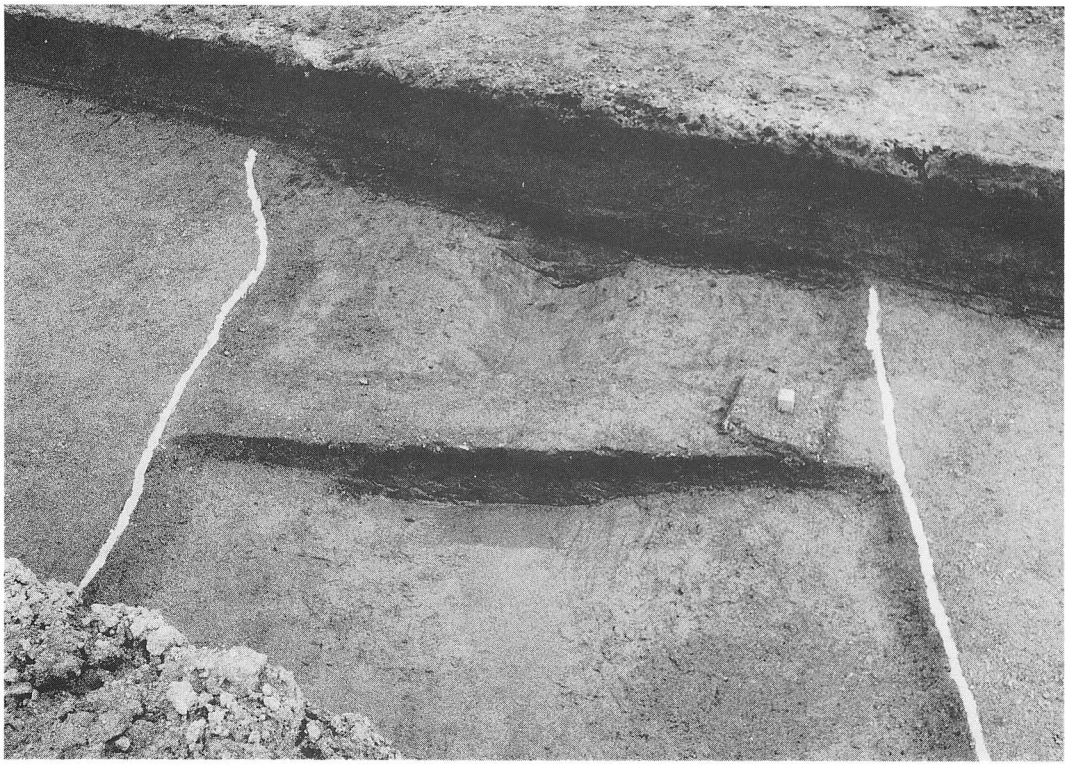


第２調査区５ｂ～７ｂ区（北から）

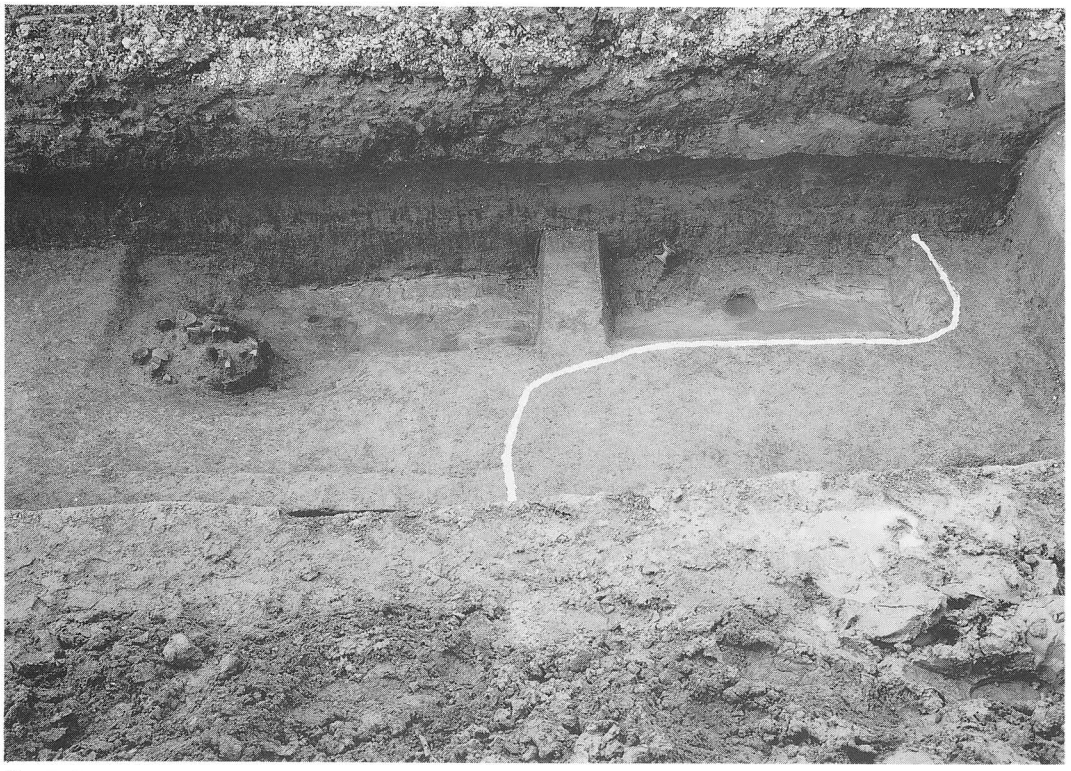


第２調査区　ＳＸ１（西から）

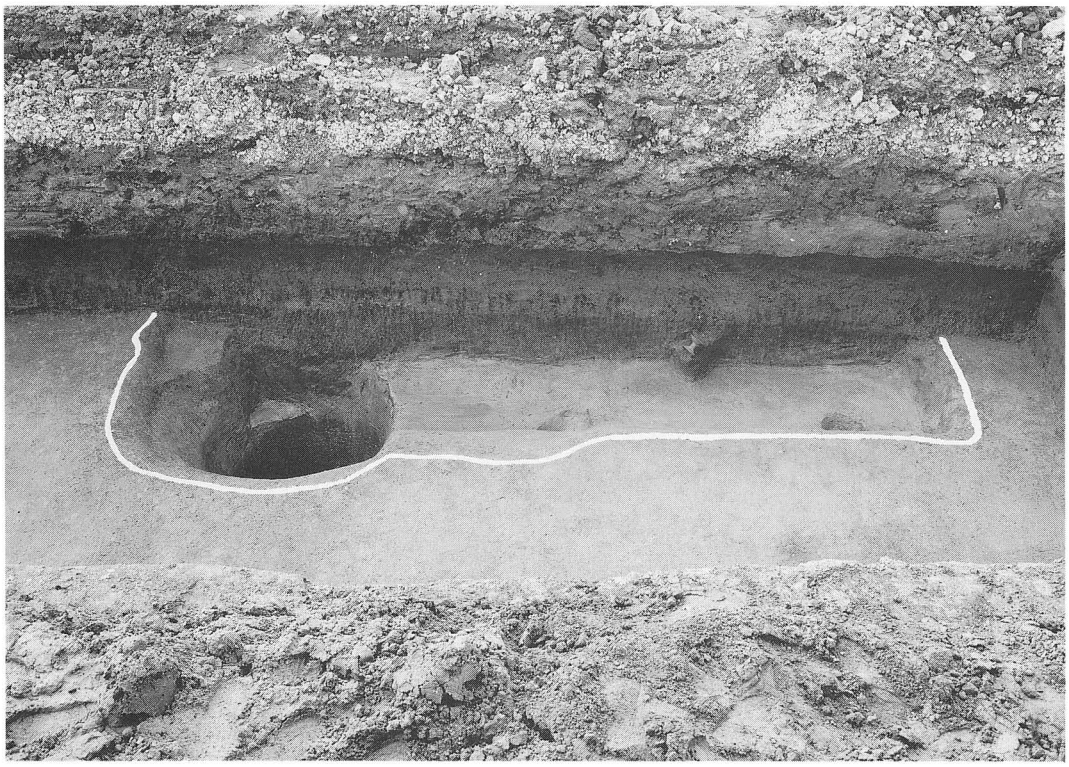
図版四



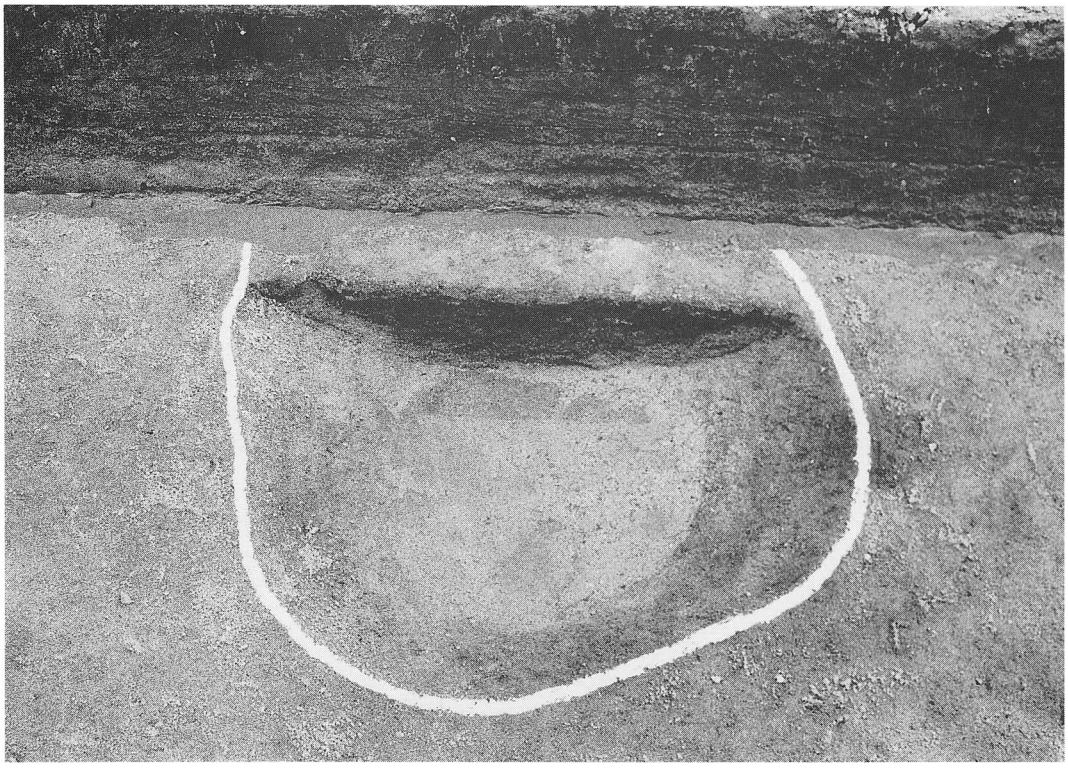
第２調査区　ＳＸ２（西から）



第２調査区　ＳＥ１・ＳＫ13（東から）



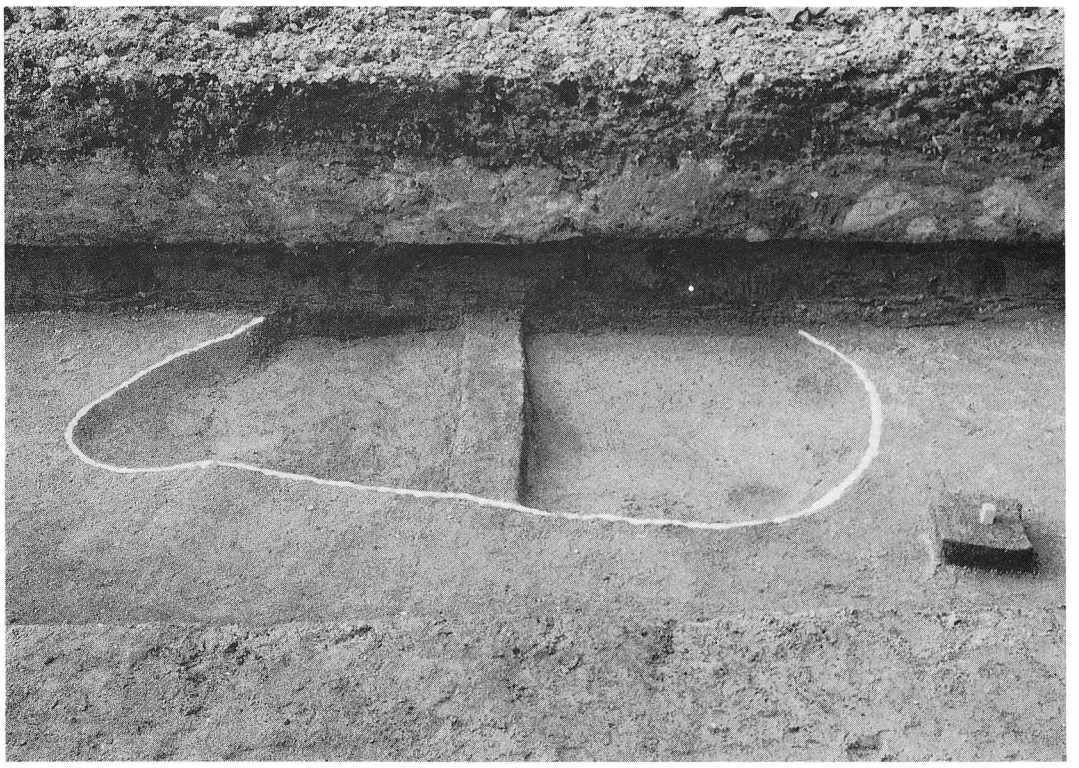
第２調査区　ＳＥ１・ＳＫ13(東から)



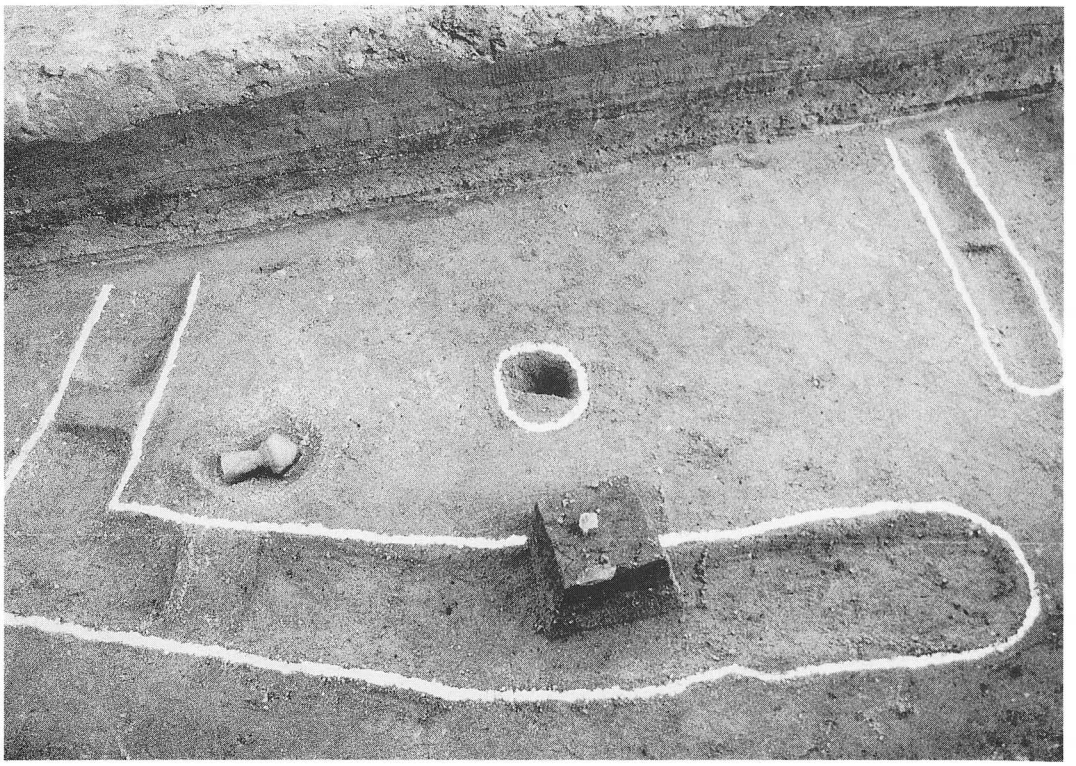
第２調査区　ＳＫ15(西から)

図版六

第２調査区　ＳＫ17（東から）



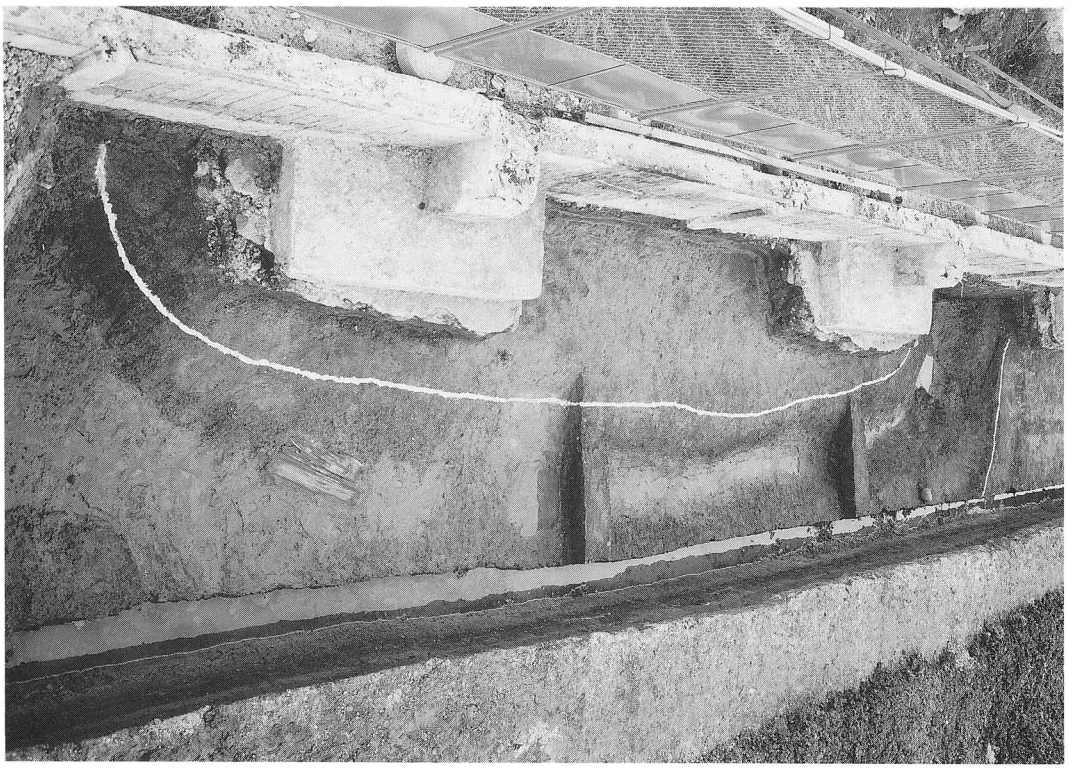
第２調査区　ＳＫ18（東から）



第３調査区　ＳＤ１・ＳＰ27(西から)

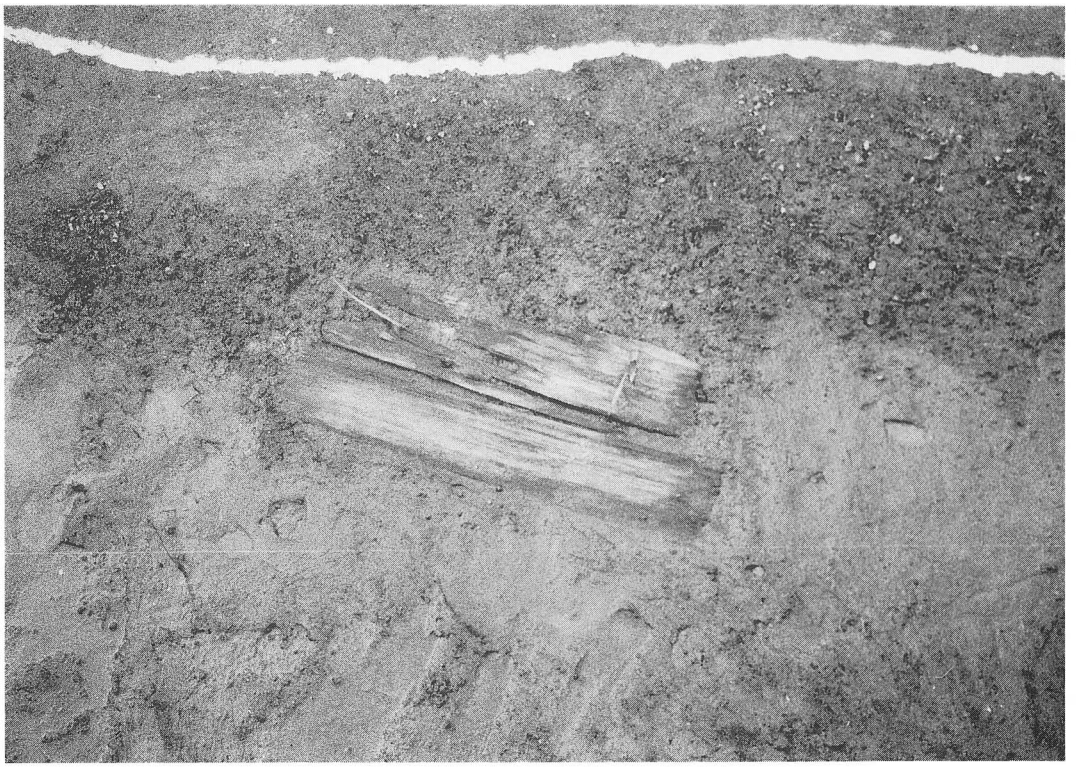
第３調査区　５ａ区(北西から)

図版八



第３調査区　ＳＸ３（南西から）

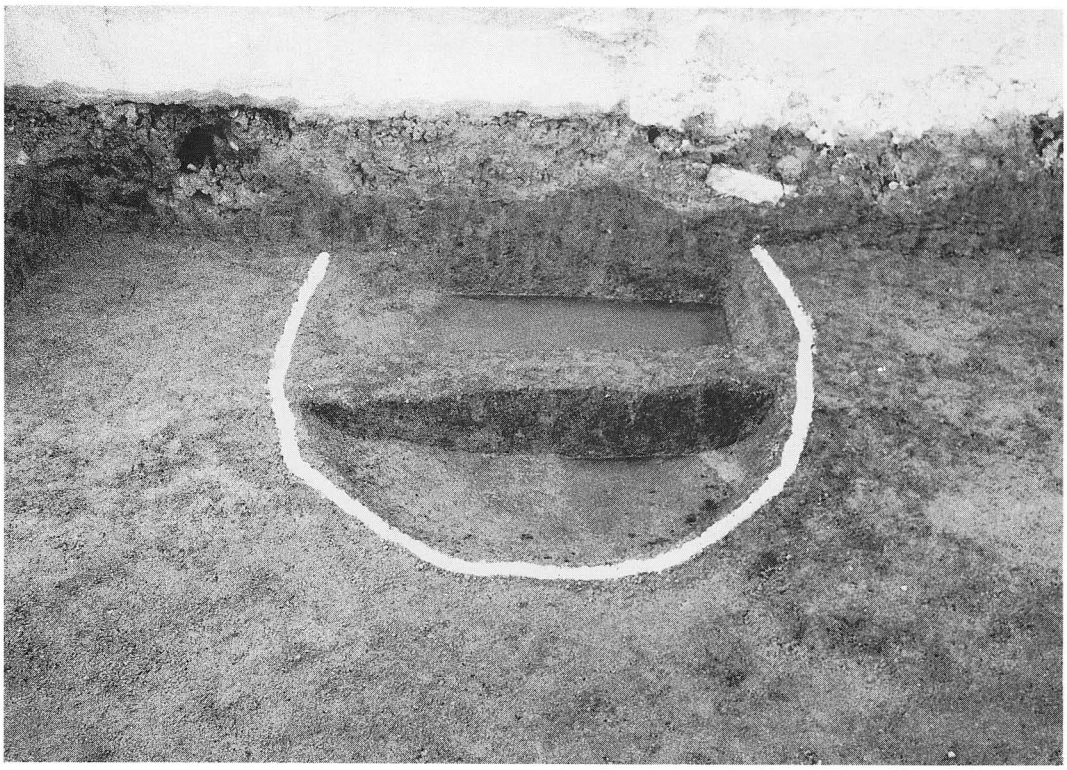
第３調査区　ＳＸ３（東から）



第３調査区　ＳＸ３（東から）

第３調査区　ＳＸ３（北から）

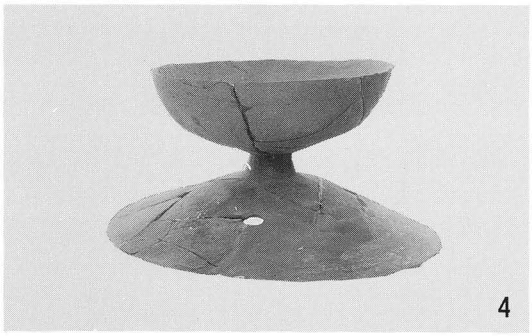
第３調査区　ＳＸ３（北から）

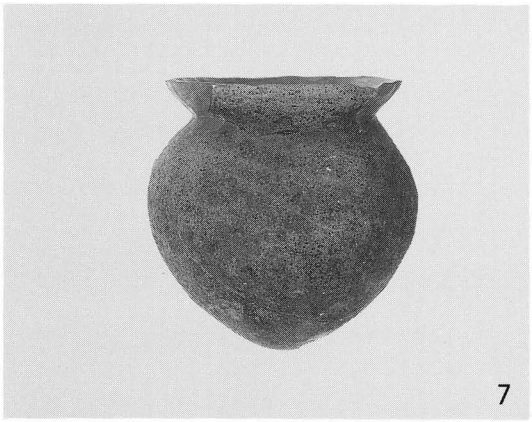


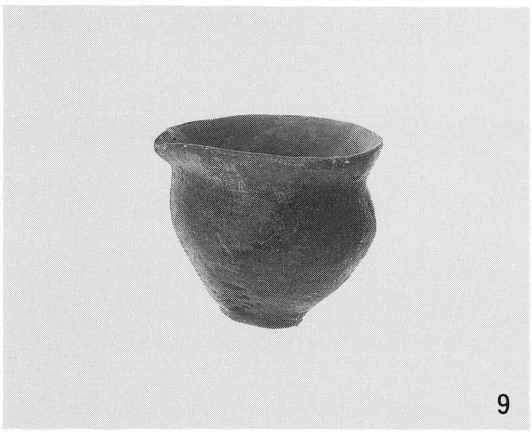
第３調査区　ＳＫ22（東から）

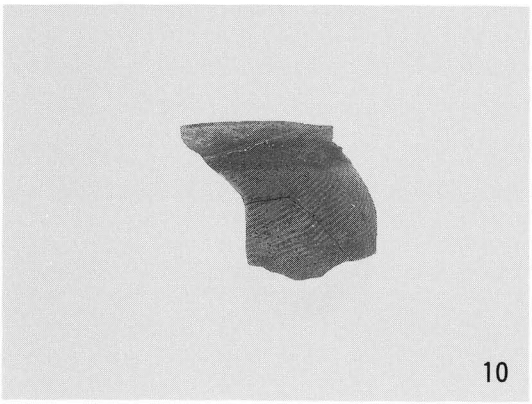
第３調査区　ＳＫ23(西から)

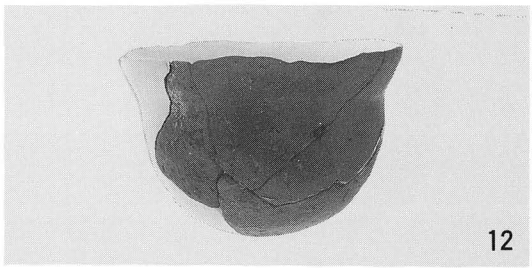
図版一二

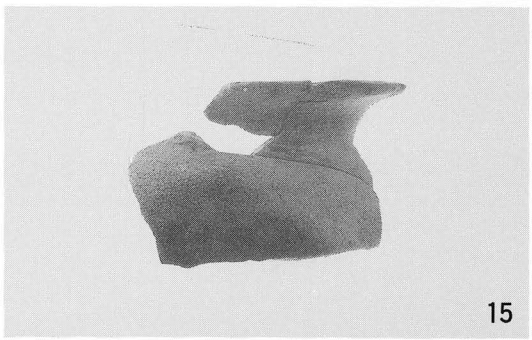

4

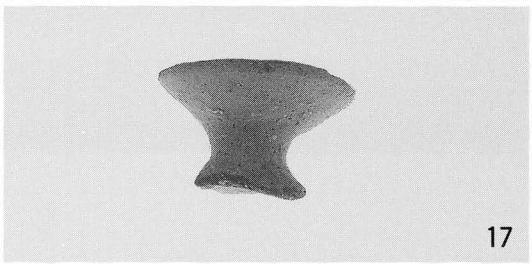

7

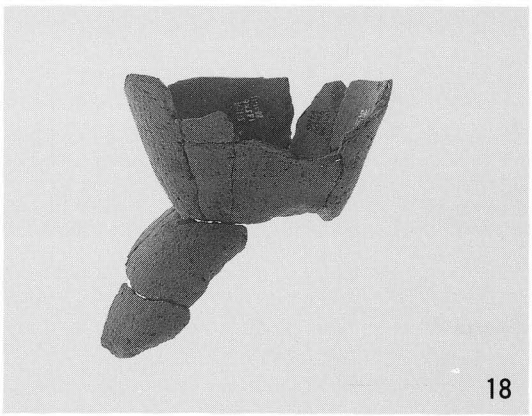

9

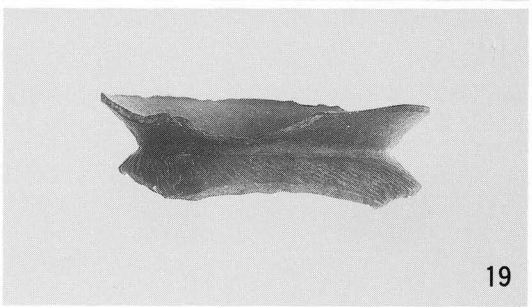

10


12

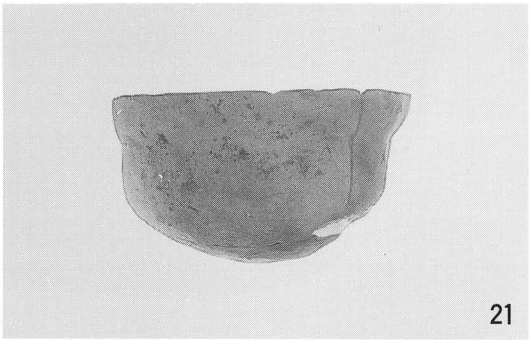

15


17


18


19

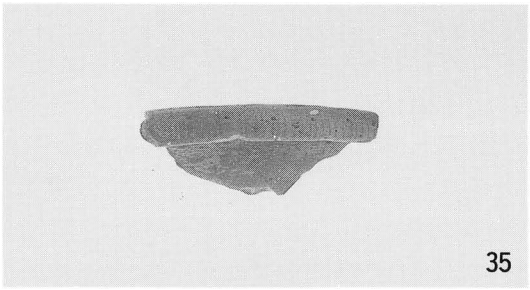
SX2　4　SX3　7・9　SE　10・12
SK4　15　17、SK5　18・19


21

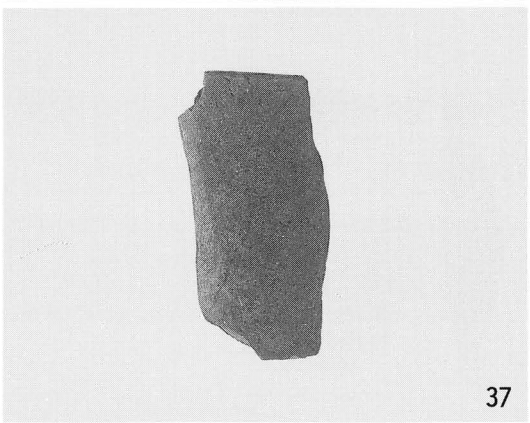
23

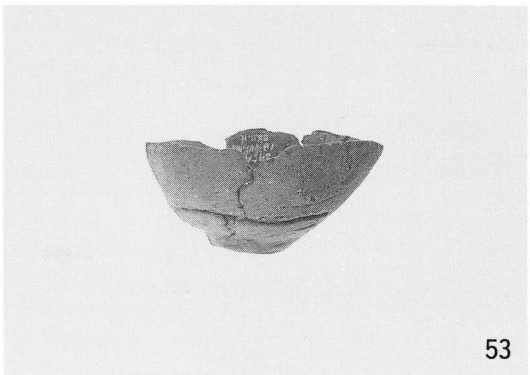
25

33


35

36


37


53

SＫ６　21　SＫ７　23　SＫ12　25
SＫ16　33、遺構に伴わない遺物　36～38・53

第6章　第6次調査報告(ＳＨ90－６)発掘調査報告

例　　言

1．本書は、八尾市南本町４丁目24で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査の報告である。

1．本書で報告する成法寺遺跡第６次調査（ＳＨ90－６）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が大石友三郎氏委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成２年２月20日から３月３日にかけて、原田昌則を担当者として実施した。調査面積は168㎡である。なお、調査においては岡田聖一・北尾光男・正木洋二・八元聡志が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後実施し、平成３年３月31日に完了した。

1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－別所秀高・真柄竜、図面レイアウト－原田、図面トレース－中西隆子、遺物撮影－原田が行った。

1．本書の執筆および編集は原田が行った。

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに …… 85

Ⅱ　調査概要 …… 86

　１．調査方法と経過 …… 86

　２．基本層序 …… 86

　３．検出遺構・出土遺物 …… 86

Ⅲ　出土遺物観察表 …… 95

Ⅳ　まとめ …… 99

挿　図　目　次

第１図　調査区設定図および地区割図 …… 85
第２図　検出遺構平断面図 …… 87
第３図　ＳＫ－１出土遺物実測図 …… 88
第４図　ＳＫ－１平断面図 …… 89
第５図　ＳＫ－２平断面図 …… 90
第６図　ＳＫ－２・ＳＫ－３出土遺物実測図 …… 91
第７図　ＳＤ－１・ＳＤ－２断面図 …… 92
第８図　ＳＤ－２・ＳＤ－３・ＳＰ－13・ＳＰ－15出土遺物実測図 …… 94

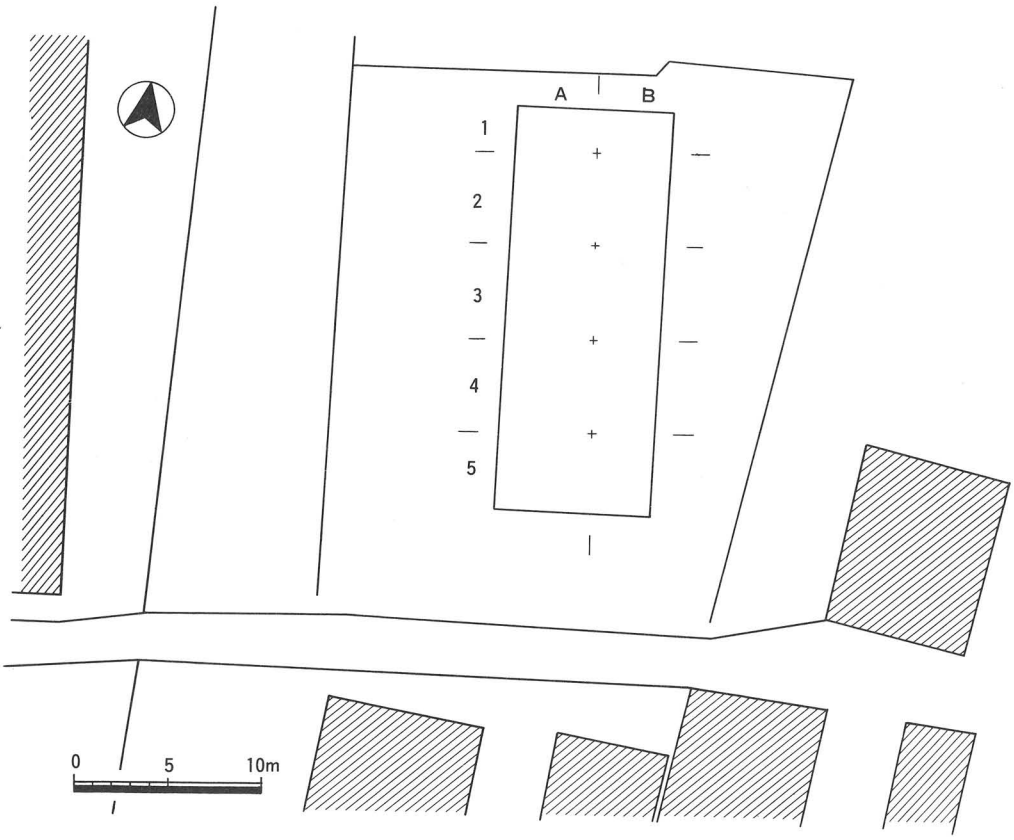
図　版　目　次

図版一　調査区全景
図版二　ＳＫ－１北部
　　ＳＫ－１南部
図版三　ＳＫ－２
　　ＳＫ－３
図版四　ＳＤ－２断面
図版五　ＳＫ－１・ＳＫ－２出土遺物
図版六　ＳＫ－２・ＳＫ－３・ＳＤ－２・ＳＰ－15出土遺物
図版七　ＳＤ－２・ＳＤ－３・ＳＰ－13・ＳＰ－15出土遺物

Ⅰ　はじめに

平成元年11月25日、大石友三郎氏から八尾市南本町4丁目24で共同住宅を建設する旨の届出書が八尾市教育委員会文化財室に提出された。八尾市教育委員会文化財室では、当該地が成法寺遺跡範囲の東部に当ることから、遺構および遺物包含層の有無を確認するため、平成元年12月8日に試掘調査を実施した。その結果、地表下0.5mまでに弥生時代・古墳時代・中世の土器を含む遺物包含層の存在を確認した。この試掘結果から、八尾市教育委員会文化財室では文化財保護法に基づき発掘調査が必要であると判断し、事業者へその旨を通知した。

発掘調査にあたっては、事業者・八尾市教育委員会・（財）八尾市文化財調査研究会の三者間で協議を行い、当調査研究会が事業者から委託を受けて実施することが決定された。現地での発掘調査は、平成2年2月20日から3月3日までの11日間にわたって実施した。調査面積は168㎡である。内業整理および本書作成業務は、調査終了後平成3年8月31日まで随時実施した。



第1図　調査区設定図および地区割図

Ⅱ 調 査 概 要

1．調査方法と経過

共同住宅の建築予定地に東西８ｍ、南北21ｍの調査区を設定した。掘削に際しては、八尾市教育委員会文化財室の試掘結果に基づいて、現地表下0.4ｍまでの土層は重機により排除し、以下0.2ｍ前後については人力掘削を実施して、試掘調査で確認された弥生時代～中世の遺物包含層と遺構の関係を追求した。その結果、現地表0.5ｍ前後（標高8.9ｍ）に存在する第４層および第５層上面で室町時代中期に比定される土坑３基（ＳＫ－１～ＳＫ－３）、溝３条（ＳＤ－１～ＳＤ－３）、小穴15個（ＳＰ－１～ＳＰ－15）を検出した。

調査区の地区割については、調査区の中央部を通る南北ラインを任意に設定した。東西ラインは南北ラインに直交させ、調査区を東西にほぼ二分するように設定した。一区割の単位は５ｍ四方で、東西方向は西からＡ・Ｂ、南北方向は北から１～５で表した。各地区の表示には、東西軸と南北軸の組み合せで、１Ａ区～５Ｂ区と呼称した。

2．基本層序

ここでは普遍的に存在した土層５層を基本層序とした。以下、各層を概説する。

第１層：耕土。暗灰色砂質土。層厚0.1ｍ前後を測る。地表面の標高は9.4ｍ前後である。

第２層：灰色砂質土。層厚0.15～0.3ｍ。南部に行くに従って層厚が漸増している。鎌倉時代末期以降に比定される遺物が少量含まれている。

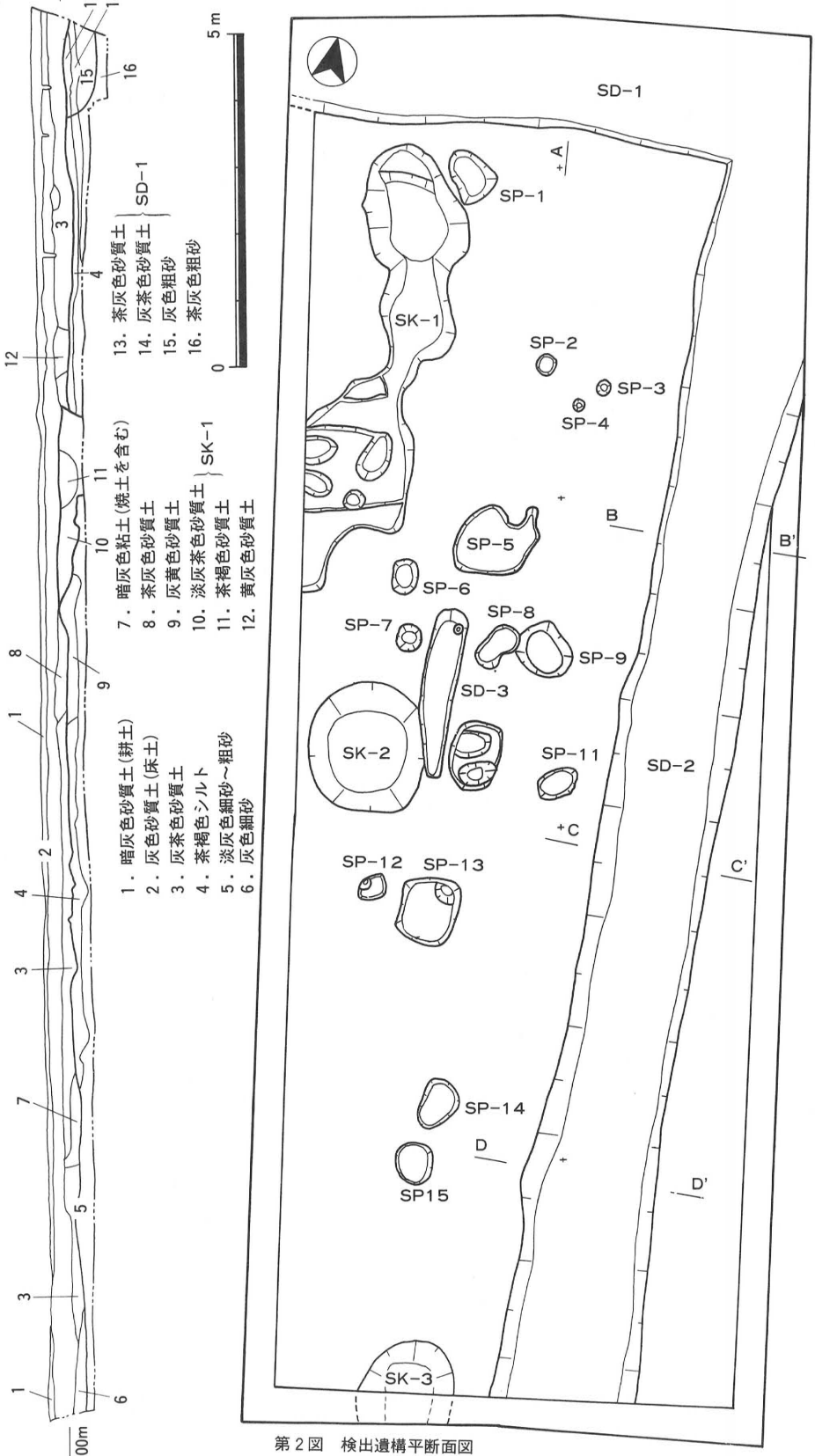
第３層：灰茶色砂質土。層厚0.1～0.3ｍ。北から南に向かってゆるやかに傾斜するもので、北部と南部の比高差は0.3ｍを測る。鎌倉時代末期以降に比定される遺物が少量含まれている。

第４層：茶褐色シルト。層厚0.1～0.2ｍ。調査区の南部では欠如している。この土層上面が遺構構築のベース面である。

第５層：淡灰色の色調で土質には細砂～粗砂がある。層厚は0.2ｍ以上である。調査区の南部では、この土層上面が遺構構築のベース面である。弥生時代後期に比定される遺物を含むが、量は微量である。

3．検出遺構・出土遺物

調査の結果、現地表下0.5ｍ前後（標高8.9ｍ）付近に存在する第４層および第５層上面で、鎌倉時代末期から室町時代中期に比定される土坑３基（ＳＫ－１～ＳＫ－３）、溝３条（ＳＤ－１～ＳＤ－３）、小穴15個（ＳＰ－１～ＳＰ－15）を検出した。出土遺物は各遺構のほか、第２層・第３層からコンテナ箱に４箱程度出土したが、大半が小破片で完形のものは極少量である。



第2図　検出遺構平断面図

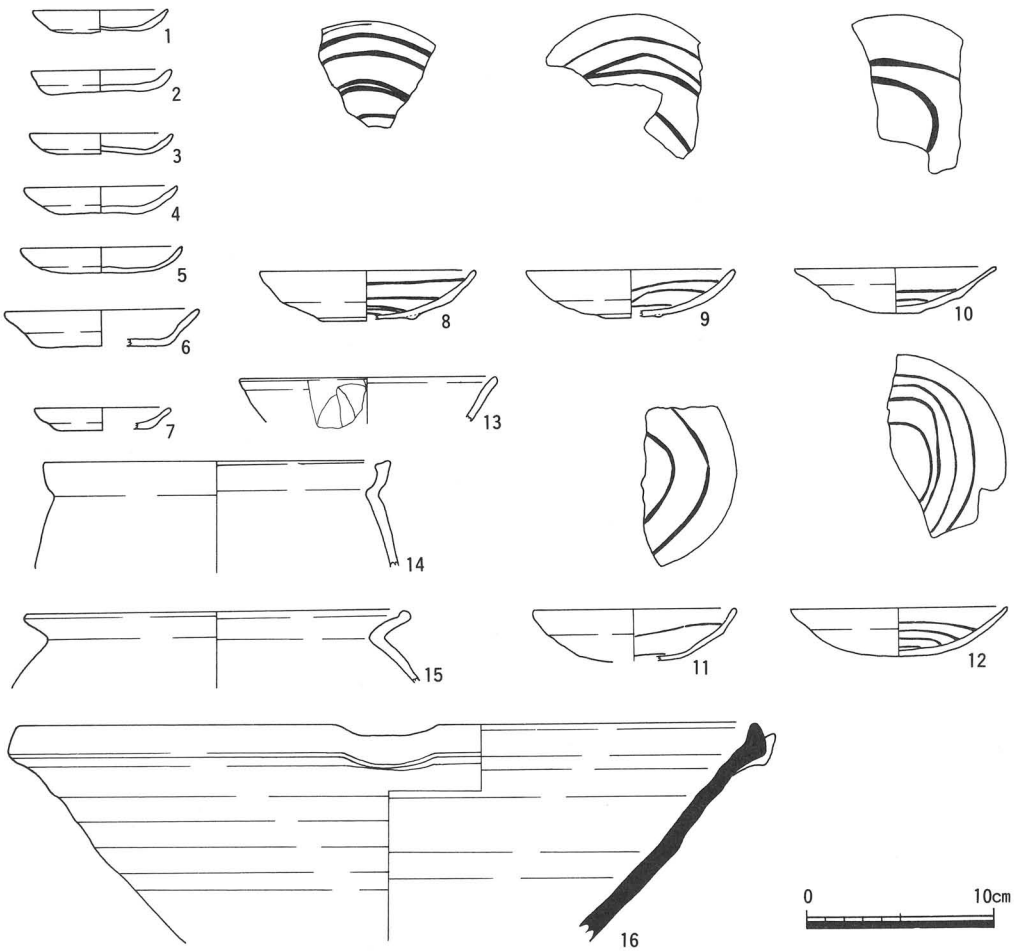
以下、検出遺構および出土遺物について概要を記す。なお、出土遺物の形態については一部本文中でふれるが、個々の法量・調整等の詳細についてはⅢ出土遺物観察表を参照されたい。

土坑（ＳＫ）

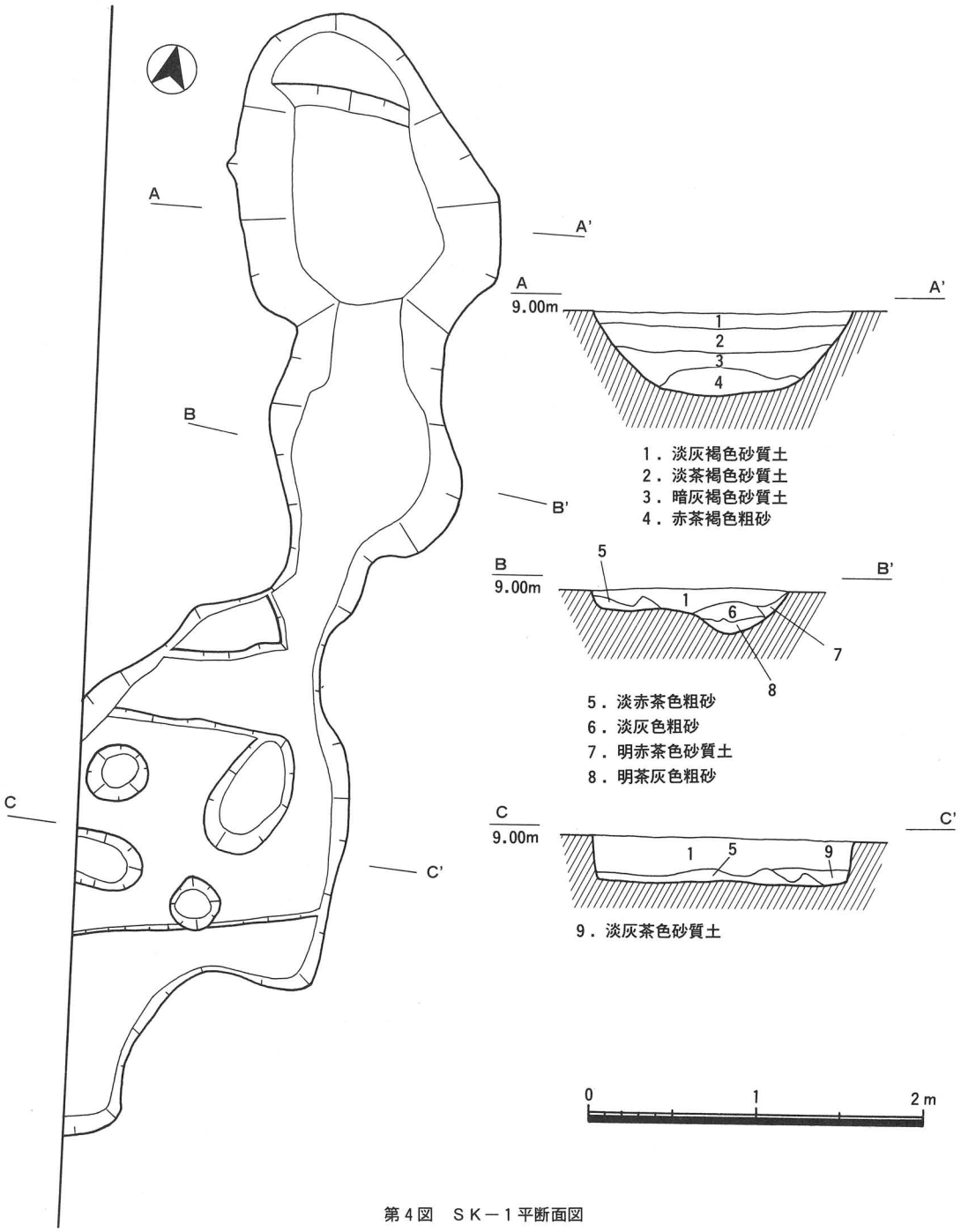
ＳＫ－１

調査区の北西部で検出した。溝状を呈するもので、検出部で南北幅6.6ｍ・東西幅1.5ｍで、深さは北部で0.5ｍ、南部で0.25ｍを測る。内部堆積土層は北部では上層から第１層淡灰褐色砂質土・第２層淡茶褐色砂質土・第３層暗灰褐色砂質土・第４層赤茶褐色粗砂で、南部では上層から第１層淡灰褐色砂質土・第５層淡赤茶色粗砂・第９層淡灰茶色砂質土である。

遺物は主に第１層淡灰褐色砂質土から出土した。出土遺物の内訳は土師器小皿441・土釜５、須恵器甕43・鉢４、瓦器椀327・小皿１・土釜１・足釜２、青磁碗５、屋瓦８であるが、大半



第３図　ＳＫ－１出土遺物実測図



第4図　ＳＫ－１平断面図

が小破片であった。そのうち図示できたものは16点（１～16）である。

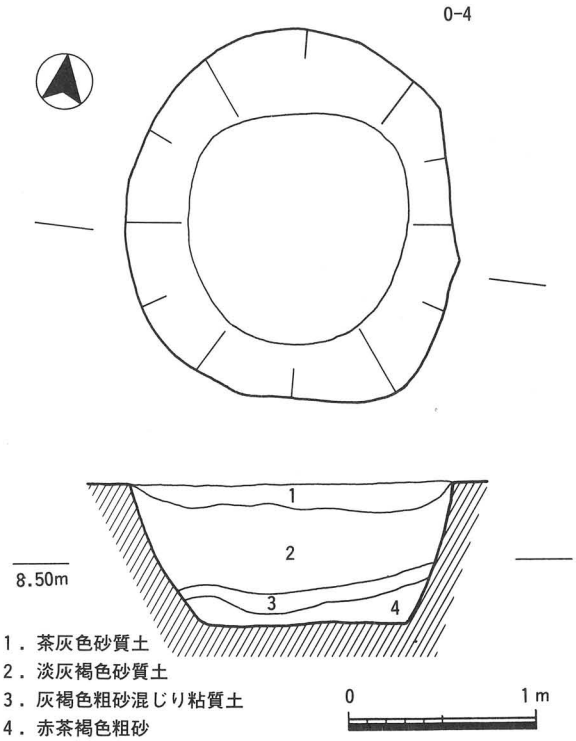
土師器小皿（１～６）はほぼ水平な底部から斜上方に立ち上がるもの（１～５）と、体部が上外方へ伸びた後、角度を斜上方へ変えるもの（６）がある。瓦器椀は５点（８～12）を図示したが、他の資料も含めてすべて和泉型であった。すべて浅い椀形を呈するもので、形骸化し

た高台を有する（8～10）と高台が消滅したもの（11・12）がある。見込みのヘラミガキは一本線による渦巻状である。前者が八尾市域編年のⅣ－2、後者がⅤ－1に当る。（7）は瓦器小皿で体部がやや外反気味に斜上方へ伸びる。（13）は龍泉窯系の青磁碗で、体部外面に鎬蓮弁文が施されている。（14・15）は土師器土釜で、（14）は口縁部が内湾気味に立ち上がるもので、口縁端部は内傾する面を持つ。（15）は「く」の字状に屈曲する口縁部を有するもので、口縁端部は内側に肥厚している。（14）は菅原分類による大和Ⅰ$_2$型aに当たり、15世紀後半に比定されている。（16）は東播系の須恵器こね鉢である。遺物の特徴から土坑の廃絶時期は、一部の夾雑物を除けば14世紀後半から15世紀初頭の一時期に推定される。

ＳＫ－2

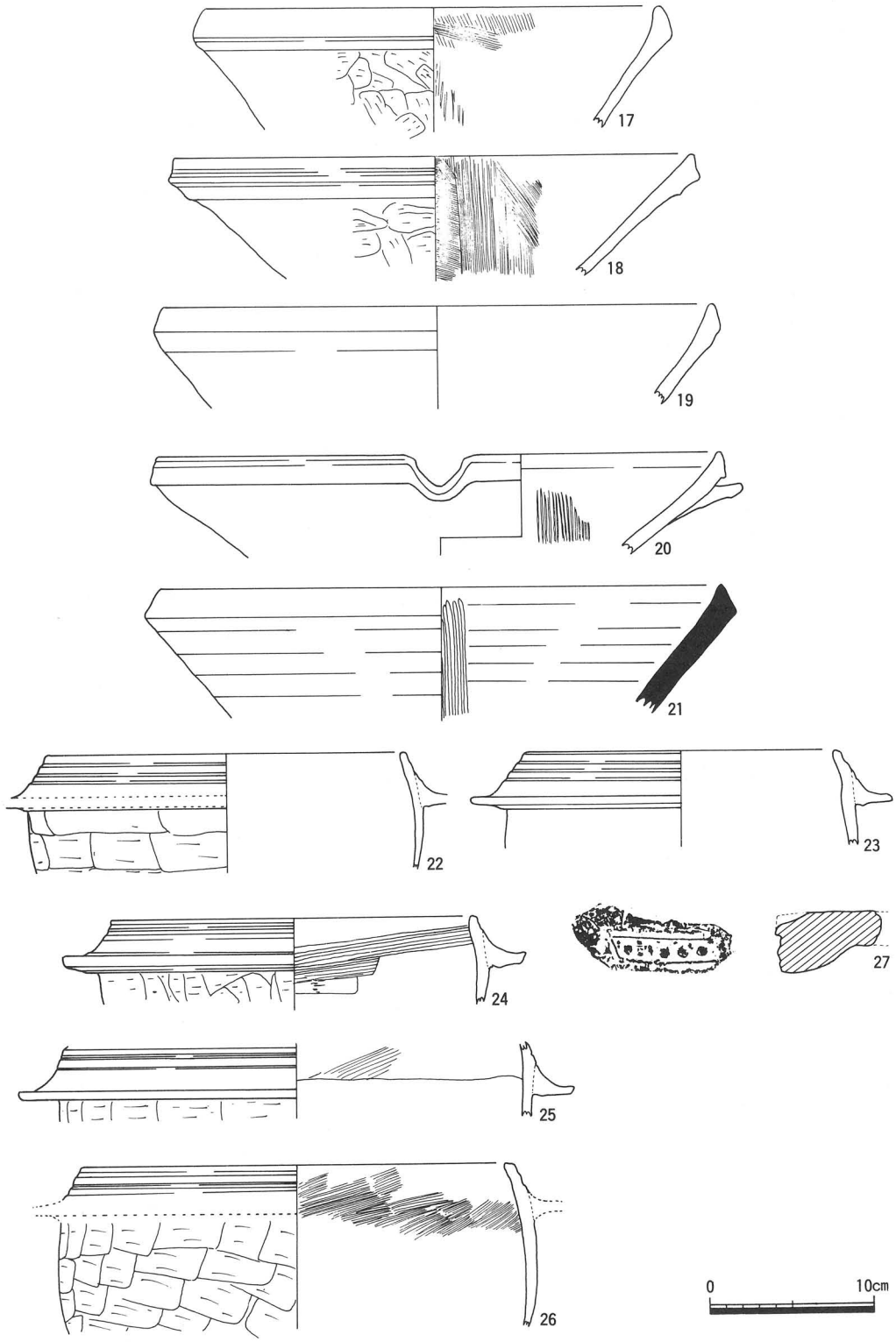
調査区の西部で検出した。南北方向に長い楕円形を呈するもので、東西幅1.8m・南北幅1.95m・深さ1.5mを測る。断面の形状は逆台形を呈する。内部堆積土層は上層から第1層茶灰色砂質土・第2層淡灰褐色砂質土・第3層灰褐色粗砂混じり粘質土・第4層赤褐色粗砂である。

遺物は第1層・第2層・第3層から出土した。出土遺物の内訳は土師器小皿193・土釜1、瓦器椀104・甕1・土釜7・鉢30、磁器碗9、屋瓦20であるが大半が小破片であった。



第5図　ＳＫ－2平断面図

そのうち図示できたものは9点（17・19～23・25～27）である。鉢には瓦器質摺鉢（17・19・20）と須恵質こね鉢（21）がある。瓦器質摺鉢3点は共に口縁部が逆「く」の字に屈曲するものである。須恵器摺鉢（21）は口縁部が内傾する面を持つもので、内面にやや太めの摺目が施されている。土釜には土師質の（22・23・26）瓦器質の（25）がある。土師器土釜は小型の（22・23）とやや大型の（26）がある。いずれも底部が欠損するもので、ほぼ水平に貼り付けられた鍔から口縁部が内傾して立ち上がるもので、口頸部外面に三段の段を有する（22・23）と二段の（26）がある。（25）は瓦器質の土釜で、口頸部外面に二条の沈線が廻る。（27）は瓦当面に対して左部分が遺存する連珠文軒平瓦で、二本の圏線間に小粒で隆起の大きい珠文を配するもので、珠文が5個遺存していた。



第６図　ＳＫ－２・ＳＫ－３出土遺物実測図

遺物の特徴から土坑の廃絶時期は14世紀後半に比定されよう。

ＳＫ－３

調査区の南端で検出した。南部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部で東西幅1.5ｍ・南北幅1.8ｍ・深さ0.6ｍを測る。内部堆積土は灰色砂質土である。

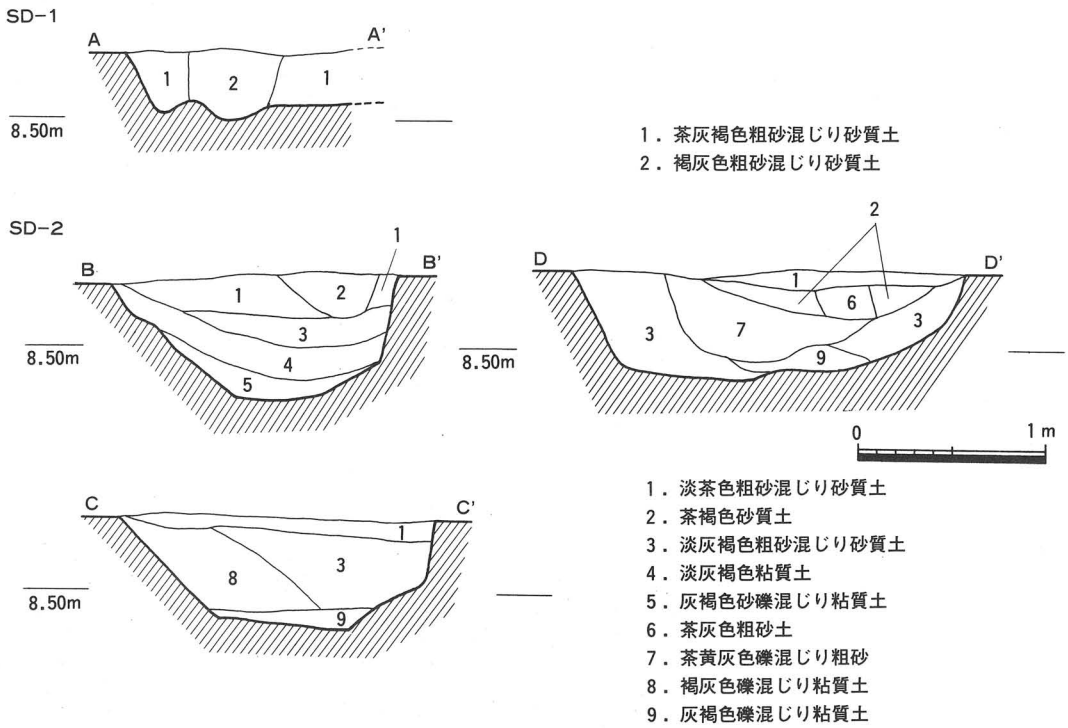
出土遺物の内訳は土師器小皿50、瓦器椀25・土釜４・鉢１であるが、大半が小破片であった。そのうち図示できたものは２点（18・24）である。瓦器摺鉢（18）は口縁部が逆「く」の字を呈するもので、体部内面には櫛状工具による摺目が施されている。(24) は瓦器土釜で口頸部の外面に三段の段を有する。

溝（ＳＤ）

ＳＤ－１

調査区の北部で検出した。東西方向に伸びるもので東部はＳＤ－２と合流している。検出部で長さ6.4ｍ・幅2.0ｍ・深さ0.3ｍを測る。内部堆積土は第１層茶灰褐色砂混じり砂質土・第２層褐灰色粗砂混砂質土である。

遺物は土師器鉢１・高杯１・小皿23・土釜１、瓦器椀２が出土したが、大半が小破片で図示できたものはない。



第７図　ＳＤ－１・ＳＤ－２断面図

SD－2

調査区の東部で検出した。南北方向に伸びるもので、北端はSD－1と合流している。検出部で長さ21m・幅1.6～1.8m・深さ0.4m～0.7mを測る。断面の形状は逆台形を呈する。

遺物は各層からコンテナ箱に半分程度出土した。出土遺物の内訳は土師器甕2・高杯3・小皿312・土釜4・鉢2、須恵器壺1・杯身1、瓦器椀50・甕2・足釜1・屋瓦6点であるが、大半が小破片であった。そのうち図示できたものは9点（28・29・32・34・37・40・43・45・46）である。(28・29・32）は土師器小皿である。(28）は水平な底部から外反気味に立ち上がった後、角度を斜上方に変えるもので、体部中位に指頭圧痕が遺存している。(29）は口縁部が上外方に立ち上がる。(32）は底部と体部の境に明瞭な段を有する。(34）は土師器中皿で口縁部が斜上方へ直線的に立ち上がる。(40）は土師器摺鉢で流し口を有する。(43）は土師器土釜で、口頸部は内傾して立ち上がり外面に三段の段を有する。鍔は水平方向よりやや上方に貼り付けられており、鍔以下には煤が付着している。(45）は平瓦で、凹面に細かい布目、凸面に隆線で構成される叩きが縦位に施されている。(46）は丸瓦で玉縁を有する。

遺物の特徴から溝の廃絶時期は14世紀後半から15世紀初頭の一時期に比定されよう。

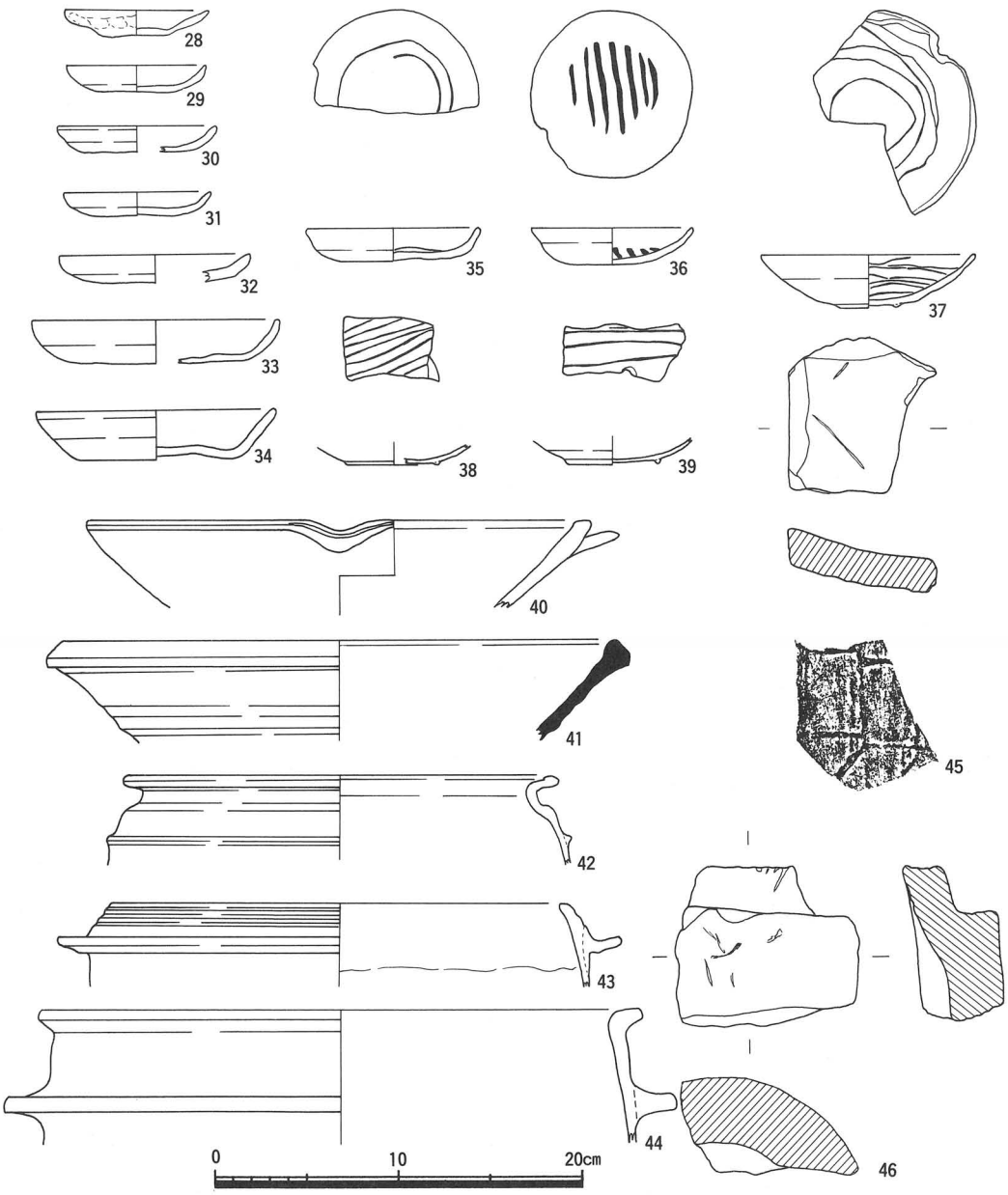
SD－3

調査地の中央部で検出した。南北方向に伸びるもので、南西部はSK－2に切られている。長さ2.5m・幅0.55m・深さ0.15mを測る。内部堆積土は上層から淡褐灰色砂質土・淡灰茶色砂質土である。遺物は主に下層から出土した。出土遺物の内訳は土師器小皿33・土釜1・須恵器甕1、黒色土器椀1、瓦器椀23、屋瓦1が出土したが、大半が小破片であった。そのうち図示できたものは1点（42）である。(42）は土師器土釜で口頸部で内傾して立ち上がった後、口縁部付近で大きく外反するもので、口縁端部は内側に折り返されて肥厚気味に終わる。鍔は断面の形状が三角形を呈する。色調はにぶい褐色で、胎土には精良な粘土を使用する。菅原分類の大和B_2型dに当たるもので、14世紀後半に比定されている。

小穴（SP）

総数で15個（SP－1～SP－15）を検出した。平面の形状で区別すれば、円形4個・楕円形8個・方形2個・不定形1個で、上面幅0.2～0.85m・深さ0.1～0.7mを測る。

遺物はSP－2・SP－11を除く各小穴から土師器－小皿・土釜、須恵器鉢、瓦器－椀・小皿・土釜、陶器、白磁等の小破片が少量出土した。そのうち図示できたものは、SP－13の須恵器こね鉢（41）とSP－15の土師器小皿（30・31）・中皿（33）・土釜（44)、瓦器小皿（35・36）・椀（38・39）である。(41）は東播系の須恵器こね鉢で口縁部が逆「く」の字を呈する。土師器小皿（30・31）は水平な底部から口縁部が斜上方へ立ち上がる（30）と上外方へ立ち上がる（31）がある。(33）は土師器中皿で、水平な底部から口縁部が内湾気味に立ち



第８図　ＳＤ－２・ＳＤ－３・ＳＰ－13・ＳＰ－15出土遺物実測図

上がる。瓦器小皿（35・36）は水平な底部から口縁部が斜上方へ立ち上がるもの（35）と丸味のある底部から内湾気味に立ち上がる（36）がある。瓦器椀（38・39）は、ともに底部のみが遺存するもので、形骸化した高台が付く。見込みに平行線状ヘラミガキが施されている。（44）は土師器土釜で水平方向に伸びる鍔が付く。口縁部は「く」の字に屈曲している。

Ⅲ　出土遺物観察表

SK－1

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考 遺存状況
1	土師器 小皿	7.1 1.2		手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。底部外面弱いナデ。	浅黄橙色	密	良好	1／6
2 五	土師器 小皿	7.4 1.3		手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。底部外面弱いナデ。	灰白色	密	良好	1／2
3 五	土師器 小皿	7.7 1.1		手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。底部外面弱いナデ。	灰白色	密	良好	1／4
4 五	土師器 小皿	8.1 1.4		手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。底部外面未調整。	にぶい 黄橙色	密	良好	1／3
5 五	土師器 小皿	8.6 1.4		手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。底部外面指頭圧痕遺存。	浅黄色	密	良好	1／4
6	土師器 中皿	10.3 1.9		手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。底部外面弱いナデ。	にぶい 黄橙色	密	良好	1／4
7	瓦器 小皿	7.4 1.2		手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	灰色	密	良好	1／6
8	瓦器 椀	11.4 2.7		口縁部外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。高台は一周せず部分的に切れる部分がある。内面に渦巻状ヘラミガキ。	灰色	やや粗 1㎜大の長石を散見する	良好	1／6
9	瓦器 椀	11.2 2.6		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面指頭圧成形後、弱いナデ。内面に渦巻状ヘラミガキ。	淡灰色	密	良好	1／4
10	瓦器 椀	10.8 2.4		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面指頭圧成形後、弱いナデ。内面体部にヘラ先による圧痕遺存。内面に渦巻状ヘラミガキ。	淡灰色	やや粗	良好	1／3
11 五	瓦器 椀	11.0 2.8		口縁部外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面弱いナデ。内面に渦巻状ヘラミガキ。	淡灰色	やや粗	良好	1／3
12 五	瓦器 椀	11.5 2.6		口縁部外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。内面に渦巻状ヘラミガキ。	灰白色～灰色	やや粗	良好	外面に重ね焼痕 1／3

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考 遺存状況
13	青磁 碗	13.7 ——	ロクロ成形。体部外面鎬蓮弁文を施す。釉には光沢がありやや厚目に施釉されている。全体に粗い貫入が入る。	オリーブ灰色	緻密	堅緻	龍泉窯系 口縁部 1／6
14 五	土師器 甕	18.4 ——	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	灰白色	密	良好	外面煤付着 1／6
15 五	土師器 甕	20.1 ——	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	灰白色	やや粗 0.5～1㎜程度の長石、クサリ礫を含む	良好	外面煤付着 1／6
16 五	須恵器 こね鉢	39.2 ——	マキアゲ・ミズビキ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部上位内外面回転ナデ。体部中位以下の内外面ナデ。	淡青灰色	やや粗	堅緻	体部内面炭化物付着 1／6

SK－2

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考 遺存状況
17 五	瓦器 擂鉢	27.5 ——	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ。体部内面上位ハケナデ、他はナデ。体部内面に櫛状工具による擂目を施す。	淡灰色～灰色	やや粗 1㎜大の長石を多量に含む	良好	1／6
19	瓦器 擂鉢	34.4 ——	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラナデの後、弱いナデ。体部内面ナデ。	淡灰色	やや粗 0.1～1㎜大の長石を多量に含む	良好	1／8
20 五	瓦器 擂鉢	27.6 ——	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。体部内面16本／3.3㎝を一単位とする櫛状工具による擂目を施す。	外面 乳灰色 内面 淡灰色	密	良好	1／6
21	須恵器 擂鉢	34 ——	マキアゲ・ミズビキ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面回転ナデ。体部内面櫛状工具による擂目を施す。	淡灰色	やや粗 0.5㎜大の長石を少量含む。	堅緻	1／12
22 五	土師器 土釜	21.5 ——	マキアゲ成形。口頸部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ。体部内面ナデ。	乳灰色	やや粗	良好	鍔部以下煤付着 1／6
23 六	土師器 土釜	18.5 —— 鍔径25.7	マキアゲ成形。口頸部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	浅黄橙	密	良好	鍔部以下煤付着 1／4
25 六	瓦器 土釜	—— —— 鍔径33.8	マキアゲ成形。口頸部外面ヨコナデ。口頸部内面左下りのハケナデの後ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ、内面ヨコナデ。	淡灰茶色	やや粗	良好	1／6
26 六	土師器 土釜	26.0 ——	マキアゲ成形。口頸部外面ヨコナデ。口頸部内面左下りのハケナデ。体部外面横位のヘラケズリ、内面はヨコナデ。	にぶい橙色～黒色	やや粗 0.1㎜大の砂粒を多量に含む。	良好	体部外面煤付着 1／6
27 六	軒平瓦	—— —— 幅3.5	瓦当面に対して左部分が遺存。顎は段顎である。外縁は上外縁が下外縁に比して幅拡で低位置に付く。現状で二本の圏線間に小粒で隆起の大きい珠文が5個遺存している。	淡灰色	やや粗 0.1～0.5㎜大の長石を多量に含む。	良好	1／2

SK－3

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考 遺存状況
18 六	瓦器 擂鉢	31.5 ——		マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面右下りのハケナデ。体部内面節状工具による擂目(－単位は不明)。	淡灰色	やや粗 1㎜大の長石・石英を含む	良好	1／8
24 六	瓦器 土釜	22.1 —— 鍔径28.1		マキアゲ成形。口頸部外面および鍔部内外面ヨコナデ。口頸部内面横位のハケナデ。体部外面ヘラケズリ。	淡灰色	やや粗	良好	鍔裏面以下煤付着 1／4

SD－2

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考 遺存状況
28 六	土師器 小皿	7.9 1.5		手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面指頭圧痕遺存。底部内外面ナデ。	茶灰色	密	良好	内面および口縁部外面煤付着 1／2
29 六	土師器 小皿	7.7 1.5		手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	浅黄橙色	密	良好	1／2以上
32	土師器 小皿	10.4 1.6		手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部ナデ。	浅黄橙色	密	良好	1／4
34 六	土師器 中皿	13.0 2.2		手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。底部外面弱いナデ。	浅黄橙色	密	良好	1／2
37 七	瓦器 椀	11.8 2.8		口縁部内外面ヨコナデ。体部外面弱いナデ。体部内面ナデ。高台部ナデ。体部内面渦巻状ヘラミガキ。	灰白色～灰色	やや粗	良好	1／2
40	土師器 擂鉢	27.6 ——		マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナデ、他はナデ。	淡茶色	やや粗	良好	1／4
43	土師器 土釜	25.0 —— 鍔径31.2		マキアゲ成形。口頸部および鍔部ヨコナデ。他はナデ。	灰色	やや粗	良好	1／8
45	平瓦 七	—— ——		凹面細い布目遺存。凸面は隆線で構成される叩きを縦位に施す。表面に離れ砂が遺存。	乳灰色	やや粗	良好	
46	丸瓦 七	—— ——		玉縁を有する丸瓦。凹面は未調整。凸面はナデ。	淡茶灰色	やや粗 0.1～1㎜大の長石・石英を含む	良好	

SD－3

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考 遺存状況
42 七	土師器 土釜	23.0 —— 鍔径25.5		マキアゲ成形。口頸部および鍔部ヨコナデ。体部内面ナデ。	にぶい褐色	密	良好	大和型 1／6

SP－13

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考 遺存状況
41 七	須恵器 こね鉢	30.2 ——	マキアゲ、ミズビキ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。	灰色～黒灰色	やや粗	堅緻	口縁部外面重ね焼痕 東播系 1／6

SP－15

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考 遺存状況
30 六	土師器 小皿	8.6 1.5	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	にぶい橙色	密	良好	1／4
31	土師器 小皿	8.0 13.5	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	にぶい橙色	密	良好	1／4
33 六	土師器 中皿	13.0 2.2	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。底部外面弱いナデ。	にぶい橙色	密	良好	1／4
35 六	瓦器 小皿	9.6 1.8	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。底部外面弱いナデ。内面渦巻状ヘラミガキ。	淡灰色	密	良好	1／2
36 六	瓦器 小皿	8.9 2.1	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。内面平行線状ヘラミガキ。	淡灰色	密	良好	完形
38	瓦器 椀	—— —— 高台径5.0 高台高0.2	体部内外面ナデ。底部内面ナデ。高台部ナデ。高台は低く断面三角形を呈する。見込み平行線状ヘラミガキ。	淡灰色	密	良好	高台部 1／2
39	瓦器 椀	—— —— 高台径5.0 高台高0.3	体部内外面ナデ。底部内面ナデ。高台部ナデ。高台は低く断面「U」字状を呈する。見込み平行線状ヘラミガキ。	淡灰色	密	良好	内面に炭化物付着 高台部 1／2
44 七	土師器 土釜	30.3 —— 鍔径37.0	マキアゲ成形。口頸部および鍔部ヨコナデ。体部内面ナデ。	橙色	やや粗 0.5～1㎜大の長石・石英を散見する	良好	鍔裏面に煤付着 1／6

Ⅳ　まとめ

今回の調査では小面積にもかかわらず、14世紀末から15世紀初頭に比定される遺構・遺物を検出した。遺構の配置関係からSD－1・SD－2は堀の機能を果したものと考えられ、堀で囲繞された屋敷地(館)であった可能性が高い。八尾市域では福万寺遺跡[註1]で堀（溝）で区画された集落が検出されており、この時期このような集落形態が一般的であったものと推定される。

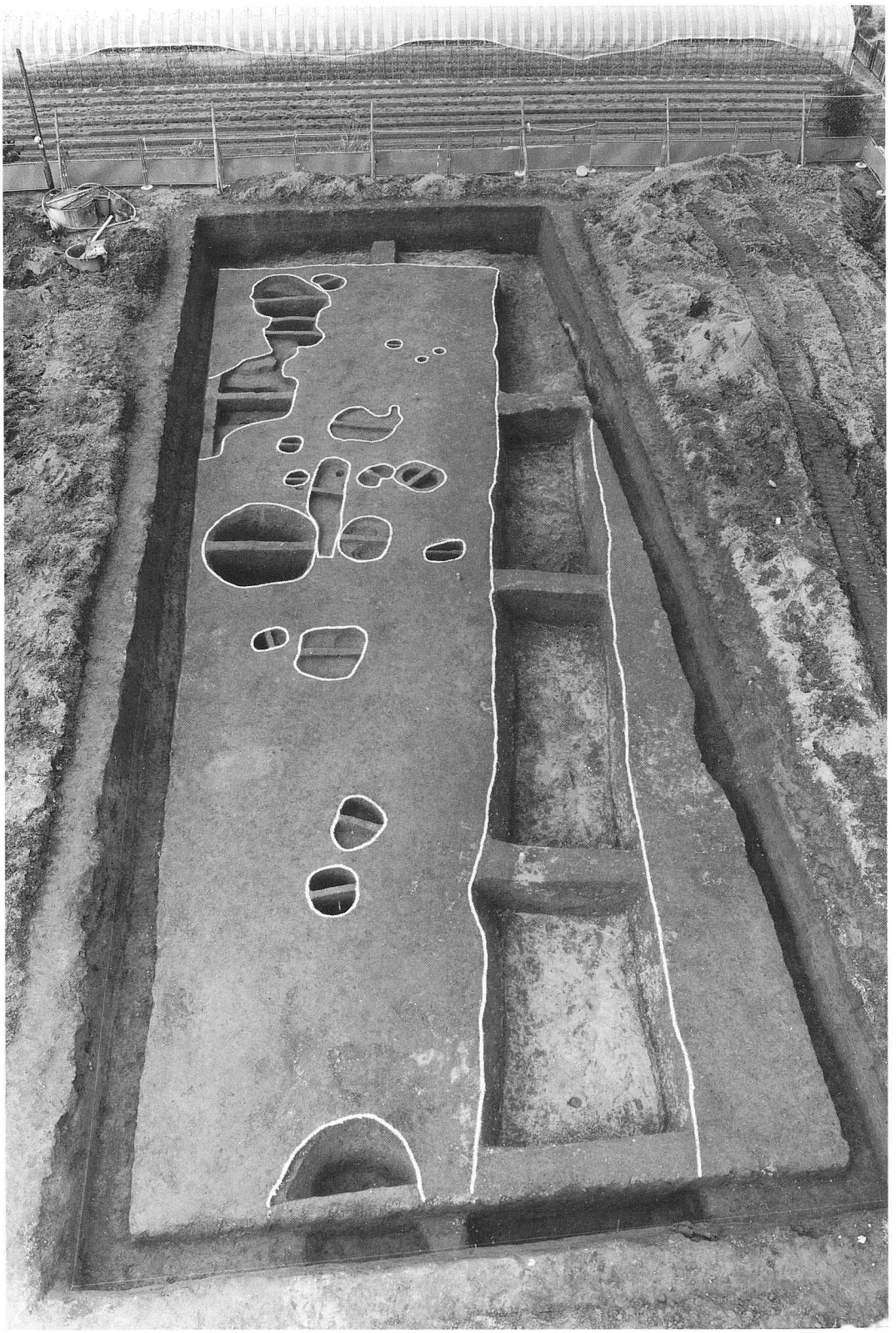
なお、調査地点は服部昌之氏[註2]が指摘されているように長瀬川から分かれて北流した旧流路の自然堤防にあたり、現在、南北方向に弓状を描いて走っている道路が旧流路と合致するものと推定されている。調査においてもこれらを裏付けるように、遺構検出面より下部は深部に至るまで粗砂の堆積が顕著であった。また、これらの土層からは弥生時代後期に比定される土器片が少量出土しており、旧流路の存続時期を示唆する貴重な資料と言えよう。

註記

註1　（財）八尾市文化財調査研究会　『福万寺遺構－上之島町北3丁目22－1の調査』　（財）八尾市文化財調査研究会報告24　1990

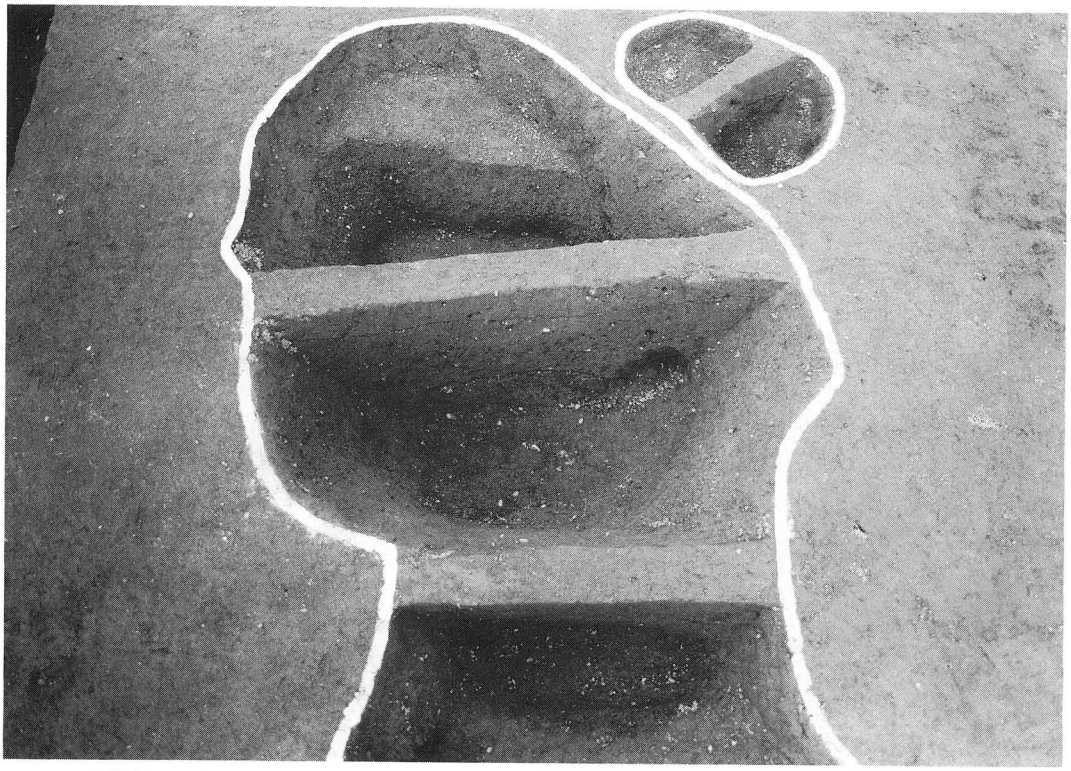
註2　服部昌之　「大阪平野低地古代景観の基礎的研究」『歴史地域研究と都市研究』大明堂1978

図　　版



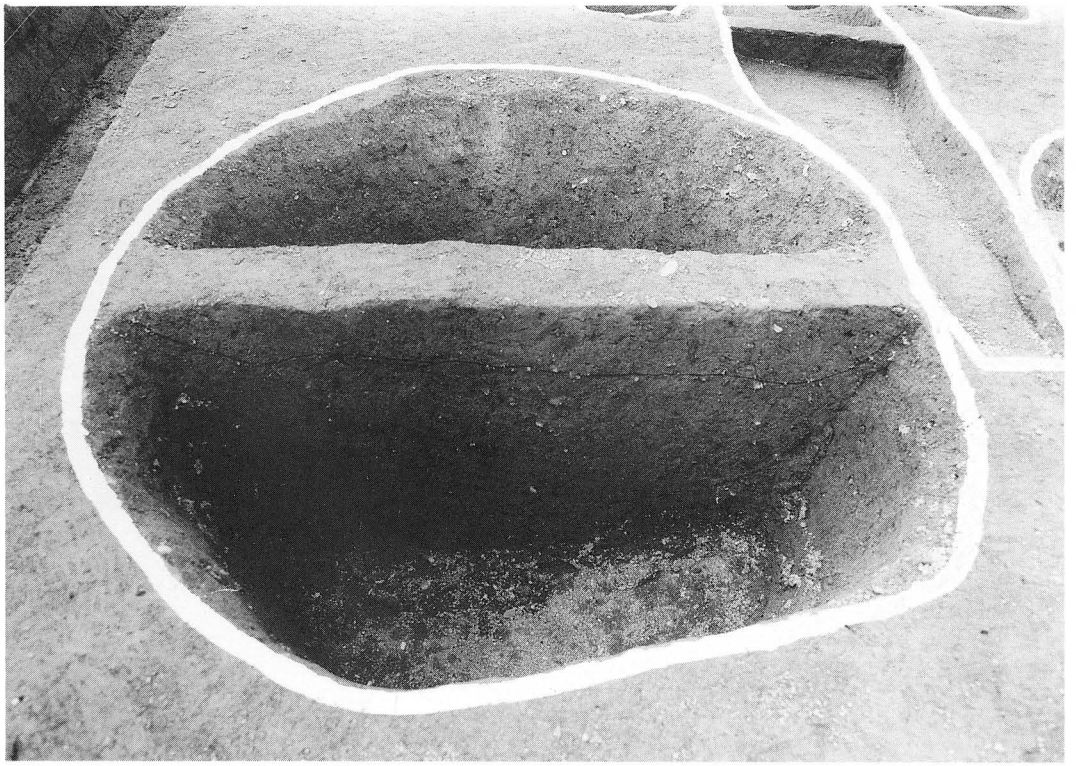
調査区全景（南から）

図版二



ＳＫ－１北部(南から)

ＳＫ－１南部(北から)



ＳＫ－２（南から）

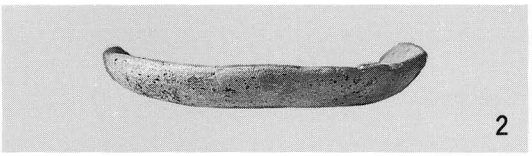
ＳＫ－３（北から）

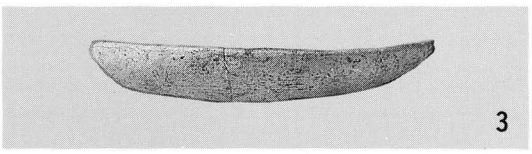
図版四

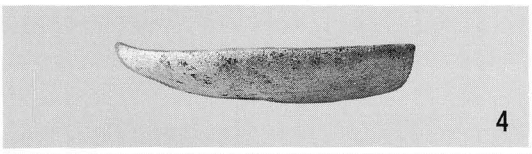
ＳＤ－２　Ｂ－Ｂ'断面(南から)

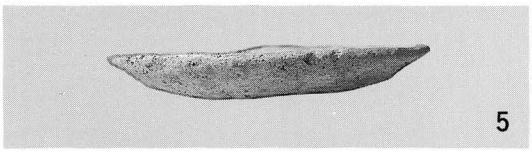
ＳＤ－２　Ｃ－Ｃ'断面(南から)

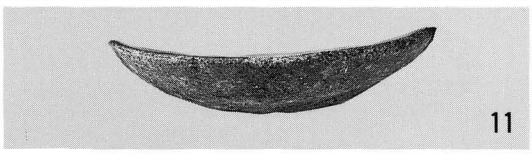
ＳＤ－２　Ｄ－Ｄ'断面(南から)

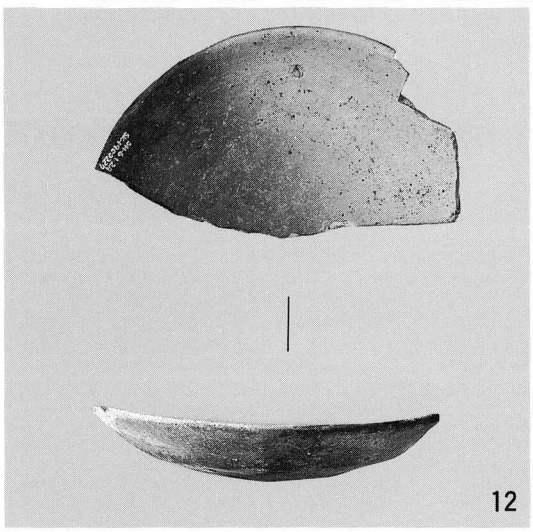

2

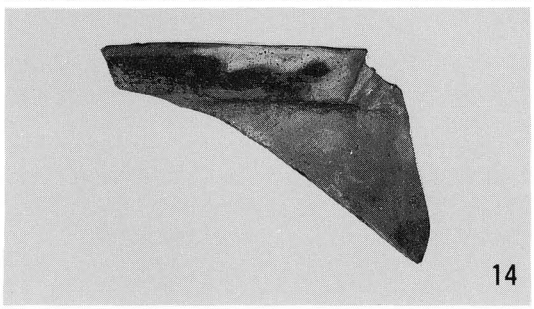

3

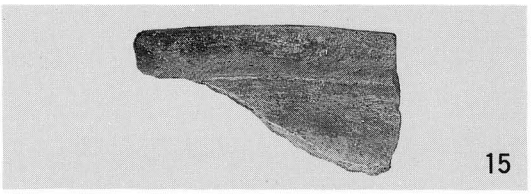

4


5

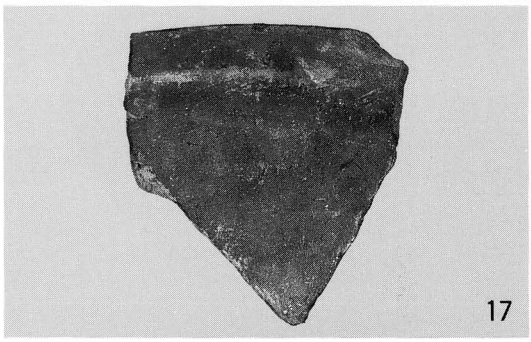

11

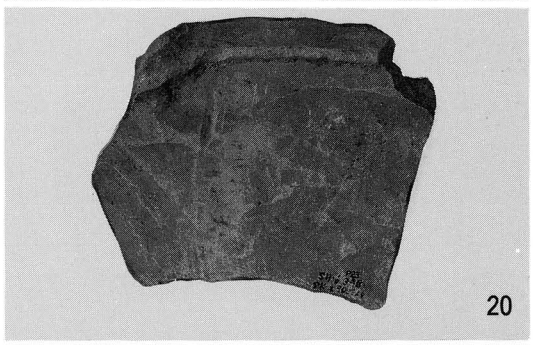

12

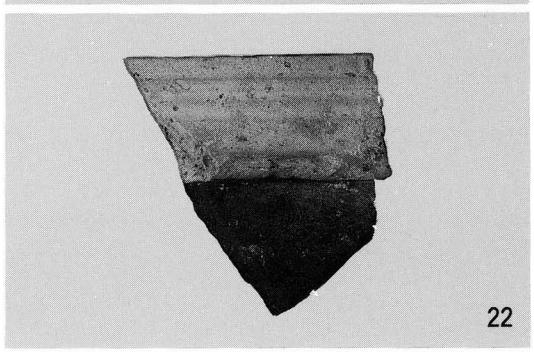

14


15

16

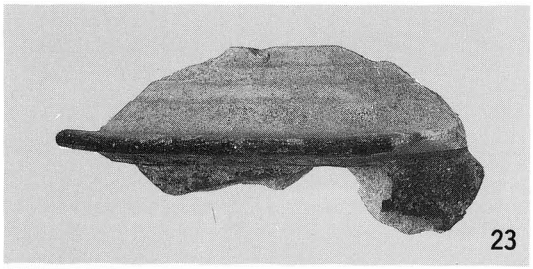

17

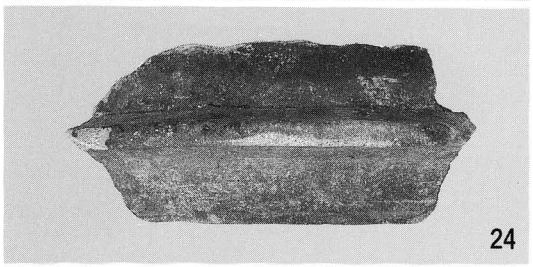

20

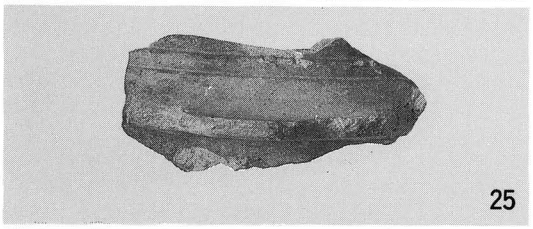

22

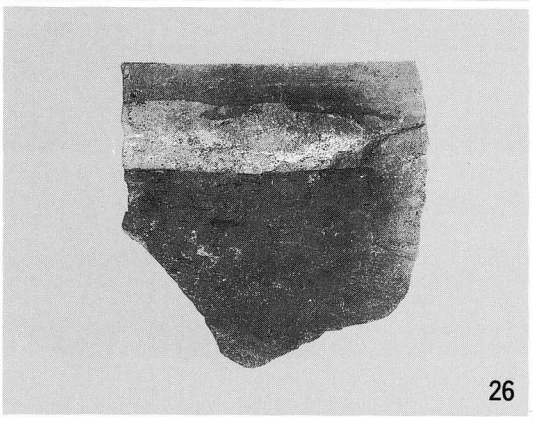
SＫ－1（2～5・11・12・14～16）　SＫ－2（17・20・22）出土遺物

図版六

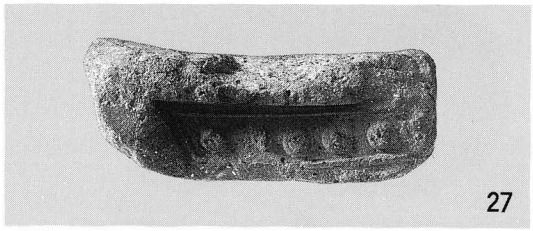

23

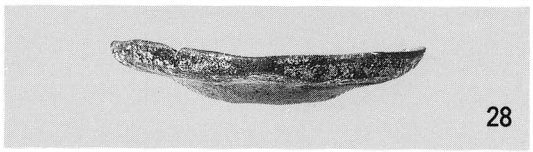

24

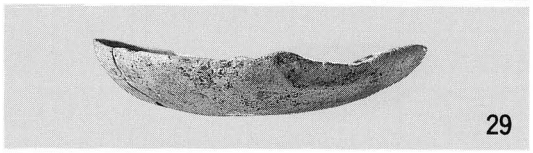

25

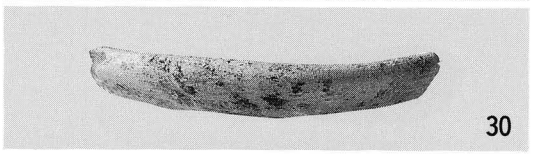

26

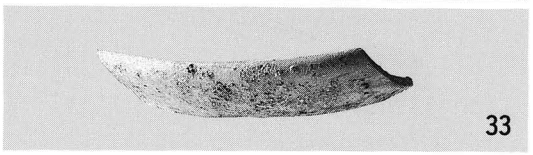
18

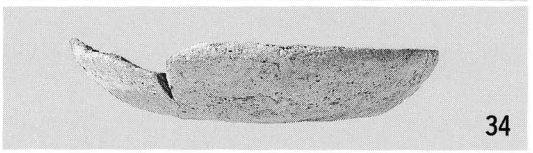

27

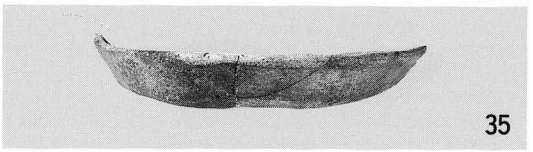

28

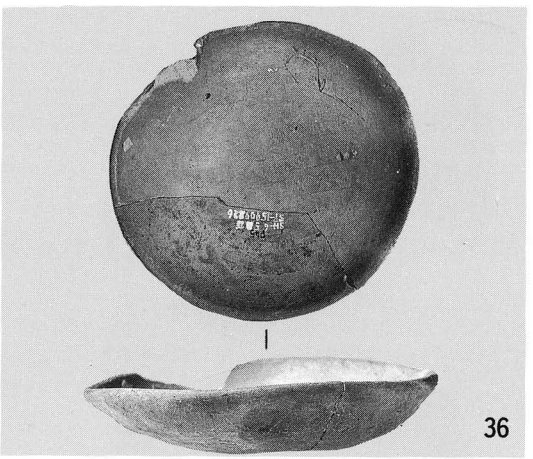

29


30

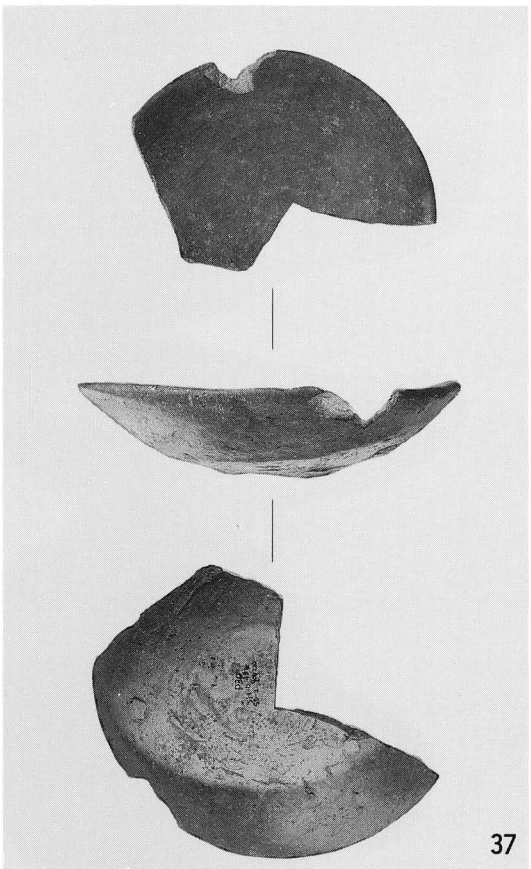

33

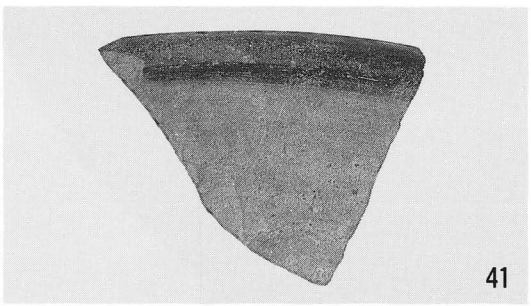

34

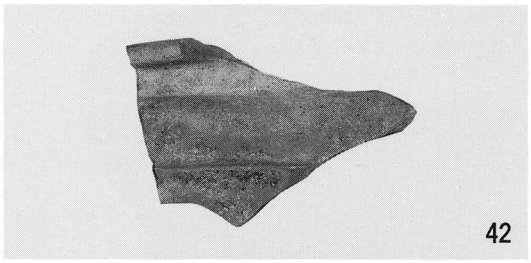

35

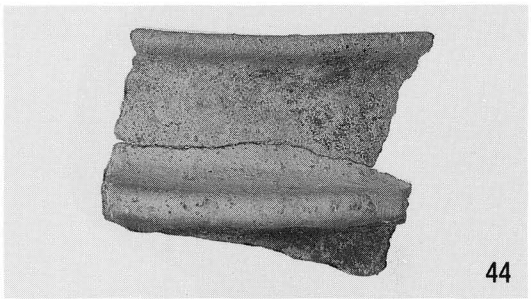

36

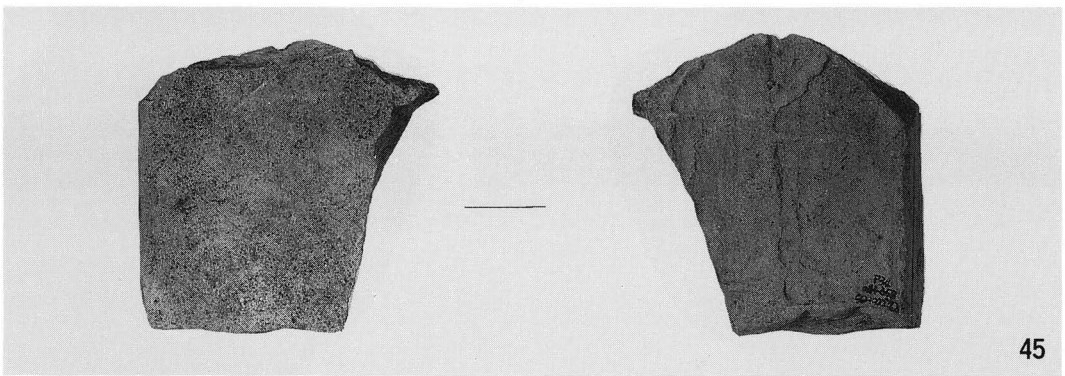
S K — 2 (23・25・26・27)　S K — 3 (18・24)　S D — 2 (28・29・34)
S P —15(30・33・35・36)出土遺物

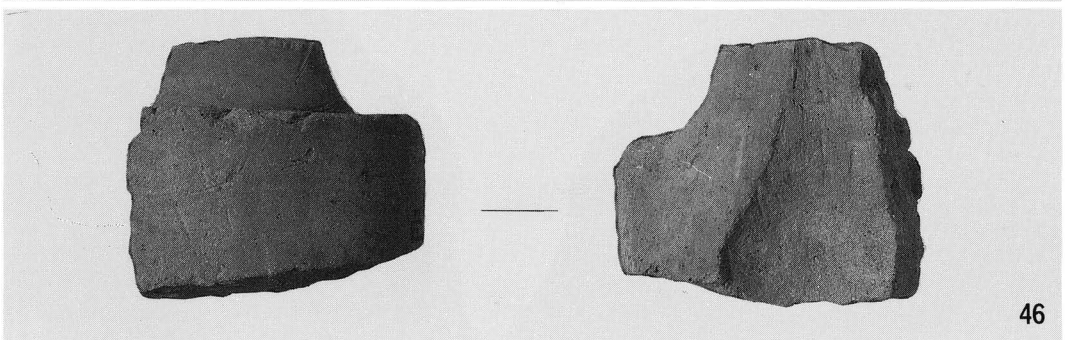

37


41


42


44


45


46

SD－2 (37・45・46)　SD－3 (42)　SP－13(41)　SP－15(44) 出土遺物

(財)八尾市文化財調査研究会報告 33

成法寺遺跡

＜第1次調査～第4次調査・第6次調査＞

発　行　　平成3年9月

編　集　　財団法人 八尾市文化財調査研究会
〒581 大阪府八尾市清水町1丁目2番1号
TEL (0729)94－4700

印　刷　　株式会社 近畿印刷センター
〒582 大阪府柏原市本郷5丁目6番25号
TEL (0729)72－5918

表　紙　レザック66　〈260 kg〉
本　文　書籍用紙　〈 70 kg〉
図　版　マットアート　〈135 kg〉